

宮城県多賀城跡調査研究所年報1990

# 多賀城跡



宮城県多賀城跡調査研究所

## 序 文

特別史跡多賀城跡附寺跡の組織的な調査が開始されてから 30 年、かつは当研究所が設立されてから早くも 21 年の歳月が経過した。

この間、5 ヶ年計画を積み重ねる方法で継続してきた発掘調査事業によって、多賀城跡の実態解明が進み、環境整備事業の促進とあいまってその重要性と意義が県民をはじめ各地の人々に理解されるようになってきた。

これも一重に、多賀城跡調査研究指導委員会の諸先生方の御指導や、文化庁・県・多賀城市をはじめとする関係各方面の方々の深い御理解と御助言そして御協力の賜であり、心から感謝の意を表する次第である。

平成 2 年度は、第 5 次 5 カ年計画の第 2 年次目として多賀城跡外郭東門の南西に位置する大畑地区を対象に第 58 次、第 59 次調査を実施したが、本書はその成果をとりまとめたものである。

この年報が、東北古代史解明の資料として、広く活用されるとともに、多賀城跡の保護保存に寄与することを切に願ってやまない。

平成 3 年 3 月

宮城県多賀城跡調査研究所  
所長 佐々木 茂 楨

# 目 次

I 調査の計画	1
II 第58次調査	5
1 調査の目的	5
2 調査経過	5
3 基本層序	7
4 発見した遺構と遺物	8
5 考 察	66
III 第59次調査	94
1 調査の目的	94
2 調査経過	94
3 基本層序	98
4 発見した遺構と遺物	99
5 考 察	115
6 ま と め	119
IV 付 章	120
1 関連研究・普及活動	120
2 研究成果刊行物	122

図 版

# 例 言

1. 本書は平成2年度に実施した多賀城跡第58次調査と第59次調査の成果を収録したものである。
2. 発掘調査の測量点は政庁正殿跡(SB150B)の南入側柱列の中央に埋設したコンクリート柱である。この原点と政庁南門のほぼ中心を結ぶ線を南北の基準線、原点を通りこれに直交する線を東西の基準線に定めた。南北の基準線の方向は真北に対して1° 04' 00" 東に偏している。遺構の位置は南北・東西の基準線からの距離で示すこととし、例えば南北の基準線から東50mの位置はE50ないしE50mのように記している。
3. 政庁跡の遺構期と瓦の分類基準については宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡－政庁跡本文編－』1982による。
4. 刻印瓦については巻末の付図多賀城出土の刻印瓦を参照されたい。
5. 土色については『新版標準土色帖』(小山正忠、竹原秀雄：1976)を参照した。
6. 本書の作成にあたっては佐々木茂楨・進藤秋輝・古川雅清・丹羽 茂・後藤秀一・柳沢和明・村田晃一の協議・検討を経て、執筆はI・IVを進藤、IIを柳沢、IIの漆紙文書を鈴木拓也、IIIを後藤・進藤が分担し、編集については柳沢・進藤が担当した。また、これらの作業を鈴木拓也、千田祐美恵、神山晶子、本多昭子、内海 薫、千葉久美子、鈴木文子、佐藤友子、小幡悦子、佐藤良江、斎藤和子、斎藤由紀が援けた。

# I 調査の計画

平成2年度は第24回多賀城跡調査研究指導委員会(1988年)で承認された第5次5か年計画の2年次に当たり、昨年に引き続き多賀城跡の東辺北寄りに位置する大畑地区を対象に第58・59次の調査を実施した。

この大畑地区の地形は多賀城跡では標高55mと最も高い地点にあたる外郭東門から西へは六月坂地区に至るまで平坦であり、南へは緩く傾斜しているものの多賀城内では最も広い平坦地をなしている。昭和46・49年に実施した第13・14・23次調査で外郭東門から城内に通ずる道路の南に道路に開く八脚門、その南には掘立柱建物群や竪穴住居群などが発見されたことや、この地区の広く平坦な地形をも考慮すると、この大畑地区には幾つかの職掌を担う実務官衙ブロックが集合している可能性が強く推定されていた。また、第23次調査のSE3333井戸跡は高い地点に営まれた井戸であるにもかかわらず、井筒の曲げものが遺存しており、木簡等の実務官衙の性格を推定できる資料の取得も期待されていた。そこで、第4次5か年計画の最終年度にあたる昭和63年度からは外郭東門を含めて、この大畑地区全体の官衙の構成を把握することを目的として調査を継続して実施することにした。

また、第53・54次調査では外郭東門と築地が奈良時代と平安時代とで位置を異にすることや、昨年度の第56次調査では8世紀中頃から10世紀にかけて頻繁に建て替えていることが解った。

第58次調査では昨年度に実施した第56次調査地西地区の南隣接地を中心に、第59次調査では第56次調査地東地区(未調査部分)とその南隣接地を対象に調査を計画した。

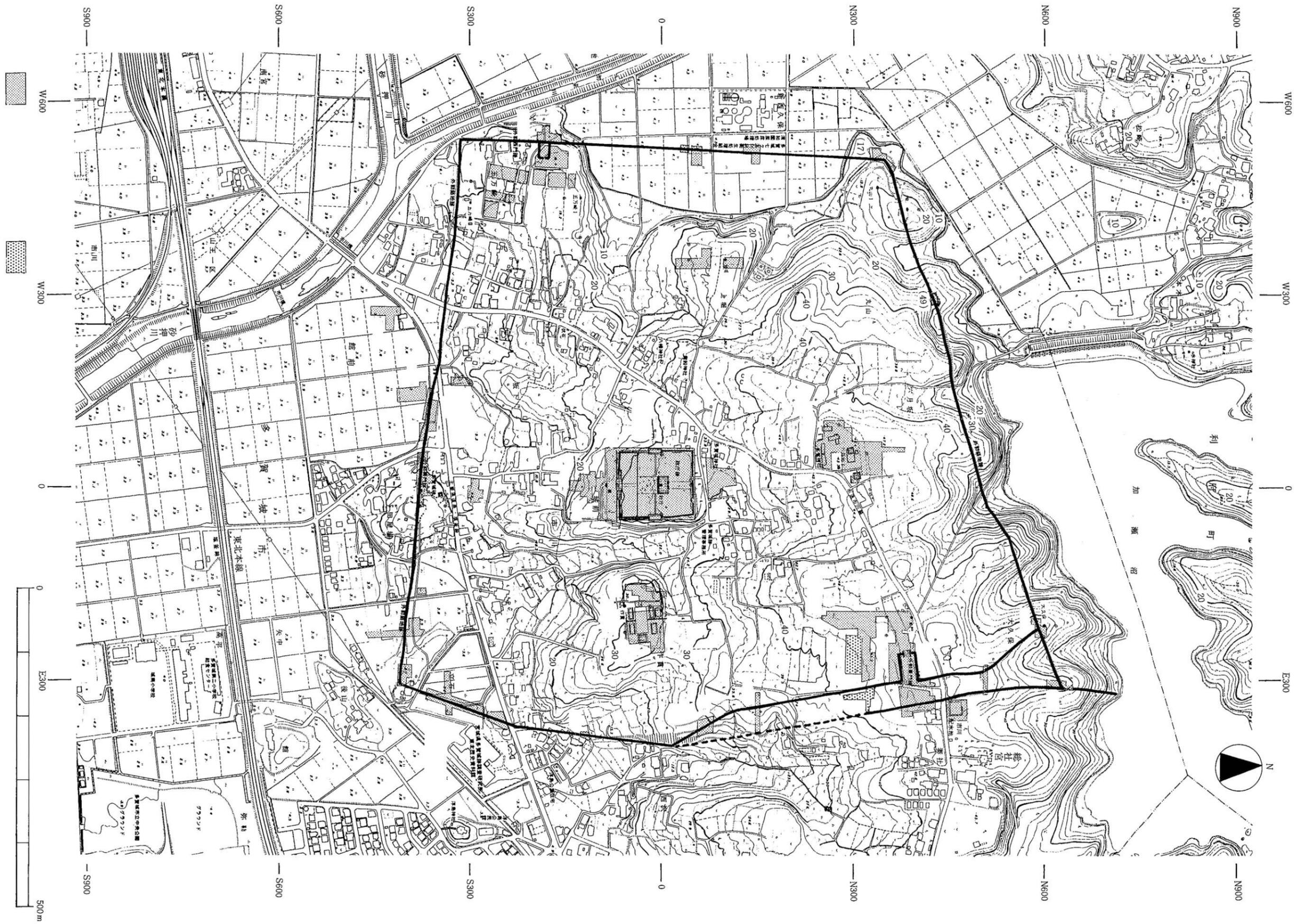
本年度の調査実施地区・面積・実施状況・予算は第1図・表1、第5次5か年計画は表2のとおりである。

年次	次数・発掘調査地区	調査面積	予 算
平成 2 年度	第 58 次調査 (大畑地区)	1,470 m <sup>2</sup>	30,000 千円
	第 59 次調査 (大畑地区)	900 m <sup>2</sup>	
	合 計	2,370 m <sup>2</sup>	

表 1 平成 2 年度発掘調査実績

年次	次数・発掘調査地区	調 査 面 積		予 算
平成 3 年度	(1) 第 60 次 大 畑地区	1,500 m <sup>2</sup>	2,000 m <sup>2</sup>	35,000 千円
	(2) 第 61 次 鴻ノ池地区	500 m <sup>2</sup>		
4 年 度	(1) 第 62 次 大 畑地区	1,500 m <sup>2</sup>	2,000 m <sup>2</sup>	35,000 千円
	(2) 第 63 次 政庁南西前面地区	500 m <sup>2</sup>		
5 年 度	(1) 第 64 次 大 畑地区	1,500 m <sup>2</sup>	2,300 m <sup>2</sup>	35,000 千円
	(2) 第 66 次 城 前地区	800 m <sup>2</sup>		
合計	6 地 区		6,300 m <sup>2</sup>	105,000 千円

表 2 多賀城跡発掘調査第 5 次 5 か年計画 (第 3 年次以降)



第1図 多賀城跡調査実施地区 ( ) は調査次数

## Ⅱ 第 58 次調査

### 1. 調査の目的

#### 【調査対象地】

第 58 次調査は、多賀城跡の北東部に位置する外郭東門の南西側に隣接する通称大畑地区を対象に実施したものである(第 1 図)。本地区は東側を外郭東辺に、また西側を南から入り込む沢によって画される丘陵平坦面となっており、南へ緩やかに傾斜する。その範囲は南北・東西ともおよそ 300m ほどである。

#### 【これまでの調査の成果】

大畑地区と外郭東門地区では、これまでに第 13 次(1971 年度)・第 14 次(1971 年度)・第 23 次(1974 年度)・第 53 次(1987 年度)・第 54 次(1988 年度)・第 56 次調査(1989 年度)を実施している。その結果、以下の事柄がわかってきている(『多賀城跡調査研究所年報』1971・1974・1987～1989、第 図)。

①奈良時代には、SB1762 外郭東門の南側で SF380 築地の西側にあたる第 56 次調査東地区に掘立式建物跡 1 棟、また第 56 次調査西地区の中央部で 8 世紀中頃とみられる竪穴住居跡 4 棟とこれに後続する掘立式建物跡 3 棟、さらに西方の第 23 次調査地区で SB707 八脚門とその南側の 2 棟の南北棟建物跡というように、遺構の密度は希薄であるが広範囲にわたって建物跡が分布していることが判明した。

②その後、この奈良時代の SB1762 外郭東門と SF380 築地は、宝亀 11(780)年の伊治公皆麻呂の乱によって焼失した。そして、これらの一時的な修復後に位置を西側へ移動し、平安時代の SB307 外郭東門と SF300 築地が新たに造営されている。

③平安時代には、外郭東門に近接した第 56 次調査西地区では建物跡が集中している。一方、さらに西側の第 13・14・23 次調査地区では竪穴住居跡が集中している。このように建物跡と竪穴住居跡の存在する地区が異なることは、平安時代には大畑地区の中でも場所の使われ方に違いがあったと考えられる。

④第 56 次調査西地区では建物跡・竪穴住居跡が 7 時期(A 期～G 期)の遺構期に区分され、8 世紀中頃～10 世紀にかけての遺構変遷の様子が次第に明らかとなってきた。

#### 【調査の目的】

2 年度にあたり、大畑地区を対象に第 58 次調査・第 59 次調査を実施した。

第 58 次調査は、第 56 次調査西地区の南に隣接する地区を対象に、東西 70m×南北 21m、計 1470 m<sup>2</sup>の範囲に調査地区を設定した。ここは大畑地区の中でも建物が集中し、何度も建

て替えられている。本調査の主目的は、第 56 次調査に引き続いて官衙の範囲を押さえ、その変遷と性格を明らかにすることにある。今回の調査で主体を置いたこの地区を以下は南地区と呼ぶことにする。また、第 23 次・第 56 次調査で検出して東門に通じる道路の側溝と考えた SD706 溝の延長と始まり部分を押さえ、その性格を明らかにするために、北西地区を設定した(第 1 図)。

## 2. 調査経過

4 月下旬に南地区の調査地区設定を行い、表土剥ぎを開始した。その結果、南地区の東半部には第 56 次調査西地区の東半部に分布する暗褐色土の第 2 A 層と黒褐色土の第 4 層が分布し、中央部では表土直下が地山や岩盤で、その西に位置する SX2003 石敷遺構上面とその南に水の影響を受けて自然堆積したような砂・シルト混じりの褐色土が分布し、西半部では須恵系土器を多量に含む黒褐色土が厚く堆積していることが判明した。また、表土直下で近世以降の新しい溝やピットを多数検出した他、調査地区ほぼ全域を方形に大きく区画する中世の SD2050 溝、それよりも古い SD2048・2049 南北溝などを検出した。そこでこれらの溝やピットをまず掘り上げ、SD2050 溝によって画された区画を作業単位として東側から遺構検出・精査作業を続行した。東半部では第 4 層上面を掘り込み面とする SK2012・2013 などを検出し、地山面などで第 4 層に覆われる SI1962・1963 竪穴住居跡、SB1885・1887・1898・1967・1968・1973～1975・1977 掘立式建物跡、SK2004～2011 土壇、SE1987～1989 井戸跡、SD2042 溝などを検出した。また、中央部では SI1960・1961・1964・1965 竪穴住居跡、SB1970・1972・1976・1982 掘立式建物跡、SD2044 溝などを検出した。SX2003 石敷遺構よりも西側では須恵系土器を多量に含む黒褐色土の上面で土壇・溝・ピットなどを検出し、この黒褐色土を一部掘り下げた。また、その北側では第 23 次調査で検出していた竪穴住居跡や掘立式建物跡を一部検出した。

これらの各遺構の精査を進めた結果、第 56 次調査西地区で把握した 7 時期の遺構期にさらに 2 時期の遺構期を加えた 9 時期の遺構期を把握することができた。

北西地区の調査は第 56 次調査で設定した調査地区をさらに拡張し、南地区の調査と並行して実施した。その結果、SD706 溝の始まり部分を検出し、平安時代の SB307 外郭東門から城内側へ続く道路の南側溝であることが判明した。

また、9 月 4 日に多賀城跡調査研究指導委員会の現地指導を受け、11 月 13 日に報道機関に対して第 58 次・第 59 次調査の成果を公表し、11 月 17 日には一般を対象とした第 58 次・第 59 次調査の現地説明会を実施した。その後、写真撮影、平面実測、柱穴の断ち割りなどの

補則調査を行い、12月20日に調査を終了した。

なお、南地区の調査はSX2003石敷遺構よりも西側では遺構検出と精査が完了しなかったため、この範囲の精査は来年度に改めて実施し、本年度の南地区の南に接して実施する予定の第60次調査と合わせて報告することにした。本年度の年報ではSX2003石敷遺構よりも東側について以下報告する。

### 3. 基本層序

#### 【南地区の層序】

昨年度の西地区では以下のような基本層序が把握されている。

第1層：東地区と同様に暗褐色(10YR3/4)土の表土で、厚さは10～20cmである。

第2A層：炭化物・焼土を少量含む黒褐色(10YR2/3)土で、調査地区東半部に分布している。厚さ5cm以内である。

第2B層：炭化物・焼土を多量に含む黒色(10YR2/2)土で、調査地区東半部に分布し、南側ほど厚く堆積している。厚さ10cm以内である。

第3層：灰白色火山灰層。SK1929土壌の堆積層中にみられる。厚さ約5cmである。

第4層：炭化物・焼土を多量に含む黒色(10YR2/2)土で、平安時代のSF300築地に伴う城内側のSD1910大溝、SK1929土壌の堆積層中とその西側に分布し、南側ほど厚く堆積している。厚さ10cm以内である。

第5層：黄褐色(10YR5/6)地山小ブロックを含む褐灰色(10YR4/1)土で、調査地区東半部で斑状にみとめられる。厚さ2～3cmである。

第6層：地山で、岩盤小粒を含む黄橙色(10YR7/8)・黄褐色(10YR5/6)土である。

第6層以下は凝灰岩の岩盤である。

南地区の東半部の基本層序は昨年度の西地区とほぼ同様で、第2B層・第3層が分布せず、第1層の下位が第2A層ないし第4層となっている。第4層はSD2050によって区画された区画のうちの東半部に分布している。その西側では第1層の下位が第5・6層となり、第4層が分布しない。さらに西側のSX2003石敷遺構周辺とその南側には水の影響を受けて自然堆積したと思われる数枚の土層があり、その下位が第5・6層となっている。

#### 【北西拡張区の層序】

第1層：暗褐色(10YR3/4)土の表土で、色調で3層に細分され、厚さ約25cmである。

第1層以下は凝灰岩の岩盤である。

## 4. 発見した遺構と遺物

### A. 南地区

南地区で検出した主な遺構には、竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡20棟、工房1ヶ所、土器埋設遺構6基、土器溜め1ヶ所、井戸跡4基があり、この他多数の土壇・溝・ピットを検出している。ここではこれらの遺構の中で主なものについてこの順に記述する。

#### (1) 竪穴住居跡

##### **SI1960 竪穴住居跡** (第3～5図)

調査地区中央のやや南東寄りに位置し、地山面で検出した。北半の残存状況は比較的良好だが、南半はあまり良くない。壁高は北辺が約15～40cmで、南辺が約5～10cmである。平面形は隅丸長方形で、規模は東西約4.5m、南北約3.1mである。方向は東辺で見ると東で約24°北へ偏している。

カマドは北辺中央やや西寄りに設けられ、地山粘質土で構築されている。煙道部・燃焼部の天井は崩落していた。燃焼部は馬蹄形で住居内部にあり、幅約60cm、奥行き約50cmで、奥壁は約20cm程立ち上がり、煙道底面へと続いている。燃焼部の中に水平に焼け面があり、燃焼部は一度修築されたと考えられる。煙道部は長さ約80cm、幅約23cm、深さ約10cmで、煙出しは検出されなかった。

床は灰褐色粘質土ブロックを含む黄褐色地山粘土で全面貼床されており、ほぼ平坦である。柱穴・貯蔵穴・周溝は検出されなかった。また、燃焼部の周囲の床面には約1.5m×0.7m程の範囲に炭化物が多く分布していた。

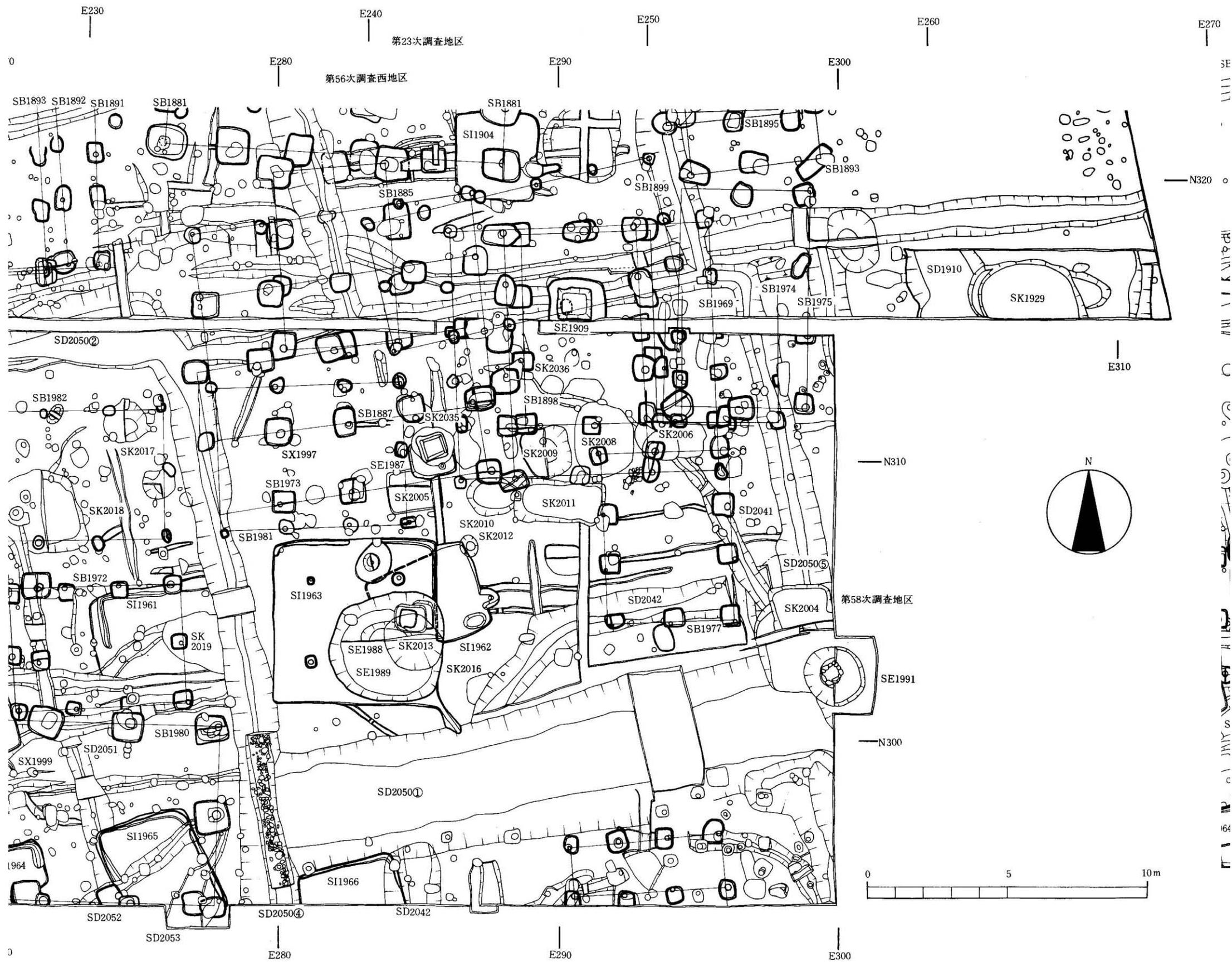
堆積層は住居跡・カマド内に7層あり、自然堆積層と考えられる埋土1層、煙道部天井崩落土の埋土3層以外は廃絶時に人為的に埋められた土層と考えられる。

新旧関係はSB1971・1972・1978・1980、SD2045・2056よりも古い。

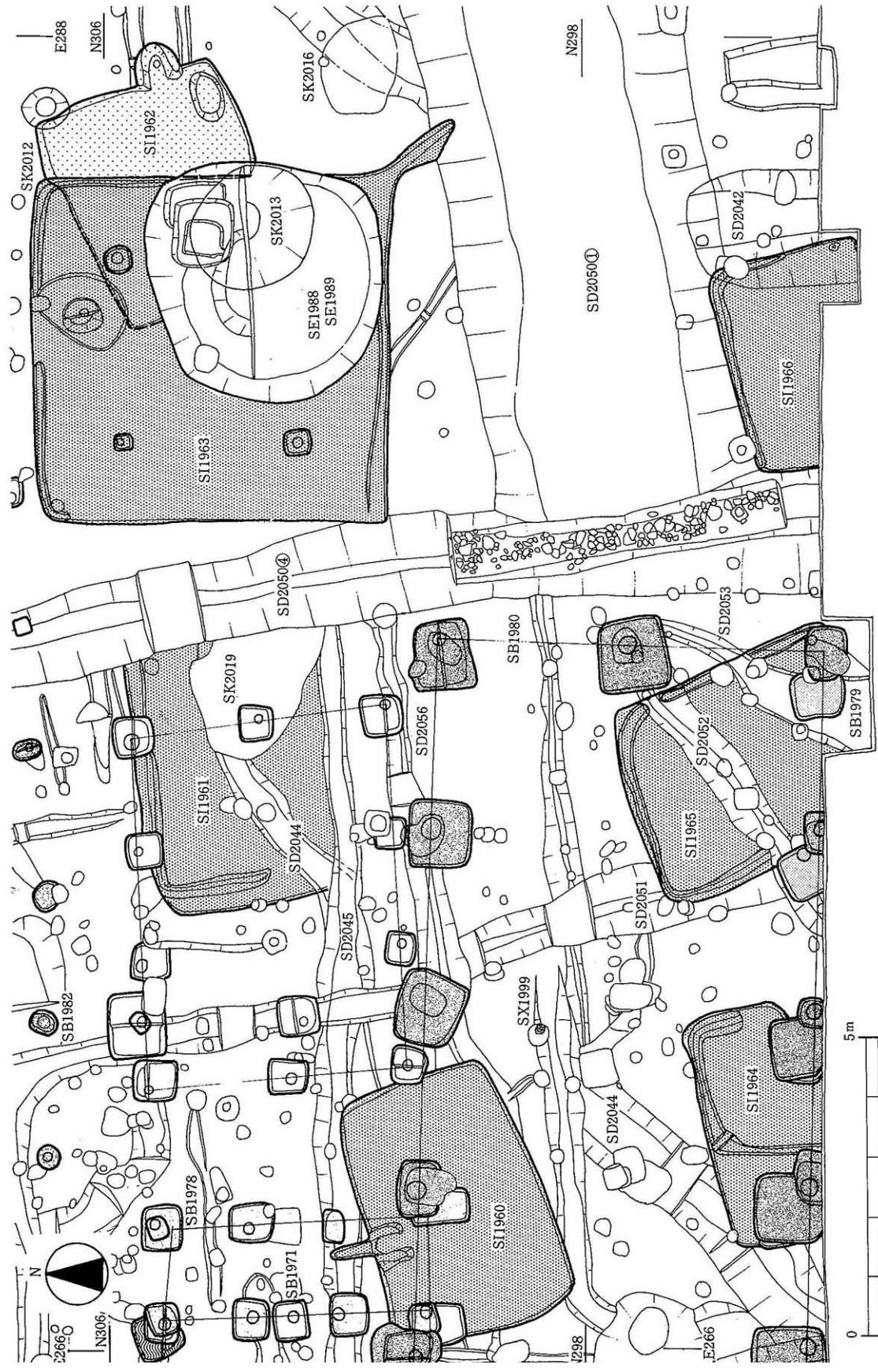
遺物は床面から非ロクロ調整の土師器の長胴甕破片(第5図4)6点と須恵器の甕体部破片1点、カマド内から非ロクロ調整の土師器の坏体部破片1点、堆積層から須恵器の高台碗1点(第5図8)と坏体部破片1点、ロクロ調整の土師器の坏破片14点、甕破片16点、丸瓦1点が出土している。なお、床面から出土した土師器の長胴甕の底部は二次加熱を受けており、カマドの支脚として用いられたものと考えられる。

##### **SI1961 竪穴住居跡** (第3・5・6図)

調査地区中央東寄りのほぼ中央に位置し、地山面で検出した。東側はSD2050、南辺はSD2044・2045に壊され、残存状況はあまり良くない。残りが比較的良い北辺でも壁高は

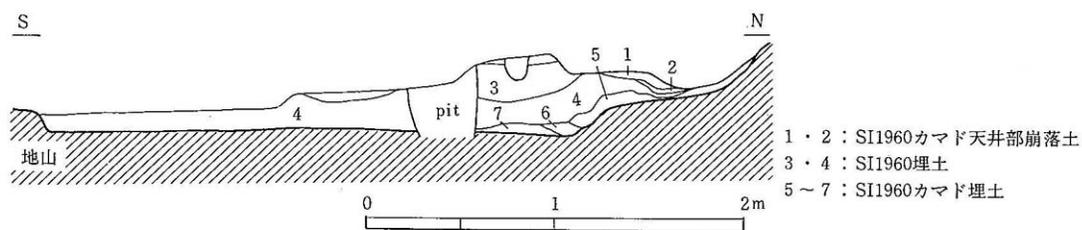


第2図 南地区検出遺構全体図(2)

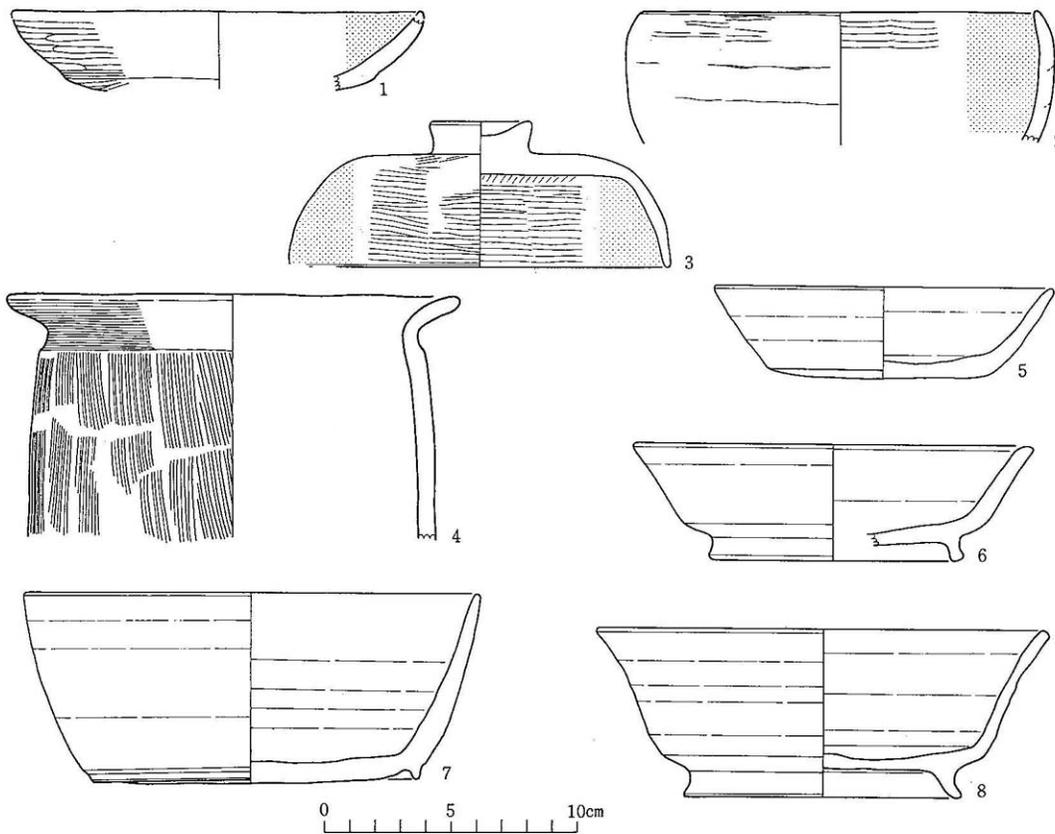


第3図 SI1960~1966 竪穴住居跡平面図

約10cmである。SD2045よりも南では床面と同じレベルで地山面となっていることから、南辺はSD2045よりも南には延びず、東西約4.6m以上、南北約3.5m前後の隅丸長方形をなすと推定される。方向は北辺で見ると東で約10°北へ偏している。

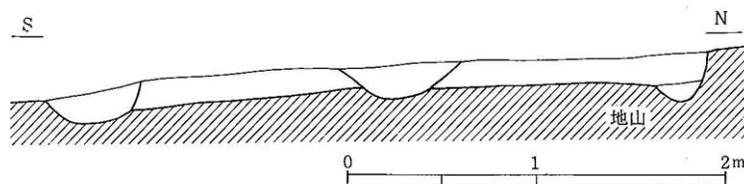


第4図 SI1960 竪穴住居跡断面図



番号	遺構	種類	特徴	箱番号	番号	遺構	種類	特徴	箱番号
1	SI1963-3層	内黒土師器坏	外面:横ナデ→ヘラケスリ→ヘラミガキ	8171	5	SI1966カマド埋土	須恵器坏	底部:ヘラ切り、ヘラ記号「×」	8172
2	SI1963-3層	内黒土師器坏	内外面:ヘラミガキ	8171	6	SI1963床面	須恵器高台坏	内外面:ロクロナデ	8171
3	SI1965埋土	両黒土師器壺	内外面:横ナデ→ヘラミガキ→黒色処理	8171	7	SI1963周溝	須恵器塊	底部:回転ヘラケスリ→高台→ナデ	8171
4	SI1960床面	土師器甕	外面:刷毛目→横ナデ、内面:磨滅	8171	8	SI1960埋土	須恵器塊	底部:回転ヘラケスリ(右)→高台→ナデ	8171

第5図 SI1960・1963・1965・1966 竪穴住居跡出土遺物



第6図 SI1961 竪穴住居跡断面図

カマドの位置は不明である。床は灰褐色土ブロックを含む黄褐色地山土で一部貼床されており、平坦で多少南側へ傾斜している。北辺・西辺に沿って周溝が認められる。支柱穴は認められない。

堆積層は1層で、明褐色地山粘質ブロック・炭を多量に含む褐色粘質シルトである。

新旧関係はSB1972、SD2044・2045・2050、SK2019よりも古い。

遺物は床面からは土師器の坏の底部破片3点が出土し、不明の1点を除く2点は非ロクロ調整である。なお、住居跡の堆積層から須恵器の坏の底部破片(へら切り無調整)1点と体部破片2点、土師器の甕(ロクロ調整?)体部破片24点、内黒土師器坏の口縁部破片2点と高台坏の底部破片2点、政庁第II期の平瓦2点が出土している。

#### SI1962 竪穴住居跡 (第3・7・8図)

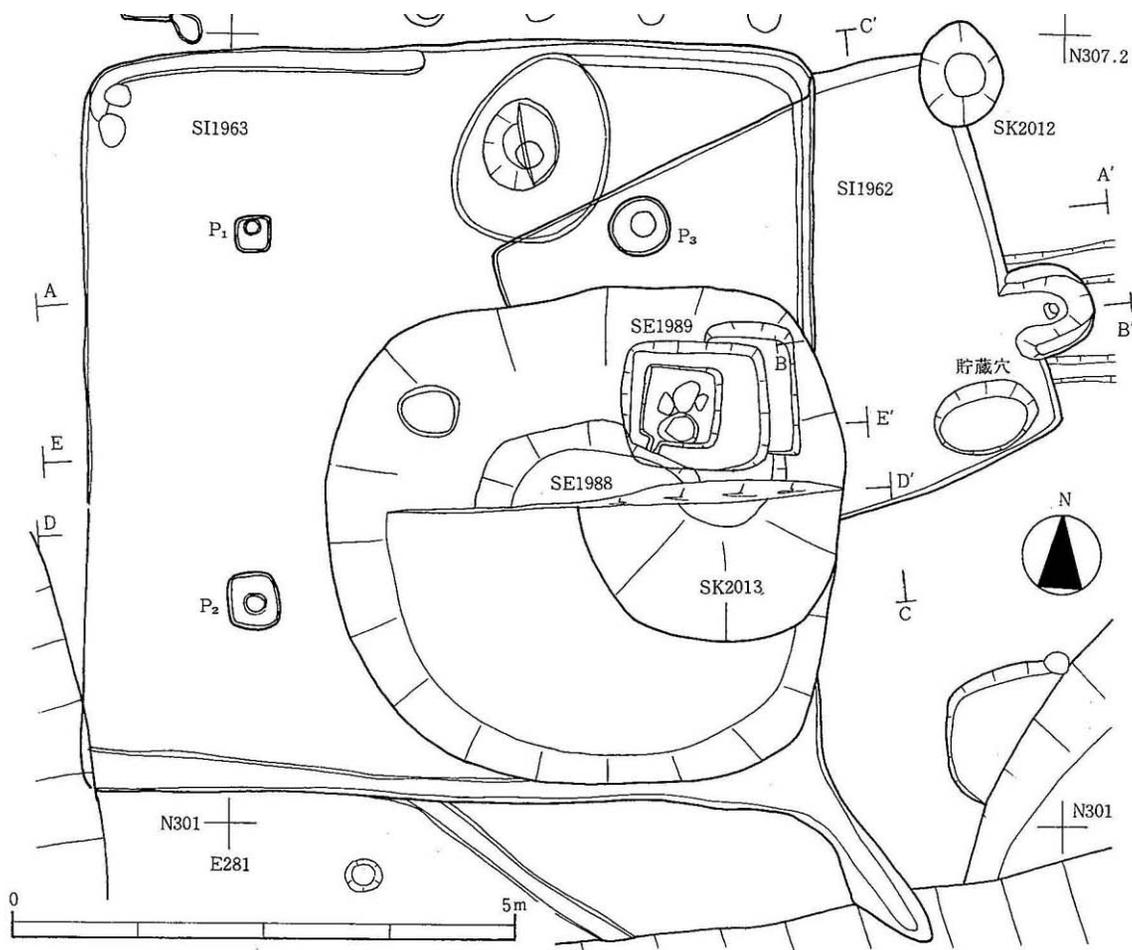
調査地区の東側ほぼ中央に位置し、地山とSI1963床面で検出した。東半部の残存状況は良好で、壁の高さは30~50cmある。しかし、西半部はSE1988・1989、SK2013によって壊され、残りが良くない。平面形は長方形をなし、大きさは北辺約3.9m、東辺約3.4mである。方向は北辺で見ると東で約23°北に偏している。

カマドは東辺の中央から南寄りに位置し、馬蹄形の燃焼部が住居外に突出するように地山粘質土で構築されている。燃焼部は幅約70cm、奥行き約70cmで、奥壁は約20cm程立ち上がり、そのまま煙出しが付くと推定される。また、燃焼部内の奥壁近くには、非ロクロ調整の土師器甕の体部下半が底部を上にして設置されていた。カマドの支脚に用いられたものと思われる。

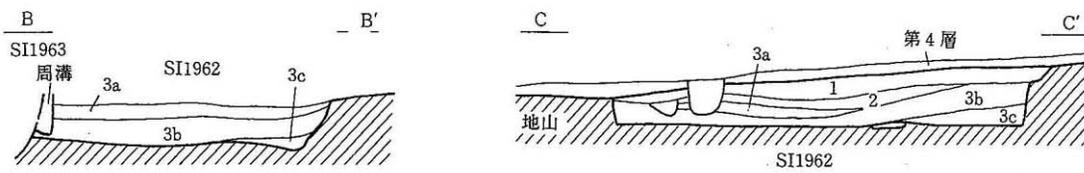
床面はほぼ平坦で、褐灰色土を含む黄褐色土で2~3cmの厚さで全面に貼床されている。また、住居内の南東隅には大きさが83×45cm、深さ約10cmの楕円形の貯蔵穴があり、炭・焼土・地山粘質土小ブロックを多量に含む土層が堆積していた。周溝・支柱穴は認められない。堆積層は5層あり、カマド内にも住居内部と同様の土層が堆積していた。いずれも住居廃絶時に人為的に埋められたと考えられる。

新旧関係はSI1963、SE1988・1989、SK2012・2013よりも古い。

遺物は床面、カマドと住居内の各堆積層から出土している。床面からは非ロクロ調整の

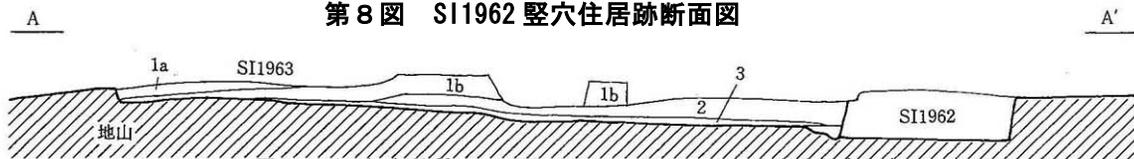


第7図 SI1962・1963 竪穴住居跡、SE1988・1989 井戸跡、SK2012・2013 土坑平面図



- 1 層：褐色粘質シルトでφ 5 mm以下のマンガン粒、風化凝灰岩礫を多く含む
- 2 層：暗褐色粘質シルトでφ 5 mm以下のマンガン粒、風化凝灰岩礫を多く含む
- 3 a層：褐色シルトで風化凝灰岩礫を多く含む
- 3 b層：3 a層と同様だが、風化凝灰岩礫をより多く含む
- 3 c層：にぶい褐色粘質シルトで風化凝灰岩礫を多く含む

第8図 SI1962 竪穴住居跡断面図



- 1 a層：にぶい褐色粘質シルトでφ 1 cm以下の風化凝灰岩礫を多く含む
- 1 b層：褐色粘質シルトでφ 1～5 cmの風化凝灰岩礫を多く含む
- 2 層：にぶい褐色粘質シルトでφ 1～5 cmの風化凝灰岩礫を多く含む
- 3 層：褐色粘質シルトで炭、φ 1 cm以下の風化凝灰岩礫を多く含む

第9図 SI1963 竪穴住居跡断面図

土師器の甕破片 14 点が出土している。カマド内からは支脚として用いられた非ロクロ調整の土師器の甕と坏の破片が出土している。また、住居内の堆積層からは非ロクロ調整の土師器の甕・坏・埴?と須恵器の甕・坏の破片、政庁第Ⅱ期の平瓦が出土している。

#### SI1963 竪穴住居跡 (第3・5・7・9図)

調査地区の東側ほぼ中央に位置し、地山面で検出した。北半部の残存状況は良好で、壁の高さは30~40cmあるが、南半部は残りがあまり良くなく、壁の高さは10cmしかない。南東部はSE1988・1989、SK2013によって大きく壊されている。平面形は方形で、大きさは北辺約5.8m、西辺約5.9mである。方向は発掘基準線とほぼ一致する。

カマドの位置は不明である。周溝は北辺・東辺・西辺・南辺で検出され、住居の南東隅から南東外側に向けて外延溝が延びる。外延溝は深さが約20~25cmと他よりも深く、レベルも他より低いので、住居外への排水施設と考えられる。

床面はほぼ平坦で、褐灰色土を含む黄褐色土で2~3cmの厚さで全面に貼床されている。貼床面下、3ヶ所で支柱穴を検出した。配置関係から見て支柱穴は住居の対角線上に4本あったと推定される。

堆積層は3層あり、いずれも住居廃絶時に人為的に埋められた土層と考えられる。

新旧関係はSI1962よりも新しく、SE1988・1989、SK2013よりも古い。

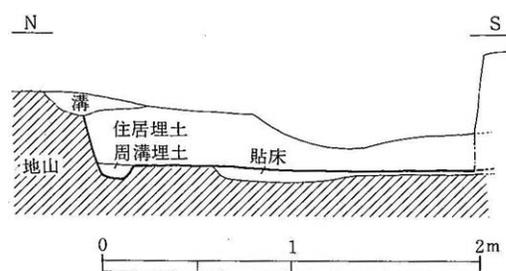
遺物は床面、周溝と住居内の各堆積層からそれぞれ少量出土している。床面からは須恵器の高台坏(第5図6)、周溝からは須恵器の高台埴(第5図7)と非ロクロ調整の土師器の甕破片が出土している。住居内の各堆積層からは土師器の埴(第5図2)・坏・甕、須恵器の坏・鉢・蓋・甕の破片、政庁第Ⅱ期の平瓦が出土している。このうち、第1層にはロクロ調整の土師器も含まれるが、第2・3層にはロクロ調整の土師器は含まれず、すべて非ロクロ調整で、第3層からは体下部に段のある非ロクロ調整の内黒土師器坏(第6図1)も出土している。また、堆積層出土の須恵器の坏のうち、底部の調整がわかる2点はいずれもヘラ切り無調整である。

#### SI1964 竪穴住居跡 (第3・10図)

調査地区中央やや東寄りの南壁際に位置し、地山面で検出した。北半部を検出し、南半部は調査地区外の南にある。SB1979・1980、SD2044に大きく壊されているが、壁の高さは30~45cmあり、北辺・東辺付近の残存状況は比較的良好である。平面形は方形と推定され、大きさは北辺が約5.0mである。方向は北辺で見ると東で北に約15°偏している。

カマドは東辺にあり、一部が残存するのみである。支柱穴は認められない。床面はほぼ平坦であり、住居構築時に掘り方の底面で火を焚いて乾燥させた後、炭・焼土混じりの明黄褐色粘質シルトによって2~3cmの厚さで全面に貼床されている。

周溝は北辺東半部・東辺・住居内西側にある。住居内西側の周溝は北辺中央やや西寄り西辺約2m離れてこれと平行するように南に延び、貼床面で検出したことから、西側に拡張されていることがわかる。周溝の上端幅は約15～38cm、底面幅は約8～15cm、深さ約5～8cmで、断面形は浅いU字形をなす。住居廃絶時に炭混じりの褐灰色粘土・明黄褐色粘質シルト土で埋められている。



第10図 SI1964 竪穴住居跡断面図

堆積層は1層で、明黄褐色粘質シルトと褐色粘質シルトが不均一に混ざり合う土で住居廃絶時に人為的に埋められている。

新旧関係はSB1979・1980、SD2044よりも古い。

遺物は貼床、床面と住居内堆積層からそれぞれ破片が少量出土している。貼床からは非ロクロ調整の土師器の坏・甕破片、須恵器の甕破片、床面からは非ロクロ調整の土師器の坏・甕破片、須恵器の坏・甕破片が出土している。また、堆積層からは非ロクロ調整の土師器の坏・甕破片、須恵器の坏・甕破片、政庁第I期の均整唐草文軒平瓦660が出土している。これらのうち、貼床出土の土師器の坏は底部が手持ちヘラ削り調整された丸底である。また、堆積層出土の土師器の坏は底部がヘラ切り無調整のものが多く、さらにヘラミガキされたものも若干ある。また、堆積層出土の須恵器の坏で、底部の調整がわかるものはすべてヘラ切り無調整のものである。

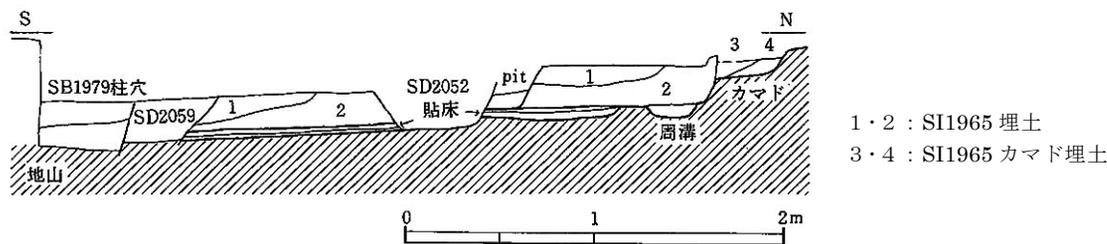
#### SI1965 竪穴住居跡 (第3・5・11図)

調査地区中央やや東寄りの南壁際に位置し、地山面で検出した。一部拡張して南東隅を検出したが、SB1980、SD2053に壊されて、南辺は検出できなかった。残存状況は比較的良好で、壁の高さは25～30cmある。平面形は長方形で、大きさは北辺が約3.5m、東辺が約4.0mである。方向は東辺で見ると北で西に約25°偏している。

カマドは北辺の中央から東寄りにあり、住居外に延びる煙道の一部が残存するが、燃焼部・側壁は住居廃絶時に取り払われている。支柱穴は認められない。

床面はほぼ平坦で、灰白色シルトを含むにぶい黄褐色粘土によって2～3cmの厚さで全面に貼床されている。住居内北東部の貼床下で浅い長方形の焼け面を検出したが、住居構築時に掘り方の底面で火を焚いて乾燥させた後、貼床させたことがわかる。

周溝は北辺・東辺・西辺で検出したが、南辺は不明である。周溝の上端幅は約20～25cm、



第11図 SI1965 竪穴住居跡断面図

底面幅は約10～15cm、深さ約3～5cmで、断面形は浅いU字形をなす。住居廃絶時に灰白色シルトを含むにぶい黄褐色粘土で埋められている。

堆積層は住居内とカマド内に各2層あり、カマドが取り払われて先に埋められた後、住居内が埋められている。

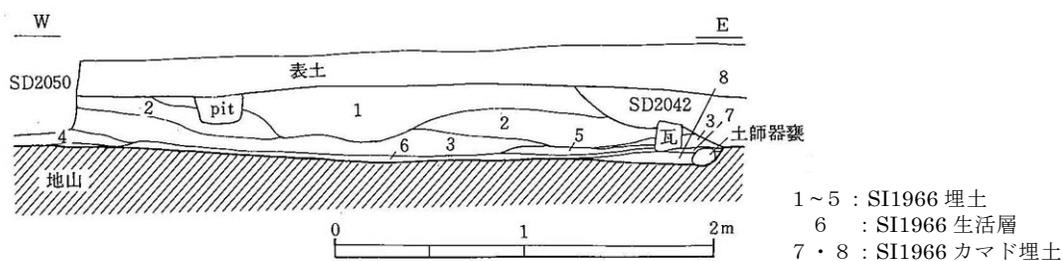
新旧関係はSB1979・1980、SD2052・2053よりも古い。

遺物は堆積層から土師器・須恵器が少量出土している。土師器には坏・蓋・長胴甕・球胴甕の破片があり、蓋以外は非ロクロ調整である。蓋はロクロ成形の可能性がある、その後に両面が丁寧にヘラミガキされ、さらに両面が黒色処理されている(第5図3)。須恵器は坏・甕の破片であり、底部のわかる坏1点はヘラ切り無調整のものである。

**SI1966 竪穴住居跡 (第3・5・12図)**

調査地区中央東寄りの南壁際に位置し、地山面で北半部を検出した。北辺・西辺はSD2050、東辺はSD2041に壊されている。残存状況はあまり良くないが、比較的残りの良い部分では壁の高さは30～40cmある。平面形は方形で、大きさは北辺が約3.6m以上、東辺が約2.6m以上である。方向は北辺で見ると東が北に約13°偏している。

カマドは東辺にあり、住居内に地山粘質土でカマド側壁を作り、南側壁の一部には丸瓦を用いている。また、土師器甕体部下半をカマド支脚としている。側壁は住居廃絶時に取り払われ、煙道部も壊されて一部残存するにすぎない。支柱穴・貯蔵穴は認められない。



第12図 SI1966 竪穴住居跡断面図

床面はほぼ平坦で、褐灰色粘土を含む地山起源のにぶい黄褐色粘土で2～3cmの厚さで全面に貼床されている。周溝は東辺の北半部と北辺で検出した。周溝の上端幅は約10～15cm、底面幅は約8～10cm、深さ約3～7cmで、断面形は浅いU字形をなす。

堆積層は住居内に4層、カマド内に4層あり、住居廃絶時にカマドが取り払われた後、人為的に埋められている。

新旧関係はSD2041・2050よりも古い。

遺物は住居内とカマドの各堆積層からそれぞれ少量出土している。住居内の堆積層からは須恵器の坏・蓋・長頸瓶・広口瓶・甕の破片、非ロクロ調整の土師器の坏が出土している。須恵器の坏の多くは底部がヘラ切り無調整のものであるが、回転ヘラ削り調整・手持ちヘラ削り調整されたものが各1点ある。また、カマド内からは支脚に用いられた土師器の甕の底部～体下部破片1点の他、底部ヘラ切り無調整の須恵器坏(第6図5)、土師器の甕破片が出土し、いずれも非ロクロ調整である。また、カマド内からは焼けた骨片が1点出土し、堆積土上面からは径約12cmの大きさの平滑な漆皮膜が検出された。

## (2) 掘立式建物跡

### SB1885 掘立式建物跡 (第13図)

調査地区北東部に位置し、第56次調査西地区と第58次調査地区にまたがって地山面で検出した南北3間、東西2間の南北棟掘立式建物跡で、方向は西側柱列で見ると発掘南北基準線に対し北が西へ約2°偏している。柱痕跡は北東隅と南西隅の2ヶ所で確認している。柱位置を抜取穴などの状況によって推定すると、桁行柱間は約2.1m等間で総長は約6.3mである。また、梁行は総長約3.8m、柱間約1.9m等間となる。柱穴は一辺1.2m前後の方形で、柱痕跡は径約30cmである。柱穴・抜取穴・柱痕跡には黒褐色土を含まない。

新旧関係はSB1881よりも新しく、SB1887・1899・1973よりも古い。なお、SB1884とは東西側柱筋を揃え、南北に並んでいることより同時期と考えられる。

遺物は柱穴埋土から須恵器の甕破片が1点出土したのみである。

### SB1887 掘立式建物跡 (第13図)

調査地区北東部に位置し、第56次調査西地区と第58次調査地区にまたがって地山面で検出した東西4間、南北3間の東西棟掘立式建物跡で、北側に廂が付く。方向は北側柱列で見ると発掘東西基準線に対して東が北へ約9°偏する。柱穴は地山面で検出し、3ヶ所の柱穴を除いて柱痕跡を確認した。柱穴は身舎が一辺0.9m前後の方形で埋土は厚さ0.1～0.2mの互層をなし、壁は垂直に掘り込まれ、深さは約0.6m程残存している。廂は一辺0.5m前後の不整形で深さ約0.2m程が残り、壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、身舎に較べ小さく浅い。柱痕跡は身舎で径25cm、廂で径約15cmである。柱穴・抜取穴・柱痕跡には



黒褐色土を含まない。平面規模は桁行が北入側柱列で総長 9.93m、柱間が東より 2.45m・5.01m(2間分)・2.47m である。梁行は東妻で廂の出が 2.26m で、身舎部分の柱間は北から 2.67m・約 2.5m(推定値)である。

新旧関係は SI1904、SB1885 よりも新しく、第 4 層、SB1899、SX1997 土器埋設遺構よりも古い。なお、SB1886A・B とは建物の方向が同じで西妻柱筋が一致していることから、これと同時期のものと推定される。

遺物はすべて破片資料であるが、柱穴から少量の須恵器・土師器が出土している。須恵器には坏、瓶があり、この中の坏には底部が回転ヘラ削り調整のものとヘラ切り無調整のものがみられる。土師器にはロクロ調整の甕、底部と体部下端を回転ヘラ削り調整した内黒の坏、ロクロ使用の有無不明の内黒坏・両黒蓋・甕がある。

#### **SB1898 掘立式建物跡 (第 14・15 図)**

調査地区の北東部に位置し、第 56 次調査地区と第 58 次調査地区にまたがる南北 3 間、東西 2 間の南北棟掘立式建物跡である(註 1)。方向は西側柱列で見ると南北発掘基準線に対して北が西へ約 3° 弱偏している。柱穴は地山面で検出し、柱痕跡は 2ヶ所確認した。柱穴は一辺 0.6~0.9m 前後の方形である。柱穴・抜取穴・柱痕跡には黒褐色土を含まない。平面規模は西側柱列で見ると桁行総長が 6.69m で、柱間は等間ならば 2.23m である。また、梁行総長は北妻の推定値が 4.63m である。

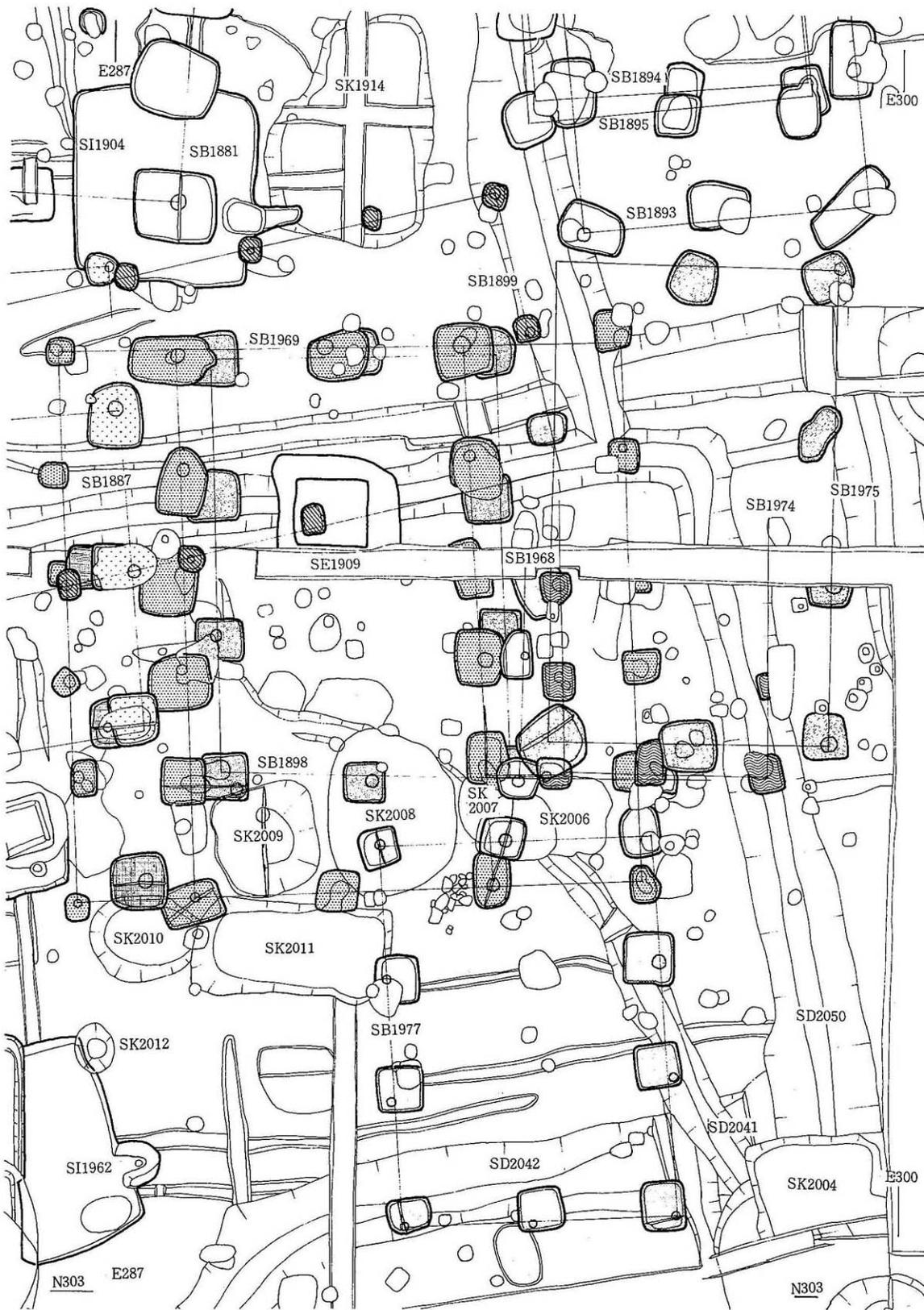
新旧関係は第 4 層、SB1968・1969、SX1995 土器埋設遺構、SK2008~2010、SD2041 よりも古い。

遺物は柱穴と柱抜取穴から須恵器と土師器が少量出土している。柱穴から出土した須恵器には底部がヘラ切り無調整の坏と高台坏、甕があり、土師器には底部が回転糸切り無調整かと思われる内黒坏、甕がある。柱抜取穴から出土したものには須恵器の蓋、土師器では非ロクロ調整の甕と調整不明の内黒坏、甕がある。

#### **SB1899 掘立式建物跡 (第 13 図)**

調査区の北東部に位置し、第 56 次調査西地区と第 58 次調査地区にまたがる東西 5 間、南北 2 間の東西棟掘立式建物跡で、方向は発掘基準線に対し北側柱列では東が北へ約 13° 強偏している。柱穴は地山面で検出し、柱痕跡は第 56 次調査西地区も併せると 6ヶ所で確認した。柱穴は径 0.4~0.6m 程の不整円形で深さは約 0.4m 程残存している。埋土は黒褐色土が主体をなし、これより柱穴は 2 b 層上面より掘り込まれたものと考えられる。柱痕跡は径 15~20cm である。平面規模は桁行が総長約 10.4m で、柱間が 2.1m 弱の等間、梁行が総長約 4.6m で、柱間は約 2.3m 等間と推定される。

新旧関係は第 4 層、SB1885・1887、SI1904、SE190 よりも新しく、SD2050 より



第 14 图 SB1898 · 1968 · 1969 · 1974 · 1975 · 1977 掘立式建物跡平面图

も古い。SB1900 とは若干方向が異なるが、柱穴の形状や規模、また埋土の特徴がきわめて類似するため、同時期の建物と考えられる。

遺物はすべて破片資料であるが、柱穴から微量の土師器が、また抜取穴から微量の須恵系土器・須恵器・土師器が出土している。柱穴からは底部が回転糸切り無調整の内黒坏が出土している。抜取穴から出土したものには須恵系土器の小型坏・小皿、須恵器の瓶、土師器では非クロ調整の甕、調整不明の内黒および両黒の坏、甕がある。

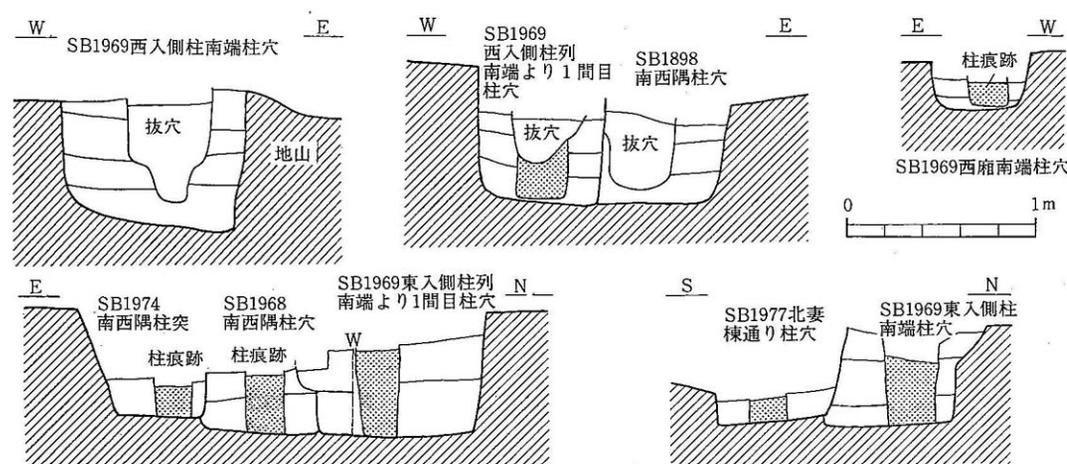
**SB1968 掘立式建物跡** (第 14・15 図)

調査地区の北東部に位置し、地山面で検出した掘立式建物跡で、柱穴が 3ヶ所検出されたにすぎないため、建物の方向・規模は不明である。柱穴は一辺 0.5~0.8m 前後の方形で、柱痕跡は径約 22cm である。柱穴・抜取穴・柱痕跡には黒褐色土を含まない。

新旧関係は SB1898 よりも新しく、第 4 層、SB1887・1969・1973、SK2006・2007 よりも古い。出土遺物はない。

**SB1969 掘立式建物跡** (第 13~15 図)

調査地区の北東部に位置し、第 56 次調査地区と第 58 次調査地区にまたがる南北 5 間、東西 4 間の東西両廂付きの南北棟掘立式建物跡である(註 1)。方向は西入側柱列で見ると、発掘南北基準線に対して北が西へ約 2° 強偏している。柱穴は地山面で検出し、柱痕跡は身舎で 13ヶ所、廂で 6ヶ所確認した。柱穴は身舎が一辺 0.8~0.9m 前後の方形で、廂は 0.4~0.6m 前後の方形で、身舎よりも小さい。柱痕跡は身舎が約 25cm 前後、廂が約 20cm 前後である。柱穴・抜取穴・柱痕跡には黒褐色土を含まない。桁行は西入側柱列で総長が 8.77m、柱間が 1.84m・1.76m・1.59m・1.75m・1.83m である。梁行は南妻で総長が 9.34m、柱間は



第 15 図 SB1969 掘立式建物跡及びこれと重複する SB1898・1968・1974・1977 掘立式建物跡の柱穴断面図

身舎部分が西より 2.37m・2.53m で、廂の出は西が 1.94m、東が約 2.5m と推定される。

新旧関係は SB1898・1968 よりも新しく、第 4 層、SB1973、SX1995 土器埋設遺構、SX2002 集積遺構、SK2006～2008・2010・2011、SD2041 よりも古い。

遺物は柱穴から少量の須恵器・土師器・瓦が出土している。須恵器には坏、高台坏、甕、長頸瓶があり、高台坏は底部がへら切り無調整のもので、坏には底部がへら切り無調整のもの、手持ちへら削り調整のものがみられる。土師器にはロクロ使用の内黒坏、ロクロ使用の内面黒色処理されない埴、両黒の埴、非ロクロ調整・ロクロ調整の甕がある。瓦には政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類、政庁第Ⅲ期の平瓦ⅡB類 a3タイプがある。また、柱抜取穴からは須恵器の坏、ロクロ調整の土師器の内黒坏・甕が少量出土している。

**SB1970 掘立式建物跡** (第 16・18 図)

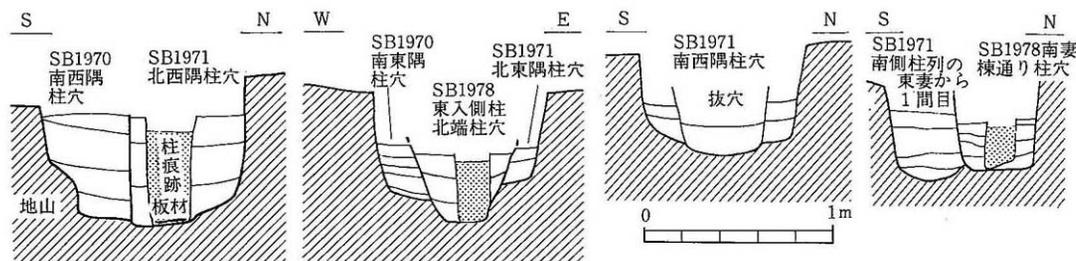
調査地区の中央北部に位置し、地山面で検出した南北 3 間、東西 2 間の南北棟掘立式建物跡である。方向は西側柱列で見ると発掘南北基準線に対し北が西へ約 7° 強偏している。柱穴は地山面で検出し、柱痕跡は 5ヶ所で確認した。柱穴は一辺 0.5～1.4m 前後の方形で、大きさは一定ではない。柱痕跡は径約 15～23cm である。柱穴・抜取穴・柱痕跡には黒褐色土を含まない。平面規模は北妻で見ると梁行総長が 5.86m で、柱間は西より 3.29m・2.57m である。また、桁行総長は西側柱列で見ると約 8.5m 前後と推定され、柱間は北より 5.66m(2 間分)・不明である。

新旧関係は SB1971・1976・1978、SD2049・2050 よりも古い。

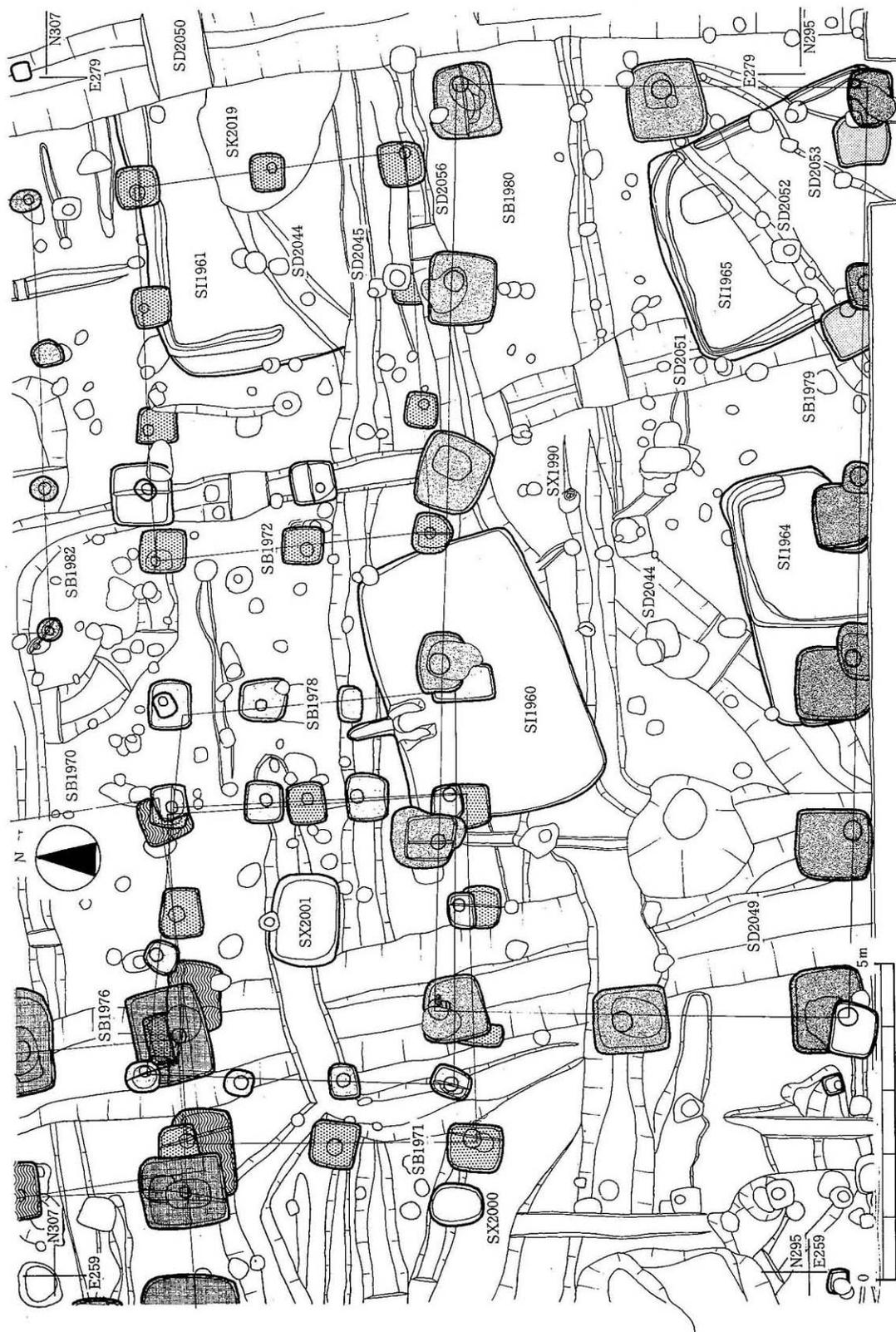
遺物は柱穴から須恵器・土師器が少量出土している。須恵器には坏・甕の体部破片があり、土師器にはロクロ調整の内黒坏・高台坏、非ロクロ調整の甕がある。

**SB1971 掘立式建物跡** (第 21・22 図)

調査地区の中央部に位置し、地山面で検出した東西 3 間、南北 2 間の東西棟掘立式建物跡で、方向は北側柱列で見ると発掘東西基準線に対し東が北に約 2° 弱偏している。柱穴は地山面で検出し、柱痕跡は 6ヶ所で確認した。柱穴は一辺 0.5～0.8m 前後の方形で、柱痕



第 16 図 SB1971 掘立式建物跡及びこれと重複する SB1970・1978 掘立式建物跡の柱穴断面図

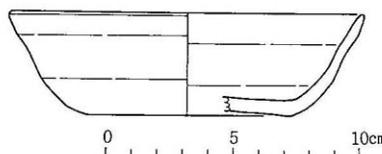


第 17 图 SB1971・1972・1978~1980 掘立式建物跡平面图

跡は径 25cm 前後である。柱穴・抜取穴・柱痕跡には黒褐色土を含まない。桁行は北側柱列で総長が約 5 m、柱間は西より 1.55m・2.05m・約 1.8m(推定値)である。また梁行は西妻で総長が 4.49m、柱間は北より 2.33m・2.16m である。

新旧関係は SI1960、SB1970 よりも新しく、SB1976・1978、SD2045・2049 よりも古い。SX2001 工房と重複するが、新旧関係は不明である。なお、本建物と SB1972 とは北側柱列をほぼ揃えて東西に並ぶことから同時期のものと考えられる。

遺物は柱穴から底部がヘラ切り無調整の須恵器杯(第 18 図)ロクロ調整の土師器甕、政庁第 II 期の平瓦 II B 類など、柱痕跡からロクロ調整の土師器甕が少量出土している。



出土位置	種類	特徴	箱番号
南西隅柱穴	須恵器杯	外面：ロクロ調整ヘラ切り、内面：ロクロ調整	8173

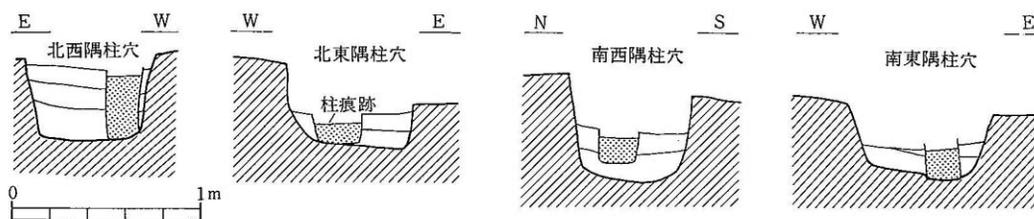
第 18 図 SB1971 掘立式建物跡出土遺物

**SB1972 掘立式建物跡 (第 17・19 図)**

調査地区の中央部に位置する東西 3 間、南北 2 間の東西棟掘立式建物跡で、方向は発掘東西基準線に対して北側柱列では東が北に約 2° 強偏している。柱穴は地山面で検出し、柱痕跡は 1ヶ所を除きすべてで確認した。柱穴は一辺 0.6m 前後の方形で、埋土は厚さ 15cm 前後の互層をなす。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、深さは約 50cm 前後残っている。柱痕跡は径約 15~30cm である。柱穴・抜取穴・柱痕跡には黒褐色土を含まない。桁行は北側柱列で総長が 5.87m、柱間が西より 2.12m・1.91m・1.84m である。梁行は西妻で総長が 4.33m、柱間が北より 2.39m・1.94m である。

新旧関係は SI1961 よりも新しく、SK2019、SD2044・2045・2056 よりも新しい。なお、本建物は SB1971 と北側柱列をほぼ揃えて東西に並ぶことから、これと同時期のものと考えられる。

柱穴からは土師器の甕破片(ロクロ使用の有無不明)、底部と体部下端が回転ヘラ削り調整された須恵器の坏破片が出土している。



第 19 図 SB1972 掘立式建物跡柱穴断面図

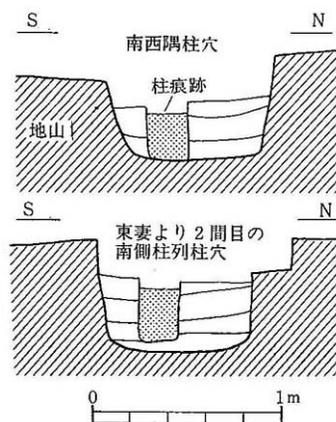
### SB1973 掘立式建物跡 (第 14・20 図)

調査地区北東部に位置し、地山面で検出した東西 4 間、南北 2 間の東西棟掘立式建物跡である。方向は発掘東西基準線に対し北側柱列では東が北へ約  $10^\circ$  偏し、南側柱列では東が北へ約  $10^\circ$  強偏する。これらの柱穴の内、3ヶ所の柱穴を除いて柱痕跡を確認した。柱穴・抜取穴・柱痕跡には黒褐色土を含まない。平面規模は桁行総長が不明で、梁行総長が東妻で約 5.11m と推定される。桁行の柱間は北側柱列では東より 2.14m(推定値)・2.30m・2.77m・不明、南側柱列では東より 5.03m(2間分)・2.57m・不明である。また梁行の柱間は東妻で北より約 3.0m(推定値)

・2.42m で、西妻では不明である。

新旧関係は SB1969 よりも新しく、SB1887・1899、SE1987、SK2005、第 4 層よりも古い。また、SB1981、SX1997 土器埋設遺構と重複するが、新旧関係は不明である。

柱穴からは土師器と須恵器の坏・甕破片、丸瓦が少量出土している。内黒土師器坏は底部が回転糸切り無調整かと思われ、甕はロクロ使用の有無について不明である。



第 20 図 SB1973 掘立式建物跡柱穴断面図

### SB1974 掘立式建物跡 (第 14・15 図)

調査地区北東部に位置し、地山面で検出した南北 3 間以上、東西 2 間の南北棟掘立式建物跡で、北半部は第 56 次調査西地区であるが検出していない。

方向は発掘南北基準線に対し西側柱列では北が西に約  $4^\circ$  偏している。これらの柱穴の内、2ヶ所で柱痕跡を確認した。柱穴は一辺 0.7~0.9m 前後の方形で、埋土は厚さ 0.1~0.2m の互層をなし、壁は垂直に掘り込まれ、深さは約 0.6m 程残存している。柱穴・抜取穴・柱痕跡には黒褐色土を含まない。桁行は総長が不明で、西側柱列の南妻より 2 間目で 1.67 m である。梁行は総長が約 3.3m 前後、柱間は等間ならば約 1.65m と推定される。

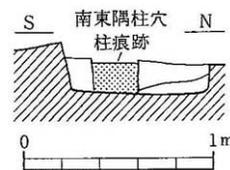
新旧関係は SB1968 よりも新しく、第 4 層、SB1975、SD2050 よりも古い。

出土遺物はない。

### SB1975 掘立式建物跡 (第 14・21 図)

調査地区北東部に位置し、地山面で検出した南北 3 間、東西 2 間の南北棟掘立式建物跡で、第 56 次調査西地区と第 58 次調査地区にまたがる。方向は発掘南北基準線に対し東側柱

列では北が西に約1°強偏している。これらの柱穴の内、4ヶ所で柱痕跡を確認した。柱穴は一辺0.5～0.9m前後の方形で、埋土は厚さ10～15cmの互層をなし、壁は垂直に掘り込まれ、深さは約0.3m程残存している。柱穴・抜取穴・柱痕跡には黒褐色土を含まない。平面規模は不明確だが、桁行は東側柱列で見ると総長7.75mで、柱間は北より5.26m(2間分)2.80mである。梁行は南妻で見ると総長約4.7m前後と推定され、柱間は東より2.35m・不明である。



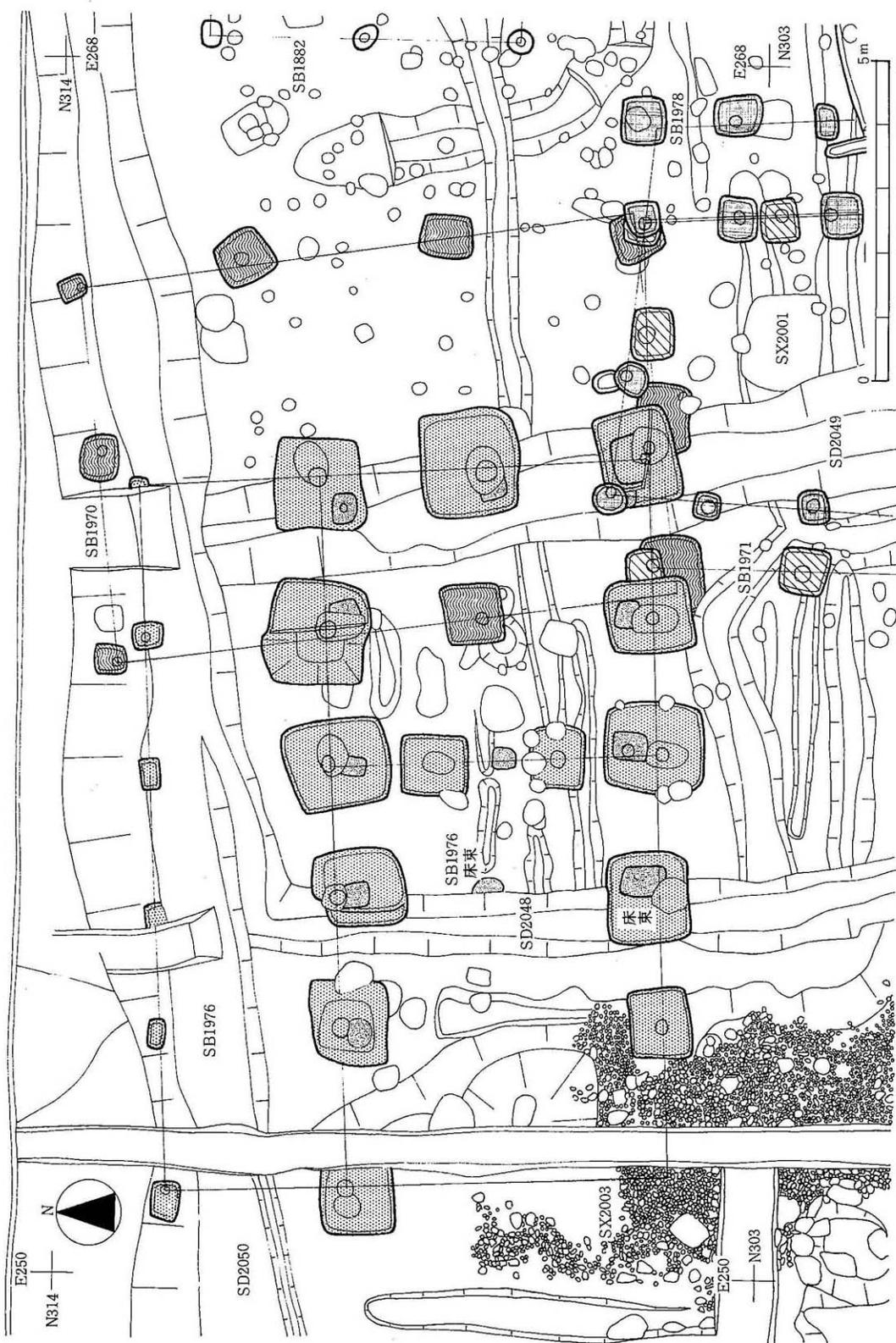
第21図 SB1975 建物跡柱穴断面図

新旧関係はSB1968・1974よりも新しく、第4層、SD2050よりも古い。

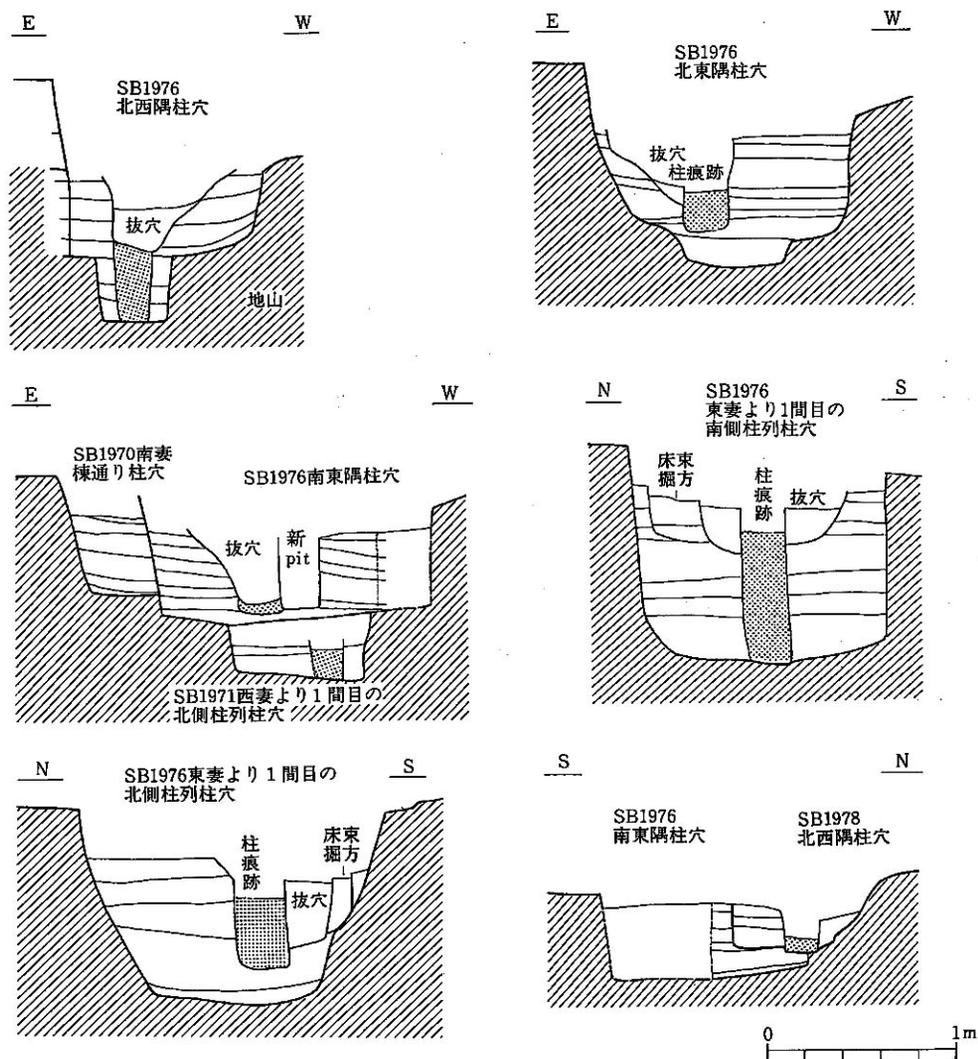
柱穴からは須恵器・土師器・瓦が少量出土している。須恵器には坏・甕・瓶があり、坏には底部がへら切り無調整のものがある。土師器には内黒坏・内黒埴・両黒蓋・甕があり、内黒坏には底部が回転へら削り調整されたもの、内黒埴には底部と体部下端がへらケズリされたもの、両黒蓋にはロクロナデ調整後にさらにへらミガキされたものがある。また、内面に漆皮膜が付着した土師器の甕体部破片が1点ある。瓦には政庁第II期の平瓦II B類などがある。また、柱痕跡からは須恵器・土師器の坏、瓦が少量出土しており、須恵器坏は底部が回転系切り無調整のものである。瓦には政庁第II期の平瓦II B類がある。

#### SB1976 堀立式建物跡 (第22・23図)

調査地区中央部北寄りに位置し、地山面で検出した東西5間、南北2間の東西棟掘立式建物跡で、東妻より2間目に間仕切りを、北に土廂を伴う。また、側柱内側と棟通り下に14ヶ所で床束を検出した。なお、西妻の棟通り柱穴と南西隅柱穴はSX2003石敷遺構に覆われ、検出していない。しかし、さらに西には連続する柱穴がないため、東西5間と判断した。柱穴は身舎が一辺約1.2～1.5m前後の方形で、埋土は厚さ10～15cmの互層をなし、壁は垂直ないしやや斜めに掘り込まれ、深さは深いところでは約1.16m程残存していた。身舎の間仕切りの柱穴はこれよりも一回り小さく、一辺約1.0m前後の正方形で、埋土は厚さ10～15cmの互層をなし、壁は垂直に掘り込まれ、深さは深いところでは約0.76m程残存していた。また、土廂の柱穴はさらに小さく、一辺約0.4～0.6m前後の方形である。床束は一辺約0.4～0.6m前後の方形で、深さは約0.7m前後と浅い。側柱内側の床束は側柱と近接してその内側に設けられている。側柱を立て、柱穴を埋めて突き固めた後、床束柱穴を掘り、床束柱を立てている。また、北東隅・南東隅柱穴で断ち割り調査を行ったところ、段掘りされていた。柱痕跡の大きさは側柱が径約30cmと大きく、間仕切りが径約25cmと一回り小さい。土廂は径16～22cmとさらに小さい。方向は発掘東西基準線に対し北側柱



第 22 图 SB1970 · 1976 掘立式建物跡平面图



第 23 図 SB1976 掘立式建物跡及びこれと重複する SB1970・1978 掘立式建物跡の柱穴断面図

列では東が北に約  $3^\circ$  弱偏している。これらの柱穴のうち 15ヶ所で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が北入側柱列で総長 11.01m、柱間は東より 2.36m・2.08m・2.15m・1.97m・2.46m である。梁行は東妻では総長 5.09m、柱間は北より 2.58m・2.46m である。間仕切りの柱間は北より 1.60m・1.93m・1.62m である。土廂の出は東で約 2.8m である。

新旧関係は SB1970・1971 よりも新しく、SB1978、SD2048~2050、SX2003 石敷遺構よりも古い。

遺物は柱穴・柱痕跡・柱抜取穴から少量の須恵器・土師器・瓦が出土している。柱穴からは須恵器の坏・甕・瓶、土師器の内黒坏・甕、政庁第 II 期の平瓦 II B 類と丸瓦が出土している。また、柱痕跡からは土師器の甕、柱抜取穴からは須恵器の坏・甕と土師器の内黒

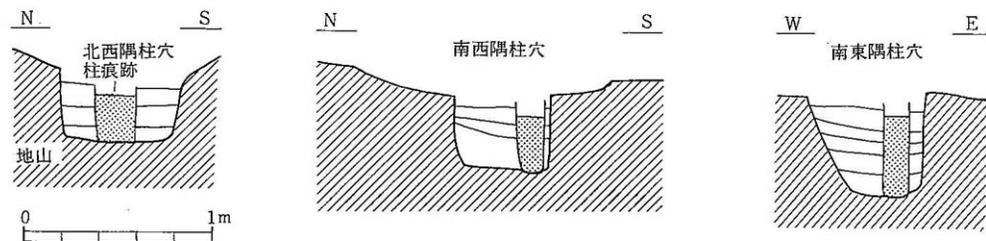
坏・両黒坏・甕が出土している。

#### SB1977 掘立式建物跡 (第 14・24 図)

調査地区東中央部に位置し、地山面で検出した南北 3 間、東西 2 間の南北棟掘立式建物跡で、方向は発掘南北基準線に対し東側柱列では北が西に約 4° 弱偏している。柱穴は一辺 0.6~0.8m 前後の方形で、埋土は厚さ約 5~15cm の互層をなし、壁は垂直に掘り込まれ、深さは約 0.55m 程残存している。すべての柱穴で柱痕跡を確認し、柱痕跡は径 20cm 前後である。柱穴・抜取穴・柱痕跡には黒褐色土を含まない。桁行は東側柱列では総長が 6.11m、柱間が北より 1.96m・1.92m・2.25m である。梁行は北妻で総長が 4.48m、柱間が東より 2.44m・2.04m である。

新旧関係は SB1969 よりも新しく、第 4 種、SK2006~2008・2010・2011・2014、SD 2041・2042 よりも古い。

遺物は柱穴から須恵器・土師器・瓦が少量出土している。須恵器には坏・甕の体部破片、土師器には非ロクロ調整の坏、非ロクロ調整・調整不明の甕がある。瓦には政庁第 II 期の平瓦 II B 類がある。



第 24 図 SB1977 掘立式建物跡柱穴断面図

#### SB1978 掘立式建物跡 (第 16・17・23 図)

調査地区の中央部に位置し、地山面・SI1960 埋土上面で検出した東西 3 間、南北 3 間の東廂付きの南北棟掘立式建物跡である。方向は発掘南北基準線に対し東入側柱列では北が西に約 3° 弱偏している。柱穴は身舎・廂とも一辺 0.4~0.8m 前後の方形で、大きさが一定しない。柱痕跡は廂の 3ヶ所を除くすべての柱穴で確認した。柱痕跡は径約 22cm 前後である。桁行は東入側柱列で総長が 4.35m、柱間が北より 1.49m・1.41m・1.46m である。また、梁行は北妻で総長が 4.20m、柱間が東より 2.39m・1.81m である。廂の出は北が約 1.6m 前後である。本建物は西側柱列に比べて東入側柱列・東廂列の総長が短いため、特に北半部が歪んでいる。

新旧関係は SI1960、SB1971・1976 よりも新しく、SB1980、SD2045・2048・2056 よりも古い。SX2001 工房と重複するが新旧関係は不明である。

遺物は柱穴から須恵器・土師器・瓦が少量出土している。須恵器には底部が回転ヘラ削り調整の坏、甕、土師器には底部が手持ちヘラ削り調整の内黒坏、甕がある。瓦には政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類、丸瓦がある。また、柱痕跡からは砥石が1点出土している。

**SB1979 掘立式建物跡** (第 17・25 図)

調査地区の中央東寄りの南壁際に位置し、地山面と SI1964・1965 埋土上面で検出した東西3間の掘立式建物跡である。規模は不明で、建物は調査地区外の南に延びる。また、柱痕跡を確認した北東隅柱穴とその西隣の柱穴で見ると、方向は発掘東西基準線に対し西で北に偏している。柱痕跡は2ヶ所で確認した。

新旧関係は SI1964・1965、SD2044・2052・2053 よりも新しく、SB1980、SD2049 よりも古い。

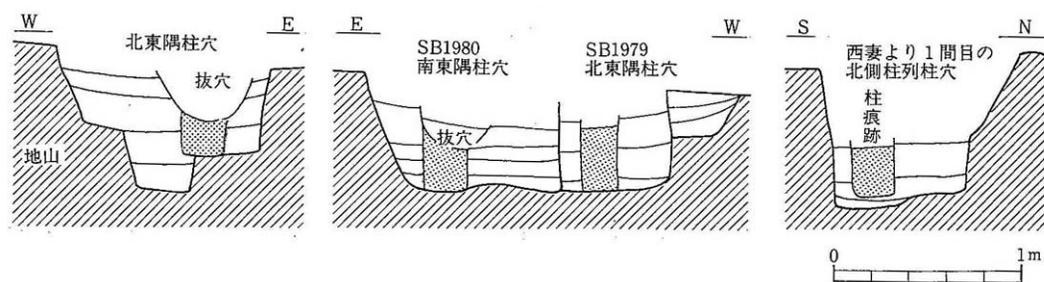
遺物は柱穴から須恵器・土師器・瓦が少量出土している。須恵器には坏・蓋・甕があり、内面に漆皮膜の付着した甕の口縁部破片が1点ある。土師器にはロクロ調整の坏・甕がある。瓦には政庁第Ⅲ期の平瓦ⅡC類がある。また、柱痕跡からは調整不明の土師器甕が出土している。

**SB1980 掘立式建物跡** (第 17・25 図)

調査地区の中央東寄りの南壁際に位置し、地山面で検出した東西5間、南北2間の東西棟掘立式建物跡で、方向は発掘東西基準線に対し北側柱列では西が北に約2°強偏している。柱穴は地山面と SI1964・1965 埋土上面で検出した。柱穴は一辺1.2m前後の方形である。柱痕跡は11ヶ所で確認し、径約30cm前後である。柱穴・抜取穴・柱痕跡には黒褐色土を含む。桁行は北側柱列で総長が14.67m、柱間が東より3.15m・6.06m(2間分)・2.78m・2.68mである。また、梁行は東妻で総長が6.36m、柱間が北より3.16m・3.20mである。

新旧関係は SI1964・1965、SB1971・1978・1979、SD2044・2052・2053 よりも新しく、SD2049・2050 よりも古い。

遺物は柱抜取穴から須恵系土器の坏・高台坏・鉢、柱痕跡から政庁第Ⅳ期の平瓦ⅡC類が少量出土した他、柱穴・柱痕跡・柱抜取穴から比較的多くの須恵器・土師器・瓦などが

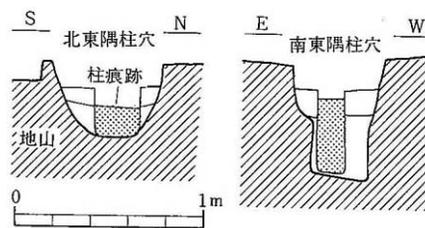


第 25 図 SB1980 掘立式建物跡柱穴断面図

出土している。

**SB1981 掘立式建物跡** (第 14・26 図)

調査地区北東部に位置し、地山面で検出した東西 3 間、南北 2 間の東西棟掘立式建物跡で、方向は発掘東西基準線に対し南側柱列では東が北へ約 3° 偏する。検出した 9 個の柱穴の内、6ヶ所で柱痕跡を確認した。柱穴は一辺 0.4~0.5m 前後の不整形円形ないし方形で、埋土は黒褐色土を含み、厚さ 0.1m 前後の互層をなす。壁は垂直ないしやや斜めに掘り込まれ、深さは約 0.6m 程残存している。柱痕跡は径約 18cm 前後である。平面規模は桁行が南側柱列で総長が約 6.5m と推定され、柱間は東より 2.10m・2.25m・不明である。梁行は東妻で総長約 5.11m、柱間が北より 2.56m・2.53m である。

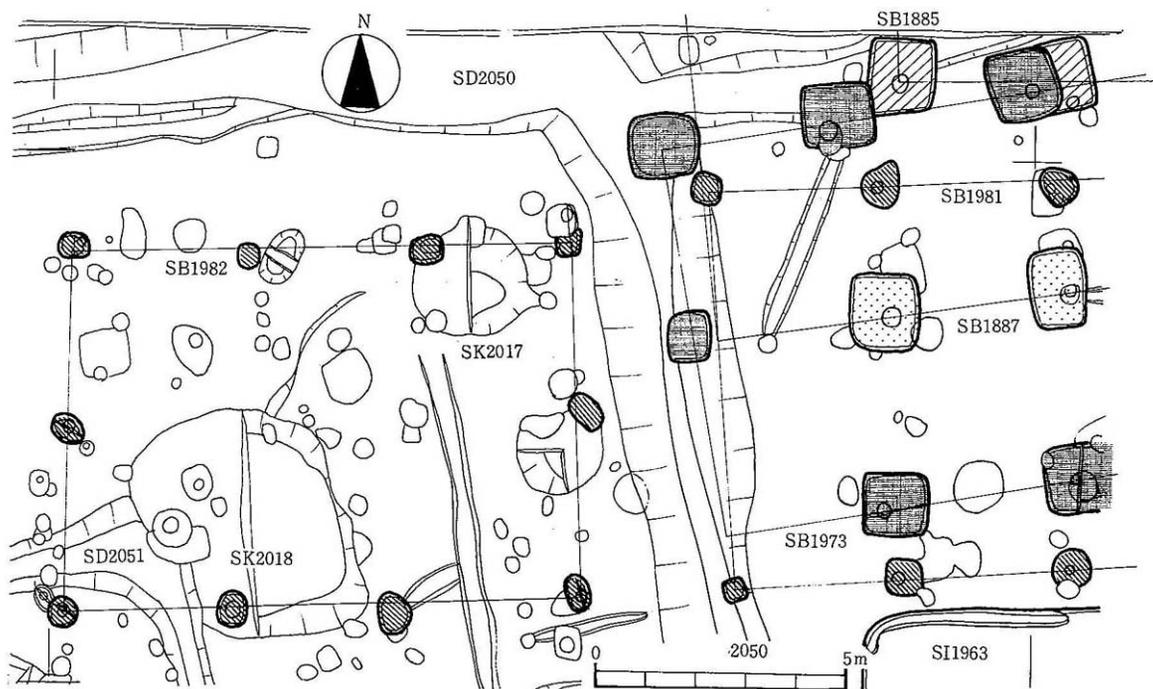


第 26 図 SB1981 掘立式建物跡柱穴断面図

SB1887・1973、SX1994・1997・1998、SE1987、SK2005 と重複するが、直接の新旧関係はない。なお、SB1982 とは建物の方向がほぼ同じで、北側柱筋をほぼ揃えて東西に並ぶことから、両建物は同時期と考えられる。

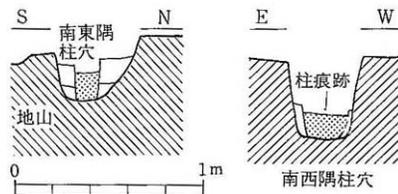
柱穴から比較的多くの須恵系土器の坏と少量の灰釉陶器塊、須恵器・土師器の坏・甕、瓦が出土した。また、柱痕跡からは須恵器の甕、土師器の坏・甕が少量出土した。

**SB1982 掘立式建物跡** (第 27・28 図)



第 27 図 SB1982 掘立式建物跡平面図

調査地区北東部に位置し、地山面で検出した東西3間、南北2間の東西棟掘立式建物跡である。北側柱列は残存状況が悪い。すべての柱穴を検出し、5ヶ所の柱穴で柱痕跡を確認した。柱穴は一辺0.3～0.5m前後の不整円形ないし方形で、埋土は黒褐色土を含み、厚さ0.1m前後の互層をなす。壁は垂直ないしやや斜めに掘り



第28図 SB1982 掘立式建物跡 柱穴断面図

込まれ、深さは約0.45m程残存している。柱痕跡は径約15cm前後である。方向は発掘東西基準線に対し南側柱列では東が北へ約2°強偏する。平面規模は桁行が南側柱列で総長6.85m、柱間は西より2.05m・4.79m(2間分)である。また、梁行は西妻で総長4.77m、柱間は北より2.35m・2.42mである。

新旧関係はSK2018よりも新しい。SB1981とは建物の方向がほぼ同じで、北側柱筋をほぼ揃えて東西に並ぶことから、両建物は同時期と考えられる。

遺物は柱穴から須恵系土器の坏・鉢、須恵器の坏・瓶・甕、土師器の坏・高台坏・甕が少量出土している。

**SB1983 掘立式建物跡 (第2図)**

調査地区南東部に位置し、地山面で検出した東西3間、南北2間以上の掘立式建物跡で、南半部は調査地区外の南に延びる。検出したすべての柱穴で柱痕跡を確認した。柱穴は一辺0.6～0.8m前後の方形で、柱痕跡は径約15～18cmの円形である。方向は発掘東西基準線に対し北の柱列では東が北へ約4°強偏する。平面規模は東西方向の柱間は北の柱列で西より1.76m・1.76m・2.01m、総長5.39mである。南北方向の柱間は東では1.94mである。

新旧関係はSD2043よりも新しい。

遺物は柱穴から須恵器・土師器・瓦が少量出土している。須恵器には坏・蓋・甕があり、坏のうち底部のわかる2点はヘラ切り無調整である。土師器にはロクロ調整の内黒坏・甕、非ロクロ調整の甕、ロクロ使用の有無不明の甕がある。瓦には政庁第II期の平瓦II B類が1点、政庁第II期または政庁第IV期の平瓦II B類が1点出土している。

**SA1986 掘立式柱列 (第2図)**

調査地区中央部の南壁際で検出した東西3間の柱列で、建物の北側柱列の可能性が高い。方向は発掘東西基準線に対し北側柱列が約1°強偏する。柱間は東より3.16m・2.90m・2.97m(推定値)である。柱穴は一辺0.3～0.4m前後の方形で、柱痕跡は径約15cmである。

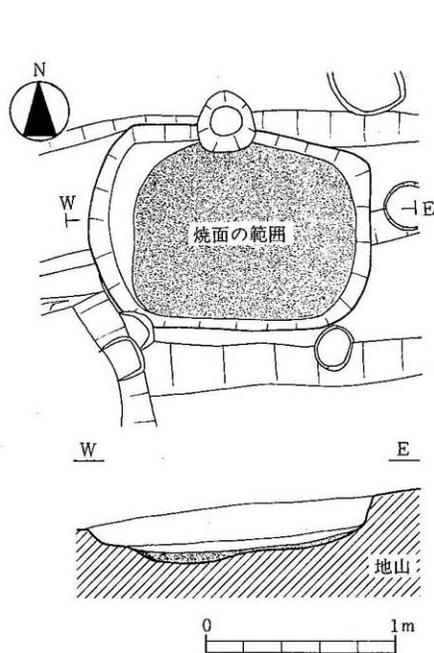
新旧関係はSD2047・2048・2057よりも古い。

(3) 工房跡

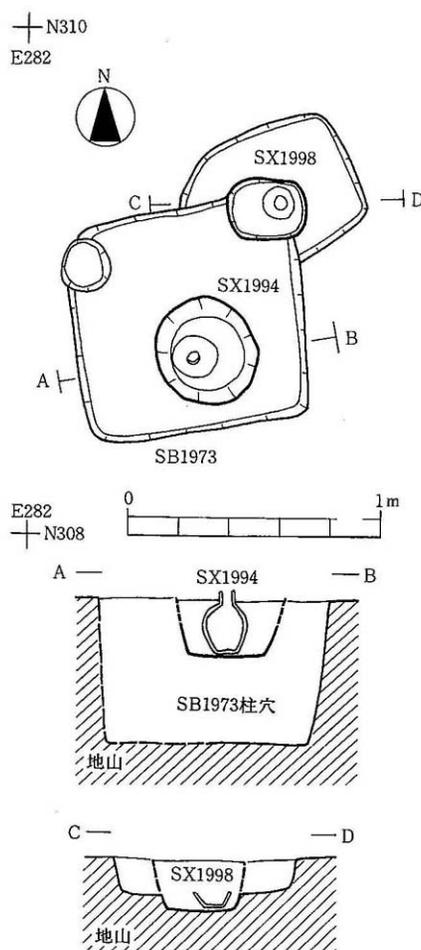
**SX2001 工房跡** (第 29 図)

調査地区中央のやや南よりに位置し、地山面で検出した。西端は SD2049 に一部壊され、北半は新しい溝に壊されて残存状況はあまり良くない。平面形は隅丸長方形で、大きさは東西が約 1.5m、南北 1.1m で、深さは約 35cm である。底面と壁下半部は固く焼け締まっている。褐色シルトの埋土は 2 層に分れ、第 2 層には焼けた壁片多量に含み、人為的に埋められたと考えられる。

遺物は須恵器の坏・甕の体部破片が各 1 点と政庁第 II 期の熨斗瓦が 1 点出土している。新旧関係は SD2049 よりも古い。SB1971・1978 と重複するが新旧関係は不明である。



第 29 図 SX2001 工房



第 30 図 SX1994・1998 土器埋設遺構

(4) 土器埋設遺構

**SX1994 土器埋設遺構** (第 30・31 図)

調査地区北東部の SB1973 の柱穴(南側柱列の東妻より 2 間目)埋土上面で検出し、

これよりも新しい。据方の土壇は径約 40cm の円形で、深さは約 30cm 残っており、上部

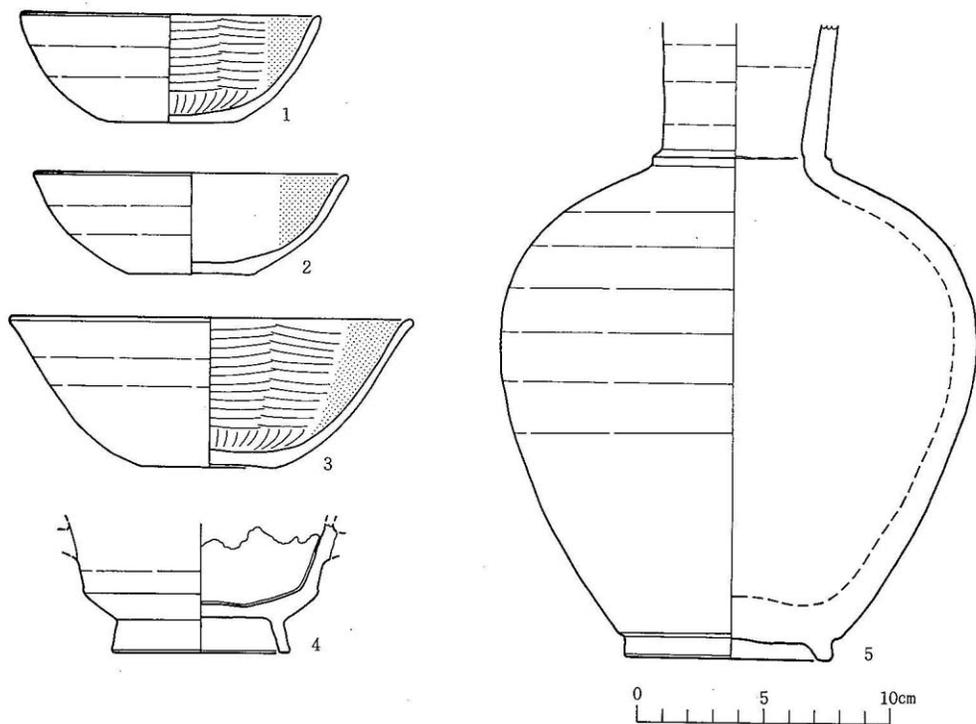
は削平されていた。埋土は地山ブロック・風化凝灰岩礫を多量に含むにぶい褐色粘質土で、しまり良く固い。この土壇に須恵器の長頸瓶(第 31 図 5)を正立状態で埋設し、人為的に埋

め戻している。この長頸瓶の口縁部は後世の削平を受けてなくなっていたが、それ以下は完形である。この長頸瓶の中には黄色粘土が口まで入り、中には何も入っていなかった。

SB1973 を壊した後、それよりも新しい SB1887 の南側柱列の南南東約 2.5m の至近距離に埋設していることから、SB1887 に伴う地鎮遺構と考えられる。

**SX1995 土器埋設遺構 (第 31・32 図)**

調査地区北東部の SB1969 の柱穴(西入側柱列の南妻より 2 間目)抜き取り穴埋土上面で検出し、これらよりも新しい土器埋設遺構である。くしゃくしゃに丸めた漆紙を中に入れた須恵器双耳環(第 31 図 4) 1 点をこれよりも少し大きい小土壇に正立状態で埋設している。据え方は長径約 15cm、短径約 17cm の楕円形の土壇で、深さは約 10cm 残っていたが、上部は削平されていた。埋土は地山ブロック細粒を含む褐色粘質シルト土である。なお、漆紙は非常に複雑に丸められているため展開できず、文字の有無については不明である。

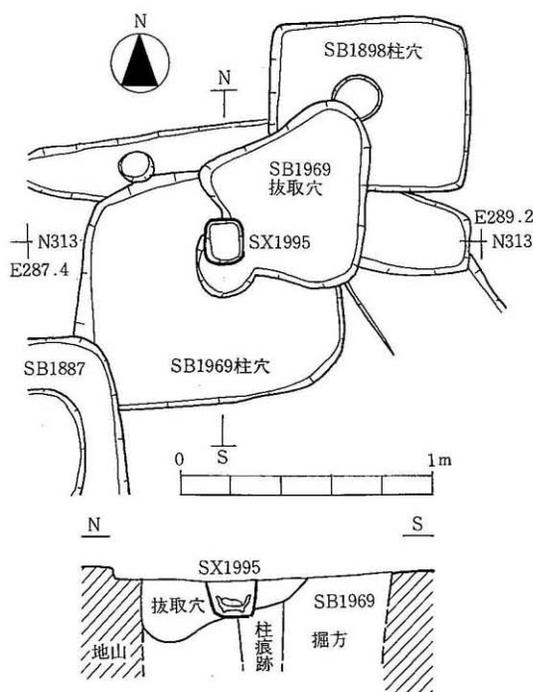


番号	遺構	種類	特徴	箱番号	番号	遺構	種類	特徴	箱番号
1	SX1997	内黒土師器坏	底部：回転糸切り？ 内面：放射状ミガキ	8185	4	SX1995	須恵器双耳環	底部：回転糸切り、 内面：漆紙入り	8201
2	SX1997	内黒土師器坏	底部：回転糸切り？	8185	5	SX1994	須恵器長頸瓶	頸部下端：リング状隆帯	8185
3	SX1998	内黒土師器坏	底部：回転糸切り 内面：放射状ミガキ	8185					

第 31 図 SX1994・1995・1997・1998 土器埋設遺構出土遺物

**SX1996 土器埋設遺構** (第 33・34 図)

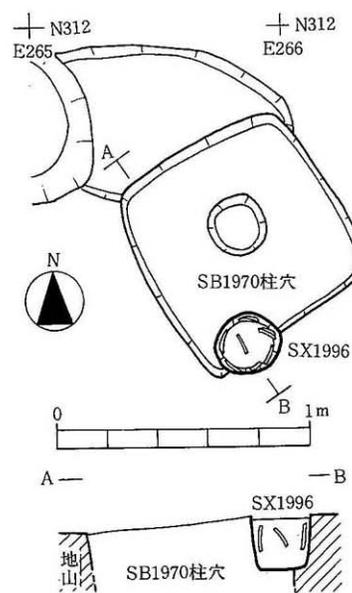
調査地区ほぼ中央の北部に位置し、SB1970 掘立式建物跡の柱穴(東側柱列の北妻より 1 間目)埋土上面・地山面で検出し、これよりも新しい土器埋設遺構である。径約 25cm、深さ約 20cm 以上の円形の据え方内に須恵系土器の甕(第 34 図 2)を正立状態で埋設し、その中に安山岩小礫 7 点を埋納していた。また、甕上部が内部に崩れ落ち、それとともに須恵系土器の坏(第 34 図 1) 2 点が検出された。これらの坏は甕の口縁部に蓋されていた可能性が高い。据方の埋土は地山黄褐色土・風化凝灰岩礫・炭を含む暗褐色粘質シルトで、人為的に埋められている。甕内部の埋土もこれと同様であった(註 2)。



**SX1997 土器埋設遺構** (第 31・34 図)

調査地区北東部の地山面で検出した土器埋設遺構で、径約 40cm、深さ約 5cm 以上の浅い皿状の円形の土壇に底部が回転糸切り無調整と思われる内黒土師器坏(第 31 図 1・2) 5 点を埋設している。埋土は地山黄色粘土ブロックを含む黒褐色土である。

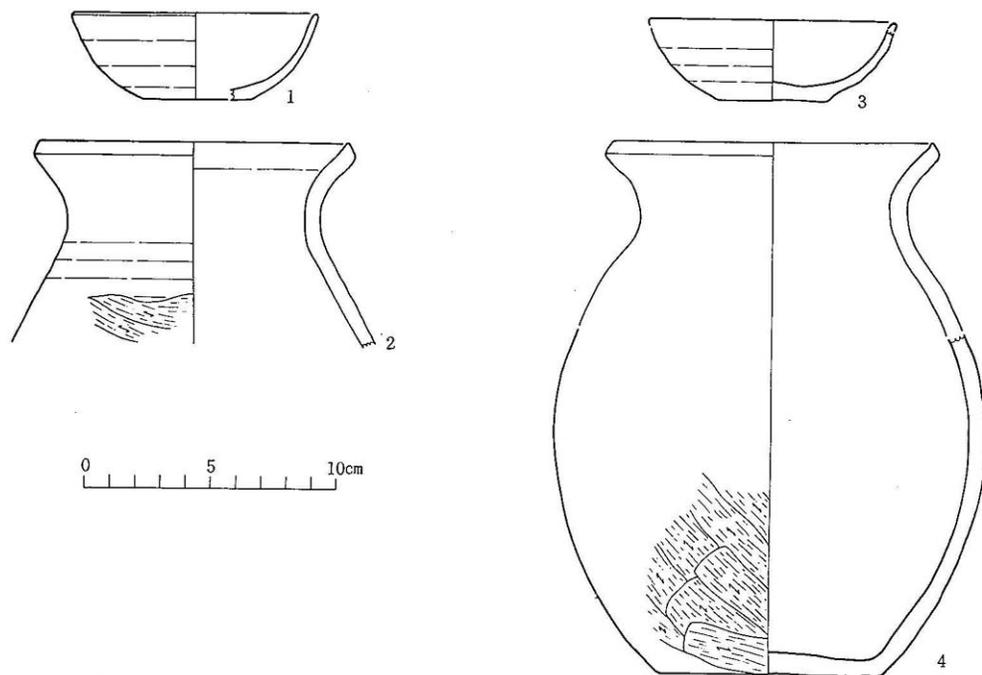
新旧関係は SB1887・1973 よりも新しい。また、SB1981 と重複するが新旧関係は不明である。



第 33 図 SX1996 土器埋設遺構

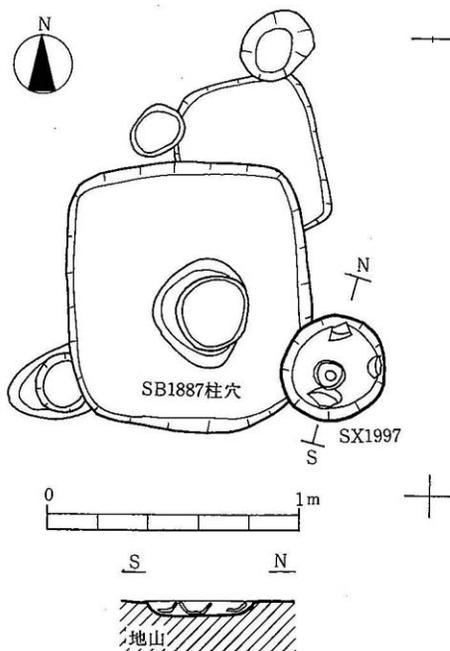
**SX1998 土器埋設遺構** (第 30・31 図)

調査地区北東部に位置し、SB1973 の柱穴とこれよりも古い土壇の埋土上面で検出した土器埋設遺構で、これらよりも新しい。また、SB1981 の内部に位置するが、直接の新旧関係はない。据方は長径約 32cm、短径約 25cm、深さ 10cm 以上の断面形が浅い皿状となる楕



番号	遺構	種類	特徴	箱番号	番号	遺構	種類	特徴	箱番号
1	SX1996	須恵系土器坏	底部：回転糸切り	8186	3	SX1999	須恵系土器坏	底部：回転糸切り(右)	8185
2	SX1996	須恵系土器甕	外面：ロクロナデ、ヘラケズリ	8186	4	SX1999	須恵系土器甕	外面：ロクロナデ、ヘラケズリ	8185

第 34 図 SX1996・1999 土器埋設遺構出土遺物

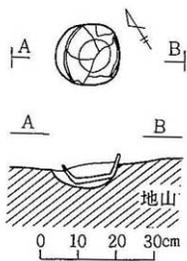


第 35 図 SX1997 土器埋設遺構

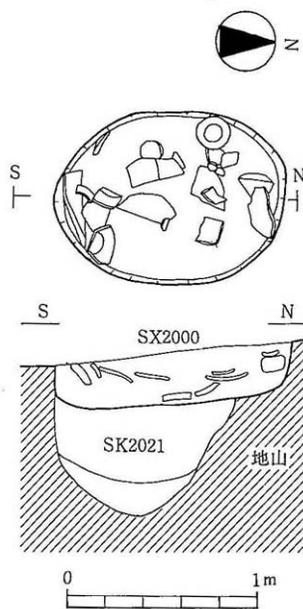
円形の土壇である。この底面に底部が回転糸切り無調整で底径が小さくやや深めの内黒土師器坏の完形品 1 点(第 30 図 3)を埋設している。埋土は地山小ブロックを含むにぶい褐色粘質シルトで、しまりは良い。

**SX1999 土器埋設遺構 (第 34・36 図)**

調査地区中央東寄りの南半部で、現代の溝の底面となる地山面で検出した土器埋設遺構である。据え方は径約 35cm、深さ 20cm 以上の断面形が浅い鉢状となるほぼ円形の土壇で、掘方上部は削平されていた。この中に須恵系土器の甕(第 34 図 4) 1 点を正立の状態で埋設している。据え方埋土中には須恵系土器坏(第 34 図 3) 2 点が入っていた。埋土は地山ブロック・炭を含む黒褐色粘質シルトで、



第 36 図 SX1999 土器埋設遺構



第 37 図 SX2000 土器

しまりは良い(註2)。

新旧関係はSD2044よりも新しい。また、SB1980と重複するが、新旧関係は不明である。

(5) 土器溜め

**SX2000 土器溜め** (第 37・38 図)

調査地区中央やや南西寄りに位置し、地山面で検出した。掘方は長径約82cm、短径約62cm、深さ22cm以上の断面形が浅い鉢状となる楕円形の土壇で、掘方上部は削平されていた。堆積土は1層で、褐色粘質土に灰褐色粘質土を斑状に含み、人為的に埋め戻されている。新旧関係はSK2021よりも新しい。

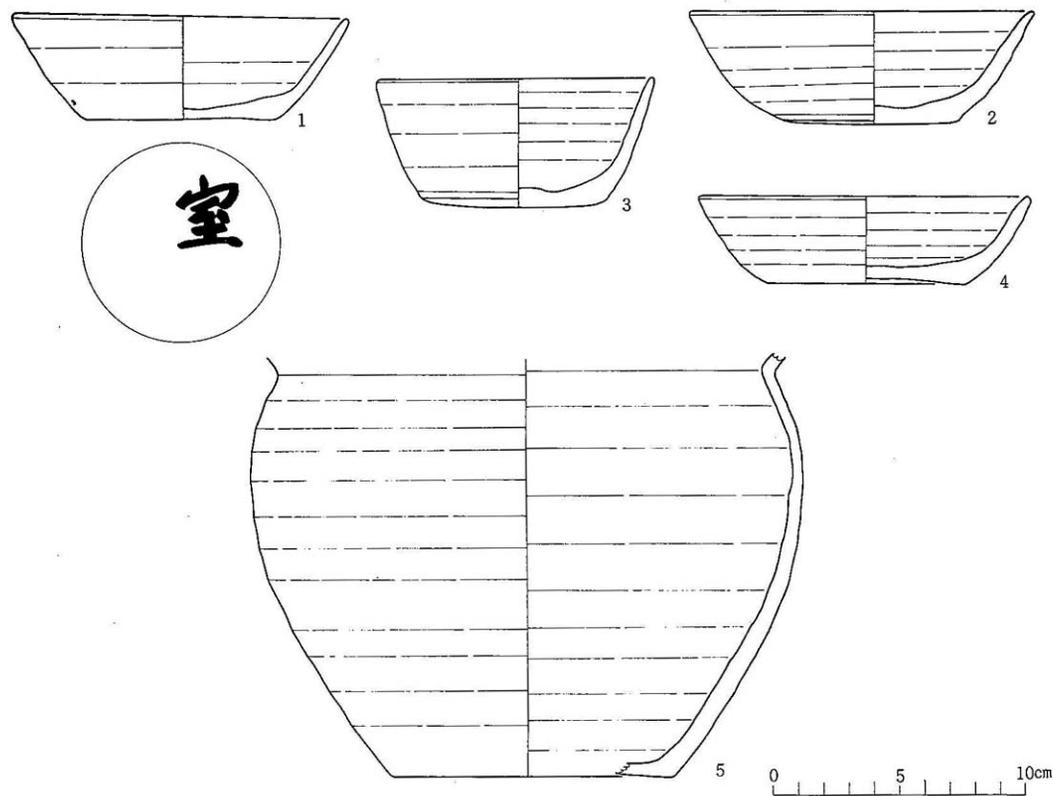
堆積土からは須恵器・土師器・瓦が出土している。須恵器にはほぼ完形の坏が5点(第38図)、坏の底部破片が1点、坏の体部破片が11点、甕体部破片が2点ある。土師器には非ロクロ調整の内黒坏の体部破片が1点、非ロクロ調整の甕の口縁部～体上部破片が1点ある。このうち、須恵器坏には底部がヘラ切り無調整のものが5点、底部糸切り後に底部周縁を手持ちヘラ削り調整したものが1点ある。瓦には政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類が10点、「伊」の刻印のある政庁第Ⅱ期の丸瓦が1点ある。

(6) 井戸跡

**SE1987 井戸跡** (第 39～42 図)

調査地区東側の北半部で地山面で検出した井戸跡で、第4層に覆われる。上部はSK2035に壊されているが、残存状況は良い。

掘方上面は約3.8m×約4.0mのほぼ正方形で、約0.7m掘り下げてから掘方の北東隅に掘方を小さくして段掘りしている。段掘り上位面も約0.9m×約1.0mのほぼ正方形で、約0.55m掘り下げてからさらに約0.2m段掘りしている。中位の段掘りと下位の段掘りとの間には、両端をほぞ組みして井籠に組合せた丸太材が2段残っていた(第41図・図版9)。これと掘方壁面との間には縦板の断片が残っていた。また、掘方上位の段掘りは裏込めされ、埋め戻されて井戸が構築されている。井戸の上位面から底面までの深さは約1.5mで、底面の標高は39.85mである。本井戸の廃絶時には人頭大前後の大きさの礫と完形に近い土器を投げ込み、人為的に埋めている。新旧関係はSK2005よりも新しく、SK2035より



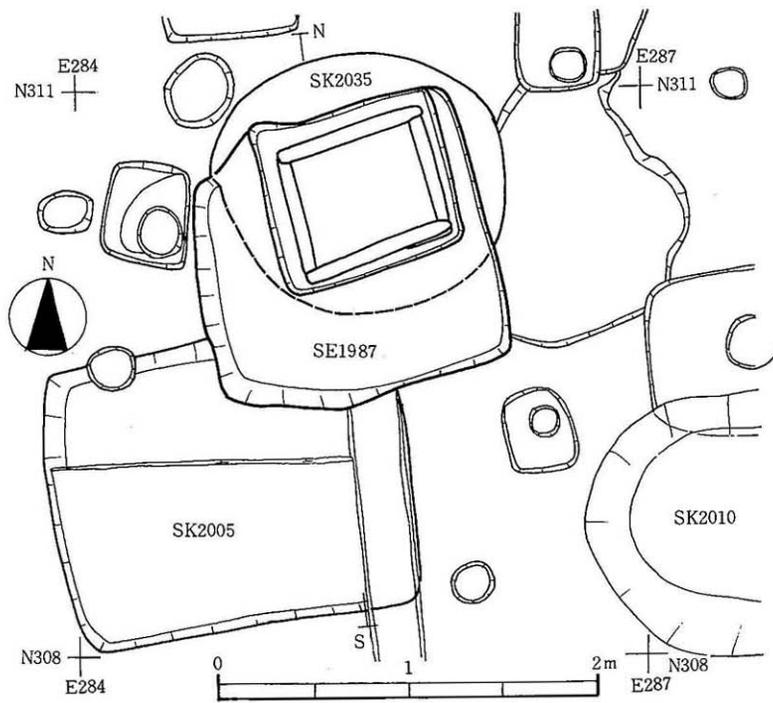
番号	種類	特 徴	箱番号	番号	種類	特 徴	箱番号
1	須恵器坏	外面：ロクロナデーヘラ切り、底部に墨書「室」	8184	4	須恵器坏	外面：ロクロナデー回転糸切り→周縁手持ヘラケズリ	8184
2	須恵器坏	外面：ロクロナデーヘラ切り 内面：ロクロナデー	8184	5	須恵器甕		8184
3	須恵器坏	外面：ロクロナデーヘラ切り 内面：ロクロナデー	8184				

第 38 図 SX2000 土器溜め出土遺物

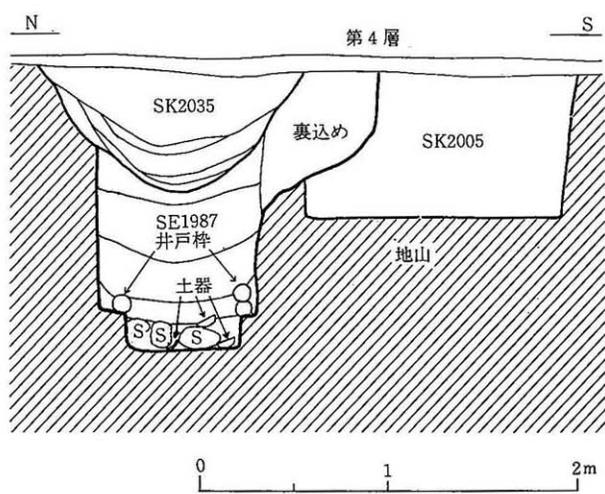
も古い(註3)。

本井戸の堆積層は、井戸廃絶時に埋められた1層～6層と井戸構築時の裏込め土に分れる。1～5層は地山崩壊土・炭を多く含む黄褐色～灰黄褐色粘質土で、3層は植物遺存体を多く含み、粘性が強い。6層は褐灰色粘土で、礫・土器を多く含む。裏込め土は地山黄色粘土と灰黄褐色粘質土が不均一に混ざり合った土層である。

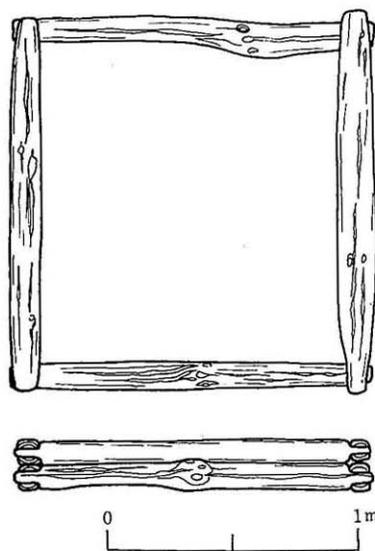
遺物は井戸廃絶時の埋土各層と裏込め土から出土している。井戸廃絶時の埋土からは完形率の高い須恵器・土師器の坏が比較的多く出土し、他に少量の須恵器・土師器の甕、瓦が出土している。須恵器坏・内黒土師器坏はいずれも底径が大きく、底部が再調整されているものが多い。このうち須恵器坏では底部が回転糸切り無調整のものが2点、ヘラ切り無調整のものが1点、内黒土師器坏では底部が回転ヘラ削り調整のものが5点、手持ちへ



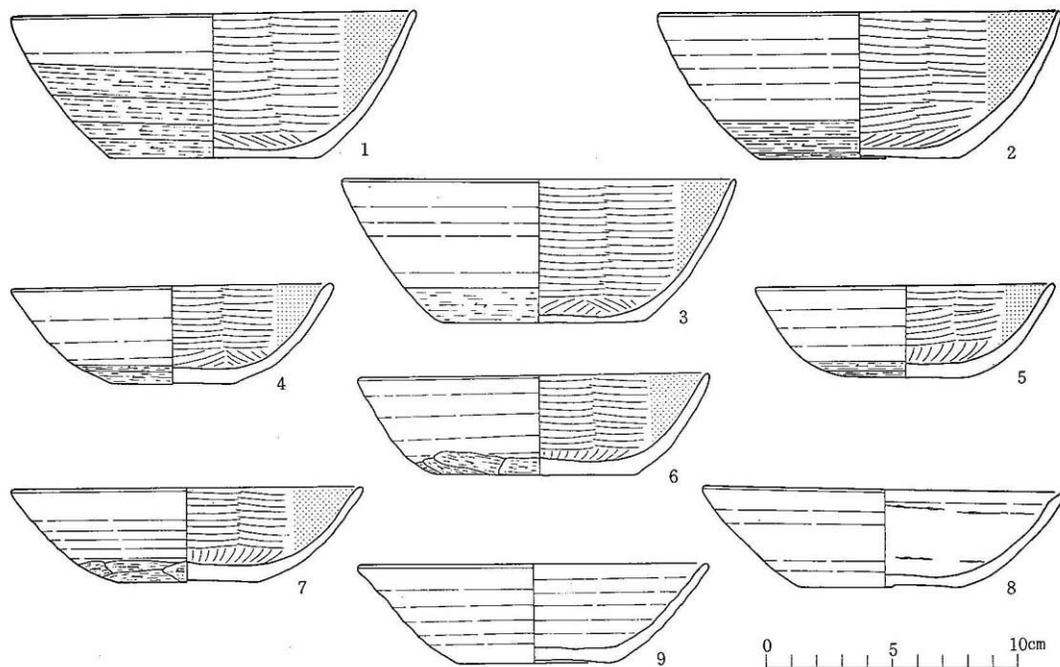
第 39 図 SE1987 井戸跡平面図



第 40 図 SE1987 井戸跡断面図



第 41 図 SE1987 井戸跡の井戸枠



番号	層位	種類	特徴	箱番号	番号	層位	種類	特徴	箱番号
1	4層	内黒土師器坏	外面：ワカサゲ→回転ヘラケズリ 内面：井桁状ヘラミガキ	8175	6	6層 上面	内黒土師器坏	外面：ロクロナデ→手持ヘラケズリ、漆付着 内面：放射状ミガキ	8175
2	4層	内黒土師器坏	外面：ワカサゲ→回転ヘラケズリ 内面：井桁状ヘラミガキ	8174	7	6層 上面	内黒土師器坏	外面：ワカサゲ→回転ヘラケズリ 内面：放射状ヘラミガキ	8175
3	3層	内黒土師器坏	外面：ワカサゲ→回転ヘラケズリ？ 内面：井桁状ヘラミガキ	8174	8	底面	須恵器坏	外面：ロクロナデ→ヘラ切り 内面：ロクロナデ	8175
4	6層 上面	内黒土師器坏	外面：ワカサゲ→回転ヘラケズリ 内面：井桁状ヘラミガキ	8175	9	2層	須恵器坏	外面：ワカサゲ→回転糸切り(右) 内面：ロクロナデ	8174
5	4層	内黒土師器坏	外面：ワカサゲ→回転ヘラケズリ 内面：放射状ヘラミガキ	8174					

第 42 図 SE1987 井戸跡出土遺物

ラ削り調整が 2 点ある。また、内外面に漆の被膜が付着したほぼ完形の内黒土師器坏が 3 点あり、漆塗り作業のパレットとして用いられたと考えられる。また、裏込め土からはロクロ調整の内黒土師器坏、土師器甕の破片が微量出土している。

**SE1988 井戸跡 (第 7・43・44 図)**

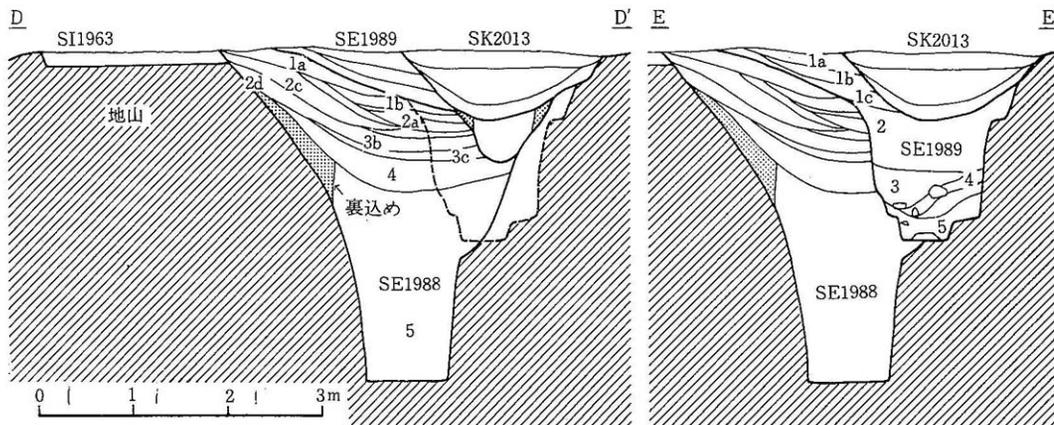
調査地区東側のほぼ中央部に位置する。本井戸よりも新しい SE1989 とほぼ重複しているためやや不確かだが、掘方上面は径約 4.0~4.3m の不整円形と推定される。断面形は漏斗状で、底面までの深さは約 3.5m である。井戸の中心は掘方のほぼ中央にある。中段以下の平面形は方形で、底面は一辺約 0.8m 前後と推定される。また、裏込めが一部残っていたが、井戸枠は残っていなかった。

堆積層は 5 層に大別され、いずれも人為的に埋め戻された土層と考えられる。第 1 層~第 4 層は明赤褐色粘質シルトと褐色粘質シルトを斑状に含む土層とマンガン粒を多く含み、粘性がやや強いにぶい褐色粘質シルトが交互となっており、第 3 層には植物遺存体を多く

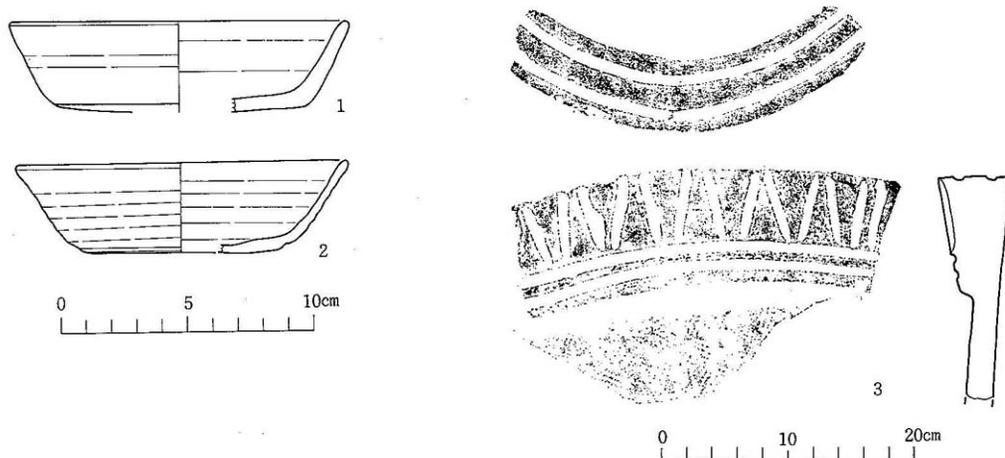
含む。第5層は緑灰色グライ化土である。

新旧関係は SI1962・1963 よりも新しく、第4層、SE1989、SK2013 よりも古い。

遺物は各層から須恵器・土師器・瓦が少量出土している。須恵器には坏・高台坏、甕、土師器には内黒坏・甕がある。このうち須恵器坏には底部がへら切り無調整、回転へら削り調整で底径が大きいもの、内黒土師器坏には回転へら削り調整で底径が大きいもの、土師器甕にはロクロ調整のものがある。瓦には政庁第Ⅰ期の二重弧文軒平瓦 511C タイプ(第44図3)、政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類 a1・a2 タイプ、政庁第Ⅲ期の平瓦ⅡB類 a3 タイ



第43図 SE1988・1989 井戸跡、SK2013 土壌断面図



番号	層位	種類	特徴	箱番号	番号	層位	種類	特徴	箱番号
1	5層	須恵器坏	外面：ロクロナデ→へら切り？ 内面：ロクロナデ	8176	3	5層	軒平瓦	二重弧文軒平瓦 511Cタイプ(政庁第Ⅰ期)	8197
2	3層	須恵器坏	外面：ロクロナデ→へら切り 内面：ロクロナデ	8176					

第44図 SE1988 井戸跡出土遺物

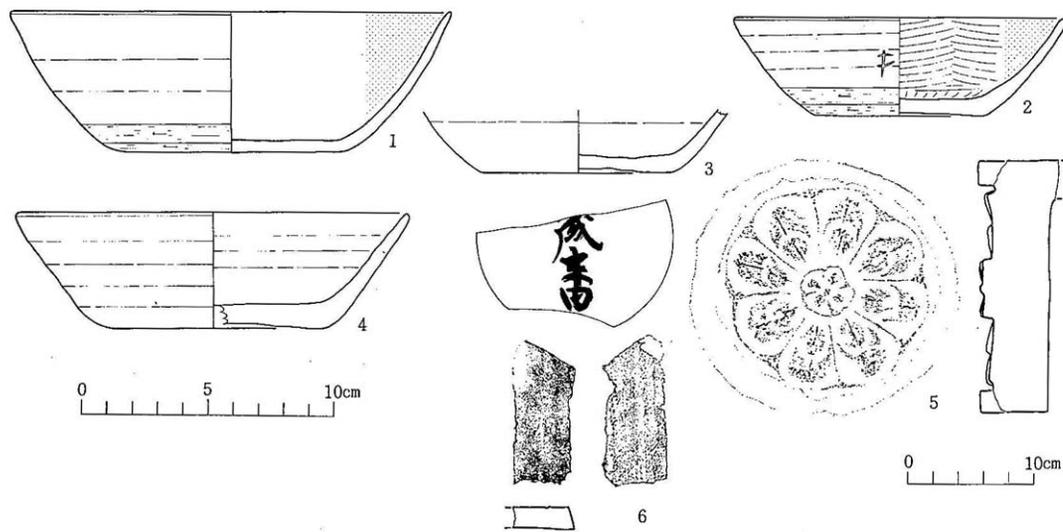
ブ、「物」Aの刻印平瓦、丸瓦がある。他には鹿角、漆被膜の付着した須恵器甕の底部破片、須恵器坏・高台坏を用いた転用硯が各1点出土している。

**SE1989 井戸跡** (第7・43・45図)

調査地区東側のほぼ中央部に位置し、第4層に覆われる。これよりも古いSE1988とほぼ重複し、人為的に埋め戻して廃絶したSE1988の掘方をさらに掘り直し、井戸の中心を掘方の北東に移して構築している。掘方上面の平面形は径約4.0mの不整円形で、断面形は漏斗状である。3段掘りされており、底面までの深さは約1.95mである。中段以下の平面形は一辺約1.0mのほぼ正方形で、底面の規模を小さくしてさらに約25cm掘り下げ、その南西隅に小溝が付けられている。なお、中段上面の東側には約1.0×0.7mの長方形の平場があり、井戸を掘り下げる際の作業スペースと考えられる。また、裏込めが一部残っていたが、井戸枠は残っていなかった。

井戸内の堆積層は5層に分れ、いずれも人為的に埋め戻された人為堆積土である。第1層・第2層は褐色粘質シルトで、φ5mm以下のマンガン粒・炭・地山黄色小ブロックを多く含む。第3層～第5層は灰褐色粘質土で、下層ほどグライ化している。

新旧関係はSI1962・1963、SE1988よりも新しく、第4層、SK2013よりも古い。



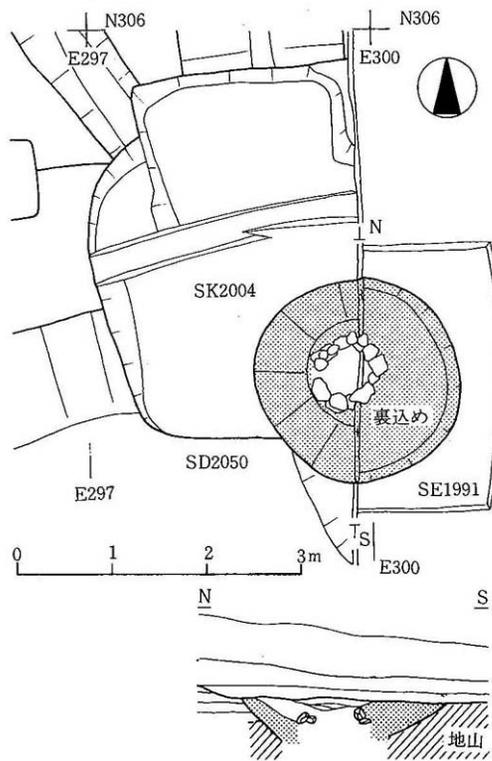
番号	層位	種類	特徴	箱番号	番号	層位	種類	特徴	箱番号
1	2層	内黒土師器坏	外面：ロコナデ→回転ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ	8177	4	1層	須恵器坏	底部：静止糸切り→周縁回転ヘラケズリ(右)	8177
2	3層	内黒土師器坏	外面：ロコナデ→回転ヘラケズリ 内面：放射状ヘラミガキ	8177	5	1層	軒丸瓦	八葉重弁蓮花文軒丸瓦 114(政庁第I期)	8200
3	5層	須恵器坏	底部：ヘラ切り、墨書「□成番」	8177	6	2層	熨斗瓦	(政庁第I期)	8197

第45図 SE1989 井戸跡出土遺物

遺物は井戸内の各層から須恵器・土師器・瓦が少量出土し、裏込めからは出土していない。須恵器には坏・高台坏・蓋・甕、土師器にはロクロ使用の内黒坏・甕がある。須恵器坏・内黒土師器坏はいずれも底径が大きく、底部切り離し後に再調整のあるものが主体を占める。須恵器坏には底部がへら切り無調整で「口成番」と墨書されたもの(第45図3)、静止糸切り後に回転へら削り調整のもの(第45図4)、へら切り後に軽いナデ調整のもの、手持ちへら削り調整のもの、内黒土師器坏には底部・体部下端を回転へら削り調整したもの(第45図1・2)、静止糸切り後に回転へら削り調整のもの、回転糸切り無調整のものがある。内黒高台坏には底部糸切り後に高台部を接合し、接合部周辺をナデ調整したものがある。瓦には政庁第Ⅰ期の八葉重弁蓮花文軒丸瓦114(第45図5)と熨斗瓦(第45図6)、政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類a1・a2タイプ、丸瓦がある。

**SE1991 井戸跡 (第46図)**

調査地区の東壁際の中央やや西よりに位置し、地山面で検出した石組井戸跡である。西半部を一部掘り下げただけであるため、深さは不明である。裏込め上部の平面形は径約2.2mの円形、断面形は漏斗状で、その中心部にφ約10~25cm前後の自然礫を円筒状に積み上げて井戸枠としている。石組部の内径は約0.5mで、深さは不明である。裏込め埋土は黒褐色粘質土で、焼土・炭化物を含む。また、井戸枠内部の堆積層は4層に分れ、第1層が黒褐色砂層で、酸化鉄を含む。第2層は褐灰色粘質土で、地山粒を多く含む。第3層は褐灰色粘質土で、砂を含む。第4層は黒色粘質土で、焼土・炭化物を多く含む。



**第46図 SE1991 井戸跡**

新旧関係はSK2004よりも新しく、SD2042・2050よりも古い。

遺物は第4層から須恵系土器坏、須恵器坏、土師器の内黒坏・甕、政庁第Ⅳ期の平瓦ⅡC類が少量出土している。土師器はいずれもロクロ調整で、内黒坏には底部と体部下端を手持ちへら削り調整したものがある。また、裏込め埋土からは須恵系土器の坏と土師器の内黒坏・甕が少量出土している。

(7) 土 壙

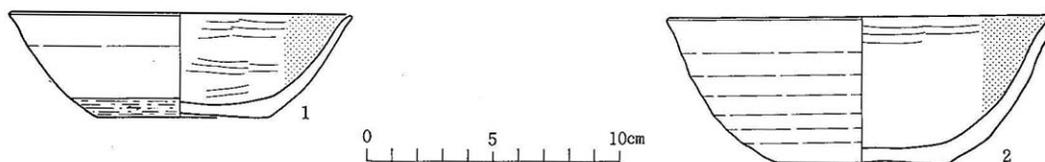
【第4層よりも古い土壙群】

第4層の黒褐色土に覆われ、これよりも古い土壙にはSK2005～2011・2035・2036がある。いずれも地山面で検出した。形状・規模・堆積土・重複関係・参照図面は表3のとおりである。

土 壙	平面形	断面形	平面規模	深さ	埋 土	重複する古い遺構	重複する新しい遺構	平面図断面図	遺 物
SK2005	長方形	方形	2.3m×1.9m	76cm	地山粘質土+灰黄褐色粘質土		SE1987	第39図 第40図	第40図
SK2006	不整形	皿状	1.3×1.2m	35cm	地山黄褐色土細粒を含む褐色土	SB1898・1968・1969 SB1977・SD2041	SK2007	第14図	第48図
SK2007	楕円形	皿状	1.3×0.8m	20cm	地山黄褐色土細粒と炭を含む褐色土	SB1898・1968・1977 SK2006・SD2041		第14図	
SK2008	不整形	皿状	2.7×2.1m	20cm	地山黄褐色土細粒を含む褐色土	SB1898・1977 SD2041		第14図	第49図
SK2009	不整形	皿状	1.7×1.7m	25cm	地山黄褐色土細粒を含む褐色土	SB1898		第14図	第50図
SK2010	楕円形	皿状	1.8×1.4m	20cm	地山黄褐色土細粒と炭を含む褐色土	SB1969・1973	SK2011	第13図	第50図
SK2011	隅丸長方形	皿状	3.3×1.6m	30cm	風化凝灰岩礫を多量に含む褐色土	SB1969・1977 SK2010		第14図	第51図
SK2014	楕円形	皿状	1.0×0.7m	10cm	地山粒・炭・マンガノ粒を多く含む鈍い褐色土	SB1977		第14図	
SK2016	楕円形	皿状	1.8×1.2m	20cm	地山粒・炭・マンガノ粒を多く含む鈍い褐色土			第2図	
SK2035	楕円形	浅鉢状	1.6×1.4m	70cm	炭・焼土を含む鈍い黄質土で6層に分れる	SE1987		第39図 第40図	
SK2036	楕円形	皿状	0.8m		地山粒・炭を含む暗褐色土		SD2041	第14図	第52図

表3 第4層よりも古い土壙群

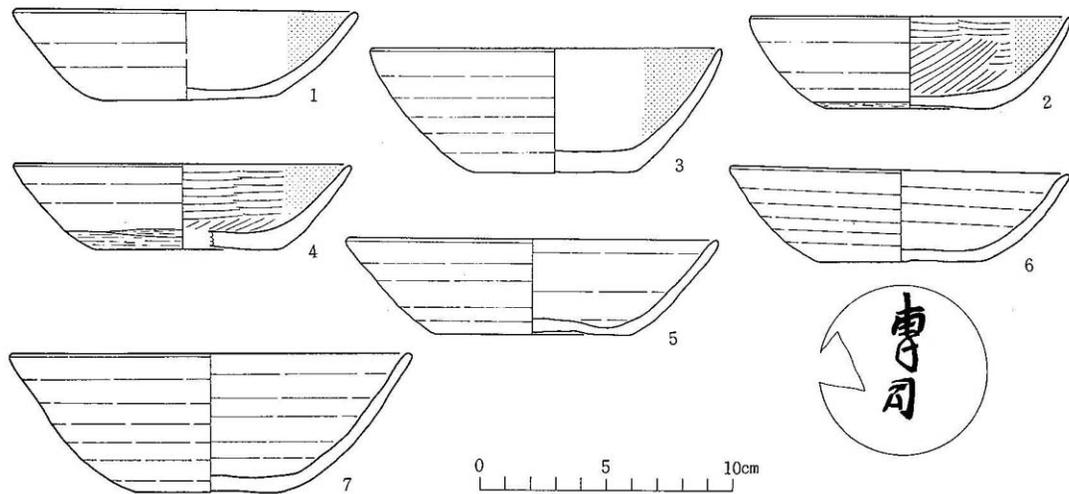
SK2005は平面形・断面形が長方形で、それ以外の土壙の平面形・断面形と大きく異なる。SK2005は①SE1987に隣接し、これよりも古い、②平面形・規模がSE1987と同様であり、底面レベルもSE1987の段掘り開始レベルとほぼ一致する、③一気に埋め戻されていることから、SE1987を掘り上げるために掘られた作業スペースか、井戸を掘るために掘られ始めたが、何らかの理由で途中で放棄されたものと考えられる。出土遺物にはロクロ調整の内黒土師器坏がある(第47図)。



番号	種 類	特 徴	箱番号	番号	種 類	特 徴	箱番号
1	内黒土師器坏	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ？ 内面：ヘラミガキ	8179	2	内黒土師器坏	外面：ロクロナデ？ 内面：ヘラミガキ	8179

第47図 SK2005土壙出土遺物

SK2006からは比較的多くの土師器・須恵器と政庁第II期の平瓦II B類、単体の水晶が各1点出土している。須恵器には底部が回転糸切り無調整の坏(第48図7)、底部がヘラ切り無調整で底部に「曹司」と墨書された坏(第48図6)、蓋、長頸瓶、甕があり、土師器はい



番号	種類	特	徴	箱番号	番号	種類	特	徴	箱番号
1	内黒土師器坏	外面：ロクロナデー回転ヘラケズリ？ 内面：ヘラミガキ		8178	5	須恵器坏	外面：ロクロナデーヘラ切り 内面：ロクロナデー		8178
2	内黒土師器坏	外面：ロクロナデー回転ヘラケズリ 内面：井桁状に丸いヘラミガキ		8178	6	須恵器坏	外面：ロクロナデーヘラ切り、墨書「曹司」(曹司) 内面：ロクロナデー		8178
3	内黒土師器坏	外面：ロクロナデー手持ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ		8178	7	須恵器坏	外面：ロクロナデー回転糸切り(右)		8178
4	内黒土師器坏	外面：ロクロナデー回転糸切り一周縁回転ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ		8178					

第 48 図 SK2006 土壌出土遺物

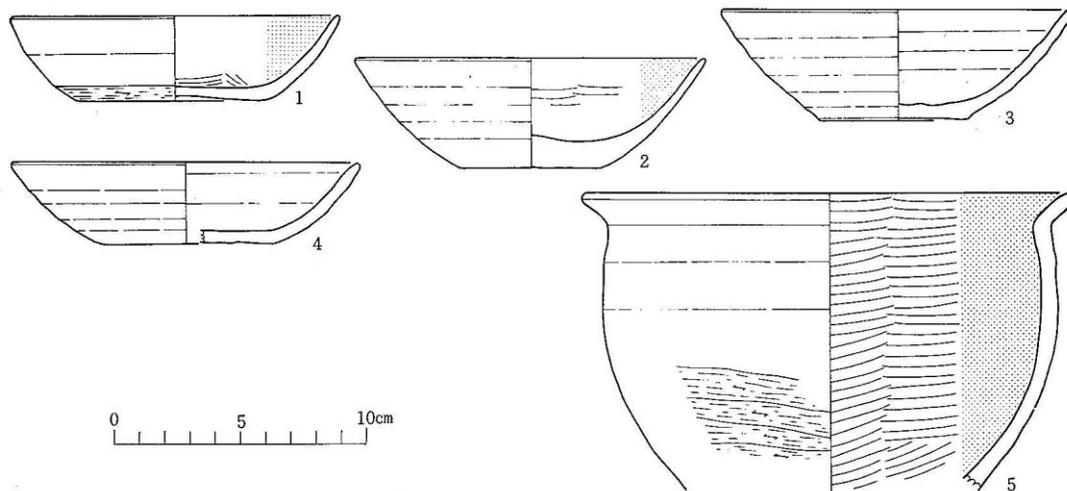
ずれもロクロ調整で、底部切り離し後に回転ヘラ削り調整した内黒坏(第 48 図 1・2・4)、底部切り離し後に手持ちヘラ削り調整した内黒坏(第 48 図 3)、高台坏、甕がある。須恵器・土師器の坏はいずれも底径が大きく、底部切り離し後に再調整されたもの・ヘラ切り無調整のものが主体を占める。

「曹司」の墨書土器は宮城県内では白石市明神脇遺跡の堅穴住居跡から出土した 2 点(註 4)に次いで 3 例目で、全国的に見ても数少ない。「曹司」・「曹」の墨書土器は中央でも数少なく、平城京では式部省推定地から「式部外曹司進」が 1 点、「式曹」(式部省曹司の略記)が 5 点出土した他、「曹司」が 3 点、「佐曹」・「左曹」が各 1 点、「曹」が 2 点出土し(註 5)、長岡京では左京二条二坊六町にあたる太政官厨家跡推定地に「造大臣曹司」・「裏曹」の墨書土器が各 1 点あるにすぎない(註 6)。また地方官衙でも出土例は数少なく、他に相模国府推定地の神奈川県平塚市四之宮高林寺遺跡に 1 点、筑後国御井郡衙跡ないし古代寺院跡と推定されている福岡県久留米市へボノ木遺跡に 1 点ある(註 7)にすぎない。なお、文献史料からは宮中・官衙などの庁舎・宿直所・局・部屋などを「曹司」ということがわかり、『続日本紀』に平城宮や長岡宮の太政官曹司・大納言曹司・弁官曹司・神祇官曹司・兵部曹司・内豎曹司などがみえ、平安宮では太政官曹司庁(官曹司庁・太政官曹司)・大臣曹司・弁官曹司・造曹司・松本曹司・木工寮曹司などがみえるという(註 8)。墨書土器と文献史料か

ら見ると、中央では二官八省などの行政実務を行った個々の役所やその地区を「曹司」と呼んだらしく、国衙でも実務官衙を「曹司」と呼んだことがわかる。SK2006 出土の「曹司」墨書土器は大畑地区の実務官衙が「曹司」と呼ばれていたことを示している。

SK2007 からは比較的多くの土師器・須恵器と灰釉陶器皿、政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類が出土している。須恵器には底部が回転糸切り無調整とへら切り無調整の坏、瓶がある。土師器はいずれもロクロ調整で、底部へラケズリした内黒坏、両面へラミガキした両黒蓋、甕がある。

SK2008 からは比較的多くのロクロ調整の土師器内黒坏・内黒甕(第 49 図 5)と少量の須恵器坏・甕と瓦が出土している。須恵器坏には底部が回転糸切り無調整、へら切り無調整(第 49 図 3)、回転へら削り調整のものがあり、内黒土師器坏には底部がへら削り調整(第 49 図 1)、回転糸切り無調整(第 49 図 2)のものがある。瓦には政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類、丸瓦がある。



番号	種類	特徴	箱番号	番号	種類	特徴	箱番号
1	内黒土師器坏	外面：ろくろ調整→回転へラケズリ？ 内面：井桁状へラミガキ	8180	4	須恵器坏	外面：ロクロナデ→へら切り 内面：ロクロナデ	8180
2	内黒土師器坏	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：へラミガキ(磨滅)	8180	5	内黒土師器甕	外面：ロクロナデ、体下半へラケズリ 内面：へラミガキ	8181
3	須恵器坏	外面：ろくろ調整→回転糸切り(右) 内面：ロクロナデ	8180				

第 49 図 SK2008 土壌出土遺物

SK2009 からは須恵器の坏・長頸瓶・甕、土師器のロクロ調整の内黒坏・甕、瓦が少量出土し、他に単体の水晶が 2 点出土している。須恵器坏には底部が回転糸切り無調整(第 50 図 4)、へら切り無調整、へら切り後に回転へら削り調整したものがある。また、内黒土師器坏には底部が回転へら削り調整したもの(第 50 図 1)がある。瓦には政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類、政庁第Ⅲ期の平瓦ⅡB類 a3 タイプ、丸瓦がある。

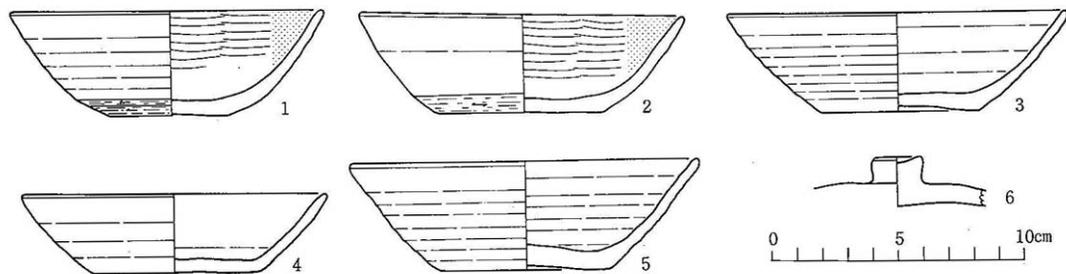
SK2010 からは比較的多くの須恵器坏・蓋・甕、ロクロ調整土師器の内黒坏・甕と灰釉陶器？の瓶の口縁部破片1点、少量の瓦が出土している。須恵器坏には底部が回転糸切り無調整(第50図3・5)、ヘラ切り無調整のものがある。内面に漆皮膜の付着した土師器甕体部破片1点がある。瓦には政庁第Ⅰ期・第Ⅱ期の平瓦、丸瓦がある。

SK2011 からは須恵器の坏・甕、ロクロ調整土師器の内黒坏・内黒埴・両黒蓋(第50図6)・甕、灰釉陶器の坏類の口縁部破片、瓦が出土している。このうち須恵器坏には底部が回転糸切り無調整、ヘラ切り無調整のものがあり、内黒土師器坏には底部を回転糸切り後に回転ヘラ削り調整したもの、ヘラ切り後に回転ヘラ削り調整したもの、底部の切り離し技法不明で回転ヘラ削り調整したもの(第50図2)などがある。瓦には政庁第Ⅰ期・第Ⅱ期の平瓦、丸瓦が少量ある。

SK2014・2016 からは丸瓦が少量出土している。

SK2035 からは須恵器の坏・甕、ロクロ調整土師器の内黒坏・甕、瓦が少量出土している。須恵器坏には回転糸切り無調整のもの、ヘラ切り無調整のものがある。

SK2005 以外の土壇は断面形が皿状であることで共通し、平面形は不整形円形・楕円形・隅丸長方形で、不整形円形・楕円形のものが多い。SK2006～2011・2035 は新旧関係がいずれも建物よりも新しく、SK2006～2008 はさらに SD2041 よりも新しい。埋土はいずれも地山黄褐色土細粒を含む褐色土で、人為的に埋め戻されている。出土遺物には須恵器・土師器・瓦があり、須恵系土器と政庁第Ⅳ期の瓦は出土していない。須恵器・土師器の坏はいずれも底径が大きく、口縁部が直線的に外傾し、底部が回転糸切り無調整ないし回転ヘラ削り調整のものが主体を占め、土師器の甕はロクロ調整のものである。重複関係と出土遺物から見るとほぼ同時期と考えられ、性格も同様と考えられる。

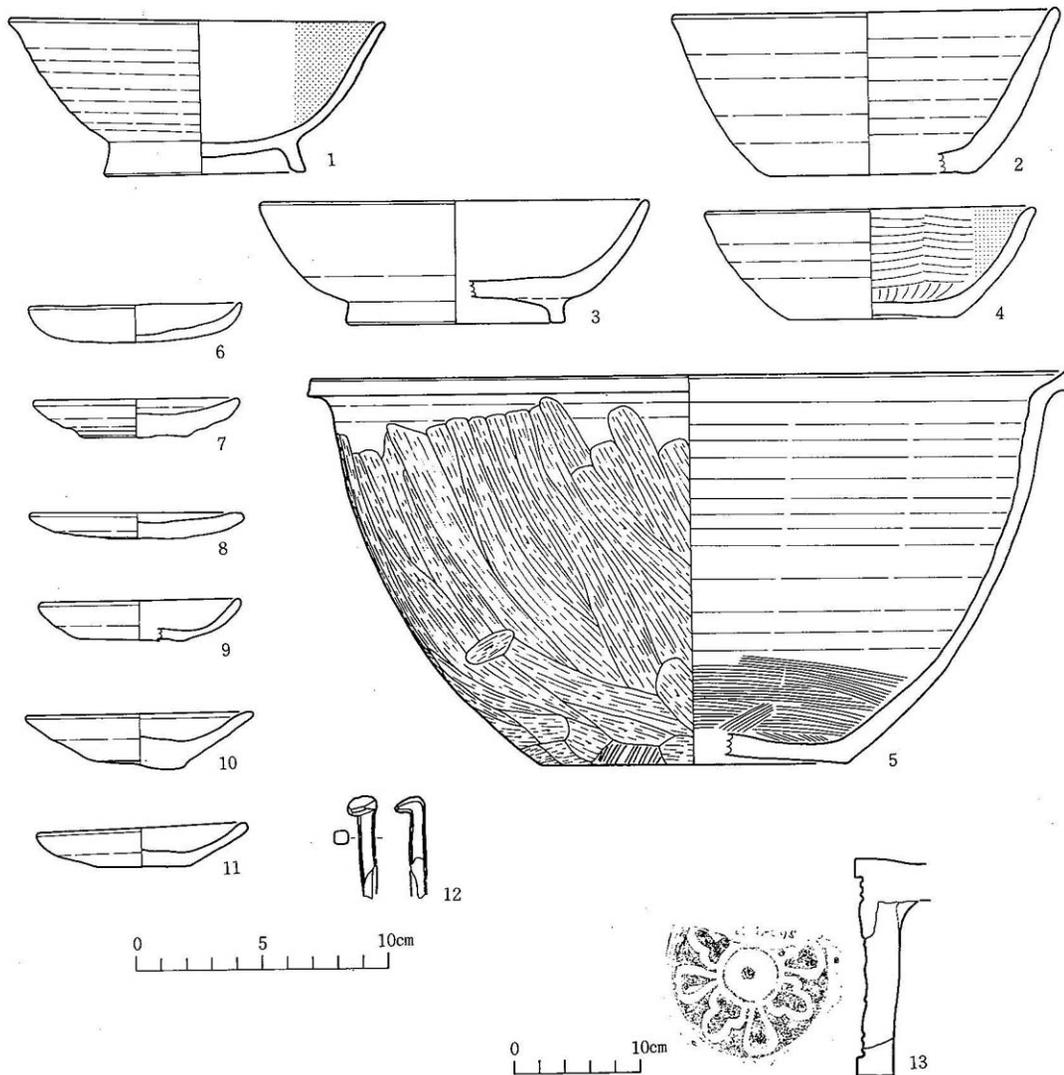


番号	遺構	種類	特徴	箱番号	番号	遺構	種類	特徴	箱番号
1	SK2009	内黒土師器坏	外面：ロクロ調整→回転ヘラ削り 内面：ヘラミガキ	8179	4	SK2009	須恵器坏	外面：ロクロ調整→回転糸切り(右) 内面：ロクロ調整	8179
2	SK2011	内黒土師器坏	外面：ロクロ調整→回転ヘラ削り 内面：ヘラミガキ	8179	5	SK2010	須恵器坏	外面：ロクロ調整→回転糸切り(右) 内面：ロクロ調整	8180
3	SK2010	須恵器坏	外面：ロクロ調整→回転糸切り(右) 内面：ロクロ調整	8180	6	SK2011	内黒土師器蓋		8179

第50図 SK2009～2011 土壇出土遺物

【第4層よりも新しい土壌群】

第4層の黒色土よりも新しい土壌には SK2012・2013 があり、埋土はいずれも黒褐色土



番号	遺構	種類	特徴	箱番号	番号	遺構	種類	特徴	箱番号
1	SK2036	内黒土師器 高台杯	外面底部：ロクロナデ 内面：へらミガキ	8182	8	SK201B	かわらけ小皿	内外面：ロクロナデ	8181
2	SK2034	須恵器 杯	内外面：ロクロナデ 底部：ナデ?	8182	9	SK2013	かわらけ小皿	外面：ロクロナデ→回転系切り	8181
3	SK2021	須恵器高台杯	ロクロナデ→回転系切り→回転ケズリ→高台→ロクロナデ	8182	10	SK2013 -3層	かわらけ小皿	外面：ロクロナデ、回転系切り 内面：ロクロナデ	8181
4	SK2013	内黒土師器 杯	底部：手持へらケズリ 内外面：放射状へらミガキ、漆付着	8181	11	SK2013	かわらけ小皿	外面：ロクロナデ→回転系切り	8181
5	SK2013	須恵器 鉢	外面：タタキ→ロクロナデ→へらケズリ、内面：ロクロナデ→ナデ	8181	12	SK2013	鉄釘		
6	SK2012	かわらけ小皿	手捏ね、指頭状オサエ	8180	13	SK2013 -3層	軒瓦	宝相花文軒丸瓦 425 (政庁第IV期)	
7	SK2012	かわらけ小皿	外面：ロクロナデ→回転系切り(左)	8180					

第 51 図 SK2013、その他土壌出土遺物

である。形状・規模・堆積土・重複関係・参照図面は表4のとおりである。

土 壌	平面形	断面形	平面規模	深さ	埋 土	重複する古い遺構	重複する新しい遺構	平面図断面図	遺 物
SK2012	楕円形	方 形	0.8×0.6m	30 cm	炭をやや多く含む黒褐色粘質土		SI1962	第3図	第52図
SK2013	楕円形	楕円状	2.7×2.6m	1.2m	4層に分れ、1層が黒色土、2・4層が極暗褐色土、3層が褐色土		SI1962・1963 SE1988・1989	第3図 第43図	第51図
SK2015	不整形 円形	皿 状	1.3×1.1m	10cm	地山小ブロックを含む黒褐色土で、やや柔らかい			第2図	

表4 第4層よりも新しい土壌群

SK2012 からはロクロ調整のかわらけ小皿2点(第51図6・7)、須恵系土器・須恵器・土師器・瓦が少量出土している。

SK2013 は第4層上面・SE1989埋土上面で検出した。堆積層は4層に分れ、黒褐色シルトの第1層は自然堆積土の可能性もあるが、少なくとも第3・4層は人為的に埋め戻された可能性がある。遺物の出土量は第1層が多く、第2層～第4層からは少ない。出土遺物にはかわらけ・須恵系土器・灰釉陶器・緑釉陶器・白磁?・須恵器・土師器・瓦・鉄釘(第51図12)がある。かわらけにはロクロ調整の小皿(第51図8～11)、須恵系土器には坏・高台皿、灰釉陶器には高台碗・瓶、緑釉陶器・白磁?には碗、瓦には政庁第IV期の宝相花文軒丸瓦425(第51図13)と平瓦II C類がある。

SK2015 からは単体の水晶が1点出土している。

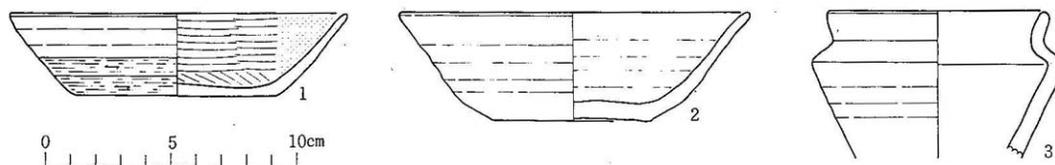
【第4層との関係が不明な土壌群】

第4層の黒色土との関係が不明な土壌には SK2004・2017～2021・2031・2032・2034 がある。いずれも地山面で検出した。形状・規模・堆積土・重複関係・参照図面は表5のとおりである。

土 壌	平面形	断面形	平面規模	深さ	埋 土	重複する古い遺構	重複する新しい遺構	平面図断面図	遺 物
SK2004	方 形	平鉢状	4.0×3.1m 以上	80 cm	6層に分れ、褐灰色～灰黄褐色粘質土		SE1991 SD2042・2050	第46図	第52図
SK2017	ほぼ円形	皿 状	1.5m	1.5m	地山小ブロックを多く含む褐灰色土で固い		SB1982	第27図	
SK2018	不整形円形	皿 状	3.3×2.7m	20 cm	風化凝灰岩礫・炭を多量に含む黄褐色土		SB1982 SD2050	第27図	
SK2019	不 整 形	皿 状	2.0×2.6m 以上	20cm	にぶい黄褐色粘質シルトに褐色粘質土が混ざる		SI1961、SB1972 SD2044	第3図	
SK2020	ほぼ円形	皿 状	0.5m	10cm	地山小ブロックを多く含む褐色土		SB1971	第17図	
SK2021	ほぼ円形	皿 状	0.6m	60cm	灰褐色粘質土と褐色粘質土が斑状に混ざる		SX2000	第38図	
SK2031	ほぼ円形	鉢 状	0.7m	40 cm	黒色土			第2図	
SK2032	不 整 形	皿 状	1.3m	10cm	地山粒・風化凝灰岩礫を多く含む褐灰色で固い		SE1967 SB1969・1973	第39図	
SK2034	不 明	皿 状	1.2m	30cm	炭・焼土を含む暗褐色粘質土		SB1974 SD2050	第2図	第51図

表5 第4層との関係が不明な土壌群

SK2004 は平面形が方形であり、他の土壌と比べて形状が特異である。SE1987 と重複してこれと関連すると考えられる SK2005 と類似するので、SE1991 と関連するのかもしれない。遺物は須恵系土器の坏・高台坏の他、須恵器・土師器・瓦が少量出土している(第52図)。



番号	層位	種類	特徴	箱番号	番号	層位	種類	特徴	箱番号
1	2層	内黒土師器坏	外面：ロクロナデヘラ切り→回転ヘラケズリ、内面：井桁状ミガキ	8179	3	1層	須恵器短頸瓶		8179
2	2層	須恵器坏	底部：回転糸切り(右)	8179					

第 52 図 SK2004 土壌出土遺物

SK2017 の出土遺物には少量の須恵系土器の坏、須恵器の瓶がある。

SK2018 の出土遺物には底部が回転糸切り無調整の須恵器坏・内黒土師器坏、ロクロ調整の土師器甕、政庁第Ⅳ期の平瓦ⅡC類などがある。

SK2019 の出土遺物には少量の須恵器、土師器、瓦の他、漆紙断片、ウシ臼歯が各 1 点ある。このうち須恵器には底部が回転糸切り無調整の坏、蓋、瓶、甕があり、土師器には非ロクロ調整・ロクロ調整の内黒坏・甕がある。ロクロ調整の内黒土師器坏には底部が回転糸切り無調整のもの、回転ヘラ削り調整のものがある。瓦には政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類、丸瓦がある。また、漆紙断片には墨の飛沫かと思われる痕跡が認められる。

SK2020 の出土遺物はない。

SK2021 の出土遺物には須恵器の高台坏・坏、ロクロ調整の土師器甕、政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類、ウメの種子がある。このうち須恵器の高台坏(第 51 図 3)は底部を糸切りして高台部を付けた後、ロクロナデしている。

SK2032 の出土遺物には少量の須恵器坏・甕、ロクロ調整の内黒土師器坏、平瓦があり、須恵器坏は底部が回転糸切り無調整のものである。

SK2034 の出土遺物には須恵器坏が 1 点ある(第 51 図 2)。

SK2036 の出土遺物には少量の須恵器坏、ロクロ調整の内黒土師器坏・高台坏(第 51 図 1)がある。

(8) 溝

**【第 4 層よりも古い溝】**

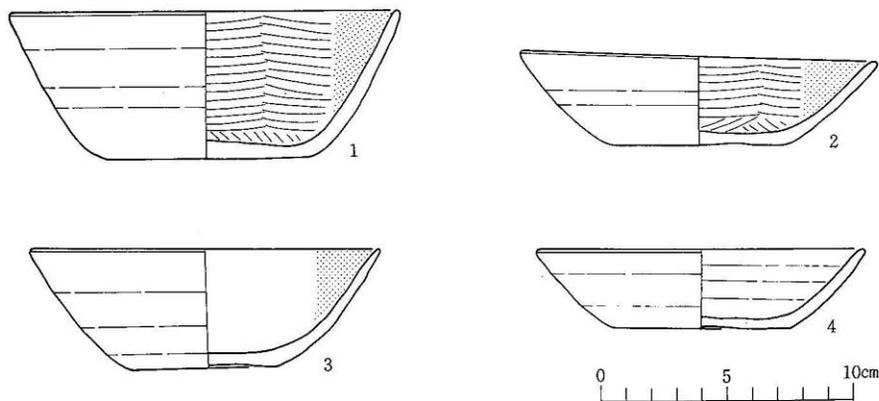
第 4 層よりも古い溝には SD2041・2043 がある。

**SD2041 溝 (第 14 図)**

調査地区北東部に位置し、第 4 層上面・地山面で検出した北西－南東溝で、ごく緩やかに蛇行している。本溝の北西部は残りが悪く、やや不明確だが第 56 次調査西地区に続くものと思われる。また、南東部はこれよりも新しい中世の SD2050 によってほぼ全壊されて

残りが悪い。検出した長さは直線距離で約 15m である。北西端と南東端との比高差は約 1.2m で、北西端の方が高く、丘陵の傾斜方向と同様に北西から南東方向に流れたことがわかる。規模は上端幅約 55~80cm、底面幅約 20~30cm、深さ約 20cm で、断面形は浅い逆台形状である。底面は平坦で、北西から南東へ緩やかに傾斜している。堆積土は 1 層で、風化凝灰岩ブロック・炭を含む褐色シルトである。新旧関係は SB1898・1969・1977、SK2004 よりも新しく、第 4 層、SK2006~2008・2036、SD2042・2050 よりも古い。

出土遺物は少量で、須恵器の坏・高台坏・大鉢・蓋・甕、土師器の内黒坏・内黒高台坏・甕、平瓦・丸瓦、漆紙断片がある。須恵器坏には底部がヘラ切り無調整のもの(第 53 図 4)、内黒土師器坏には底部が回転糸切り無調整のもの(第 53 図 3)、手持ちヘラ削り調整のもの(第 53 図 1)、平瓦には政庁第 II 期の平瓦 II B 類がある。漆紙断片は小破片であり、墨痕はない。

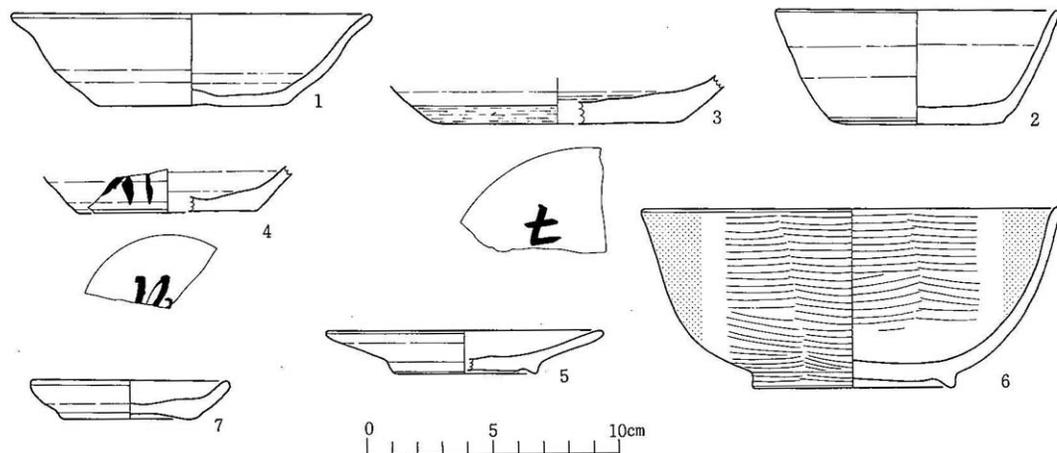


番号	種類	特徴	箱番号	番号	種類	特徴	箱番号
1	内黒土師器坏	外面：ロクロナデ→手持ヘラケズリ? 内面：井桁状ヘラミガキ	8187	3	内黒土師器坏	外面：ロクロナデ→回転糸切り(右)	8187
2	内黒土師器坏	外面：ロクロナデ? 内面：井桁状ヘラミガキ	8187	4	須恵器坏	外面：ロクロナデ→ヘラ切り 内面：ロクロナデ	8187

第 53 図 SD2041 溝出土遺物

#### SD2043 溝 (第 2 図)

調査地区東側の南東部南壁際に位置し、第 4 層上面で検出した溝で、南東から南西にかけて緩やかな弧を描くように延び、調査地区外の南にさらに延びる。規模は上端幅約 0.6m、底面幅約 10~15cm、深さ約 20cm である。断面形は皿状、底面は平坦で南東端と南西端との比高差はほとんどない。堆積土は褐灰色粘質シルトで、西半部は埋土上部がオーバーフローしている。新旧関係は第 4 層、SB1983~1985 よりも古い。出土遺物には須恵器の坏・甕、土師器の内黒坏・甕、政庁第 II 期の平瓦 II B 類が少量ある。須恵器坏には底部が回転



番号	遺構	種類	特徴	箱番号	番号	遺構	種類	特徴	箱番号
1	SD2053 -2層	須恵器杯	外面：ロクロナデ→ヘラ切り 内面：ロクロナデ	8188	5	SD2051	須恵系土器皿	底部：回転糸切り、沈線状ナデによる低い高台	8188
2	SD2043	須恵器杯	外面：ロクロナデ→ヘラ切り 内面：ロクロナデ	8187	6	SD2048	両黒土師器碗	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→高台→ナデ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	8188
3	SD2057	須恵器杯	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ 墨書「七」	8201					
4	SD2056	須恵器杯	底部：回転糸切り底部と体下部に墨書	8201	7	SD2049	かわらけ小皿	外面：ロクロナデ→回転糸切り(右)	8188

第54図 SD2043、その他の溝の出土遺物

糸切り無調整・ヘラ切り無調整のもの(第54図2)がある。

【第4層・第2A層よりも新しい溝】

第4層・第2A層よりも新しい溝にはSD2042・2050がある。

SD2042溝(第2・14図)

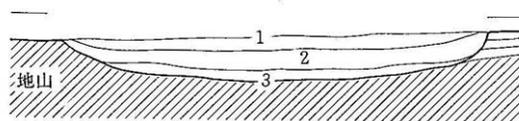
調査地区東側の南半に位置し、第4層上面で長さ約19.5m検出した溝で、本溝より新しいSD2050に分断されるが、東北東から南にかけて緩やかな弧を描くように延びている。本溝の東側はSD2050に壊されるが、調査地区外の東にさらに延びると考えられる。また、南は調査地区外の南にさらに延びる。東端が南端よりも17cm高く、比高差は少ないが、東北東から南にごく緩やかに傾斜している。規模は上端幅約1.2~2.0m、底面幅約0.2~1.15m、深さ約20cmである。断面形は皿状で、底面は平坦である。堆積土は灰褐色粘質シルトで、φ5mm以下の風化凝灰岩ブロック・炭を多く含む。新旧関係は第4層、SB1977、SK2004、SD2041・2055よりも新しく、SK2016、SD2050よりも古い。

出土遺物には少量の中世陶器・灰釉陶器・緑釉陶器・須恵器・土師器と比較的多くの瓦がある。中世陶器には12世紀末~13世紀初めと推定される渥美系かと思われる甕の体部破片、産地不明の甕の体部破片が各1点ある。灰釉陶器には杯の口縁部破片1点と瓶の体部・底部破片各1点があり、緑釉陶器には高台杯の高台部~底部破片1点がある。また、瓦

には政庁第IV期の軒丸瓦 310B が 1 点含まれている。

#### SD2050 溝 (第 2・55・56 図)

調査地区全域をほぼ取り込むように区画する一連の東西・南北溝で、調査地区東側では第 2 A 層上面ないし第 4 層上面、他では地山面で検出

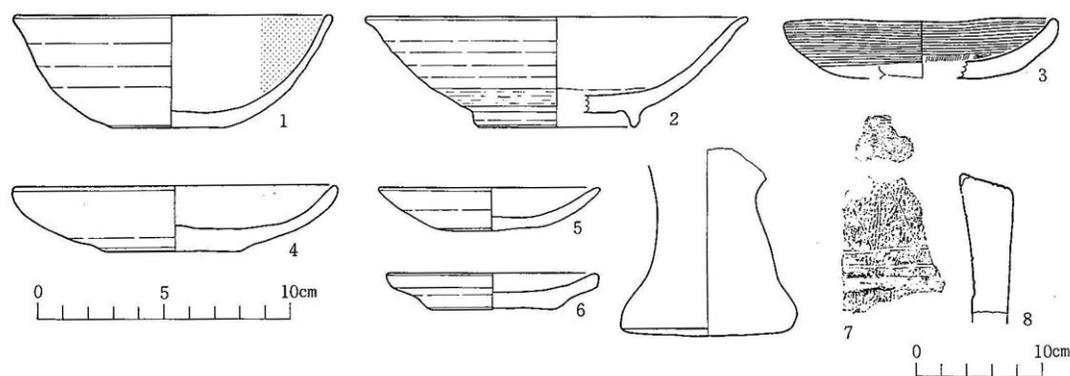


第 55 図 SD2050①溝断面図

した。これらによって画された区画には調査地区内で 3 区画ある。一番大きい西側の区画 A が東西約 38m・南北約 20m 以上、その東側北半部の区画 B が東西約 20m・南北約 14m、その南側の区画 C が東西約 18m 以上・南北約 5 m 以上である。これらの区画はいずれも発掘東西基準線に対して東で北に約 7～10° 偏している。SD2050②～⑤の規模は上端幅約 1.5～2.5m、底面幅約 0.2～0.3m、深さ約 0.8m とほぼ同様だが、SD2050①の規模は上端幅約 4.0～4.2m、底面幅約 3.0m、深さ約 0.8m と他よりも大きい。断面形はいずれも浅い逆台形状で、底面はほぼ平坦である。南北方向の SD2050③～⑤は北から南に、東西方向の SD2050①は東から西に、SD2050②は西から東にそれぞれごく緩やかに傾斜している。SD2050①・④は T 型に接続するが、これも含めて SD2050①～⑤はいずれも一連の溝で、同時期に掘削されたと考えられる。SD2050①・④との接続部分では SD2050④の堆積土は 5 層に分かれ、第 1～3 層は自然堆積の褐色粘質シルトで SD2050②～⑤と共通する。第 4 層は礫・瓦を多量に含む褐色粘質シルトで、第 5 層は自然堆積の褐色粘質シルトである。第 4 層は溝がある程度埋没しかけた段階に水の通りを良くするために礫・瓦を投げ込んで盲暗渠的な機能を持たせ部分的に改修したものであり、この後もすべての溝が機能してほぼ同じ頃に廃絶したと解釈できる。新旧関係は第 2 A 層、第 4 層、SI1961・1963・1966、SB640・1885・1887・1899・1970・1973～1976・1981・1985、SE1992・1993、SD2042・2048・2049 よりも新しい。

遺物は第 1 層～第 3 層から多量に出土し、第 4・5 層から少量出土している。出土遺物には少量のかわらけ・中世陶器・灰釉陶器の他、比較的多量の須恵系土器、多量の須恵器・土師器・瓦、少量の砥石・鉄滓・骨片・ウメの種子があり、古代～中世の遺物が各層に含まれる。かわらけには皿・小皿・柱状高台の付く高坏?があり、色調は褐色で胎土に砂粒を多く含む。皿・小皿には手捏ねのもの(第 56 図 3)とロクロ調整で底部が回転糸切り無調整のもの(第 56 図 4～6)があり、柱状高台の付く高坏?(第 56 図 7)は中実で底部が回転糸切り無調整である。灰釉陶器には黒笹 90 号窯式の埴(第 56 図 2)があり、中世陶器には押印の特徴と胎土・色調・焼成から見て 12 世紀第 4 四半期の常滑製品と考えられる甕の体部破片(図版 13)、地元製品かと思われる片口播鉢の片口部破片と甕の体部破片などがある。

須恵系土器には坏・高台坏・皿がある。瓦には政庁第Ⅳ期の瓦が含まれ、これには均整唐草文軒平瓦 721B、手描き軒平瓦 910(第 57 図 8)、平瓦ⅡC 類がある。



番号	層位	種類	特徴	箱番号	番号	層位	種類	特徴	箱番号
1	2層	内黒土師器坏	外面：ロクロナデ→回転糸切り(石) 内面：ヘラミガキ	8188	5	2層	かわらけ小皿	外面：ロクロナデ→回転糸切り	8188
2	1層	灰釉陶器碗	黒笹 90 号窯式、二日月高台、直接重ね 焼き痕	8195	6	1層	かわらけ小皿	外面：ロクロナデ→回転糸切り?	8188
3	2層	かわらけ小皿	外面：指頭状圧痕→ヨコナデ 内面：粗ナデ→ヨコナデ	8188	7	1層	かわらけ高坏	高台部中実、ロクロナデ→回転糸切り?	8188
4	2層	かわらけ皿	外面：ロクロナデ→回転糸切り		8	4層	軒平瓦	手描き軒平瓦 910(政庁第Ⅳ期)	8197

第 56 図 SD2050 溝出土遺物

#### 【第 4 層との関係が不明な溝】

第 4 層との関係が不明な溝には SD2044・2045・2048・2049・2052・2053 がある。

#### SD2044 溝 (第 2・3・17・57・58 図)

調査地区ほぼ中央の南半部に位置し、地山面で検出した北東-南西溝で、調査地区外の南にさらに延びる。本溝の中央部は残りが悪く、北と南が分断されている。長さ約 16m 検出し、規模は上端幅約 0.6~1.4m、底面幅約 0.3~0.4m、深さ約 10~26cm である。断面形は浅い皿状、底面は平坦で、南西部が北東部よりも低く、北東部との比高差は約 40cm である。堆積土は褐色粘質シルトで、灰褐色粘質土・地山黄色粘質小ブロック・φ 5 mm 前後の炭を多量に含む。新旧関係は SI1961・1964、SB1972 よりも新しく、SB1979・1980、SX1999 土器埋設遺構、SK2019、SD2045・2049 よりも古い。

出土遺物には須恵器の坏・瓶・甕、土師器の内黒坏・内黒高台坏・甕、政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB 類、丸瓦が少量ある。このうち須恵器坏には底部がヘラ切り無調整のもの、内黒土師器坏には回転糸切り無調整のものがある。

#### 〈SD2044 溝出土の漆紙文書について〉

本漆紙文書は、漆の付着した面を内側にして二つ折りにした上、それをさらに幾重にも複雑に折り畳んだ状態で出土した。これを切開して並べなおした結果、図のように復元す

ることができた。第 57 図が漆の付着していない面(以下 a 面とする)、第 58 図が漆の付着した面(b 面)である。一部を欠くものの、ほぼ円形を呈し、直径は 30cm 前後である。径 1 尺程度の漆の容器(曲物)のフタ紙として用いられたものと推定される。周縁部の折れ目は、フタ紙を押さえるために用いた枠の痕跡と考えられる(註 9)。

本漆紙文書は、3 枚の紙が貼り継がれている。これを図のように紙①・紙②・紙③とする。紙① a 面に文書 A(計帳)、紙① b 面と紙② b 面に文書 B(豆類の支出に関する帳簿?)、紙③ a 面に文書 C(性格不明)の 3 種類の文書が書かれている。紙①と紙②は、文書 B 作成時に貼り継がれたもので、継ぎ目の幅は 0.5cm 前後である。紙③は、漆の容器にフタ紙をする際に、紙①・紙②の紙高の不足分を補うために継ぎ足されたものである(註 10)。継ぎ目の幅は 1.5cm 以上と推定される。

#### ○文書 A 計帳 (第 57 図)

紙①の a 面に書かれた文書で、書体は真書、墨の残存状況は一部を除いてきわめて悪い。最終行は半裁された上、紙②に貼り継がれている。

文書 A は、人名、年齢および年齢区分を列記した歴名様文書である。このような形式の古代の公文書には、戸籍、計帳(計帳歴名・手実)等がある。文書 A の場合、1 行目に「帳見定」の 3 文字があるが、これは計帳歴名の統計記載にみられる「今年計帳見定良(賤)大小口 n 人」という文言の一部に相当するものである。したがって、文書 A は計帳であると考えられる。

「帳見定」の「見」は「現」すなわち現在の意で、1 行目は今年の計帳が現在定めている戸口の総数を記したものである(註 11)。一般に計帳歴名は、1 戸ごとに、

- I. 「戸主某戸」とある戸主名記載
- II. 去年の計帳が定めていた戸口数とその後の異動、および今年の計帳が現在定めている戸口数とその内訳(不課口・課口)を記した統計記載
- III. その戸が負担する調・庸等を註した調庸記載
- IV. 戸口の姓名・年齢・年齢区分を列記した歴名記載
- V. 戸内の異動の事情等を註した別項記載

からなる。文書 A は、1 戸分の計帳歴名のうち、II の今年の計帳に関する部分から IV までが残存したものである。

1 行目から歴名記載までの間に 2 行分程度の空白があるが、2 行目・3 行目の痕跡とみられる墨痕が上の方に残っており、ここには本来 2 行あったと考えられる。ここは、不課口・課口の人数とその内訳、および調庸記載が入る部分である。現存計帳では、これらを記載するのに 6・7 行程度を必要としている。それは、「不課口 n 人」の次行にその内訳

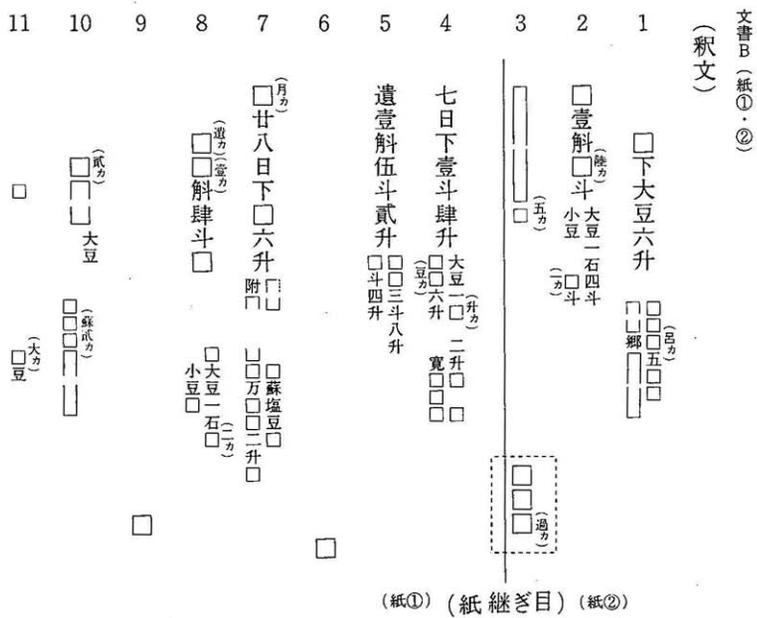
(男・女)、「課口 n 人」の次行にその内訳(見不輸・見輸)を記載し、さらに調庸記載が入るためである。ところが本文書の場合わずか 2 行しかない。このような例は現存計帳にはなく、いかなる書式であったのか不明であるが、2 行目の墨痕は、「不」の残画と考えられ、ここに「不課口 n 人」という記載があったことは推定できる。3 行目の墨痕は、全く判読できないが、この戸には正丁がいるので、おそらくここに「課口 n 人」とあったのであろう。不課口・課口の内訳は、「不課口 n 人」「課口 n 人」の下に割註の形で記載されていたか(註 12)、あるいは全く省略されていたかのいずれかであろう。調庸記載は省略されていたものと思われる。

紙①には、a 面から押した横押界が 4 本認められる。いずれも文書 A にかかわるものである。紙上端から 1 本目の横押界まで 1.5cm、1 本目の横押界から 2 本目の横押界まで 1.2 cm、2 本目の横押界から 3 本目の横押界まで 1.2cm、3 本目の横押界から 4 本目の横押界まで約 10cm の間隔がある。縦界線は認められない。1 本目の横押界は、4 行目の歴名筆頭者(戸主)の行頭に対応しており、1 行目の「今年計帳見定～」の行頭もこれに合わせていたと考えられる。2 本目の横押界は、歴名記載の行頭と、2 行目の「不課口 n 人」の行頭をそろえている。3 行目が「課口 n 人」であったとすれば、その行頭もこれに合わせていたはずである。問題は 3 本目の横押界である。現存計帳では、この横押界は不課口・課口の内訳の行頭をそろえるのに用いられている。すなわち不課口・課口の内訳は、不課口・課口の人数の行頭より横押界一つ分下げて記載するのである。しかしこの戸の場合、それは割註であったか省略されていたかのいずれかであるから、この横押界は不要のはずである。にもかかわらずこれが引かれているのは不可解だが、あえて推測すれば、本来この戸の前か後に別の戸が記載されていて、その戸の統計記載が不課口・課口の内訳を改行して記載する形式であったのではないかと思われる(註 13)。4 本目の横押界は年齢区分の高さをそろえるためのものである。

15 行目の最初の二文字は「伴部」である。半裁されている 17 行目の冒頭も残画からみて「伴部」であることは確実である。弘仁 14 年(823)に大伴宿祢が伴宿祢に改められた際、大伴部も伴部に改められたとされており(註 14)、文書 A の作成年代はそれ以降と考えられる。○文書 B (豆類の支出に関する帳簿?) (第 58 図)

紙① b 面・紙② b 面に書かれた文書で、書体は行書。1～3 行目は紙②に、4～11 行目は計帳の反故である紙①に書かれている。紙②の文字は b 面から正字で、紙①の文字は a 面から左文字で読み取れるが、紙②の a 面・紙①の b 面からはほとんど読み取れない。これは紙①と紙②の紙質の相違によるものと思われる。第 58 図は、a 面から読み取った紙①の左文字を反転させ、それを b 面に書き入れて作成したものである。3 行目の下の 3 文字





第 58 図 SD2044 溝出土漆紙文書(漆が付着したb面)

は、直接には接合しない破片に書かれたものであるが、紙継ぎ目に接して書かれているためこの位置にあったものと推定した。

比較的残りが良いのが4行目と5行目である。4行目が「七日」における支出の総量とその内訳、5行目が支出したあとの「遺」の総量とその内訳を記したものと思われ、これが一組になる。1行目と2行目、7行目と8行目も同様に組になるものと思われる。組と組との間には若干の空白を設けている。品目として「大豆」「小豆」といった豆類が見え、豆類の支出に関する帳簿かと思われるが、他に「蘇」と読める文字があり(「蘇塩豆」は「蘇」と「塩豆」か)、これは乳製品の蘇である可能性もあるので、豆類に限定できるかどうか今のところ決められない。筆跡に2種類以上あり、裏を使っていない紙②に計帳の反故である紙①を貼り継いでいるところからみて、一度に書いたものではなく、日並に書き足していったものと考えられる。

文書Bは、計帳の反故である紙①を二次的に利用して作成された文書である。『延喜式』主計式によれば、大帳(計帳)は6年間保存することになっており(註15)、文書Aにもこの規定が適用されたとすれば、文書Bは文書Aより少なくとも6年は新しいということになる。

紙①にはb面から押した横押界が2本認められる。文書Bにかかわるものかと思われるが、紙②にはみられず、また文書Bの文字との対応関係も認められないので、いかなる目的をもって引かれたものであるのか不明である。

#### ○文書C (性格不明) (第57図)

紙③のa面に書かれた文書で、書体は行書、墨の残存状況は良好である。文書の行の方向は、紙①・②の文書A・Bの行の方向に対して直交する。1行目は紙①に覆われていたが、紙①を通して文字が見えない部分は、紙①に文字がないことを確認の上、紙①を除去して文字を出した。

文書Cの性格は今のところ不明である。「前守」「田継」は人名かと思われる。「書生」は多賀城漆紙文書の5・6・63号文書にも見えている(註16)。

紙③は、紙①・紙②をフタ紙として用いる際に、その紙高の不足分を補ったものである。これまでの出土例では、紙高の不足を補う場合、補紙は本紙と同一文書で、しかも連続する可能性が高いということであるが(註17)、文書Cは、文書A・Bのいずれとも別のものであるように思われる。

#### SD2045 溝 (第2図)

調査地区中央のやや南寄りに位置し、地山面で長さ約22.0m 検出した東西溝で、方向は発掘東西基準線とほぼ一致する。底面は平坦で、西から東にごく緩やかに傾斜し、西端が

東端よりも約 40cm 高い。規模は上端幅約 0.6m、底面幅約 0.2m、深さ約 10～30cm で、断面形は皿状である。堆積土は褐色粘質シルトでφ 5 mm 前後の風化凝灰岩ブロック・炭を多量に含む。新旧関係は SI1960・1961、SB1971・1978、SD2044 よりも新しく、SK2019、SD2048・2049・2050 よりも古い。

遺物は須恵系土器の坏・高台坏、須恵器の坏・蓋・瓶・甕、土師器の内黒坏・内黒高台坏・甕、政庁第Ⅱ期・第Ⅲ期の平瓦などが少量出土している。このうち須恵器の坏には底部が回転ヘラ削り調整、手持ちヘラ削り調整、ヘラ切り無調整のものがあり、内黒土師器坏には底部が回転糸切り無調整のもの、瓦には政庁第Ⅱ期の単弧文軒平瓦 640 と「田」B の刻印平瓦ⅡB 類がある。

#### **SD2048 溝** (第 2・54 図)

調査地区中央やや西寄りに位置し、地山面で長さ約 20.5m 検出した南北溝で、調査区外の北と南にさらに延びる。方向は発掘東西基準線に対し、北で西に約 3° 偏する。底面はほぼ平坦で、北から南にごく緩やかに傾斜し、北と南の比高差は約 1.14m ある。規模は上端幅が約 0.8～1.0m、底面幅が約 0.2～0.5m で、深さ約 30cm である。断面形は皿状、堆積層は暗褐色粘質シルトで 3 層に分かれ、自然堆積土である。新旧関係は SB1976、SX2003 石敷遺構よりも新しく、SD2057 よりも古い。

遺物は須恵系土器の坏、須恵器の坏・高台坏・瓶・甕、土師器の内黒坏・内黒高台坏・両黒坏・甕が少量、政庁第Ⅰ期～第Ⅳ期までの平瓦・丸瓦が多く出土している。両黒土師器坑(第 54 図 6)はロクロ調整後に内外面を丁寧にヘラミガキし、両面を黒色処理したもので、低い高台が付く。器形は灰釉陶器坑、西日本の黒色土器坑・瓦器坑に類似し、これらの影響を受けていると考えられる。

#### **SD2049 溝** (第 2・54 図)

調査地区のほぼ中央に位置し、地山面で長さ約 21.5m 検出した南北溝で、調査区外の北と南にさらに延びる。方向は発掘東西基準線に対し北で西に約 12° 偏する。規模は上端幅約 1.7～2.2m、底面幅約 0.5～0.8m で、深さ約 20～50cm で、断面形は浅い逆台形状である。底面はほぼ平坦で、北から南にごく緩やかに傾斜し、北と南の比高差は約 1.2m ある。堆積土は黒褐色粘質シルトで 2 層に分かれ、自然堆積土である。新旧関係は SB1970・1971・1976・1978～1980、SX2001 工房、SD2045 よりも新しく、SD2050・2056 よりも古い。

出土遺物には少量のかわらけ・灰釉陶器・青磁・中世陶器・須恵系土器・須恵器・土師器と多量の瓦がある。かわらけにはロクロ調整で底部が回転糸切り無調整の小皿(第 55 図 7)と柱状高台の高坏?がある。灰釉陶器には坑・瓶、青磁には坑体部破片、中世陶器には渥美系かと思われる甕の体部破片がある。

#### **SD2052 溝** (第 2・3・17 図)

調査地区ほぼ中央やや東寄りの南半部に位置し、SI1965、SB1979・1980 の埋土上面で長さ約 4 m 検出した溝である。方向は発掘南北基準線に対して北で東に約 40° 偏する。北端は SB1980 の柱穴に壊されてその始まりは不明で、南は調査区外にさらに延びる。北東部が南西部よりも約 57cm 高く、北東から南西に緩やかに傾斜している。規模は上端幅が約 0.6~0.7m、底面幅が約 0.1~0.2m、深さ約 25~30cm で、断面形は浅い逆台形状である。堆積土は灰黄褐色粘質シルトで炭を多く含む。新旧関係は SI1965 よりも新しく、SB1979・1980 よりも古い。遺物は須恵系土器の坏、須恵器の坏・高台坏・甕、土師器の内黒坏・甕、平瓦・丸瓦が少量出土している。

#### **SD2053 溝** (第 2・3・17・54 図)

調査地区ほぼ中央やや東寄りの南半部に位置し、SI1965、SB1979・1980 の埋土上面で長さ約 4 m 検出した溝である。方向は発掘南北基準線に対して北で東に約 40° 偏する。北端は SB1980 の柱穴に壊されてその始まりは不明で、南は調査区外にさらに延びる。北東部が南西部よりも約 15cm 高く、北東から南西にごく緩やかに傾斜している。規模は上端幅が約 0.35~0.8m、底面幅が約 0.15~0.7m、深さ約 10cm で、断面形は皿状である。堆積土は灰黄褐色粘質シルトで炭を多く含む。新旧関係は SI1965 よりも新しく、SB1979・1980 よりも古い。遺物は須恵系土器の坏、須恵器の坏(第 54 図 1)・甕、土師器の坏・甕、平瓦・丸瓦が少量出土している。

#### (9) その他の遺構

##### **SX2002 集積遺構** (第 14 図)

調査地区北東部に位置し、地山面で検出した。径約 1 m の範囲に人頭大前後の大きさの自然礫や瓦・砥石などを集積している。掘方はない。新旧関係は SB1969 よりも新しい。遺物は須恵器・土師器・瓦が少量と砥石が 1 点出土している。須恵器には底部が回転糸切り無調整の坏、瓶があり、土師器にはロクロ調整の内黒土師器坏・甕、非ロクロ調整の甕、ロクロ使用の有無不明の両黒埴または蓋がある。瓦には政庁第 II 期の平瓦 II B 類が 9 点、政庁第 II 期または第 IV 期の平瓦が 1 点、丸瓦が 1 点ある。

#### (10) 堆積層出土の遺物

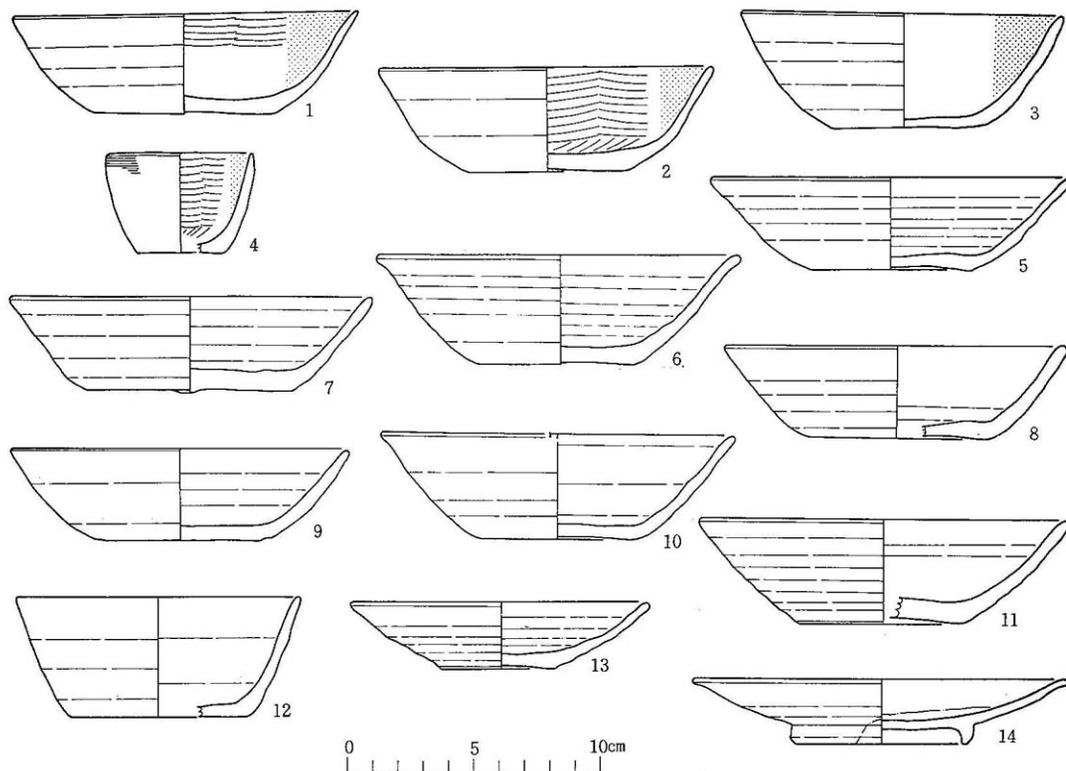
##### **第 4 層出土の遺物** (第 59 図)

第 4 層出土の遺物には多量の須恵器・土師器・瓦があり、他に少量の灰釉陶器、硯、鞆羽口、鉄釘、鉄滓、凝灰岩切り石、砥石、雲母片、水晶などがある。須恵器には坏・高台坏・蓋・甕・瓶など、土師器には内黒坏・高台坏・甕がある。このうち須恵器・土師器の坏では、底部が回転糸切り無調整で底径が小さいもの(第 59 図 3・5・6・10・11)が主体

を占める。灰釉陶器には黒笹 90 号窯式の皿(第 59 図 14)がある。瓦には政庁第 I 期～第 IV 期までの平瓦が含まれ、政庁第 II 期の平瓦が主体を占める。瓦では他に政庁第 IV 期の均整唐草文軒平瓦 721B b と細弁蓮花文軒丸瓦 310B、政庁第 II 期の刻印「占」平瓦 II B 類と刻印「物」A 平瓦 II B 類が各 1 点ある。

**第 2 A 層出土の遺物**

第 2 A 層からは古代～中世の遺物が出土し、古代の遺物が主体を占める。中世の遺物には中世陶器・青磁・白磁・かわらけなどがある。古代の遺物には比較的多くの須恵器・土師器・瓦がある。瓦には政庁第 I 期～第 IV 期までの平瓦が含まれる。

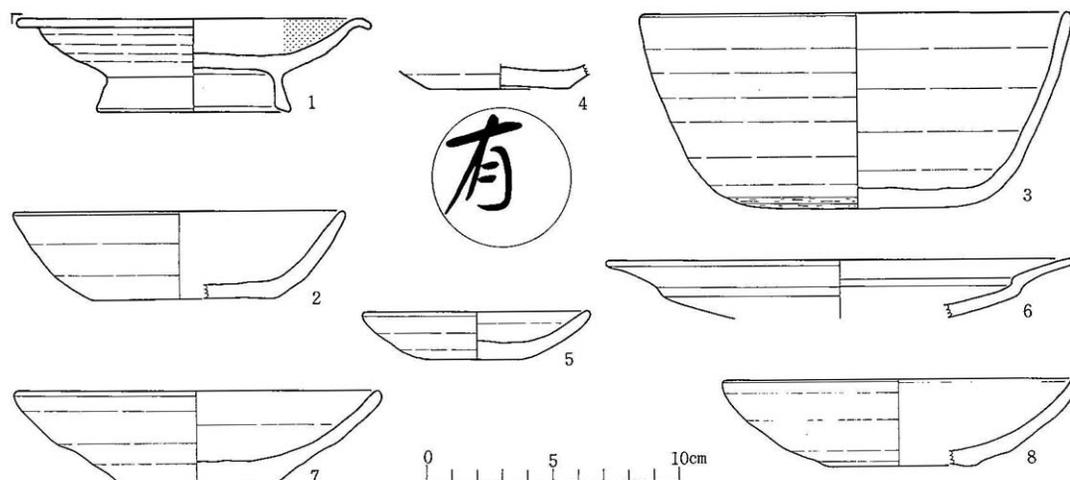


番号	種類	特	徴	箱番号	番号	種類	特	徴	箱番号
1	内黒土師器杯	外面：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ 内面：ヘラミガキ		8190	8	須恵器杯	外面：ロクロナデ→回転系切り(右) 内面：ロクロナデ		8190
2	内黒土師器杯	外面：ロクロナデ→回転系切り→手持ちヘラケズリ 内面：井桁状ミガキ		8190	9	須恵器杯	外面：ロクロナデ→ヘラ切り 内面：ロクロナデ		8191
3	内黒土師器杯	外面：ロクロナデ→回転系切り(右) 内面：ヘラミガキ		8190	10	須恵器杯	外面：ロクロナデ→回転系切り(右) 内面：ロクロナデ		8191
4	内黒土師器 軸	外面：ヨコナデ、内面：ヘラミガキ		8190	11	須恵器杯	外面：ロクロナデ→回転系切り(右) 内面：ロクロナデ		8190
5	須恵器杯	外面：ロクロナデ→回転系切り(右) 内面：ロクロナデ		8191	12	須恵器杯	外面：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ 内面：ロクロナデ		8191
6	須恵器杯	外面：ロクロナデ→回転系切り(右) 内面：ロクロナデ		8191	13	須恵器杯	外面：ロクロナデ→回転系切り(右)→手持ちヘラケズリ(部分的)		8191
7	須恵器杯	外面：ロクロナデ→ヘラ切り 内面：ロクロナデ		8191	14	灰釉陶器皿	黒笹 90 号窯式、三日月高台、底部回転ヘラケズリ		8195

第 59 図 第 4 層出土の遺物

### 第1層出土の遺物 (第60図)

第1層からは古代～現代の遺物が出土し、須恵器・土師器・瓦など古代の遺物が主体を占める。瓦には政庁第Ⅰ期～第Ⅳ期までの瓦が含まれ、政庁第Ⅱ期の瓦が主体を占める。中世の遺物には中世陶器・かわらけ・青磁・白磁など、近世以降の遺物には陶磁器などがある。他に少量の鉄釘などの鉄製品、鉄滓、凝灰岩切り石、砥石、水晶などがある。



番号	種類	特徴	箱番号	番号	種類	特徴	箱番号
1	内黒土師器高台環器	外面口縁～高台：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ 底部：摩滅	8193	5	須恵系土器杯	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	8194
2	須恵器環器	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	8193	6	灰釉陶器段皿		8195
3	須恵器環器	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	8193	7	かわらけ杯	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	8194
4	須恵系土器杯	底部：回転系切り(右)、墨書「有」	8201	8	かわらけ杯	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	8191

第60図 第1層出土の遺物

### B. 北西地区

北西地区で検出した遺構にはSD706溝、SK2060土壌、SX2061石敷遺構がある。

#### SD706溝 (第61図)

第23次調査で検出したSD706は、平安時代のSB307外郭東門から城内側へ続く東西道路の南側溝にあたり、第56次調査で検出したSD706はその延長上の屈折部にあたると考えられている(『多賀城跡調査研究所年報1989』)。今回の北西地区の調査は、第56次調査で検出したSD706の屈折部を拡張して溝が止まる部分の検出を目的とした。その結果、屈折部から約5mで立ち上がり、止まることが判明した。方向は東西溝部分でみると東で約5°北へ偏している。規模は東西溝部分で上端幅約1.7m、底面幅約1.2mで、深さは約35cm残っている。南北溝部分で上端幅約3.7m、底面幅約0.7mで、深さは約60cm残っている。

堆積土は東西溝でみると5層に細分され、いずれも自然堆積と考えられる。1・3層は黄褐色地山細粒、岩盤小ブロック・細粒を含む褐灰色土、2・4層は少量の黄褐色地山細粒・岩盤小ブロックを含む褐灰色粘質土、5層は黄褐色地山の崩落土である。

遺物は須恵系土器・須恵器・土師器・瓦が出土している。

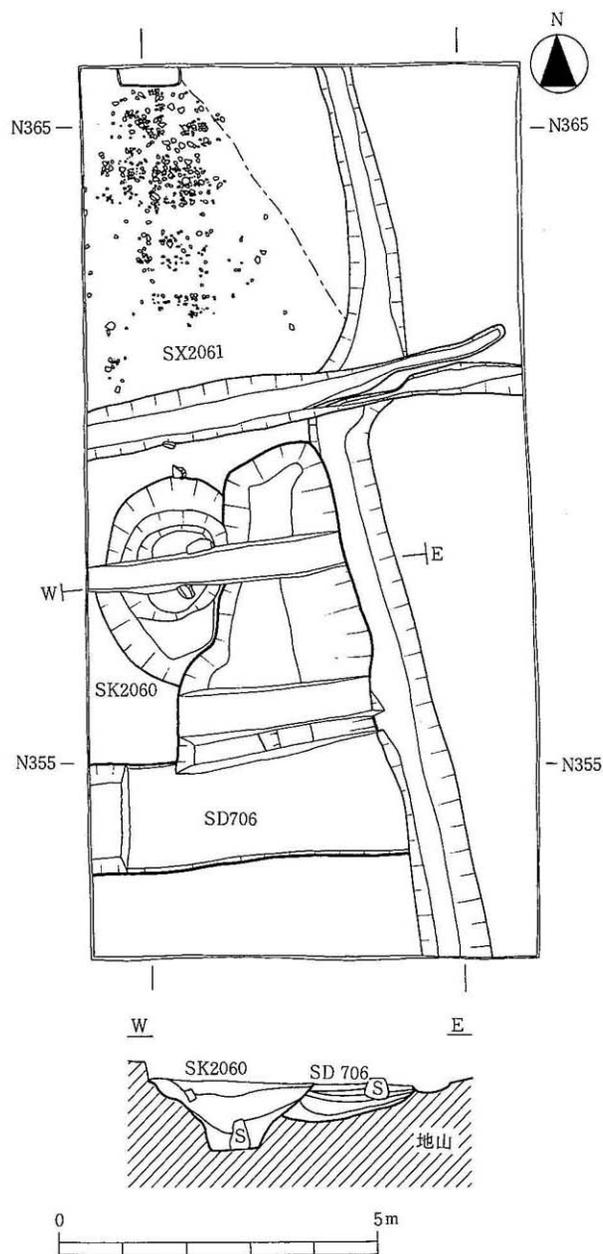
新旧関係はSK2060よりも古い。

**SK2060 土壇** (第61図)

平面形が径約2.5mのほぼ円形で、断面形が挿鉢状の土壇で、深さ1.1m残っている。堆積土は3層に分けられ、1・2層が褐色粘質シルトで、3層が灰褐色粘質土で一部グライ化している。遺物はかわらけの小皿、須恵器の甕が出土している。新旧関係はSD706よりも新しい。

**SX2061 石敷遺構** (第61図)

調査地区の北西部、SD706の北側にある石敷遺構で、小礫・瓦を薄く敷き詰めている。残存状況は部分的で、範囲はつかみにくい。出土遺物には平瓦・丸瓦がある。SD706との位置関係から見ると、平安時代のSB307外郭東門から城内側へ続く東西道路に関連する可能性がある。



第61図 北西地区検出遺構全体図

## 5. 考 察

### A. 南 地 区

第58次調査では調査期間との関係で調査面積の約1/3にあたる西側の範囲を十分に精査できなかつた。そのため、南地区の東側約2/3の範囲を中心に、この北側に隣接する第56次調査西地区も併せて、竪穴住居跡・掘立式建物跡・井戸跡などの主要遺構について考察することにしたい。

#### (1) 第56次調査西地区での遺構期の設定

今回の第58次調査地区の北に隣接する第56次調査西地区では、重複状況の検討から建物跡・竪穴住居跡には以下のように7時期の変遷があったことが明らかにされている(『宮城県多賀城跡調査研究所年報1989』)。

##### 【A期：SI1901～1904 竪穴住居跡】

建物跡と重複する場合、いずれの建物跡よりも古い。また、いずれもカマドが取り払われ、人為的に埋め戻されている。

##### 【B期：SB1881～1883 建物跡】

建物跡の方向は東で南に偏している。このような方向の建物跡は他の時期には認められない。

##### 【C期：SB1884・1885・1897・1898・1969 建物跡】

建物の方向は北が西に若干偏している。SB1884・1885は柱筋を揃えて南北に並び、同時に存在したと考えた。SB1897は重複関係がB期のSB1883よりも新しく、D期のSB1886よりも古いことから、C期の建物跡と考えた。また、SB1898・1969は建物の方向・規模からC期の建物跡と考えた(今回の第58次調査で、新旧関係がD期のSB1887・1973よりも古いことが判明し、C期の建物であることが確認された)。

##### 【D期：SB1886・1887 建物跡】

西妻の柱筋を揃えて南北に並び、ともに廂を持つことから、同時に存在した建物跡と考えた。建物の方向は東が北に偏する。

##### 【E期：SB1888～1892 建物跡】

建物の方向は北が西に若干偏している。D期の建物跡よりも新しく、埋土に第4層起源の黒褐色土を含まない。柱穴の規模は小さく、形状が方形・不整円形とヴァラエティに富む。このうちSB1890・1891は柱筋を揃えて南北に並び、同時に存在した建物跡と考えた。

##### 【F期：SB1893～1896 建物跡】

建物の方向は北が西に若干偏している。埋土に第4層起源の黒褐色土を含む。このうちSB1893とSB1896A、SB1894・1895とSB1896B・Cは東西側柱列を揃えて南北に並ぶことから、それぞれ計画的に配置された同時期の建物と考えた。

**【G期：SB1899・1900建物跡】**

柱穴は円形で小さく、埋土に黒褐色土を含む。建物跡と重複する場合、いずれの建物跡よりも新しい。

**(2) 遺構群の設定**

第56次調査でのこうした遺構期の設定を踏まえ、堆積土に第2B層ないし第4層起源の黒褐色土を含むか否かによって、本地区における主要遺構を堆積土に第2B層ないし第4層起源の黒褐色土を含むⅠ群、堆積土に第2B層ないし第4層起源の黒褐色土を含まないⅡ群に大別し、さらに基本層序の第2B層・第4層との関係や新旧関係などに着目してそれぞれをさらに細別した。以下、この遺構分類にしたがってⅠ-1群、Ⅱ-2群のように呼ぶことにする。また、本地区における主要遺構の重複関係を第62図に提示したが、直接の新旧関係があってもその間に別の遺構との新旧関係が介在する場合には、より古い時期との重複関係を適宜省略してある。

なお、黒褐色土の第2B層と灰白色火山灰の第3層は、第56次調査西地区の東端部に分布し、平安時代のSF300築地に伴う城内側のSD1910溝の堆積土中にある。第2B層には須恵系土器が多く含まれ、第2B層と類似する第4層には須恵系土器が含まれない。第58次調査地区の東半部には第2B層は分布せず、第4層が分布する。第4層との新旧関係が不明で、堆積土に黒褐色土を含む遺構には須恵系土器を含むものもあることから、第2B層も本来は第58次調査地区の東半部に分布していたが後世に削平を受けた可能性がある。したがって、第4層との新旧関係が不明で、堆積土に黒褐色土を含む遺構については、堆積土の黒褐色土の起源は第2B層ないし第4層ということになる。

**【Ⅰ群. 堆積土に第2B層ないし第4層起源の黒褐色土を含む遺構】**

**〔Ⅰ-1群. 新旧関係が第4層よりも新しく、堆積土に黒褐色土を含む遺構〕**

: SB1893～1896 掘立式建物跡、SK2012・2013・2015 土壙、SX1928 土器埋設遺構、SD2042 溝

このうち、第56次調査で検出したSB1893～1896はF期に位置付けられている。SB1896はSB1893と方向が同じことからほぼ同時期と考えられ、SB1893→SB1894→SB1895の順に新しくなる。SK2012はⅡ-1群のSI1962よりも新しく、SK2013はⅡ-1群のSI1962・1963、SE1988・1989よりも新しい。SD2042はⅡ-1群のSB1977、Ⅰ-3群のSK2004、Ⅱ-1群のSD2041よりも新しい。

**I-2群. 新旧関係が第3層(灰白色火山灰)よりも古く、堆積土に灰白色火山灰ブロックと黒褐色土を含む遺構**

: SE1909 井戸跡

第56次調査で検出したSE1909は埋土最上層に極少量の灰白色火山灰ブロックを含むことから、第3層の灰白色火山灰が降下した10世紀前半には埋められていたことがわかる。新旧関係はG期に位置付けられたI-3群のSB1899よりも古い。

**I-3群. 黒褐色土の第2B層・第4層との新旧関係は不明だが、堆積土に黒褐色土を含む遺構**

: SB1899・1900・1978～1982 掘立式建物跡、SE1991 井戸跡、SX1905・1906・1908・1996・1997・1999 土器埋設遺構、SK2004・2034 土壙、SD2048・2049 溝

- ① 建物跡では第56次調査で検出されたSB1899・1900がG期に位置付けられている。SB1978はII-3群のSI1960、SB1971・1976よりも新しく、I-3群のSB1980、II-3群のSD2045・2048よりも古い。SB1979・1980はII-3群のSI1964・1965、SD2044・2052・2053よりも新しく、I-3群のSD2049よりも古い。SB1980はII-3群のSB1971、I-3群のSB1978・1979よりも新しい。SB1981はII-2群のSD2050よりも古い。SB1982はII-3群のSK2017・2018よりも新しい。なお、SB1981・1982は方向・規模がほぼ同じで東西に並ぶことから、同時期のものと考えられる。
- ② 井戸跡ではSE1991がI-1群のSD2042よりも古く、I-3群のSK2004よりも新しい。
- ③ 土器埋設遺構では第56次調査で検出されたSX1905・1906・1908がG期に位置付けられている。SX1996はII-3群のSB1970、SX1997はII-1群のSB1887、SX1999はII-3群のSD2044よりもそれぞれ新しい。
- ④ 土壙ではSK2004がI-3群のSE1991、I-1群のSD2042、II-2群のSD2050よりも古い。SK2034はII-1群のSB1974よりも新しく、II-2群のSD2050よりも古い。
- ⑤ 溝ではSD2048・2049がII-2群のSD2050よりも古い。SD2048はII-3群のSB1976よりも新しく、SD2049はI-3群のSB1979・1980、II-3群のSB1970・1971・1976・1978、SX2001 工房、SD2045よりも新しい。

**【II群. 堆積土に第2B層ないし第4層起源の黒褐色土を含まない遺構】**

**II-1群. 新旧関係が第4層よりも古く、堆積土に第4層起源の黒褐色土を含まない遺構**

: SI1962・1963 竪穴住居跡、SB1887・1898・1968・1969・1973～1975・1977 掘立式  
建物跡、SE1987～1989 井戸跡、SX1994・1995・1998 土器埋設遺構、SK2005～  
2011・2014・2032・2035・2036 土壙、SD2041 溝

これらの遺構のうち、新旧関係がわかるものは以下の通りである。

- ① 竪穴住居跡は SI1962→SI1963 の順に新しく、さらにこれらは II - 2 群の SD  
2050、I - 1 群の SK2012・2013 に一部壊されている。
- ② 建物跡は SB1898→SB1968→SB1969→SB1973→SB1887 の順に新しく、第 56  
次調査では SB1898 を C 期、SB1887 を D 期に位置付けている。
- ③ 土器埋設遺構は SX1994 が SB1973 よりも新しく、SB1887 に対する地鎮遺構と考  
えられる。SX1995 は SB1969、SX1998 は SB1973 よりもそれぞれ新しい。
- ④ 井戸では SE1987 が SK2005 よりも新しく、SK2035 よりも古い。SE1988 は SI  
1962・1963 よりも新しく、SE1989 よりも古い。SE1989 は SI1962・1963、SE1988  
よりも新しく、I - 1 群の SK2013 よりも古い。
- ⑤ 土壙では SK2005 が SB1973 よりも新しく、SE1987 よりも古い。SK2006・2007  
は SB1898・1968・1977、SD2041 よりも新しく、SK2006 が SK2007 よりも古い。  
SK2008 は SB1898・1977、SD2041 よりも新しい。SK2009 は SB1898 よりも新し  
い。SK2010 は SK2011 よりも古く、SB1969 よりも新しい。SK2011 は SB1969・  
1977、SK2010 よりも新しい。SK2014 は SB1977 よりも新しい。SK2035 は SE1987、  
SK2005 よりも新しい。SK2036 は SD2041 よりも新しい。
- ⑥ 溝では SD2041 が SB1898・1969・1977、SK2004 よりも新しく、SK2006～2008  
・2036、I - 1 群の SD2042、II - 2 群の SD2050 よりも古い。

**II - 2 群. 新旧関係が暗褐色土の第 2A 層、黒褐色土の第 4 層、竪穴住居跡・建物跡  
よりも新しく、堆積土が褐色粘質シルトで黒褐色土を含まない遺構**  
: SD2050

**II - 3 群. 第 4 層との新旧関係が不明で、堆積土に暗褐色土・黒褐色土を含まない遺  
構**  
: SI1901～1904・1960・1961・1964～1966 竪穴住居跡、SB1881～1886・1888～1892  
・1897・1970～1972・1976 掘立式建物跡、SX2000 土器溜め、SX2001 工房、SK2017  
～2021・2032・2033 土壙、SD2044・2045・2052・2053 溝

このうち第 56 次調査で検出した SI1901～1904、SB1881～1886・1888～1892 は、S  
I1901～1904 が A 期、SB1881～1883 が B 期、SB1884・1885・1897 が C 期、SB1886  
が D 期に位置付けられている。また、第 58 次調査で検出した上記の遺構のうち、新旧関



係がわかるものは以下の通りである。

- ① 竪穴住居跡では SI1960 がⅡ－3群の SB1971・1972・1978・1980、SD2045 よりも古い。SI1961 はⅡ－3群の SB1972、SK2019、SD2044・2045、Ⅱ－2群の SD2050 よりも古い。SI1964 はⅠ－3群の SB1979・1980、Ⅱ－3群の SD2044 よりも古い。SI1965 はⅠ－3群の SB1979・1980、Ⅱ－3群の SD2052・2053 よりも古い。SI1966 はⅠ－1群の SD2042、Ⅱ－2群の SD2050 よりも古い。
- ② 建物跡では SB1970 がⅡ－3群の SB1971・1976・1978、Ⅰ－3群の SD2049、Ⅱ－2群の SD2050 よりも古い。SB1971 はⅡ－3群の SI1960、SB1970 よりも新しく、Ⅱ－3群の SB1976・1978、SD2045、Ⅰ－3群の SD2049 よりも古い。SB1972 はⅡ－3群の SI1961 よりも新しく、Ⅱ－3群の SK2019、SD2044・2045 よりも古い。SB1976 はⅡ－3群の SB1970・1971 よりも新しく、SB1978、SX2003 石敷遺構、Ⅰ－3群の SD2048・2049、Ⅱ－2群の SD2050 よりも古い。なお、SB1971・1972 は方向・規模が同じで東西に並ぶことから、同時期の建物跡と考えられる。
- ③ SX2000 土器溜めはⅡ－3群の SK2021 よりも新しい。
- ④ SX2001 工房はⅡ－3群の SD2049 よりも古い。
- ⑤ 土壌では SK2017・2018 がⅡ－3群の SB1982 よりも古い。SK2019 はⅡ－3群の SI1961、SB1972、SD2044 よりも新しく、Ⅱ－2群の SD2050 よりも古い。SK2020 はⅡ－3群の SB1971 よりも新しい。SK2021 はⅡ－3群の SX2000 土器溜めよりも古い。

第 56 次調査西地区での遺構期の設定と以上に示した主要遺構の分類と重複関係を踏まえると、上記の主要遺構の分類では、堆積土に黒褐色土を含まないⅡ－1群・Ⅱ－3群→堆積土に黒褐色土を含むⅠ群→堆積土が1層に類似する褐色土のⅡ－2群の順に新しくなることがわかる。

### (3) 遺構期の再編

前述したように、第 56 次調査西地区では 7 時期(A 期～G 期)の遺構期を設定していたが、今回の調査で主要遺構の重複関係を中心に検討した結果、第 56 次調査の F 期と G 期の間に 1 遺構期、G 期の次に 1 遺構期があることがわかり、9 時期(A 期～I 期)の遺構期に再編した(第 63～65 図・第 7 表)。A 期～F 期は第 56 次調査の A 期～F 期にそれぞれ相当し、G 期は第 56 次調査の G 期と F 期の間に位置付けられる新たな遺構期で、H 期は第 56 次調査の G 期に相当し、I 期は第 56 次調査の G 期以降に位置付けられる新たな遺構期である。なお、第 56 次調査で検出した竪穴住居跡・建物跡の位置付けは変わらない。

**【A 期 : SI1901～1904・1960～1966 竪穴住居跡】**

これらの竪穴住居跡のうち、建物跡と重複する SI1902・1904・1960・1961・1964・1965 はすべて建物跡よりも古い。建物跡と重複しない SI1901・1962・1963・1966 も出土遺物からみてこの時期に位置付けられると考えられる。いずれも堆積土に第 2 B 層ないし第 4 層起源の黒褐色土を含まず、SI1962・1963 は第 4 層よりも古く(Ⅱ-1 群)、SI1902～1904・1960・1961・1964～1966 は第 4 層との新旧関係は不明である(Ⅱ-3 群)。

#### 【B 期 : SB1881～1883 掘立式建物跡】

建物跡の方向を北妻・北側柱列で見ると、いずれも東で南に偏している。いずれも第 4 層との新旧関係は不明であるが、堆積土に第 2 B 層ないし第 4 層起源の黒褐色土を含まない(Ⅱ-3 群)。

- ① SB1881・1822 は第 56 次調査西地区で検出した建物跡の中で新旧関係が最も古く、柱筋を揃えて南北に並ぶことから同時に存在したと考えられる。
- ② SB1883 は SB1882 よりも新しく、これと方向が同様であることから、B 期の建物跡と考えられる。

#### 【C 期 : SB1884・1885・1897・1898・1968～1972 掘立式建物跡】

建物跡の方向を北妻・北側柱列で見ると、いずれも北が西に若干偏している。いずれも堆積土に第 2 B 層ないし第 4 層起源の黒褐色土を含まず、SB1898・1968・1969 は第 4 層よりも古く(Ⅱ-1 群)、SB1884・1885・1897・1970～1972 は第 4 層との新旧関係が不明である(Ⅱ-3 群)。

- ① SB1884・1885 は東側柱筋を揃えて南北に並ぶことから同時に存在したと考えられる。SB1897 は B 期の SB1883 よりも新しく、D 期の SB1886 よりも古いので、C 期の建物跡と考えられる。
- ② 第 56 次調査では建物跡の方向から SB1898・1969 を C 期、SB1887 を D 期に位置付けた。今回の調査で SB1898 周辺では SB1898→SB1968→SB1969→SB1973→SB1887 の順に新しいことがわかり、SB1969 は D 期の SB1887・1973 よりも古く、B 期の建物跡の方向とも異なるので、C 期の建物跡と考えられる。
- ③ SB1898 は SB1969 よりも古く、B 期の建物跡の方向とも異なるので、C 期の建物跡と考えられる。したがって、SB1898 よりも新しく、SB1969 よりも古い SB1968 も C 期の建物跡と考えられる。
- ④ SB1971 は E 期の SB1976 よりも古く、建物の方向も B 期・D 期とも明らかに異なり、A 期はすべて竪穴住居跡で構成されることから、C 期の建物跡と考えられる。
- ⑤ SB1970 は SB1971 よりも古く、建物の方向も B 期・D 期とも明らかに異なり、A 期はすべて竪穴住居跡で構成されることから、C 期の建物跡と考えられる。

- ⑥ SB1972はSB1971と柱筋をほぼ揃えて東西に並ぶ同規模の建物跡であることから、これと同時に存在したC期の建物跡と考えられる。

#### 【D期：SB1886・1887・1973 掘立式建物跡】

建物跡の方向を北側柱列で見ると、いずれも東が北に約 $8^{\circ}$ ～ $10^{\circ}$ 前後偏している。これらの建物跡の偏し方は各時期を通じて最も大きい。いずれも堆積土に第2B層ないし第4層起源の黒褐色土を含まず、SB1887・1973は第4層よりも古く(Ⅱ-1群)、SB1886は第4層との新旧関係が不明である(Ⅱ-3群)。

- ① SB1886はC期のSB1884よりも新しく、SB1887はC期のSB1885・1969よりも新しい。また、SB1886・1887は西妻の柱筋を揃えて南北に並ぶことから、同時に存在したと考えられる。
- ② SB1973はC期のSB1969よりも新しく、SB1887よりも古くてこれと方向が同じであることから、D期の建物跡と考えられる。

#### 【E期：SB1888～1892・1974～1977 掘立式建物跡】

建物跡の方向を北妻・北側柱列で見ると、SB1889を除けばいずれも東が北に若干偏している。いずれも柱穴・抜取穴に第2B層・第4層起源の黒褐色土を含まない。SB1974・1975・1977は第4層よりも古く(Ⅱ-1群)、第4層との新旧関係が不明のSB1888～1892・1976(Ⅱ-3群)も第4層より古い可能性が高い。

- ① 第56次調査西地区で検出したSB1888～1992は、D期の建物跡よりも新しいこと、柱穴埋土に黒褐色土を含まず(Ⅱ群)、F期以降の建物跡の柱穴埋土には黒褐色土を含む(Ⅰ群)ことから、E期として設定した(『宮城県多賀城跡調査研究所年報1989』)。このうちSB1890・1891は柱筋を揃えて南北に並ぶことから、同時期に計画的に配置されたと考えられる。
- ② SB1974・1975はC期のSB1898・1968・1969よりも新しく、D期のSB1886・1887・1973とも方向が大きく異なること、柱穴埋土に黒褐色土を含まないこと(Ⅱ-1群)から、E期と考えられる。SB1975はSB1974よりも新しい。
- ③ SB1976はC期のSB1970・1971よりも新しく、方向がE期のSB1888～1892の方向とほぼ一致すること、柱穴埋土に黒褐色土を含まないこと(Ⅱ-3群)から、E期と考えられる。なお、SB1976は北廂・間仕切りを持ち、身舎の柱穴に床束があることから、身舎が床張りで廂が土間の建物であったことがわかる。これまで大畑地区で検出された建物跡の中で床張りの建物であることが確実なのはこのSB1976だけである。
- ④ SB1977はC期のSB1969よりも新しいこと、第4層よりも古く、柱穴埋土に黒褐色土を含まないこと(Ⅱ-1群)から、E期の建物跡と考えられる。

#### 【F期：SB1893～1896・1978 掘立式建物跡】

建物跡の方向を北妻で見ると、いずれも北が西に若干偏している。E期以前の建物跡の柱穴の埋土には第4層起源の黒褐色土を含まない(Ⅱ群)のに対し、F期の建物跡の柱穴の埋土にはいずれも第4層起源の黒褐色土を含む(Ⅰ群)。SB1893～1896は第4層よりも新しく(Ⅰ-1群)、SB1978は第4層との新旧関係が不明である(Ⅰ-3群)。

- ① SB1893とSB1896A、1894・1895とSB1896B・1896Cは、東・西側柱列を揃えて南北に並ぶことから、それぞれ計画的に配置された同時期のものと考えられる。いずれも第4層上面で検出され、柱穴の埋土には第4層起源の黒褐色土が含まれる。
- ② SB1978は重複関係がA期のSI1960、C期のSB1970・1971、E期のSB1976よりも新しく、G期のSB1980よりも古い。

#### 【G期：SB1979・1980 掘立式建物跡】

SB1979・1980は、柱穴の形が方形で柱穴の規模も1.0～1.5m前後と大きいことでB期～F期の建物群と共通し、柱穴の埋土に黒褐色土を含むこと(Ⅰ群)でF期・H期の建物群と共通する。建物の方向を北側柱列で見ると東で南に偏し、F期・H期いずれの建物群とも大きく異なる。そのため、F期とH期の間に位置付ける。

- ① SB1979はA期のSI1964・1965、SD2044よりも新しく、SB1980よりも古い。柱穴の埋土に黒褐色土を含む(Ⅰ-3群)。
- ② SB1980はA期のSI1960・1964・1965、C期のSB1971・1972、F期のSB1978よりも新しい。柱穴の埋土に黒褐色土を含む(Ⅰ-3群)。

#### 【H期：SB1899・1900・1981・1982 掘立式建物跡】

柱穴が円形ないし楕円形で小さいことでG期以前の建物とは異なり、第2B層との新旧関係は不明だが埋土に第2B層起源の黒褐色土を含むこと(Ⅰ-3群)で共通する建物群である。

- ① SB1899はA期のSI1904、C期のSB1885・1969・1898、D期のSB1887・1973、E期のSB1975よりも新しい。
- ② SB1900はC期のSB1884、D期のSB1886、E期のSB1888～1890よりも新しい。
- ③ SB1981・1982は南側柱列を揃えて東西に並び、SB1900の方向もほぼ同様であることから、これらは計画的に配置された同時期の建物と考えられる。ただし、SB1899は方向がこれらの建物と大きく異なり、SB1981と近接しすぎているため、これらとは同時に存在せず、H期がさらに細分される可能性が高い。なお、SB1982はSD2051・SK2018よりも新しく、G期のSB1980がSD2051よりも古いことから、G期のSB1980よりも新しいことが間接的に知られる。また、SB1981はI期のSD2050より

も新しい。したがって、SB1981・1982はG期以降、I期以前ということで、H期に位置付けられる。

#### 【I期：SD2042・2048・2049・2050溝】

堆積土と新旧関係から2小期に細分される。I-1期は堆積土に黒褐色土を含み(I群)、SD2050溝よりも古いSD2042・2048・2049溝で構成される。I-2期は堆積土に黒褐色土を含まず(II群)、調査区ほぼ全体を大きく方形に区画するSD2050で構成される。I-1期・I-2期とも建物跡は検出されなかった。

SD2042はE期のSB1977よりも新しい。SD2048はE期のSB1976よりも新しい。SD2049はC期のSB1971、E期のSB1976、F期のSB1978、G期のSB1979・1980よりも新しい。SD2050はA期のSI1961・1966、C期のSB1885・1898・1969・1970、D期のSB1973・1887、E期のSB1975・1976、H期のSB1899・1981、I-1期のSD2042・2048・2049よりも新しい。

#### (4) 各遺構期の年代的位置付け

前述したように、A期～E期の各遺構は堆積土や柱穴・抜取穴に黒褐色土を含まず、第4層よりも古いと推定され、F期～H期の各建物は柱穴・抜取穴に黒褐色土を含み、第4層ないし第2B層よりも新しいと推定される。したがって、各遺構期、特にE期・F期の年代的位置付けを行う際には第4層・第2B層が大きな基準となる。第4層・第2B層はともに黒褐色土で類似するが、分布範囲・形成時期・出土遺物が異なる。

第4層は第56次調査西地区では平安時代のSF300築地に伴う城内側のSD1910溝の堆積土中とSD1910溝よりも西側に分布し、第58次調査地区では東側に分布している。第4層からは須恵器・土師器・瓦が多量に出土し、政庁第IV期の瓦を少量含み、須恵系土器をほとんど含まない。須恵器坏と内黒土師器坏には底部が回転糸切り無調整のもの、回転ヘラ削り調整のもの、手持ちヘラ削り調整のものがあり、回転糸切り無調整のものが多い。第4層に政庁第IV期の瓦が少量含まれることから、第4層の形成年代は政庁第IV期の開始年代である貞観11(869)年よりも古くはならない。第4層が最大層厚約10cmの自然堆積層であることから、E期とF期との間には少なくともこの層が堆積する程度の時間幅があったと推定される。第4層に覆われるE期以前の遺構から政庁第IV期の瓦が出土していないことを考え併せると、第4層は貞観11(869)年の陸奥国大地震で大畑地区の建物群が倒壊した9世紀第4四半期を中心とする頃に形成されたと考えられる。また、第4層はSD1910溝の堆積土中で灰白色火山灰の第3層に覆われていることから、10世紀前半よりも古いことが明らかである。

一方、第2B層は第56次調査西地区のSD1910溝の堆積土中に分布し、第58次調査地区

内には分布していない。第2B層は灰白色火山灰の第3層の上位にあり、須恵系土器を含み、かわらけ・中世陶器を含まない。須恵系土器は須恵系土器の一群の中でも比較的古い様相のもので、10世紀前半頃のものである。したがって、第2B層の形成年代は10世紀前半頃と推定される。

以上の第4層・第2B層の年代的な位置付けから見て、第4層よりも古いE期以前の各建物は、第4層の上限年代である貞観11(869)年よりは古く、F期以降の各建物は貞観11(869)年よりは新しいと推定される。

次に、各遺構期の出土遺物をもとに相前後する遺構期との相対的関係を考慮に入れて検討すると、各遺構期の年代的な位置付けは以下のように推定される。

**【A期 (SI1901～1904・1960～1966 竪穴住居跡) : 8世紀中頃】**

第56次調査西地区で検出したSI1901～1904では、土器の出土量はさほど多くないが、いずれも土師器では非ロクロ調整のものだけが出土している。このなかで坏には国分寺下層式の範疇に入ると見られる体部外面に段のあるものがあり、8世紀中頃に位置付けた(『宮城県多賀城跡調査研究所年報1989』)。今回の調査で検出したSI1960～1966も土器の出土点数は少ないが、床面や堆積層から出土した土師器はいずれも非ロクロ調整のものである。したがって、SI1960～1966についても8世紀中頃と考えておきたい。

**【B期 (SB1881～1883 掘立式建物跡) : 8世紀後半頃】**

SB1881がA期のSI1904を埋め戻した後に建てられた最も古い建物跡でA期の年代とさほど隔たっているとは考えにくいこと、SB1881の柱穴からロクロ調整の土師器が出土していないが、柱抜取穴から少量のロクロ調整の土師器が出土していることから、B期の年代を8世紀後半頃と推定した(『宮城県多賀城跡調査研究所年報1989』)。

**【C期 (SB1884・1885・1897・1898・1968～1972 掘立式建物跡) : 9世紀前半頃】**

第56次調査西地区で検出したC期のSB1884・1885・1897・1898からはほとんど遺物が出土しなかったため、第56次調査ではB期とD期の年代的な位置付けからC期の年代を9世紀初頭頃と推定した(『宮城県多賀城跡調査研究所年報1989』)。今回の調査で検出したC期の建物跡のうち、SB1898・1969・1971・1972の柱穴から出土した須恵器の坏は、底部が回転ヘラ削り調整ないしヘラ切り無調整のもので、底部が回転糸切り無調整のものは認められない。また、SB1898・1969・1971の柱穴から出土した土師器の甕にはロクロ調整のものがあり、SB1898の柱穴からは底部と体部下端を回転ヘラ削り調整した内黒土師器坏も出土している。したがって、C期の年代的な位置付けは9世紀前半頃と推定され、後述するようにD期・E期も9世紀前半頃と考えられることから、やはり9世紀初頭頃に位置付けられる可能性が高い。

#### 【D 期 (SB1886・1887・1973 掘立式建物跡) : 9 世紀前半頃】

SB1886B の柱穴からは底部がヘラ切り無調整の須恵器坏、ロクロ調整の甕が出土し、その抜取穴からは底部が回転糸切り無調整の須恵器坏、政庁第Ⅳ期の歯車文軒丸瓦 427 が出土した。このうち、政庁第Ⅳ期の歯車文軒丸瓦 427(『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1989』第 28 図 12)については、出土した抜取穴上面にこれよりも新しい土壌があり、混入した可能性が高いと判断した。また、SB1887 の柱穴からは底部が回転ヘラ削り調整・ヘラ切り無調整の須恵器坏、ロクロ調整の土師器甕、底部と体部下端を回転ヘラ削り調整した内黒土師器坏が出土していることから、9 世紀前半頃と推定される。SB1973 は 9 世紀前半頃と推定される SE1987 井戸跡よりも古いこと、ロクロ調整の内黒土師器坏が出土していることから、9 世紀前半頃と推定される。したがって、D 期は 9 世紀前半頃と考えられる。

#### 【E 期 (SB1888～1892・1974～1977 掘立式建物跡) : 9 世紀前半～中頃】

いずれの建物も柱穴・抜取穴に第 2 B 層・第 4 層起源の黒褐色土を含まない。SB1974・1975・1977 は第 4 層よりも古く(Ⅱ-1 群)、第 4 層との新旧関係が不明の SB1888～1892・1976(Ⅱ-3 群)も第 4 層よりも古い可能性が高い。次の F 期が第 4 層よりも新しいことから、9 世紀前半～中頃と考えられる。

なお、SB1975 の柱穴からは底部がヘラ切り無調整の須恵器坏、回転ヘラ削り調整の内黒土師器坏、底部と体部下端がヘラケズリされた内黒坑、政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB 類などが出土しており、9 世紀前半頃と考えられる。ただし、SB1888・1892A の柱穴からは底部が回転糸切り無調整の内黒土師器坏・須恵器坏が出土し、これらも第 4 層よりも古いと推定されることから、9 世紀中頃になる可能性もある。

#### 【F 期 (SB1893～1896・1978 掘立式建物跡) : 9 世紀第 4 四半期を中心とする頃】

SB1893～1896 は第 4 層上面で検出され、柱穴の埋土に第 4 層起源の黒褐色土を含むこと、第 4 層が貞観 11(869)年の陸奥国大地震で大畑地区の建物群が倒壊した頃以降に形成されたと考えられることから、F 期は 9 世紀第 4 四半期を中心とする頃と考えられる。

なお、SB1893～1896 の柱穴・抜取穴からは、底部がヘラ切り無調整・手持ちヘラ削り調整・回転ヘラ削り調整の須恵器坏、回転糸切り無調整の内黒土師器坏など 9 世紀前半～後半頃の土器が出土している。

#### 【G 期 (SB1979・1980 掘立式建物跡) : 9 世紀第 4 四半期頃～10 世紀前半頃】

SB1979・1980 よりも古い SD2044 から出土した漆紙文書が天長 6(829)年以降のものであることから、SB1979・1980 は 829 年よりも古くはならず、反故にされてから漆容器のフタ紙に転用された後、廃棄されるまでの時間幅を考慮すれば廃棄年代は 9 世紀後半頃で

ある可能性が高い。SB1979の柱穴からは政庁第Ⅲ期(780～869年)の平瓦ⅡC類が1点出土している。SB1980の柱穴からは、底部がヘラ切り無調整・回転糸切り無調整の須恵器坏、回転ヘラ削り調整・回転糸切り無調整の内黒土師器坏が出土している。また、SB1980の柱痕跡からは底部が回転糸切り無調整の内黒土師器坏、政庁第Ⅳ期(869年～10世紀前半頃)の平瓦ⅡC類が出土している。また、SB1980の抜取穴からは須恵系土器の坏・高台坏・鉢、底部が回転糸切り無調整の須恵器坏・内黒土師器坏などが出土している。したがって、F期が9世紀第4四半期を中心とする頃と考えられることも考慮すると、G期は9世紀第4四半期頃～10世紀前半頃に位置付けられる。

#### 【H期(SB1899・1900・1981・1982掘立式建物跡)：10世紀前半頃】

H期の建物群は、G期以前の建物群と異なり、柱穴が円形ないし楕円形で小さい。柱穴・抜取穴の埋土には黒褐色土が含まれる。基本層序の黒褐色土には第4層と第2B層がある。須恵系土器を含むのは第2B層であり、この時期の建物跡の柱穴などから須恵系土器が出土していることから、この黒褐色土は第2B層起源で、これらの建物は本来は第2B層上面を掘り込み面としていたと考えられる。

SB1900の柱穴・抜取穴・柱痕跡、SB1981柱穴、SB1982柱穴からは須恵系土器の坏類が多く出土している。また、SB1900は須恵系土器の甕・坏を埋設したSX1906土器埋設遺構よりも古い。また、SB1898は埋土上部に第3層の灰白色火山灰を含むSE1909井戸跡よりも新しい。したがって、H期は10世紀前半頃に年代的に位置付けられる。

なお、SB1899は方向がSB1900・1981・1982と大きく異なり、SB1981と近接しすぎているため、これらとは同時に存在せず、H期がさらに細分される可能性が高いことを前述した。SB1899抜取穴からは須恵系土器でもより後出と考えられる底部のやや厚い小皿も出土していること、新旧関係が灰白色火山灰よりも新しいことから、SB1899はH期の中でもより後出の段階に位置付けられる可能性が高いと考えられる。

#### 【I期(SD2042・2048・2049・2050溝)：12世紀後半頃～13世紀頃】

SD2042からは少量の中世陶器・灰釉陶器・緑釉陶器・須恵器・土師器と比較的多くの瓦が出土している。中世陶器には12世紀末～13世紀初めと推定される渥美系かと思われる甕の体部破片がある。SD2048はSX2003石敷遺構の上を覆う自然堆積層を掘り込み面としており、この自然堆積層からもかわらけ、須恵系土器などが出土している。SD2049からはかわらけ、青磁、中世陶器、須恵系土器が含まれる。SD2042・2048・2049よりも新しいSD2050の各堆積層からは多量の遺物が出土したが、この中で最も時期的に新しく、溝の廃絶年代を示すと考えられる遺物にはかわらけ・中世陶器がある。かわらけには手捏ねの小皿とロクロ調整で底部が回転糸切り無調整の小皿、ロクロ調整で底部が回転糸切り

無調整の柱状高台の付くものがあり、色調は褐色で胎土に砂粒を多く含む。中世陶器には外面に押印があり、押印の特徴と胎土・色調・焼成から見て12世紀第4四半期の常滑製品と考えられる甕の体部破片、地元製品かと思われる片口播鉢の片口部破片と甕の体部破片がある。したがって、I期は12世紀後半頃～13世紀頃に位置付けられる。

#### (5) 主な井戸跡・土器埋設遺構・土壌・溝などの遺構期への編入

遺構期の再編で位置付けた遺構以外の主な遺構について、それらから出土した遺物、E期～F期間に形成された第4層との新旧関係、他の遺構との重複関係、堆積土などを検討し、(4)で再編した遺構期にこれらの各遺構を位置付ける作業を行った結果を以下に述べる。

#### 1. C期～E期(9世紀前半頃)の遺構

SX2000 土器溜め、SX1995 土器埋設遺構、SK2021 土壌がC期、SX1994 土器埋設遺構がD期、SE1988 井戸跡がC期～D期、SE1989 井戸跡がD期～E期、SE1987 井戸跡、SK2005～2011・2035・2036 土壌、SD2041 溝がE期の遺構と考えられる。

- ① SX2000 土器溜め、SK2021 土壌は第4層との新旧関係が不明で堆積土に黒褐色土を含まないこと(Ⅱ-3群)から、E期以前に位置付けられる。SX2000 土器溜めよりも古いSK2021からは、底部を糸切りして高台部を付けた後、ロクロナデした須恵器高台坏、ロクロ調整の土師器甕などが出土している。また、SX2000 土器溜めから出土した須恵器坏には底部がヘラ切り無調整、底部糸切り後に底部周縁を手持ちヘラ削り調整したものなどがある。したがって、両者は9世紀前半でも比較的古い頃と考えられ、C期の遺構と考えられる。
- ② SX1995 土器埋設遺構は堆積土に黒褐色土を含まず、第4層よりも古いこと(Ⅱ-1群)、C期のSB1969よりも新しいことから、堆積土・重複関係から見ればC期～E期に位置付けられる。出土した須恵器双耳坏は伊治城跡SI173 竪穴住居跡出土の須恵器双耳坏に類似しており、この竪穴住居跡から出土した土器群は8世紀末～9世紀初頭に位置付けられている(註18)。したがって、SX1995 土器埋設遺構はC期に位置付けられる可能性が高い。
- ③ SX1994 土器埋設遺構は堆積土に黒褐色土を含まず、第4層よりも古いこと(Ⅱ-1群)からE期以前で、さらにD期のSB1887に伴う地鎮遺構と考えられることからD期に位置付けられる。
- ④ SE1988 井戸跡は堆積土に黒褐色土を含まず、A期のSI1962・1963よりも新しく、SE1989 井戸跡、SK2013、第4層よりも古い。また、SE1989は堆積土に黒褐色土を含まず、A期のSI1962・1963、SE1988よりも新しく、SK2013、第4層よりも

古い。したがって、新旧関係から見れば SE1988・1989 は A 期～E 期に位置付けられる。SE1988 の出土遺物には底部がヘラ切り無調整・回転ヘラ削り調整の須恵器坏、ロクロ調整の内黒土師器坏・土師器甕、政庁第 I 期の軒平瓦 511C、政庁第 II 期の平瓦 II B 類、政庁第 III 期の平瓦 II B 類 a3 タイプなどがあり、SE1989 の出土遺物には底部が回転糸切り無調整の須恵器坏・内黒土師器坏は少なく、底部がヘラ切り無調整ないし回転ヘラ削り調整の須恵器坏・内黒土師器坏が多いことから、それぞれ 9 世紀前半頃と考えられる。また、SE1989 は SE1988 を人為的に埋め戻して掘り直した井戸であり、これも人為的に埋め戻されている。両者の出土遺物はこの埋め戻した土層から出土しており、井戸廃絶時の年代を示す。したがって、9 世紀前半頃の中でも井戸に新旧 2 時期の変遷があり、SE1988 は C 期～D 期、SE1989 は D 期～F 期の遺構と考えられる。

- ⑤ SE1987 井戸跡とこれよりも古い SK2005 土壌は、堆積土に黒褐色土を含まず、第 4 層よりも古いこと(II-1 群)から、E 期以前である。SE1987 からは底部が回転ヘラ削り調整されて底径が大きい須恵器坏・内黒土師器坏が多く出土していることから、9 世紀前半頃と考えられる。また、SK2005 は D 期の SB1973 よりも新しい。SB1973 建物は SB1887 に建て替えられており、SE1987 とは重複しないが、これよりも古いと考えられる。したがって、SE1987、SK2005 は E 期の遺構と考えられる。
- ⑥ SD2041 は堆積土に黒褐色土を含まず、E 期～F 期の間に形成された第 4 層よりも古いこと(II-1 群)、C 期の SB1898・1969、E 期の SB1977 よりも新しいこと、新しい溝からの混入と考えられる須恵系土器などを除けば、底部がヘラ切り無調整の須恵器坏など 9 世紀前半頃の土器が主に出土していることから、E 期に位置付けられる。
- ⑦ SK2006～2011・2035・2036 は、(a)堆積土に黒褐色土を含まず、E 期～F 期の間に形成された第 4 層に覆われること(II-1 群)、いずれも場所が近接し、人為的に埋め戻されており、ほぼ同時期に掘られて埋め戻された一連の土壌の可能性のあること、(c)SK2006～2008・2035・2036 が E 期に位置付けられる SD2041 よりも新しいこと、(d)出土遺物では回転ヘラ削り調整・ヘラ切り無調整の須恵器坏・内黒土師器坏が多く、政庁第 IV 期の平瓦 II C 類を含まないことから、9 世紀前半頃と考えられ、E 期に位置付けられる。

## 2. F 期(9 世紀第 4 四半期を中心とする頃)・G 期(9 世紀第 4 四半期頃～10 世紀前半頃)に相当すると考えられる 9 世紀後半頃の遺構

SE1909 井戸跡、SX1997・1998 土器埋設遺構、SK2018・2034 土壌、SX2002 集積遺構が F 期・G 期、SK2019 土壌、SD2044・2052・2053 溝が G 期の遺構と考えられる。

- ① 第56次調査西地区の南端で検出したSE1909は、堆積土の最上層に黒褐色土を含み、H期のSB1899、10世紀前半頃に降灰した第3層の灰白色火山灰よりも古い(I-2群)。また、井戸の据方の埋土と井戸内の堆積層の出土遺物には、それぞれ回転糸切り無調整の須恵器坏・内黒土師器坏が含まれ、構築・廃絶年代は9世紀後半頃と考えられる。したがって、新旧関係と出土遺物から見て、F期・G期に位置付けられる。
- ② SX1997 土器埋設遺構は第4層との新旧関係は不明だが埋土に黒褐色土を含み(I-3群)、D期のSB1887よりも新しい。また、D期のSB1973、H期のSB1981の内部に位置してこれらとも重複するが、直接の新旧関係はない。D期のSB1973はD期のSB1887よりも古いので、SX1997土器埋設遺構がSB1973よりも新しいことは確実である。出土遺物には底部が回転糸切り無調整と思われる内黒土師器坏があり、9世紀後半頃と考えられることから、埋土と出土遺物から見てF期・G期に位置付けられる。
- ③ SX1998土器埋設遺構はD期のSB1973よりも新しい。また、H期のSB1981の内部に位置して重複するが直接の新旧関係はない。第4層との新旧関係は不明で埋土に黒褐色土を含まない(II-3群)が、出土遺物には底部が回転糸切り無調整で底径が小さくてやや深めの内黒土師器坏があり、9世紀後半頃と考えられることから、F期・G期と考えたい。
- ④ SK2018はH期のSB1982、SD2051よりも古い。また、第4層との新旧関係は不明で埋土に黒褐色土を含まない(II-3群)が、出土遺物には政庁第IV期の平瓦II C類と回転糸切り無調整の須恵器坏・内黒土師器坏が含まれる。したがって、9世紀後半頃でH期以前と考えられることから、F期・G期と考えたい。
- ⑤ SK2019は第4層との新旧関係が不明で埋土に黒褐色土を含まない(II-3群)が、A期のSI1961、C期のSB1972、G期のSD2044よりも新しく、I期のSD2050よりも古いので、G期～I期に位置付けられる。出土遺物には底部が回転糸切り無調整の内黒土師器坏など9世紀後半代の土器が出土していることから、G期と考えたい。
- ⑥ SK2034は第4層との新旧関係が不明で埋土に黒褐色土を含み(I-3群)、E期のSB1974よりも新しく、I期のSD2050よりも古いことから、F期～I期に位置付けられる。出土遺物には須恵系土器を含まないので、F期・G期頃と考えたい。
- ⑦ SD2044は第4層との新旧関係は不明で埋土に黒褐色土を含まない(II-3群)。A期のSI1961・SI1964、C期のSB1972よりも新しく、G期のSB1979・1980、H期のSX1999土器埋設遺構よりも古いことから、C期～G期に位置付けられる。出土遺物に回転糸切り無調整の内黒土師器坏のほか、須恵系土器も少量あること、出土し

た漆紙文書は内容から見て 829 年よりも新しいことから、G 期と考えたい。

- ⑧ SD2052・2053 は A 期の SI1965 よりも新しく、G 期の SB1979・1980 よりも古い。これらの溝からは須恵系土器が微量出土している。したがって、第 2 B 層・第 4 層との新旧関係は不明で埋土に黒褐色土を含まない(Ⅱ - 3 群)が、G 期と考えたい。
- ⑨ SX2002 集積遺構は C 期の SB1969 よりも新しい。出土遺物には底部が回転糸切り無調整の須恵器坏、ロクロ調整の内黒土師器坏・甕があり、須恵系土器は含まれない。したがって、9 世紀後半頃と考えられ、F 期・G 期に位置付けられる。

### 3. H 期 (10 世紀前半頃) の遺構

SX1905・1996・1999 土器埋設遺構、SE1991 井戸跡、SK2004・2017 土壇、SD2045・2047 溝が H 期の遺構と考えられる。

- ① 第 56 次調査で検出した SX1905 と第 58 次調査で検出した SX1996 は、完形の須恵系土器の甕を正立状態で埋設し、中に安山岩の小礫を埋納して、その口縁部を坏で蓋した土器埋設遺構で、地鎮に関わるものと推定される。また、第 58 次調査で検出した SX1999 もこれらと同様の土器埋設遺構の可能性が高い。SX1905 は E 期の SB1892 よりも新しい。SX1996 は C 期の SB1970 よりも新しい。SX1999 は G 期の SD2044 よりも新しい。なお、SX1999 は G 期の SB1980 の内部にあるが、直接の新旧関係は不明である。これらはいずれも第 2 B 層・第 4 層との新旧関係は不明だが堆積土に黒褐色土を含むこと(Ⅰ - 3 群)、須恵系土器を埋設することから、H 期と考えられる。
- ② SE1991、SK2004 は I 期の SD2042・2050 よりも古く、SE1991 が SK2004 より新しい。第 2 B 層・第 4 層との新旧関係は不明だが堆積土に黒褐色土を含む(Ⅰ - 3 群)。SK2004 からは須恵系土器の坏・高台坏、政庁第Ⅳ期かと思われる平瓦などが出土している。また、SE1991 井戸内の堆積層から須恵系土器坏、政庁第Ⅳ期の平瓦など、据方埋土から須恵系土器坏などが少量出土している。したがって、SE1991 と SK2004 は 10 世紀前半頃と考えられ、H 期に位置付けられる。
- ③ SK2017 は第 2 B 層・第 4 層との新旧関係が不明で埋土に黒褐色土を含まない(Ⅱ - 3 群)が、出土遺物に須恵系土器の坏があり、H 期の SB1982 よりも古いことから、10 世紀前半頃と考えられ、H 期に位置付けられる。
- ④ SD2045 は第 2 B 層・第 4 層との新旧関係が不明で埋土に黒褐色土を含まない(Ⅱ - 3 群)が、A 期の SI1960・1961、C 期の SB1971、F 期の SB1978、G 期の SD2044 よりも新しく、SK2019、I 期の SD2048~2050 よりも古いこと、出土遺物に 10 世紀前半頃と考えられる須恵系土器の坏・高台坏を含むことから、H 期に位置付けられる。
- ⑤ SD2047 は SB1986 よりも新しく、I 期の SD2048 よりも古いこと、出土遺物に 10

世紀前半頃と考えられる須恵系土器を含むことから、H 期に位置付けられる。

#### 4. I 期（12 世紀～13 世紀頃）の遺構

SK2012・2013 は出土遺物にかかわりを含みことから I 期と考えられ、堆積土に黒褐色土を含むことから I-1 期の遺構と考えられる。

① SK2012 は堆積土に黒褐色土を含み、第 4 層よりも新しいこと(I-1 群)、A 期の SI1962 よりも新しいこと、出土遺物に 12 世紀前半～13 世紀頃と推定される手捏ねとロクロ調整のかかわりを含みことから、I-1 期に位置付けられる。

② SK2013 は第 4 層よりも新しく、堆積土に黒褐色土を含む(I-1 群)。また、A 期の SI1962、C～D 期の SE1988、D 期～E 期の SE1989 よりも新しい。出土遺物には 12 世紀前半～13 世紀頃と推定されるロクロ調整のかかわり小皿を含むことから、I-1 期に位置付けられる。

#### 5. その他、位置付けが不明の遺構

① SB1986 は H 期の SD2047、I-1 期の SD2048 よりも古い。出土遺物はなく、北側柱列を検出したのみであることから、H 期以前ということしかわからない。

② SX2001 工房は C 期の SB1971、F 期の SB1978 の内部にあるが、直接の新旧関係はない。出土遺物は少なく、須恵器の坏・甕の体部破片が各 1 点と政庁第 II 期の熨斗瓦が 1 点出土しているにすぎない。I 期の SD2049 よりも古く、第 2 B 層・第 4 層との新旧関係が不明で堆積土に黒褐色土を含まないこと(II-3 群)から、E 期以前と考えておきたい。

#### (6) 各遺構期の特徴

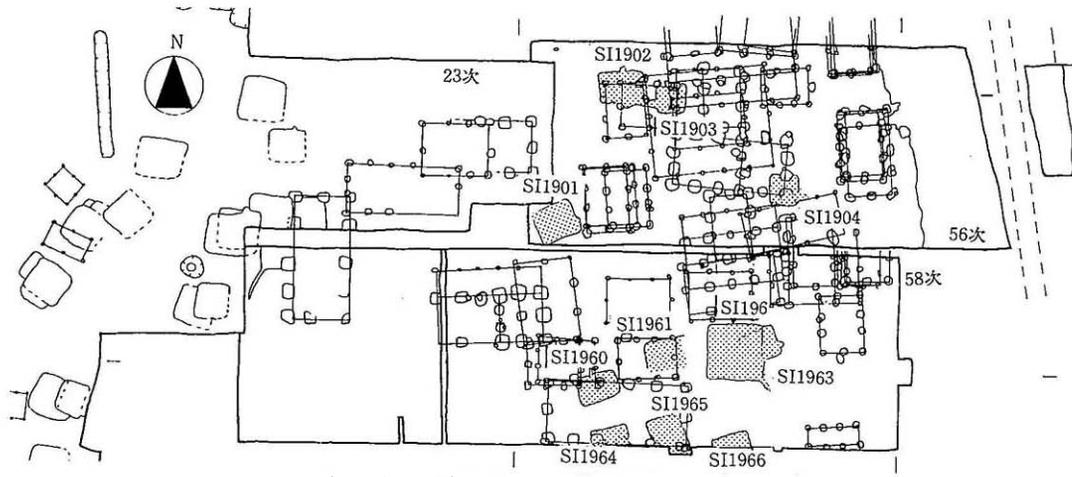
以上の検討を通じて明らかとなった各遺構期の特徴をまとめると、表 7 のようになり、各遺構期における主要遺構の配置関係は第 63～65 図のようになる。大畑地区の各遺構期と政庁の各遺構期・各小期との対応関係は、現在のところ不明確であるが、前述した各遺構期の年代的位置付けから見て、A 期・B 期が政庁第 II 期、C 期～E 期が政庁第 III 期、F 期～H 期が政庁第 IV 期、I 期が多賀城の陸奥団府としての機能が完全に終息した後の中世初頭頃にそれぞれ位置付けられると考えられる。

ところで、第 54 次調査の結果、宝亀 11(780)年の伊治公皆麻呂の乱によって外郭東門・東辺築地が焼失し、暫定的に東門・東辺築地を修復した後、政庁第 III-2 期の間に外郭東門・東辺築地を西側へ移動させて再建したことが明らかにされ、A 期～E 期の 5 期の遺構期が設定されるとともに政庁の遺構期と対応関係が明らかにされている(『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1988』)。

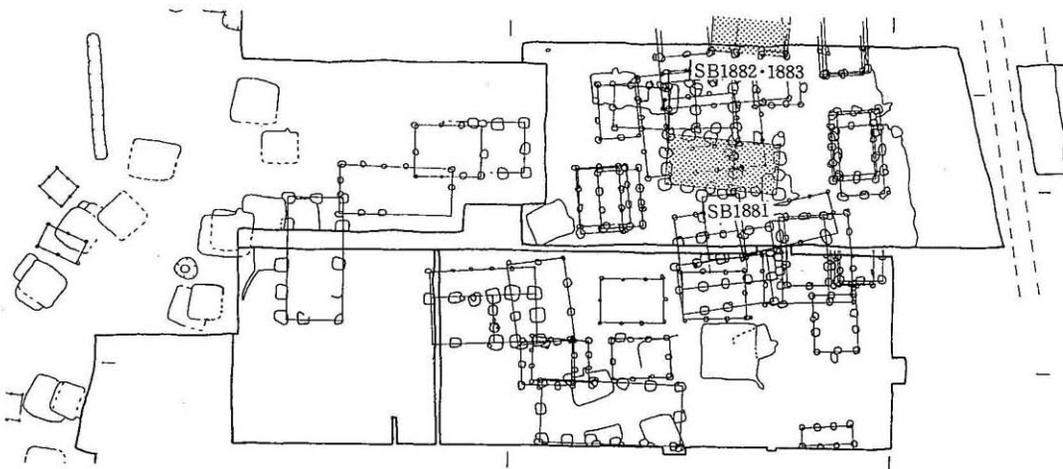
本調査で明らかにした遺構期と外郭東門・東辺築地の遺構期との対応関係、特に外郭東

遺構期	主な遺構		特徴	年代
A 期	SI1901～1904 竪穴住居跡 SI1960～1966 竪穴住居跡	SB707 門 SB711 建物 SB807 建物	竪穴住居は廃絶時にカマドが取り払われているものが多く、埋め戻されている。竪穴住居と同時期の建物の存在は明らかではない。	8 世紀 中頃
B 期	SB1881～1883 掘立式建物跡	SB1930 建物	建物の方向は東西発掘基準線に対して東で南へ偏する。	8 世紀 後半頃
C 期	SB1884・1885 SB1897・1898 SB1968～1972 掘立式建物跡	SX2000 土器溜め SX1995 土器埋設 遺構 SK2021 土壇	伊治公皆麻呂の乱(780 年)後の遺構期。建物の棟数が増え、整備が進み始めたことが窺える。建物の方向は発掘東西基準線に対していずれも北が西に若干偏する。	9 世紀 前半頃
D 期	SB1886A・B SB1887 SB1973 掘立式建物跡	SX1994 土器埋設 (地鎮)遺構	遅くともこの頃までに東門・築地は西側に移動。建物跡の方向は発掘東西基準線に対していずれも東が北に約 8～10° 前後偏する。SB1886 は南に、SB1887 は北に廂を持ち、相対するように西妻の柱筋を揃えて南北に並ぶ。SB1973→SB1887 に建て替えの際に地鎮祭祀 SX1994 が行われた。建物の南に井戸 1 基を伴う。	
E 期	SB1888～1892 SB1974～1977 掘立式建物跡	SE1987 井戸 SK2005～2011・ 2035・2036 土壇 SD2041 溝	SE1989 井戸 建物跡の方向は発掘東西基準線に対していずれも東が北に若干偏する。SB1890 と SB1891 は柱筋を揃えて南北に並ぶ。SB1976 は北廂を持ち、間仕切りのある床張りの建物で、この時期の中心的建物。建物の近くに井戸 2 基を伴う。第 58 次調査地区北東部に土壇群を構築。その後、F 期との間に黒褐色土の第 4 層が堆積。	
F 期	SB1893～1896 SB1978 掘立式建物跡	SE1909 井戸 SX1997 土器埋設 遺構 SX1998 土器埋設 遺構	貞観 11(869)年の陸奥国大地震以後の遺構期。建物の方向は発掘東西基準線に対していずれも北が西に若干偏し、柱穴の埋土に第 4 層起源の黒褐色土を含む。建物の近くに井戸 1 基を伴う。第 58 次調査地区北西部の北・西側には竪穴住居群が広がり、その東側の建物群と空間配置を異にしている。	9 世紀 後半頃
G 期	SB1979・1980 掘立式建物跡	SK2019 土壇 SD2044 溝 SD2052 溝 SD2053 溝	SK2018 土壇 SK2034 土壇 SX2002 集積遺構 柱穴の形状は B 期～F 期と同様に方形。柱穴の埋土に黒褐色土を含む。建物の方向は発掘東西基準線に対して西が北に偏する。	10 世紀 前半頃
H 期	SB1899・1900 SB1981・1982 掘立式建物跡	SX1905・1996・1999 土器埋設(地鎮) 遺構 SE1991 井戸 SK2004・2013・2017 土壇 SD2045・2047・2051 溝	柱穴の形状は B 期～F 期と異なり、円形・不整形円形。柱穴埋土に黒褐色土を含む。SB1981・1982 は柱筋をほぼ揃えて東西に並ぶ。SB1900 は四面廂付きでこの時期の中心的建物。地鎮遺構が 3ヶ所あり、広範囲を地鎮。	
I 期	SD2042・2048・ 2049 溝 SD2050 溝	SK2012 土壇	一連の東西・南北溝 SD2050 で方形の範囲を区画する I-2 期とそれ以前の I-1 期に細分される。黒褐色土の埋土は I-1 期の遺構に含まれ、I-2 期には含まれない。	12 世紀 後半～ 13 世紀 頃

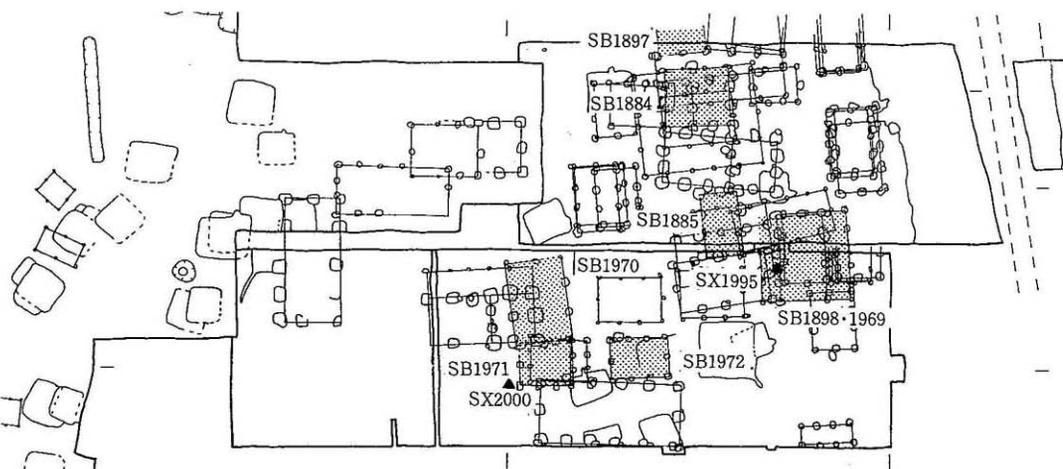
表 7 大畑地区の遺構期



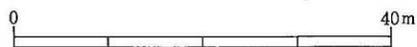
A 期(8 世紀中頃) : SI1901~1904・1960~1966



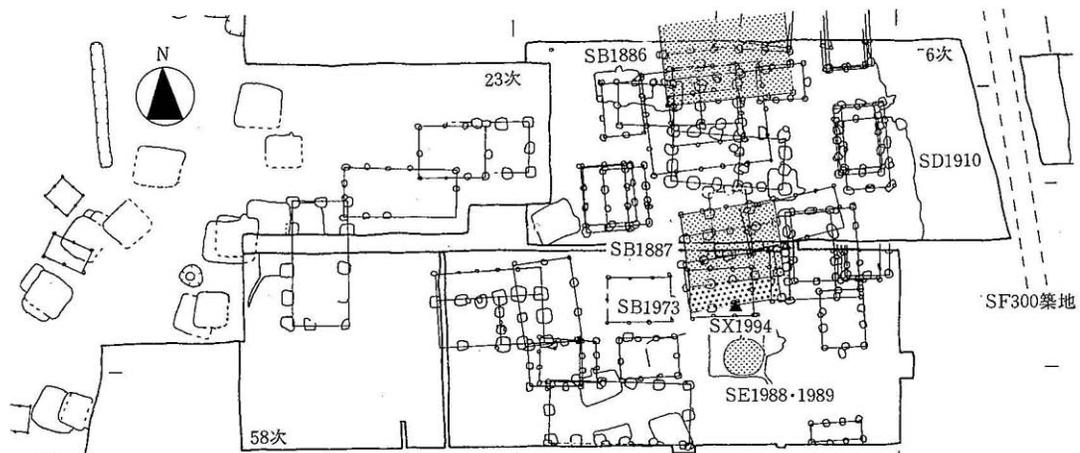
B 期(8 世紀後半頃) : SB1881~1883



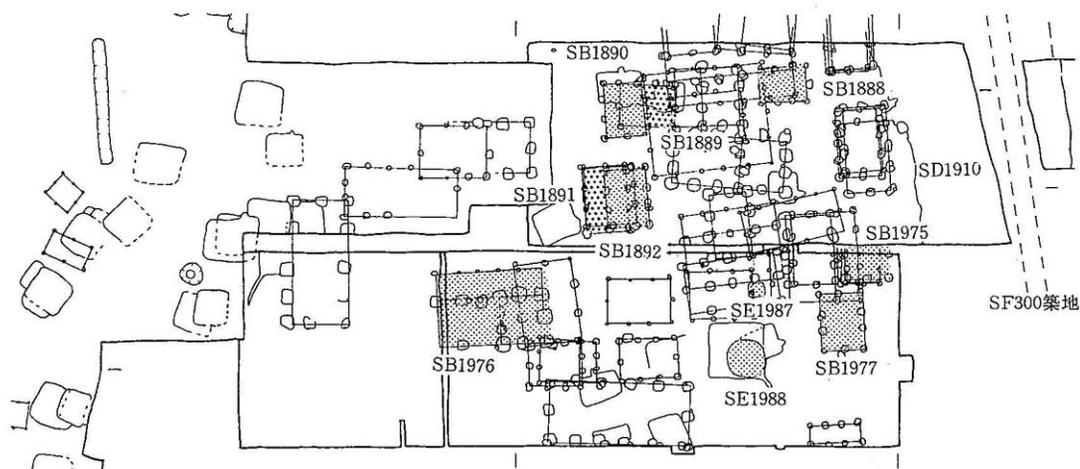
C 期(9 世紀前半頃) : SB1884・1885・1897・1898・1968~1972、SX1995・2000



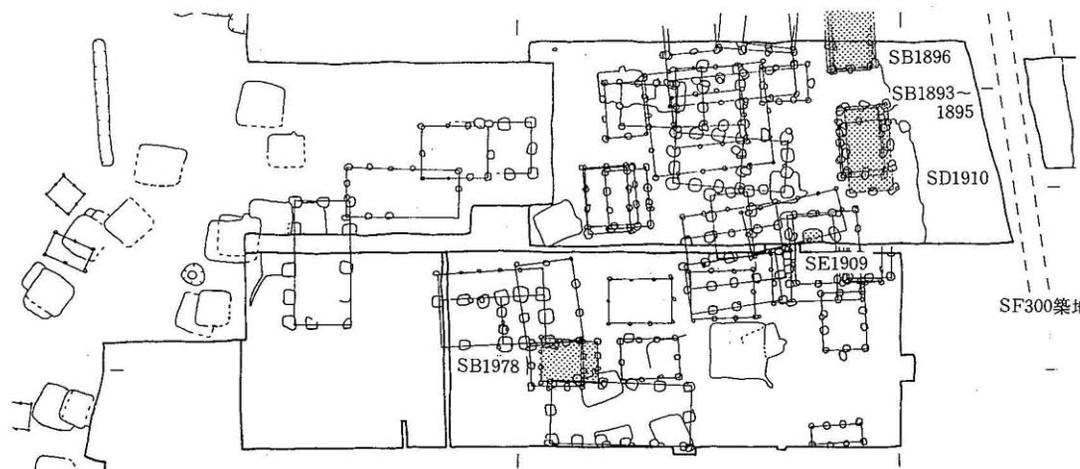
第 63 図 第 56・58 次調査地区の遺構期(1)



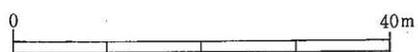
D期(9世紀前半頃) : SB1886・1887・1973、SX1994、SE1988・1989



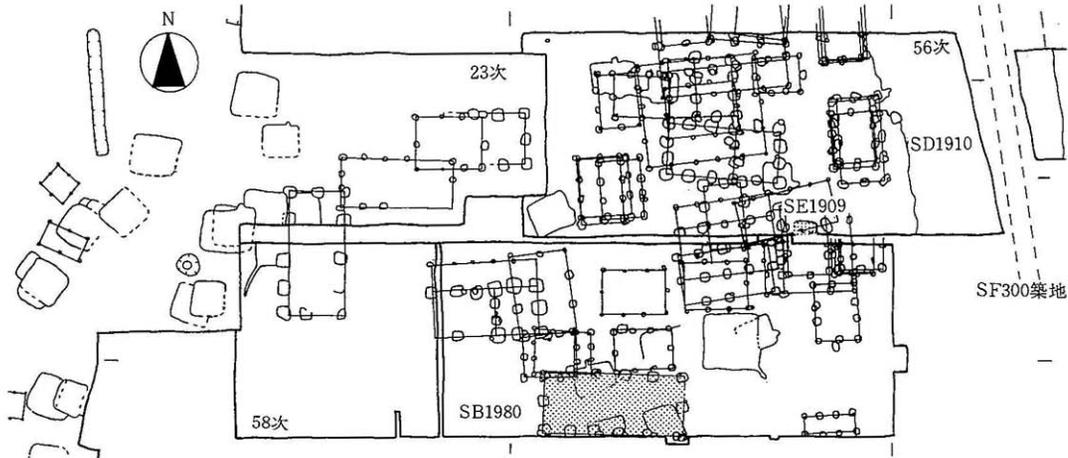
E期(9世紀前半頃) : SB1888~1892・1974~1977、SE1987~1989



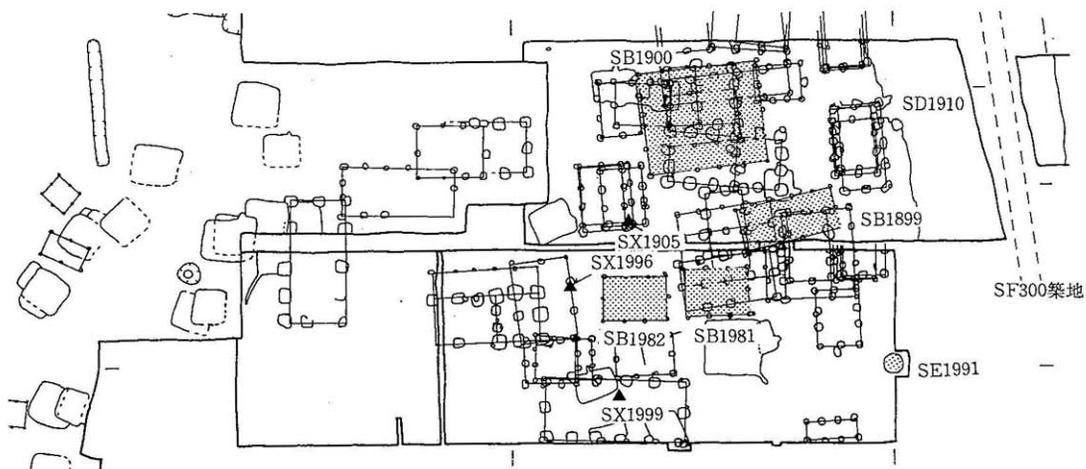
F期(9世紀第4四半期を中心とする頃) : SB1893~1896・1978、SE1909



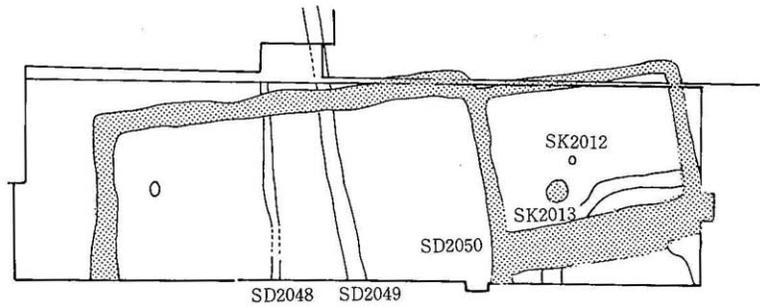
第64図 第56・58次調査地区の遺構期(2)



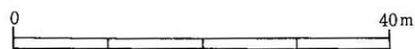
G 期(9 世紀第 4 四半期～10 世紀前半頃) : SB1979・1980、SE1909



H 期(10 世紀前半頃) : SB1899・1900・1981・1982、SE1991、SX1996



I 期(12 世紀～13 世紀頃) : SD2048・2049・2050、SK2012・2013



第 65 図 第 56・58 次調査地区の遺構期(3)

門・東辺築地を西側へ移動して再建した時期との対応関係は不確実であるが、B期が9世紀後半頃、C期～E期が9世紀前半頃に位置付けられると考えられることから、遅くともD期には外郭東門・東辺築地を西側に移動して再建した可能性が高いと考えられる。したがって、SB307 外郭東門の南側でSF300 築地の西側に沿った場所(第56次調査西地区・第58次調査地区)は、宝亀11(780)年の伊治公皆麻呂の乱以降(C期以降)に建物が集中し、何度も何度も建て替えられていることから、伊治公皆麻呂の乱を契機に外郭東門・東辺築地を西側に移動して再建し、それとともに建物が集中する官衙ブロックとして整備されてきたことが窺える。

なお、第58次調査地区の北西部に隣接する第23次調査地区では竪穴住居跡が群在している(第66図)。これらの多くは須恵系土器を含まず、底部が回転糸切り無調整の須恵器坏・土師器坏が出土していることから、9世紀後半～10世紀のものと考えられており(『宮城県多賀城跡調査研究所年報1974』)、F期・G期に対応する可能性が高いと考えられる。したがって、貞観11(869)年の陸奥国大地震以後のF期・G期では、SF300 築地の西側に沿って建物があり、さらに西側には竪穴住居跡が群在するというように、大畑地区の官衙ブロックの中でも場所の使われ方に違いがあったことが窺える。

## B. 北西地区

北西地区は昨年度の第56次調査の北西地区を拡張したもので、北へ屈折して曲るSD706の始りの部分を確認した。この東西の部分第23次調査で検出しているSD706の東延長線上に位置していることから、SD706に接続するものと考えられる。

このSD706の性格については、東西部分の方向が平安時代の外郭東門から城内側へ続く道路の方向とほぼ一致するとみられ、外郭東門の手前で北へ屈折して止まることから、道路の南側・東側の可能性が考えられる。

## C. ま と め

今回の第58次調査の成果を整理し、これまで大畑地区を対象にして行われた調査の成果を併せてまとめると以下のようなになる。

- ① 第58次調査地区では、竪穴住居跡6軒、掘立式建物跡20棟、土器埋設遺構6基(このうち3ヶ所は地鎮遺構)、土器溜め1カ所、工房1カ所、井戸跡4基の他、多数の土壇、ピット、溝を検出した。
- ② これまでの調査結果も含めて検討した結果、大畑地区の竪穴住居跡・掘立式建物跡・溝などの主な遺構にはA期～I期の9時期の変遷のあることがわかった。これらは時代



別にみれば、A期・B期が奈良時代、C期～H期が平安時代、I期が中世前半となる。また、政庁の遺構期、東門・築地との対応関係も大掴みではあるがある程度は把握できた。第63～65図には各時期の主要遺構を時期別に示した。

- ③ 奈良時代の遺構は第56次調査西地区で竪穴住居跡3棟と掘立式建物跡3棟、第58次調査地区で竪穴住居跡6棟、第59次調査地区で掘立式建物跡3棟を検出したのみであり、奈良時代には遺構の密度が希薄であることを再確認した。ただし、第56次調査西地区と第58次調査地区の東部では奈良時代の竪穴住居跡が集中する傾向も窺える。
- ④ 第58次調査地区とその北に隣接する第56次調査西地区では、平安時代にSF300築地の内側の東半部に沿って掘立式建物跡が集中し、継続的に建て替えられている。これを区画するような溝や塀などの施設がないことから、この官衙はさらに南に広がり、かなり広大な面積を占めることが予想される。また、本調査地区の西側には竪穴住居群が集中し、丘陵の中でも使われ方に違いがありそうである。なお、平安時代のSF300築地の外側では竪穴住居跡や建物跡は見つかっていない。
- ⑤ 第58次調査地区では、中世と推定される大溝が検出された。この大溝に囲まれた方形の区画内で建物跡の存在の有無については現時点では明らかでないが、多賀城市山王遺跡・新田遺跡などで発見されている中世の屋敷の区画と似ている。
- ⑥ 北西地区では平安時代の外郭東門から城内側へ通ずる道路の南側側溝とみられる溝の曲り部分と始まり部分を検出している。
- ⑦ 特に注目される遺物として、SD2041出土の漆紙文書があり、計帳と豆類の支出に関わる文書などであることがわかった。この他、第58次調査ではまるめて須恵器双耳坏にいたした漆紙1点、漆紙の断片5点が出土し、第56次調査西地区でも漆紙文書1点、漆紙断片が出土している。これらは浅いピットや溝などから出土しており、大畑地区では今後さらに文字資料の増えることが予想された。
- ⑧ SK2006から出土した「曹司」墨書土器は、大畑地区の実務官衙が「曹司」と呼ばれていたことを示している。全国的に見ても実務官衙を「曹司」と呼んだことが明らかになった例は少なく、貴重な出土例となった。どのような「曹司」であったかまでは現時点では明らかではないが、今後、大畑地区の実務官衙の性格を決めるような墨書土器や木簡、漆紙文書などの出土が期待される。

- 註1 第56次調査段階では本建物跡は同位置での建て替えと見てSB1989A・Bとした(『宮城県多賀城跡調査研究所年報1989』)。しかし、今回の調査で建物跡の全体が判明し、規模・構造が異なることが明らかとなった。そこで、第56次調査で報告したSB1898AをSB1898に、SB1898BをSB1969に改称して報告する。
- 註2 SX1996土器埋設遺構は、第56次調査で検出したSX1905土器埋設遺構と土器の埋設方法、土器内への安山岩小礫の埋納状況、須恵系土器の甕・坏の形態が類似しており、性格・時期も同様と考えられる。また、SX1999土器埋設遺構はこれらと同様に、本来は完形の須恵系土器の甕を正立状態で埋設し、その口縁部を坏で蓋した土器埋設遺構であった可能性が高い。甕・坏の形態もSX1905・1996と類似する。SX1996はSX1905の南西約8.8m、SX1999の北北西約13.3mに位置し、SX1999はSX1905の南約18.5mに位置している。これらの土器埋設遺構はほぼ同時期のもので、この付近一帯に対する地鎮遺構と考えられる。
- 註3 SK2005は、①SE1987に隣接し、これよりも古い、②平面形・規模がSE1987と同様であり、底面レベルもSE1987の段掘り開始レベルとほぼ一致する、③一気に埋め戻されていることから、SE1987を掘り上げるために掘られた作業スペースか、掘るために掘られ始めたが、何らかの理由で途中で放棄されたものと考えられる。
- 註4 宮城県教育委員会 1980「明神脇遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』pp. 188～223。
- 註5 奈良国立文化財研究所 1983『平城宮出土墨書土器集成Ⅰ』、奈良国立文化財研究所 1989『平城宮出土墨書土器集成Ⅱ』。
- 註6 清水みき 1986「長岡京の墨書土器」『向日市文化資料館紀要』創刊号pp. 33～51、清水みき 1987「墨書土器の機能について—都城(長岡京)の墨書土器を中心に」『向日市文化資料館紀要』第2号pp. 1～36。
- 註7 神奈川県平塚市教育委員会 1985『四之宮高林寺Ⅱ』。村松一良 1983「筑後国府の調査」『古代文化』35-7 pp. 2～28。へボノ木遺跡については松村論文(1983)以降、筑後国御井郡衙跡と推定されていたが、近年の調査では「寺」の墨書・刻書土器や鉄鉢形土器・香炉・火舎などの宗教的色彩の濃い遺物が出土していることを根拠に、古代寺院跡と見る見解が有力となっているようである(久留米市教育委員会 1989・1990『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書』第8集、第9集)。
- 註8 『国史大辞典』(吉川弘文館)の「曹司」の項を参照。
- 註9 平川南 1989『漆紙文書の研究』p. 15。
- 註10 平川南 1989『漆紙文書の研究』p. 8。
- 註11 現存計帳のうち、本文書のように「今年計帳見定～」とするのは天平5年右京計帳だけで、それ以外はすべて「今年計帳定見～」とするが、意味は同じである。なお、現存計帳については、岸俊男 1973「現存古代籍帳一覧表」『日本古代籍帳の研究』pp. 487～496、鎌田元一 1984「現存計帳一覧」『国史大辞典』第5巻pp. 56～57、杉本一樹 1987「現存古代籍帳一覧」『日本の古代11 ウヂとイエ』pp. 206～210などを参照。
- 註12 天平5年山背国愛宕郡計帳には、「不課口捌人」の下に割註で男女の内訳を記載している例がある(『大日本古文書』一、p. 541)。

- 註 13 同一の計帳歴名でも戸によって統計記載の形式に若干の違いがある場合がある。山背国愛宕郡計帳でも註 12 のような形式の不課口記載は 1 例だけで、他の 18 例(3 形式)はいずれも内訳を改行して記載する形式である。弥永貞三「山背国愛宕郡計帳について」(『日本古代の政治と史料』1988)を参照。
- 註 14 『日本紀略』弘仁 14 年 4 月壬子条、太田亮『姓氏家系大辞典』伴部の項、『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1983』p. 75 の註 5 を参照。
- 註 15 新訂増補国史大系本『延喜式』p. 626。かつて大帳と計帳は別種の文書と考えられてきたが、鎌田元一論文(「計帳制度試論」、『史林』55-5、1972)以来、両者は同一の文書と考えられている。
- 註 16 宮城県多賀城跡調査研究所 1979『多賀城漆紙文書』(宮城県多賀城跡調査研究所資料 I)。
- 註 17 平川南 1989『漆紙文書の研究』p. 13、27。
- 註 18 築館町教育委員会 1991『伊治城跡』 築館町文化財調査報告書第 4 集。

### Ⅲ 第 59 次調査

#### 1. 調査の目的

##### 【調査対象地】(第 1 図)

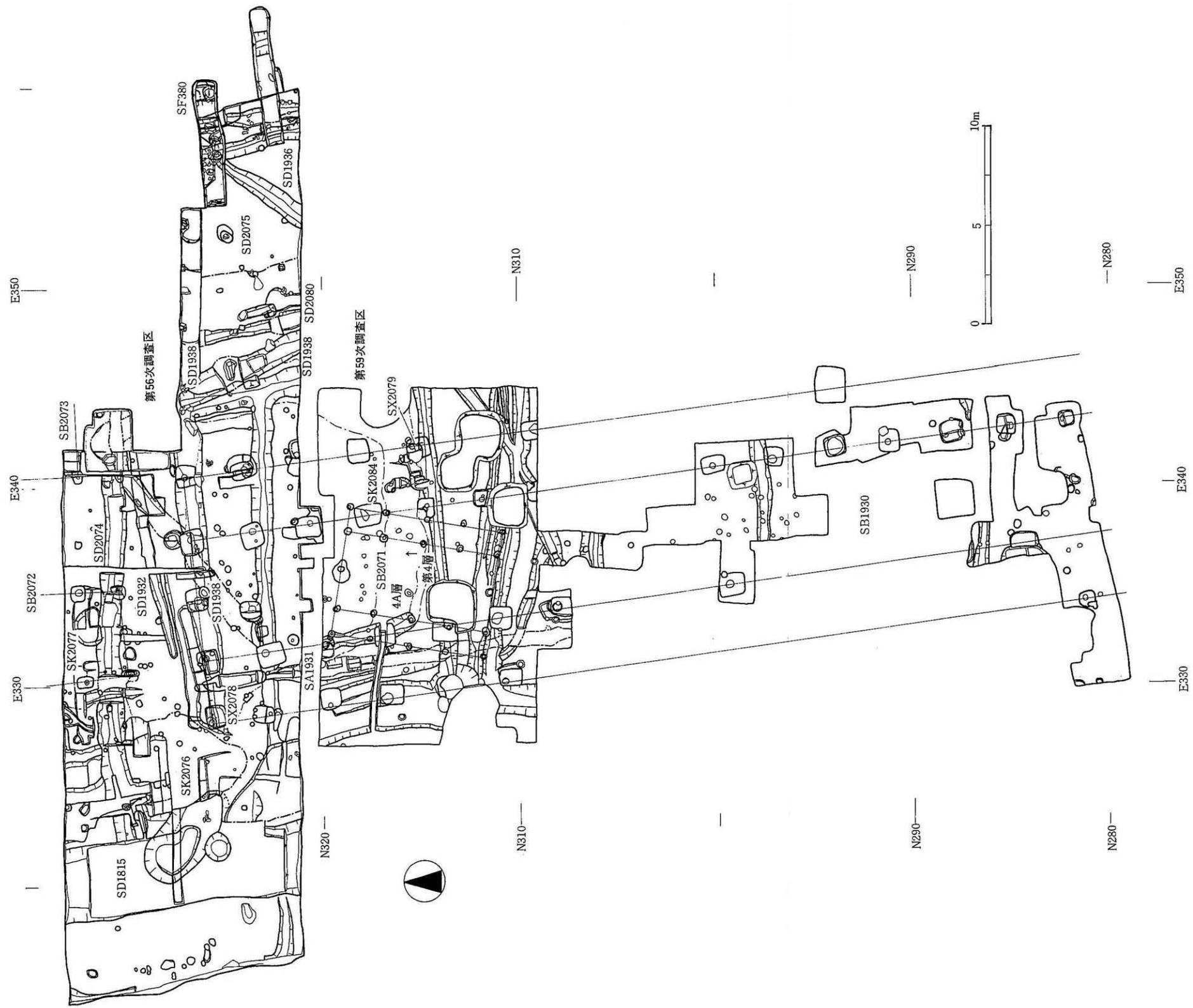
第 59 次調査は多賀城跡の北東部に位置する外郭東門の西南に隣接する通称大畑地区のうち、昨年度の第 56 次調査東地区を一部含めて、その南に隣接する地域を対象に実施したものである。本地区は東側を奈良時代の SF380 外郭東辺築地で、また、西側を平安時代の SF300 外郭東辺築地で画されている。その地形は南に緩やかに傾斜しているが、ほぼ平坦である。

##### 【これまでの調査成果と調査の目的】

大畑地区および外郭東門地区については、これまで第 13・14・23・53・54・56 次調査を実施してきている(第 1 図)。このうち、外郭東門とそれに接続する築地については第 53・54 次調査で 780 年(宝亀 11 年)の伊治公皆麻呂の乱で焼失した奈良時代の外郭東門 SB1762 とこれに取り付く SF380 築地を新たに検出したことにより、それまで創建期からの外郭東門・東辺築地と考えてきた城内に『コ』字状に入り込んだ位置にある SB307 門と SF300 築地は火災にあった先の奈良時代の門と築地を一時的に修復した後に、平安時代初期になってから西に位置を替えて新たに造営されたものであることが判明した。したがって、奈良時代の築地の内側で、平安時代の築地の外側にあたるこの地域には、多賀城ではこれまで必ずしも明らかではなかった奈良時代のみ官衙遺構が存在するものと想定された。そのため、昨年度に第 56 次調査をこの地区を対象に実施したのである。その結果、東西廂付きの南北棟掘立式建物跡 SB1930 の一部を発見し、想定通りこの地区に奈良時代の官衙建物が展開していることが確認されたのである。しかし、調査期間などの関係で建物の全貌を解明するには至らなかった。そこで、本次調査では本建物跡をはじめ、この地区での奈良時代の官衙の展開と変遷を明らかにし、さらに、SF380 築地を一部を断ち割り、その規模と変遷を把握することにした。

#### 2. 調査経過

7 月 27 日に第 56 次調査地区の南端に接して南北 12m、東西 21m の調査地区を設定した(第 67・68 図)。8 月 8 日から 10 日まで表土除去と並行して、第 56 次調査で途中まで検出していた面で清掃を行った。調査区の北半には第 2 層が分布していたが、南半は表土直下が地山であった。第 2 層上面(褐色土)からは数個のピットと溝を検出したただけであったため、



第 67 図 第 56・59 次調査遺構全体図

これらを略測してこの層を除去した。第2層下の状況は調査区北端中央部に第3層とその下層の黄褐色地山ブロックを含む第3A層が部分的に分布し、大部分は更に下層の第4層が現れている状況であった(第67図)。第56次調査で一部検出していたSB1930は第3層に覆われていたが、第3A層から柱穴が掘込まれていた。このことから、第3A層はこの建物を覆う第3層とは関連するものではなく、本建物を造営する際には存在していた盛土整地層と判断された。そのため、この層を第4A層として扱うことにした。8月20日からはSB1930建物跡の南への伸びを樹間を壺掘りして確認する作業に入った。これまでの多賀城内の実務官衙地域では桁行5間ないし6間程度の建物が多かったため、本建物もこの程度の規模と推定していた。しかし、6間目の棟通り下の柱穴がなく、より長大な建物である可能性が強まった。そこで、東入側柱列を南に延長して精査したところ、10間までの柱穴を検出できた。念のため、11間目の東廂の柱穴を精査したところ、ここには柱穴がなかった。この段階で、本建物は桁行が7間から10間のもので、東入側柱筋に一本柱列の塀が取り付くことも考えられた。次いで、南への伸びを確かめたところ、西入側柱列の9、13、14間目、西側柱列で15間目、東入側柱列で11～15間目の柱穴を検出できた(9月14日)。したがって、本建物跡は桁行15間以上の長大な建物跡と考えるのが妥当となった(9月19日)。次いで東入側柱列の13、14、15間目の柱穴を断ち割り、それらの遺存状況を調べた。その結果、いずれの柱穴の深さが10cm以内という遺存状況であった。このような検出状況から、建物跡の南半には後世の大きな削平が及んでいるものと判断された。次いで、調査区北半の第4層上面での遺構検出を行い、SB2071・2073建物跡、SA1931塀跡、SD1937・1938・2074溝、SK2076・2084・2082・2077土壌、SX2078地鎮遺構などを検出した。

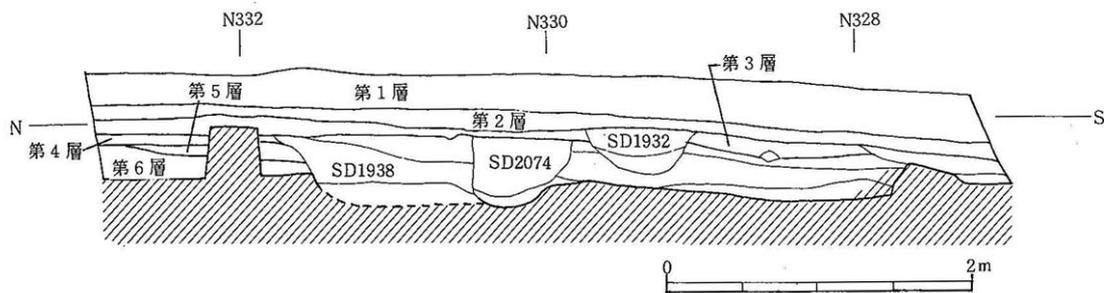
また、SF380築地を部分的に検出して、断ち割ったところ、本築地は基礎整地した上に築成された当初の築地SF380Aの東側を削り、旧築地本体の東を修築してSA380Bを造り替えており、さらに、この築地Bが火災を受けていることがわかった(11月27日)。

遺構の平面図や必要に応じて各遺構の断面図を作成し、写真による記録、補足調査などを行い12月25日に一切の調査を終了した。この間、一応の成果がまとまった11月15日には第58次調査の成果と合せて報道発表、17日には一般を対象に現地説明会を開催して、成果の普及に努めた。調査面積は900㎡である。

### 3. 基本層序 (第 68 図)

- 第 1 層 暗褐色(10YR3/4)土の表土で厚さは 15~20cm である。
- 第 2 層 炭化物、焼土を含む黒褐色(10YR2/1)土で調査区の北半部にみられ、その厚さは南東部で厚く、平均 10~15cm である。
- 第 3 層 明黄橙色(10YR7/8)の地山細粒を含む締まりのない灰色(5 Y/1)土で調査区北半中央部付近に部分的にみられる。厚さ約 10cm 以内である。
- 第 4 A 層 焼土粒・炭化物・黄褐色地山土ブロックを多く含む灰色(10YR4/1)土で、調査区北端で検出した SA1931 東西堀跡の東側に分布する整地層である(註 1)。
- 第 4 層 多量のマンガン粒の付着する硬く締まった灰褐色(10YR4/1)土で調査区の北端東半部に分布している。厚さ約 15cm である。
- 第 5 層 岩盤の小粒を含む黄橙色(10YR7/8)~赤褐色(5 YR4/6)土で地山となっている。
- 第 5 層以下は凝灰岩の岩盤である。

註 1 第 4 A 層については調査の結果、第 4 層の直上に直接のり、SB1930 などの建物などの諸遺構はこれらを切っており、第 4 A 層に覆われる遺構は皆無であった。この第 4 A 層は第 4 層上に人為的に整地した盛土整地層と判断された。これらの遺構は第 3 層によって覆われている。第 56 次調査(年報 1989)では本層を第 3 A 層として扱っていたが、上記のとおり第 4 層との関連が強いため、本報では第 3 A 層を第 4 A 層と改めた。



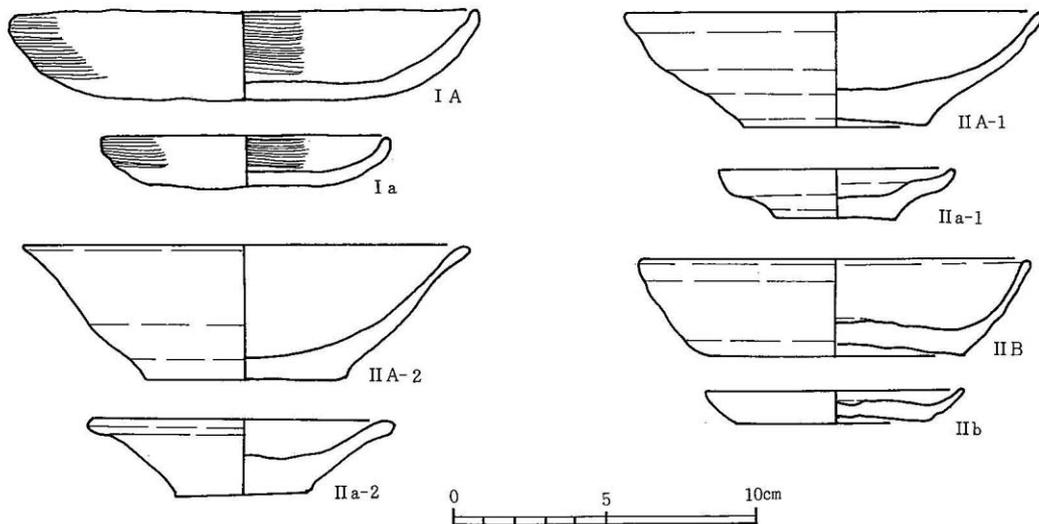
第 68 図 北東隅東壁 (E341.5m 付近) 層序断面図

#### 4. 発見した遺構と遺物

第 59 次調査で発見した遺構には築地跡 2、建物跡 4、材木塀 1、土器埋設遺構 2 のほか、SF300 築地に伴う城外の大溝や多数の溝と土墳などがある。遺物では瓦類、須恵器、土師器、「かわらけ」などがある。瓦類では政庁第Ⅱ期に相当するものがほとんどで、創建期あるいは平安期のものは極めて少ない。

なお、記載にあたっては土師器の内面を黒色処理しているものを内黒、内外面を黒色処理しているものは両黒とする。また、「かわらけ」については成形技法の違いにより、非ロクロ成形のものをⅠ、ロクロ成形のものをⅡとし、口縁部および体部における器形の違いをアルファベットで、同器形の大小については大文字・小文字で表すことにする。これまで宮城県から出土した「かわらけ」の坏とその小型化した皿は成形技法と口縁部の形態から概ね以下のとおり分類できる(第 69 図)。本文ではこの分類記号を使用する。

- ⅠA 手づくねによる非ロクロ成形の坏で、底部が比較的大きく、底部と体部の境は明瞭でない。体部は内弯して立ち上がり、口縁端部は内弯気味に丸くおさまる。底部に指圧痕、体部にナデ調整痕がみられる。
- Ⅰa ⅠA と同成形・同形態で口径が 9 cm 程度と小型のもの。
- ⅡA-1 ロクロ成形の坏で、口径に対して底径が小さい平底で、体部の中程に若干の屈曲を持ち、口縁端部は斜め上方に内反気味に延びる。
- Ⅱa-1 ⅡA-1 と同成形・同形態の小型のもので、体部の中程の屈曲が著しい。



第 69 図 かわらけの分類

ⅡA-2 ロクロ成形の坏で、口径に対して底径が小さい平底で、体部の中程に若干の屈曲を持ち、口縁端部は斜め上方に外反気味に延びる。

Ⅱa-2 ⅡA-2 と同成形・同形態の小型のものである。

ⅡB ロクロ成形の坏で、口径に対して底径が比較的大きい平底で、体部は内弯気味に上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。

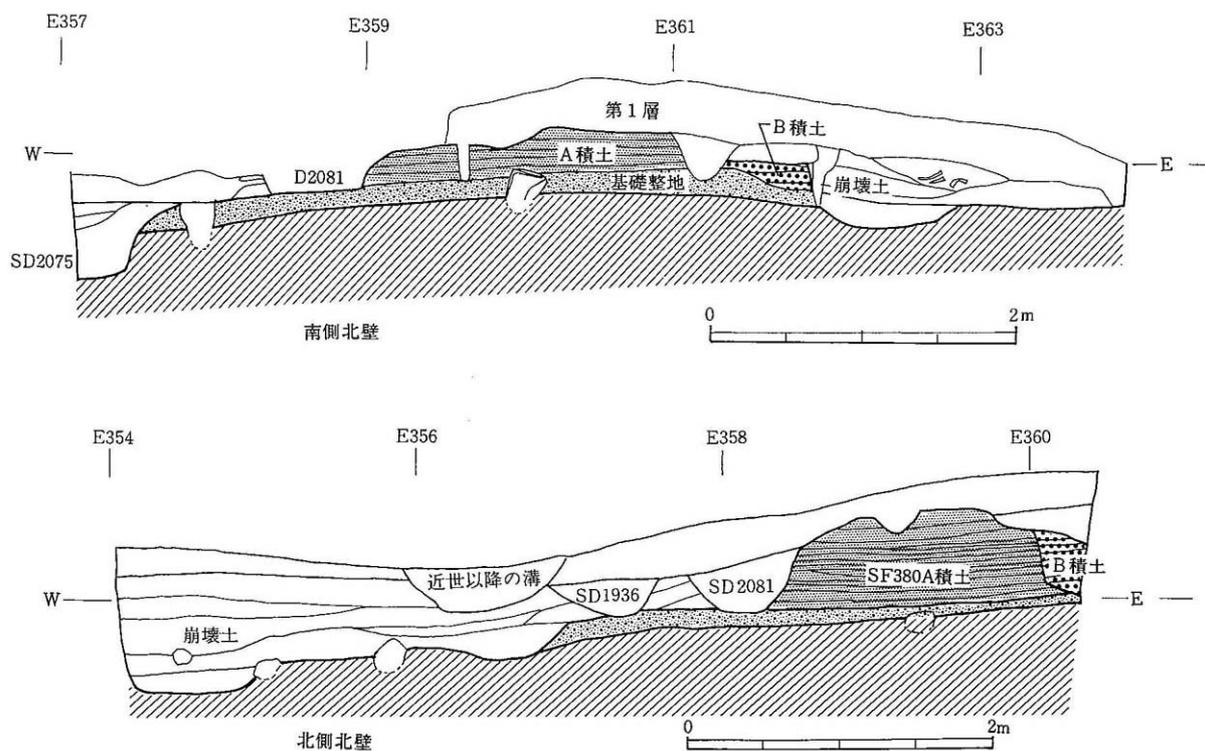
Ⅱb ⅡB と同成形・同形態の小型のものである。

以下、遺構の種類ごとに概要を述べる。

### (1) 築地跡

#### SF380A・B 築地跡 (第70図)

調査区の東端の地山面に構築した奈良時代の外郭東辺築地であり、南北に約5m分を検出した。北端と中央南の断ち割りトレンチで断面を観察すると、当初の積土Aとその東半部を削平して新たに積んだ積土Bとがある。積土の残存状況は北で60cm、南で25cmと北にゆくにつれ良い。この築地の西側には溝SD2075が伴っており、溝の東肩と積土西端間の1.2mは犬走りになっている。A・B両築地とも積手の違いや寄柱穴は検出できなかった。



第70図 SF380 築地断面図

た。なお、A・B築地はSD2081によって壊されている。

SF380Aは第6層の岩盤面まで削平し、その上に黄褐色地山ブロックや岩盤小粒を含む暗褐色土で厚さ10cmの基礎整地をして、その上に版築で積土したものである。積土は少量の炭化物・焼土や岩盤の小粒を含む黄褐色土と暗褐色の旧表土を主体として、厚さ約5cmの単位で互層に版築しており、高さは北側で約60cm残存している。基底幅は西がSD2081によって壊され、東側は築地Bの積替えの際に削られているため方向は確定できない。残存する基底幅は約2.8mである。なお、築地下の基底面には焼面が認められた。

SF380BはA築地積土の東半部を基底面あるいは一部基礎整地の上半まで削平し、新たに積み直した築地である。積土は赤褐色地山や岩盤の小粒を多く含む黄褐色土を主体として、厚さ5cmほどの互層をなし、高さは北で約40cm残存している。基底幅は西側がSD2081に壊されているため確定できない。方向は基底面東側で基準線に対し北で約11°西に偏している。

崩壊土は築地の西側南で顕著にみられ、7層に細分でき、築地の東側では焼土層がみられる。遺物にはSF380Aの基礎整地層と築地B崩壊土から出土している。基礎整地層からの遺物には土師器甕(非ロクロ)があり、崩壊土からの遺物には丸瓦(Ⅱ類:103点、ⅡB類:37点)、平瓦(ⅠA類:1点、ⅡB類:212点、ⅡC類:2点崩壊土上層から出土)のほか、微量の土師器の甕(非ロクロ)・須恵器の長頸壺・甕がある。平瓦の大部分は政庁第Ⅱ期(Ⅱ類)のもので、焼瓦が多い。

## (2) 建物跡

### SB1930 掘立式建物跡 (第71・72図)

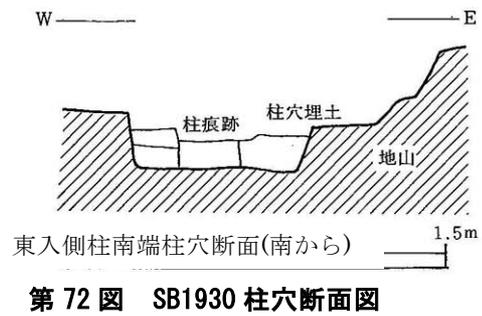
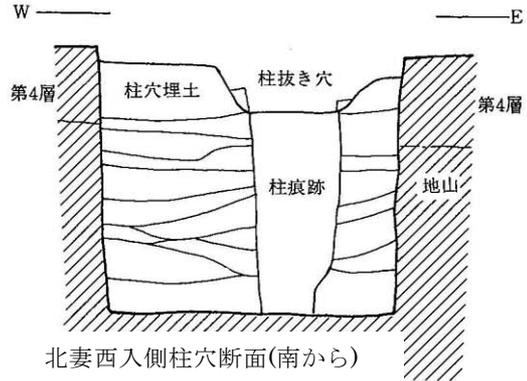
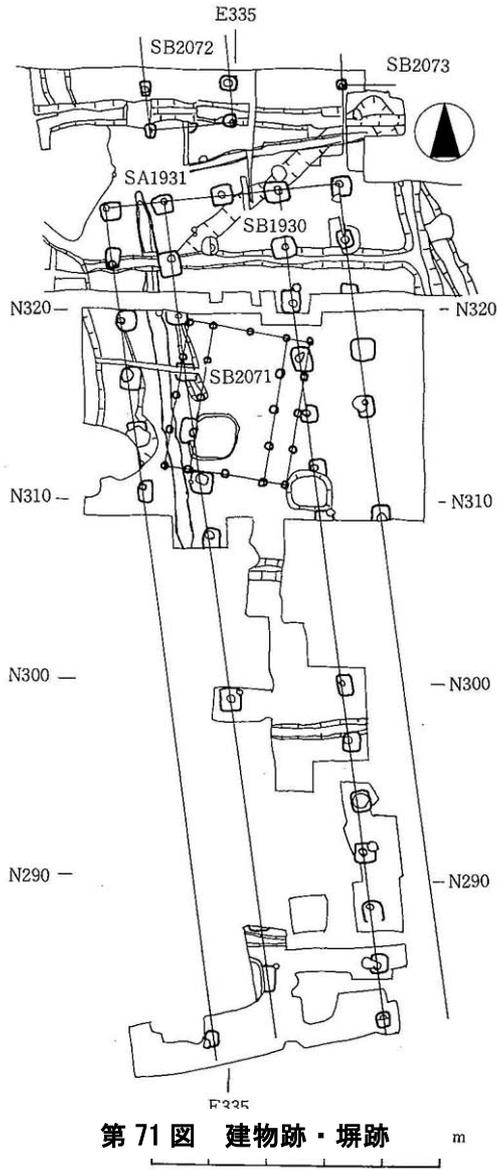
南北15間以上、東西4間の東西廂付きの南北棟掘立式建物跡である。方向は東入側柱列と西側柱列とともに約7°北で西に偏している。柱穴は北妻から4間目までは第4層、第4A層上面から、5間目以南は第5層とその下層の地山面で検出した。柱穴は図のように36箇所で見出し、そのうち23箇所で見出し、7箇所で見出し穴を確認した。平面規模は、桁行方向15間までの総長が、東入側柱列と西側柱列で共に44.63mである。柱間はよくわかる東入側柱列で、北より3.07m・2.94m・2.97m・3.01m・2.97m・26.71m(4間分)・3.03m・3.24m・2.73m・2.88m・3.27m・2.77mで、平均は2.98mである。梁行は身舎の北妻で総長6.07m、柱間が西より2.95m・3.12mであり、湘の出は西が3.14m・東が3.11mで、それぞれの平均は3.03mと3.12mである。柱間は桁行に対して梁行が若干長い、ほぼ10尺等間で計画されたと推定される。

柱穴は身舎・廂とも一辺1.0～1.5mの方形で、深さは北妻で1.0～1.5mと残存状況が良いのに対して、東入側柱列北から13～15間では0.1mで、南にゆくにつれ残存状況が悪い。

柱痕跡は0.25~0.3mの円形である。

なお、本建物跡はこれより古いSD1938溝と重複しており、第3層に覆われている。

遺物は柱穴埋土から非ロクロ調整の土師器甕体部破片、柱抜き穴4箇所から非ロクロ調整の土師器甕体部破片、平瓦ⅠA類：(政庁Ⅰ期)2点、ⅡB類：12点(政庁Ⅱ期)、丸瓦Ⅱ類：6点、柱痕跡埋土から平瓦ⅡB類1点が出土している。

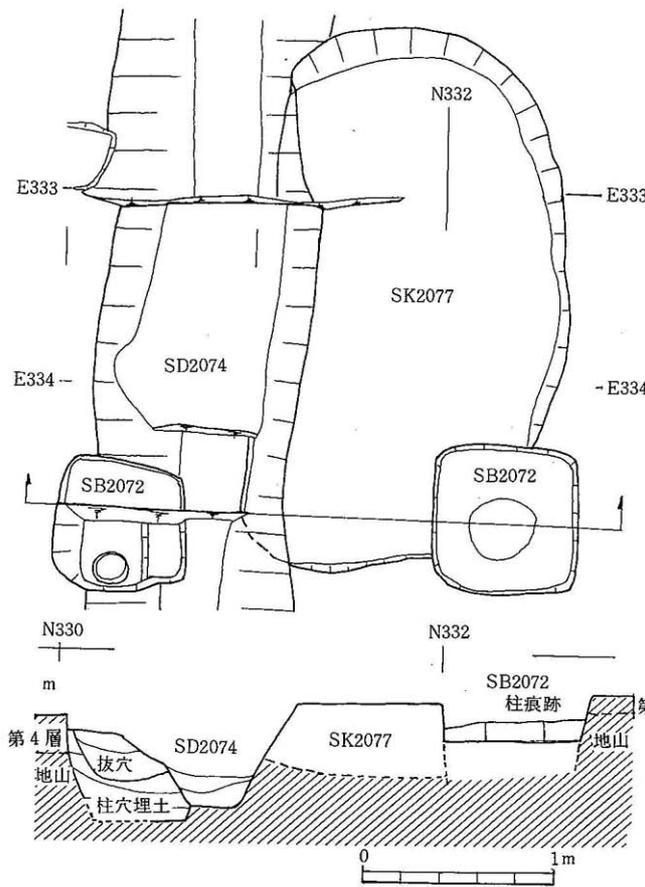


**SB2072 掘立式建物跡** (第 71・73・74 図)

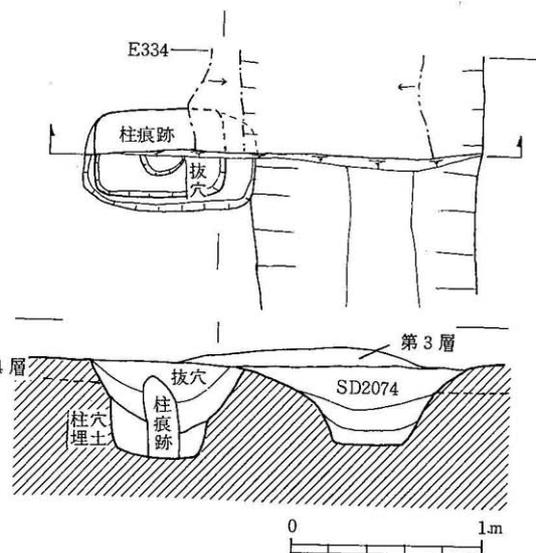
調査区北端で検出した南北 2 間以上、東西 2 間の南北棟掘立式建物跡であり、調査区外の北に延びる。方向は西側柱列で、約 9° 北で西に偏している。柱穴は東側柱列を第 4 層、西側柱列を第 5 層の地山面で検出した。図のように 5 箇所柱穴を検出し、そのいずれでも柱抜き穴下で柱痕跡を確認した。

平面規模は、桁行が東側柱列で 2.07m、西側柱列で 2.23m、梁行は南妻で総長 4.36m、柱間は西より 2.17m・2.20m である。

柱穴は一辺 0.5~0.8m の方形で、深さは 0.6~0.7m である。柱痕跡は径 0.15m の円形である(第 73 図)。なお、本建物跡はこれより古い SK2077 土壇、これより新しい SD2076 溝と重複している。遺物は出土していない。



第 13 図 SB2072、SD2074、SK2077 の関係



第 14 図 SB2072 西南側柱穴と SD2074 溝

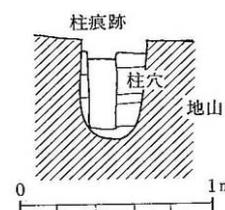
### SB2073 掘立式建物跡 (第 67・71 図)

調査区北東端で検出した 1 個の柱穴から推定した掘立式建物跡であり、調査区外の北または東に延びる。柱穴は第 4 層上面で検出した。

柱穴は一辺 0.5×0.6m の方形で、深さは 0.2m 以上である。柱痕跡は 0.15m の円形である。なお、本建物跡はこれより新しい第 3 層に覆われている。遺物は出土していない。

### SB2071 掘立式建物跡 (第 71・75 図)

南北 4 間、東西 4 間の東西廂付きの南北棟掘立式建物跡である。方向は東入側柱列と西側柱列とも約 10° 北で東に偏している。建物北半の柱穴は第 3 層・第 4 層上面から、南半では第 5 層の地山面から検出したが、柱穴埋土のなかに第 2 層特有の暗褐色土を含むことから本来は第 2 層から掘込まれたものと考えられる。柱痕跡は 3 箇所不明であった。また、南妻棟通下の柱穴では柱抜き取り穴を検出した。



第 75 図 SB2071 北妻東入側柱穴断面図

平面規模は、桁行方向の総長が東側柱列で 7.94m、西側柱列で 7.86m である。柱間は東入側柱列で北より 1.96m・1.96m・1.98m・1.89m で、平均は 1.95m である。梁行は身舎の南妻で総長 3.92m、柱間が西より 2.03m・1.88m であり、廂の出は西が 1.21m・東が 1.19m であり、桁行 6.5 尺、廂の出 4 尺で計画されたと推定される。柱穴は身舎・廂とも径 0.3~0.5m の不整円形で、深さは 0.5m 残存している。柱痕跡は径 0.15m の円形である。

なお、本建物はこれより古い SB1930 建物跡、SA1931 塀跡と重複している。

遺物はすべて破片資料であるが、柱痕跡から土師器片、須恵系土器坏底部、「かわらけ」Ⅱ類各 1 点が出土している。

### (3) 塀 跡

#### SA1931 塀跡 (第 76 図)

SB1930 建物跡の西側柱と西入側柱の間にあつて、北妻に塀の北端をほぼ合せた南北方向の布地業内に設置した塀跡である。長さ 19.5m 分検出しており、南は調査区外に延びる。方向は塀材の抜き取り溝でみると、発掘基準線に対し、7° 30′ 北で西に偏しており、SB 1930 のそれとほぼ一致する。布掘りおよび抜き取り溝は、その北半は第 4 層上面で、南半は第 6 層の岩盤で検出している。

布掘りの規模は上幅 1 m 前後と推定され、底幅は 30~40cm、深さ 50cm で、断面形は逆台形をなす。塀材の痕跡は部分的な断ち割り調査の際、長さ 1 m にわたって検出しており、

その幅は10cmである。裏込め土は岩盤の小粒を若干含む黄褐色土で一手に埋められている。抜き取り溝は上幅0.7~1m、深さ20~40cmの歪んだU字形で、底面も凸凹がある。その堆積土は多量の焼土を含む褐灰色土であり、火災後に抜き取ったことがわかる。

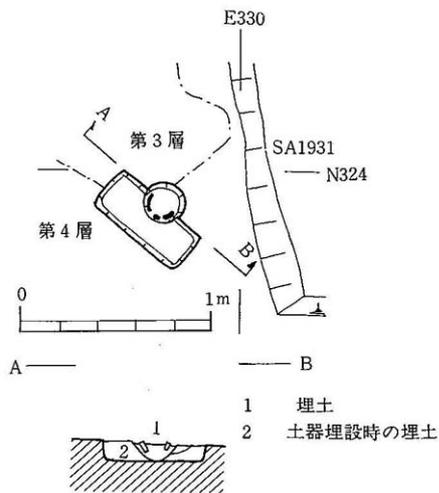
本堀跡は第3層に覆われており、これより新しいSB2071建物と重複している。SB1930建物跡との直接的な新旧関係はない。

遺物は抜き取り溝から須恵器甕底部・丸瓦Ⅱ類・平瓦ⅡB類が出土している。平瓦は火を受けている(註1)。

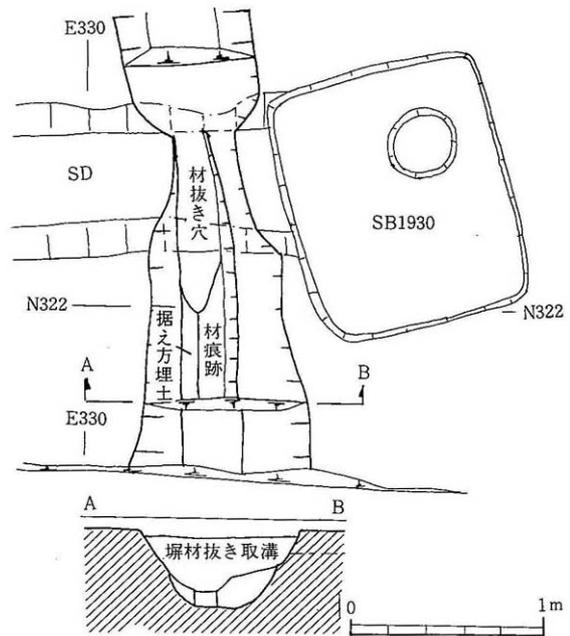
(4) 土器埋設遺構

**SX2078 土器埋設遺構** (第77図)

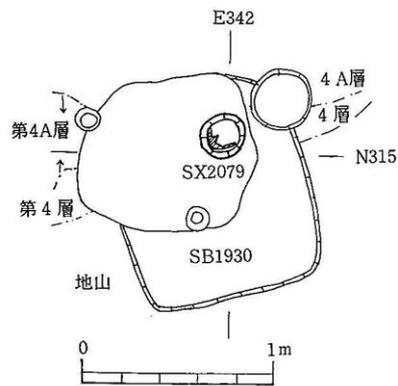
SB1930建物跡の北西隅付近で、第4層上面から検出した土器埋設遺構である。直径25cm・深さ10cmの平面形が円形で、断面形が緩いU字形をなす掘り方内に須恵系土器の坏1個を正置している。掘り方の埋土は地山の細粒を含む褐灰色土である。地鎮等の祭祀遺構かと考えられる。



第77図 SX2078 平面・断面図



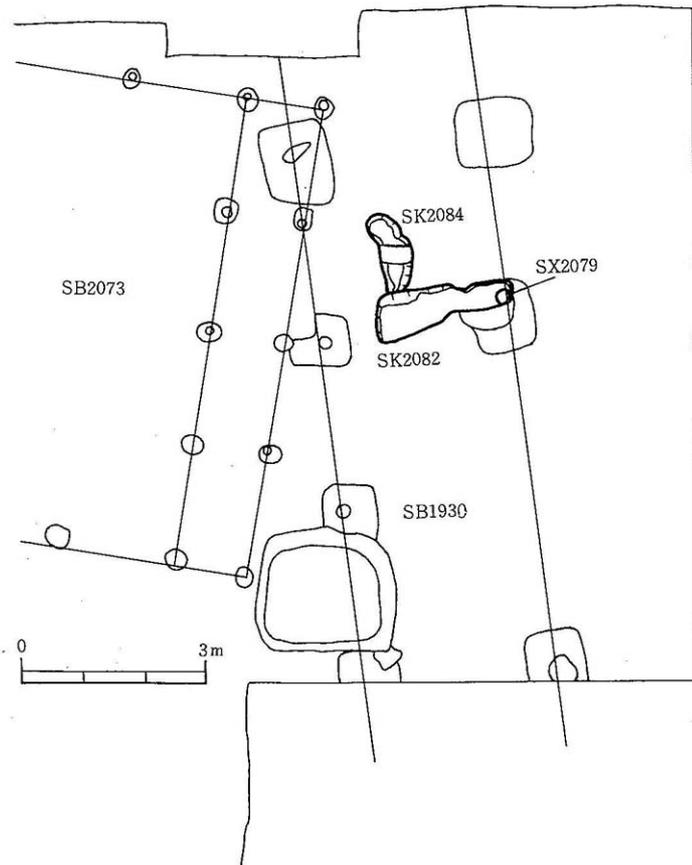
第76図 SA1931 堀跡平面断面図



第78図 SX2079 平面図

### SX2079 土器埋設遺構 (第 78・79 図)

SB1930 建物跡の東入側柱列北から 5 番目の柱穴を切る。SK2082 土壇埋土上面から検出したものである。直径 20cm・深さ 8cm の平面形が円形で、断面形が緩い U 字形をなす掘り方内に土師器の非ロクロ調整の甕 1 個が横倒しの状態で検出された。掘り方の埋土は少量の炭化物と地山の細粒を含む褐灰色土である。残存状況が悪く甕の片側が失われていたが、埋設土器遺構と考えた。なお、本遺構はこれより古い SB1930・SK2082 と重複している。



第 79 図 SX2079、SK2082・2084 平面図

### (5) 溝 跡

#### SD1815 溝 (第 67 図)

調査区北西部の地山面で検出した平安時代の SF300 築地に伴う城外側の大溝である。第 56 次調査では遺構についてのみ記述しているので出土遺物についても簡単に述べる。方向は発掘基準線に対して、北で 7° 西に偏している。上端幅 4.0~4.2m、底面幅 2.2~2.4m、深さ 1.3m で、断面形は逆台形をなし、底面は南へ傾斜している。

堆積層は 10 層に細分され、第 4 層の灰白色火山灰層を除けばいずれも岩盤の小ブロックを含む褐灰色土・灰黄褐色土である。SD2074 溝よりも新しい。

遺物は須恵系土器の坏(第 80 図 4)・須恵器の坏(同図 2 は回転系切り無調整・3 は回転ヘラケズリ)・土師器の坏(同図 1)・第 II 期から IV 期の瓦が出土している。

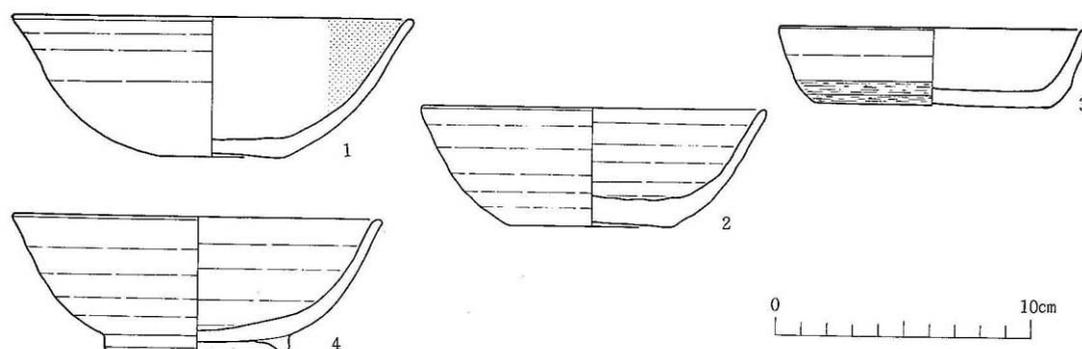
#### SD2075 溝 (第 67 図)

調査区東端部で検出した奈良時代の SF380 築地に伴う城内側の大溝である。溝の西肩

は第4層上面から、東肩はSF380築地基礎整地層上面から検出した。長さは南北6mで、なお調査区外に延びる。方向は溝の西上端で発掘基準線に対して、北で11°西に偏している。上端幅7.5m、底面幅6m、深さ20~45cmで、断面形は浅い皿状をなし、底面は平坦で南へ傾斜している。

溝中には主として東の築地崩壊土が堆積し、西からの堆積は顕著でない。堆積層は黄褐色土・赤褐色土の互層で、7層に細分される。最上第1層は焼瓦や木炭を多量に含む焼土層である。本溝は築地崩壊土よりも新しいSD1936によって切られている。

遺物は須恵器の瓶・土師器の坏・甕・丸瓦ⅡB類・平瓦ⅡB類と少量の鉄滓が出土している。瓦は政庁第Ⅱ期のものである。



番号	遺構・層位	種類	器種	特徴	平箱番号	番号	遺構・層位	種類	器種	特徴	平箱番号
1	SD1815埋土	土師器	坏	回転糸切り・内黒	B8126	3	SD1815埋土	須恵器	坏	?→回転ヘラケズリ	B8126
2	SD1815埋土	須恵器	坏	回転糸切り	B8126	4	SD1815埋土	須恵系土器	高台坏	回転糸切り	B8126

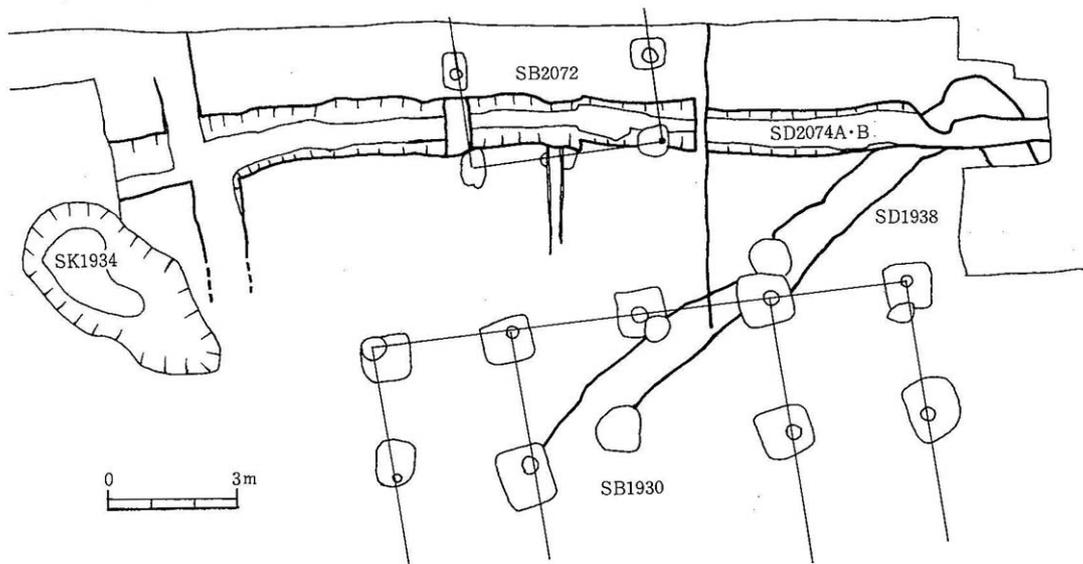
第80図 SD1815出土遺物

### SD2080溝 (第67図)

SD1938の東にあって、第5層の旧表土上面で検出した長さ6mの南北溝で、なお調査区外に延びる。方向は発掘基準線に対して、北で10°西に偏している。上端幅0.4~0.8m、底面幅0.3~0.6m、深さ15cmで、断面形は浅い皿状をなし、底面は平坦で南へ傾斜している。堆積土は多量の地山・旧表土のブロックと炭化物・焼土を含む灰黄褐色土で一手に埋まっている。本溝は第3層に覆われている。遺物は須恵器の甕破片・土師器の坏・甕、平瓦ⅡB類が出土している。

### SD1938 溝 (第 81 図)

調査区北東部の第 4 層上面で検出した L 字状に屈折している溝である。北辺の溝は約 13.6m、東辺の溝は北で  $41^\circ$  東に、東辺は北で  $26^\circ$  西に辺しており、屈折角度は  $75^\circ$  をなす。上端幅 1~1.3m、底面幅 0.5~0.7m、深さ 40cm で、断面形は逆台形をなし、底面は平坦で南へ傾斜している。堆積土は地山と旧表土のブロックを含む灰黄褐色土で、3 層に細分される。本溝は SB1930、SD2074・1932 と重複しており、いずれよりも古い。遺物は多量の鉄滓と微量の土師器片が出土している。



第 81 図 SD1938・2074 平面図

### SD2074A・B 溝 (第 81 図)

調査区の北端で第 4 層上面で検出した東西・南北方向の溝が T 字型に接する溝で、2 時期の重複がみられる。東西溝は約 22m、南北溝は約 25m 分検出したが、東西溝は更に東に延び、南北溝は途中で途切れるとみられる。新しい B 溝の東西方向は発掘基準線にほぼ一致する。上端幅は東西溝が 1.1~1.4m、南北溝が 1.1m、底面幅は前者が 40cm・後者が 70cm、深さは平均 25cm で、断面形は緩やかな U 字形をなす。底面は平坦で、東西溝は東に、南北溝は北に傾斜している。堆積土は多量の地山・旧表土の小粒を含む灰黄褐色土で、3 層に細分される。

古い A 溝は規模・方向は B 溝とほぼ同様であるが、底面幅は東西溝で 40~60cm、南北溝で 40cm、断面形は逆台形と推定される。堆積土は地山小粒を含む黄褐色土である。

本溝は SK2076、SB2072、SD1938 よりも新しく、SK2083、SD1815 よりも古い。

遺物はA溝埋土から非ロクロの土師器甕・内黒坏・丸瓦ⅡB類・平瓦ⅡB類・鉄滓が、B溝埋土から須恵器の坏(へら切り無調整を主体として第84図3のように回転糸切り無調整を1点含む)・高台坏(へら切り)・甕、土師器の坏(調整不明)・甕(非ロクロを含む)、丸瓦ⅡB類・平瓦(ⅠA類：1点・ⅡB類：99点)が出土している。

#### **SD1932 溝** (第67図)

SB1930の北にあって、第3層上面で検出した長さ10.5mの東西溝で、なお調査区外東に延びる。方向は発掘基準線に対して、東で11°北に偏している。上端幅0.5～0.7m、底面幅0.3m、深さ15cmで、断面形は緩やかなU字形をなす。堆積土は地山ブロックと炭化物を含む褐灰色土である。なお、本溝は第3層に覆われている。

遺物は須恵器の高台坏・土師器の坏・甕(調整不明)、丸瓦Ⅱ類・平瓦ⅡB類が出土している。

#### **SD1936 溝** (第67図)

発掘区の東北部にあって、SF380築地崩壊土上面で検出した長さ7mの北東～南西に延びる溝で、なお調査区外に延びる。方向は発掘基準線に対して、北で37°東に偏している。上端幅0.5～1.0m、底面幅0.2～0.5m、深さ30cmで、断面形は緩やかなU字形をなし、底面は平坦で南に傾斜している。堆積土は地山ブロックと炭化粒・焼土を含む黒褐色土である。本溝は近世よりも新しい溝と重複し、これよりも古い。

遺物は須恵器の坏・高台坏・瓶・甕、土師器の内黒坏・甕(調整不明)、「かわらけ」Ⅱ類・丸瓦Ⅱ類・平瓦ⅡB類・鉄滓などが出土している。

#### **SD1937 溝** (第67図)

発掘区の北半部の第3層上面で検出した長さ5mの南北溝で、なお調査区外に延びる。方向は発掘基準線に対して、北で11°西に偏している。上端幅0.7m、深さ10cmで、断面形は緩やかなU字形をなす。堆積土は地山ブロックと炭化粒・焼土を含む褐灰色土である。

遺物は出土していない。

#### **SD2081 溝** (第67図)

発掘区の東北端部のSF380築地崩壊土上面で検出した長さ5mの南北溝で、調査区外に延びる。方向は発掘基準線に対して北で8°西に偏している。上端幅0.7m、底面幅0.2～0.3m、深さ45cmで、断面形は緩やかなU字形をなす。底面は平坦で、南へ傾斜している。

堆積土は地山ブロックと炭化粒・焼土を少量含む褐色土である。

遺物は須恵器の甕、丸瓦Ⅱ類・ⅡB類、平瓦ⅡB類が出土している。

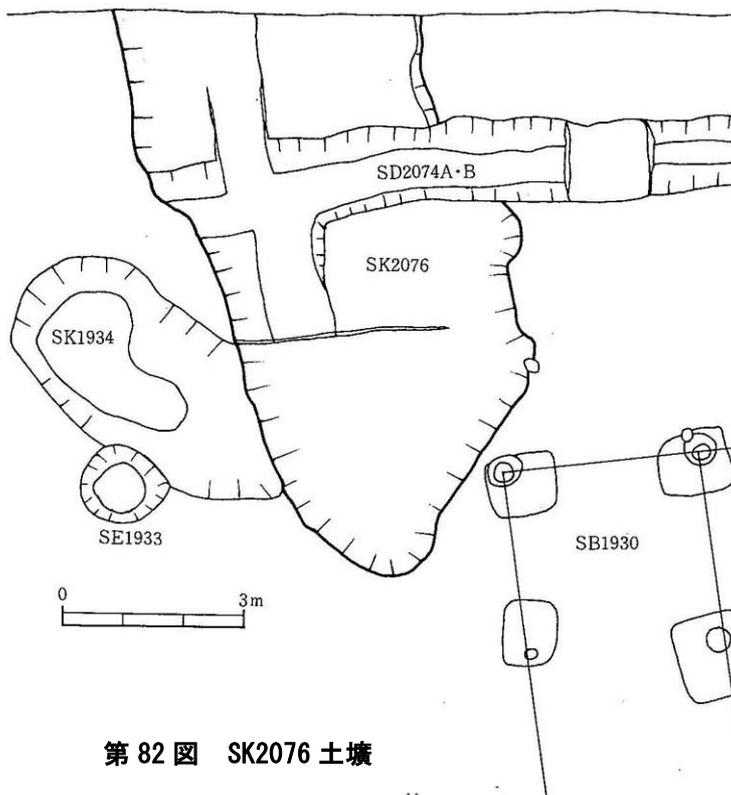
### (6) 井戸・土壙

昨年度の第56次調査で検出していた井戸跡としてSE1933・1934・1935井戸跡があり(宮

城県多賀城跡調査研究所年報 1989 P13・14 参照)、本次調査で新たに検出したものに以下の土壌がある。

**SK2076 土壌** (第 82 図)

SB1930 の北西で第 5 層の地山面で検出した土壌で、さらに調査区外の北につづく。平面・規模は南北 9 m 以上、東西 5 m 以上の南北に長い溝状をなし、深さは 0.5m、断面形



第 82 図 SK2076 土壌

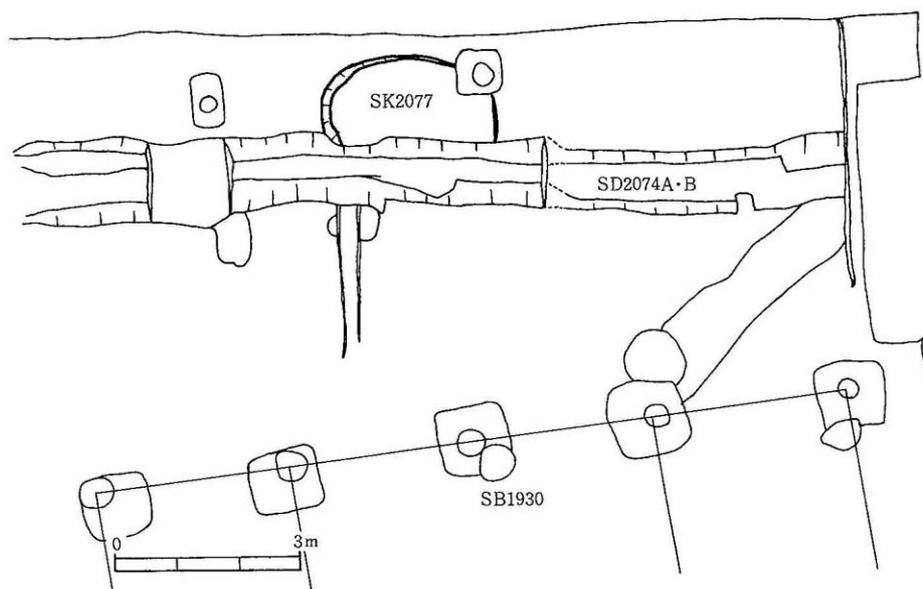
は緩い U 字形をなす。堆積土は自然堆積土で、地山や旧表土が斑点状に混在する灰褐色土と均質な灰白粘質土に大別される。前者は 6 層に細別できる。

本土壌は SD2074・1815 と重複しており、これらよりも古い。埋まり方は本土壌に 6～4 層が自然堆積する→SD2074A を掘る→3 層の灰白粘質土が自然堆積する→SD2074B を掘る→1・2 層が堆積する→SD1815 の掘削し、まだ凹んでいた本土壌に X・Y 層を盛土整地したという順になる。遺物は丸瓦Ⅱ類 1 点が出土している。

**SK2077 土壌** (第 73・83 図)

SB2072 の東側柱 1 間目付近の第 4 層上面で検出した土壌である。平面・規模は南北 1.5m 以上、東西 2.8m の東西に長い楕円形をなし、深さは 0.3m 以上、断面形は緩い皿状をなす。堆積土は地山や旧表土粒を多量に含む灰黄褐色土と暗赤褐色土が混在したもので

ある。本土壙は SB2072・SD2074 と重複しており、これらよりも古い。遺物は須恵器の甕、丸瓦Ⅱ類1点、平瓦ⅡB類9点が出土している。



第 83 図 SK2077 土壙

#### SK2082 土壙 (第 79 図)

SB1930 の東側柱北から 5 間目付近の第 4 A 層上面で検出した土壙である。平面・規模は南北 0.7m、東西 2.2m の東西に長い不整長方形をなし、深さは約 10cm、断面形は緩い皿状をなす。堆積土は地山の細粒を含む褐灰色土である。本土壙は SB1930・SK2079 と重複しており、前者よりも新しく、後者よりも古い。遺物は土師器の甕(非ロクロ)、丸瓦Ⅱ類1点が出土している。

#### SK2083 土壙 (第 67 図)

調査区の北西部で SD2074 溝堆積土上面で検出した土壙である。平面・規模は南北 0.6 m、東西 1.4m の東西に長い隅丸長方形をなし、深さは約 20cm、断面形は緩い皿状をなす。堆積土は地山の細粒を含む褐灰色土であり、2層に細分できる。本土壙は SD2074・1815 と重複しており、前者よりも新しく、後者よりも古い。遺物は須恵系土器の坏・土師器の甕・須恵器の坏・丸瓦Ⅱ類・平瓦ⅡB類が出土している。

#### SK2084 土壙 (第 79 図)

SB2072 建物の東に位置し、第 4 A 層上面で検出した土壙である。平面・規模は南北 0.9m、東西 0.5m の南北に長い楕円形をなし、深さは約 10cm、断面形は緩い皿状をなす。堆積土は焼土粒・炭化物を多量に含む第 2 層特有の黒褐色土であり、本来は第 2 層から

掘り込まれたものとみられる。本土壙はSK2082と重複しており、これよりも新しい。遺物は須恵器の甕、土師器の甕、須恵器の坏、丸瓦Ⅱ類の破片が出土している。

(7) 堆積層の出土遺物

**第4A層の出土遺物**

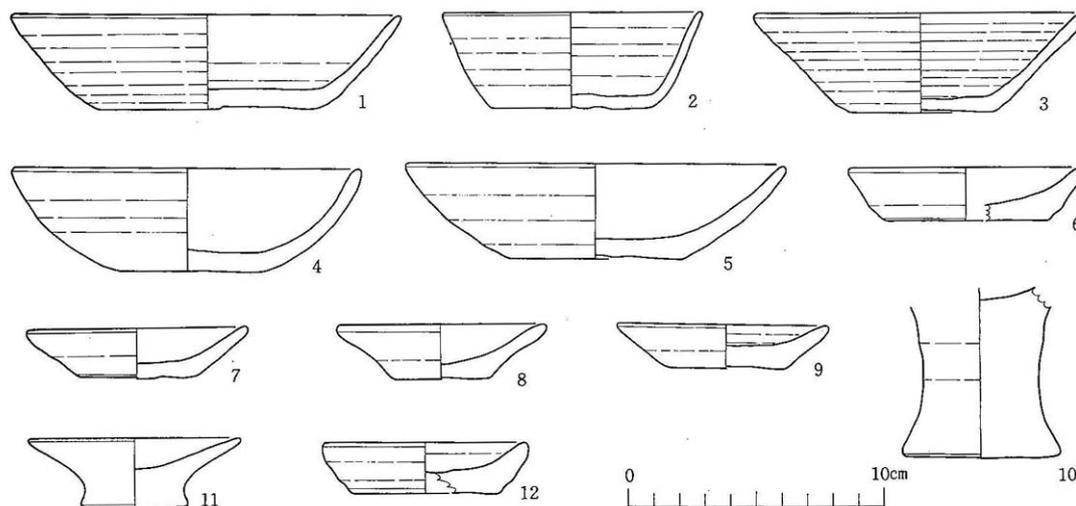
上面の焼土層から出土した遺物として、須恵器の坏口縁部、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅡB類の他多量の鉄滓がある。

**第3層の出土遺物**

灰釉陶器・土師器・須恵器・瓦のほか比較的多量の鉄滓がある。灰釉陶器は皿の破片である。土師器にはロクロ調整の内黒坏・甕のほか、非ロクロ調整の坏・甕が若干ある。須恵器には坏・甕があり、坏は底径8cmほどのへら切り無調整の底部である。甕は体部の破片で内面に青海波紋あて板痕を残し、内外面にヨコナデを施している。丸瓦はすべて38点Ⅱ類であり、平瓦はⅠA類(Ⅰ期)1点・ⅡB類(Ⅱ期)81点・ⅡC類(Ⅳ期)1点である。

**第2層の出土遺物 (第84・85図)**

土器・瓦・鉄製品がある。土器では青磁2点、中世陶器1点、かわらけ、須恵系土器・須恵器・土師器があり、須恵器が最も多く、かわらけがそれに次ぎ、土師器は少ない。青磁は壙の体部と口縁部の破片である。かわらけは皿と小皿で、SE1934付近の調査区北西



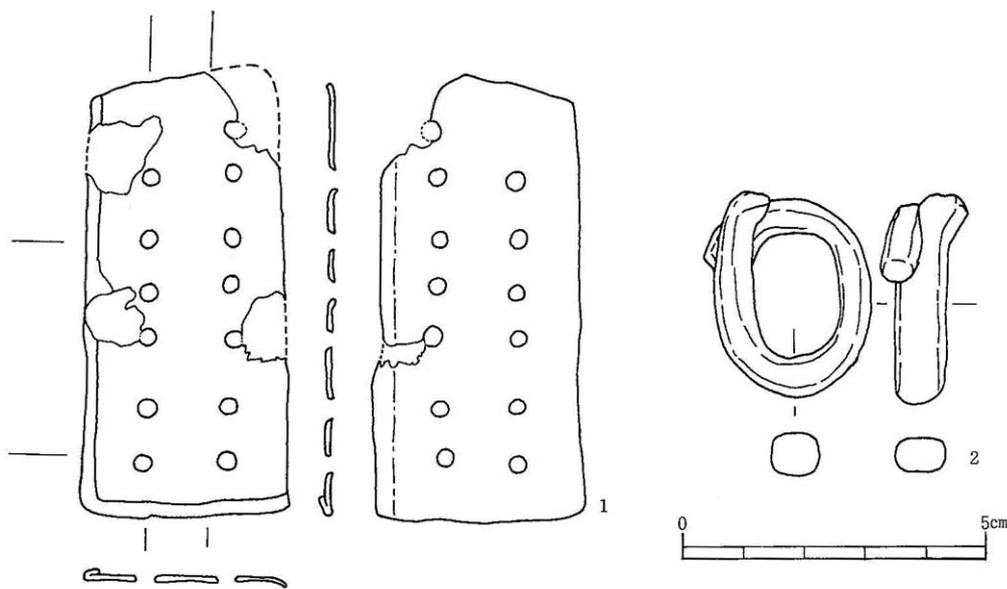
番号	遺構・層位	種類	器種	特徴	平箱番号	番号	遺構・層位	種類	器種	特徴	平箱番号
1	SK2082 埋土	須恵器	坏	へら切り	B8129	7	第2層	かわらけ	Ⅱa-2	回転糸切り	B8130
2	SD2074 埋土	須恵器	坏	回転糸切り	B8138	8	第2層	かわらけ	Ⅱa-2	回転糸切り	B8110
3	SD2074 埋土	須恵器	坏	?→回転へらケズリ	B8127	9	第2層	かわらけ	Ⅱb	回転糸切り	B8131
4	SX2078 埋土	須恵系土器	坏	回転糸切り	B8128	10	第2層	かわらけ	柱状皿	回転糸切り	B8130
5	第2層	須恵系土器	坏	回転糸切り	B8130	11	第2層	かわらけ	Ⅱa-2	回義糸切り	B8126
6	SK1934	かわらけ	Ⅱb	回転糸切り	B8126	12	第2層	かわらけ	Ⅱb	回転糸切り	B8130

第84図 第59次調査出土土器

部に集中しており、胎土・色調から2群に区分できる。1群は胎土が緻密で赤褐色をなし、ⅡB類に似るもので、2群は胎土に多量の砂を含む灰褐色をなし、ⅡA・Ⅱaと共通するものである。中世陶器は甕の体部破片で、胎土・色調からみて常滑産とみられ、器形から13世紀前半頃のものとして推定される。須恵系土器には坏・小型坏・小型埴・皿などの器種がある。全体的に器壁の遺存状況が悪く、特に破片資料では「かわらけ」と識別できないものも多い。土師器には坏・甕がある。非ロクロ調整のものが多く、ロクロ調整のものは少ない。前者の坏には両面黒色処理したものも微量みられる。須恵器には、坏・高台坏・埴・蓋・壺・甕などの器種がある。このうち、坏の底部の内訳は回転糸切り無調整1点・ケズリ調整9点、ヘラ切り無調整25点であり、回転糸切りを除くすべてのものは底径が大きく8cm前後のものである。

瓦には丸瓦と平瓦がある。丸瓦はいずれも粘土紐巻造り有段のⅡB類である。平瓦は政庁第Ⅱ期のⅡB類が大部分を占め、第Ⅲ期のものが少量と第Ⅰ期のⅠA類・第Ⅳ4期のⅡC類が数点みられる。

鉄製品には大鎧の小札・釘・鉄滓がある。鎧の小札は残存高7.5cm・幅3.4cm・厚さ1mmで縦方向2列にそれぞれ7、6個の3mmの威孔をうがっている。



番号	層位	種類	平箱番号
1	第2層	大鎧小札	B8129
2	第2層	環状製品	B8138

第85図 第2層出土鉄製品(第56次調査)

## 第1層の出土遺物

瓦が最も出土量が多く、須恵器・土師器が少量のほか、微量の「かわらけ」や鉄滓がある。土器類は大部分が破片資料である。瓦には政庁第Ⅰ期～第Ⅳ期のものがあるが、第Ⅱ期のものが圧倒的に多い。分布状況はSF380築地付近とSF300築地に伴うSD1815付近に集中している。前地区では政庁第Ⅱ期の瓦の他に微量の第Ⅰ期の瓦が認められるが、後地区では第Ⅲ・Ⅳ期の瓦が少量みられる。

註1 第56次調査では二つの重複した溝とみて、SD1931A・Bと記載したが、今次調査で堀跡と断定できたため、遺構表示記号を変えた。

## 5. 考 察

ここでは第3章の発見した遺構と遺物で詳述した事柄をもとに個々の遺構について年代を推定し、隣接する第58次調査区との遺構期との対応関係を明らかにし、ついでこの調査区の使われ方について簡単にまとめることにする。

本次調査で発見した主な遺構の新旧関係を整地層や堆積層を介在させて整理すれば表6のようになる。

重複状況表からこれらの遺構は次のグループに区分できる。

### 1. 第4A層より新しく第3層よりも古い遺構

SB1930

### 2. 第4層よりも新しく第3層よりも古い遺構

SD1938、SK2077、SB2072、SK2076、SD2074、SB2073、SA1931

### 3. 第3層よりも新しく第2層よりも古い遺構

SD1932

### 4. その他の遺構

(1) SB1930よりも新しい遺構 SK2082・2084、SX2079

(2) 第3層よりも新しい遺構 SB2071

(3) 灰白色火山灰層よりも古い遺構 SD1815、SK2083・1935

(4) 築地関係の遺構 SF380A、SD2075、SF380B

(5) SF380B築地崩壊土よりも新しい遺構 SD2081・1936

(6) 第4層よりも新しい遺構 SD1937、SX2078

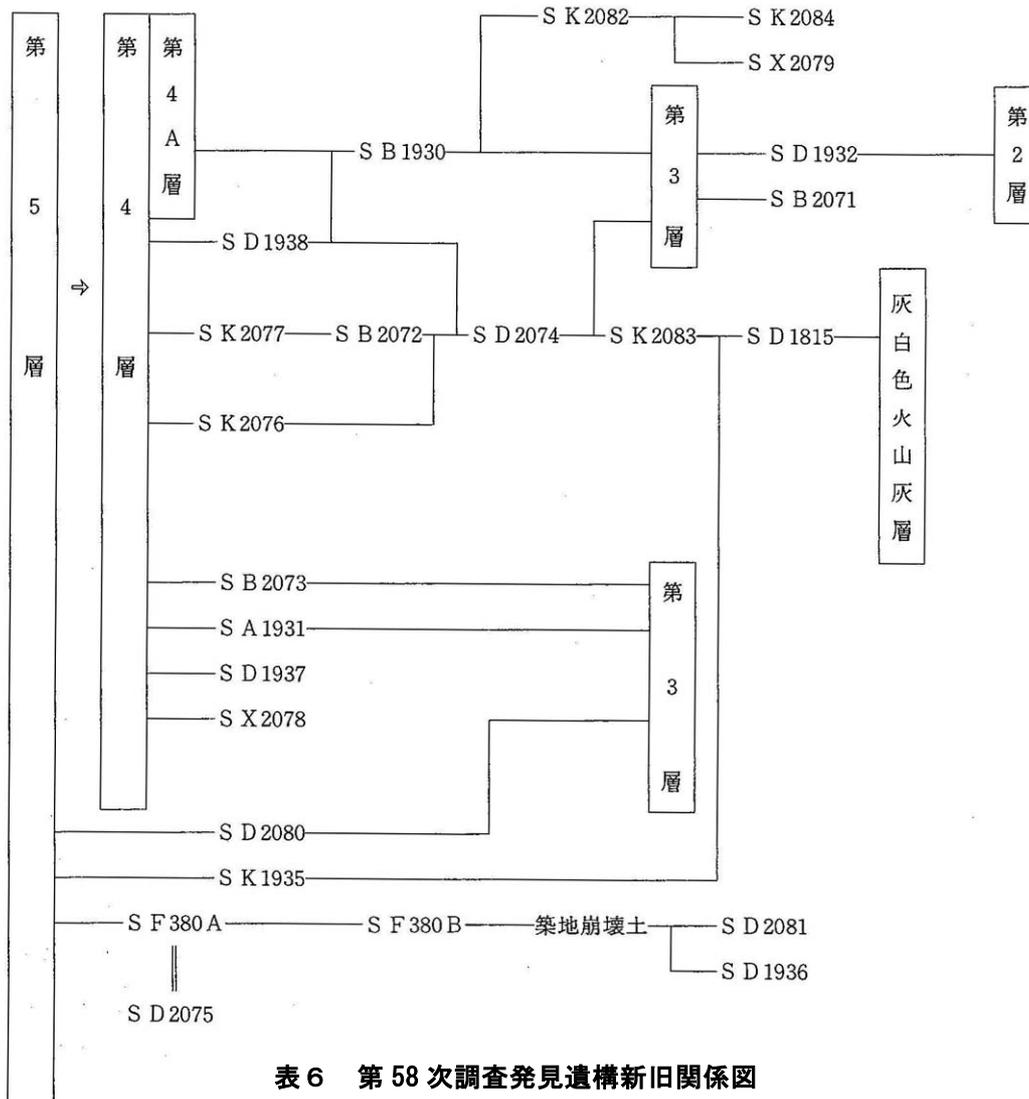


表 6 第 58 次調査発見遺構新旧関係図

【各層および遺構の年代】

各層の年代

(1) 第 4 A 層の年代

第 4 A 層は自然堆積層である第 4 層上に直接地業した整地層で、これらの層に含まれる遺物はない。しかし、第 4 A 層上面には木炭層が部分的に認められ、それに含まれる遺物から上面が機能していた時期をある程度推定できる。木炭層からは多量の鉄滓とともに平瓦では政庁第 II 期の平瓦に限って出土していることから、その下層にあたる第 4 A 層の下限は政庁第 II 期の終末である宝亀 11(780)年頃に求めることができる。

## (2) 第3層の年代

第3層に含まれる年代の新しい遺物としては政庁第Ⅳ期(869年直後)に製作された平瓦ⅡC類とロクロ調整の土師器坏とがある。この層はかなり広範囲に分布するにもかかわらず、10世紀初頭に出現する須恵系土器は出土していない。このような状況から第3層の年代は9世紀第4四半期頃とみるのが妥当とみられる。

## (3) 第2層の年代

第2層に含まれる年代の新しい遺物としては大鎧の小札・ロクロ調整による「かわらけ」ⅡA・ⅡB・Ⅱb類と中世陶器の甕の体部片がある。中世陶器は胎土・色調から13世紀前半の常滑産と見られ、「かわらけ」も同様の年代が与えられている。したがって、第2層の上限年代は13世紀前半に求められる。

## (4) 灰白色火山灰層の年代

陸奥国分寺塔跡の調査結果やこれまでの多賀城跡の調査成果から934年直前頃とみられている。

### 遺構の年代

## (5) SF380A・B築地およびSD2075の年代

**SF380B 築地**の崩壊土中には多量の焼土および焼瓦が含まれている。崩壊土のうち、下位にあたる築地西側の二つの層および東側の焼土層から出土する多量の瓦はすべて政庁第Ⅱ期の瓦に限られる。したがって、築地の崩壊年代は政庁第Ⅱ期の廃絶の原因となった宝亀11(780)年の伊治公咎麻呂の乱に求めるのが妥当となる。なお、A築地基底部をなす整地層から外面をハケ目調整した非ロクロ調整の土師器甕が出土しているが、8世紀のどの段階に属するかは特定できない。また、築地の西側溝SD2075の堆積土最上層はやはり焼土であり、焼瓦を含む政庁第Ⅱ期の瓦に限られる。したがって、築地は8世紀うちに改修され、少なくともB築地は政庁第Ⅱ期に並行する時期で瓦葺きであったことがわかる。

## (6) SB1930、SK2077・2076、SB2072・2073、SD2074・1938、SA1931の年代

第4A層が780年以前の整地層であることは述べた。SB1930では柱穴埋土から非ロクロ調整の土師器甕の破片を含む。柱抜き穴4箇所から政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類が出土していることや掘立柱建物の耐用年数などを考慮すれば、8世紀後半と推定できる。

**SK2077** 埋土からも政庁第Ⅱ期平瓦9点が出土していることから同様に8世紀後半頃の所産とみられる。

**SD2074** は堆積土に須恵器の坏(へら切り無調整を主体とし、微量の回転糸切り無調整を含む)・高台坏(へら切り)、非ロクロ調整の土師器甕片、94点の政庁第Ⅱ期の平瓦、第Ⅲ期の平瓦4点が含まれ、8世紀末頃から9世紀前半頃と考えられる。

**SK2076** 埋土からは丸瓦Ⅱ類が1点出土しているだけで、年代を限定できない。ただ、SD2074より古いことやこの地区全体で第Ⅱ期の瓦が圧倒的に多いことから8世紀後半の可能性が強いと考えておきたい。

**SB2072** はSD2074よりも古いことやSB1930と方向柱筋の方向が一致することから、この建物と組み合わせるものと考えられる。

**SB2073** については第3層より古いことから9世紀後半以前である。柱穴埋土中に焼土を含まず、その状況がSB1930・2072と類似することからこれも8世紀後半頃の所産と見ておきたい。

**SD1938** はSB1930よりも古く、8世紀後半以前と考えられる。他の遺構と方向が著しく異なることから多賀城創建期に遡るものかもしれない。

**SA1931** は抜き取り溝に大量の焼土と若干の政庁第Ⅱ期の焼瓦がみられることから780年に焼失していることがわかり、これも8世紀後半が与えられる。

(7) **SD1932** は第2層より古く、第3層よりも新しいことから9世紀後半以降13世紀前半以前の年代におさまるものである。出土遺物は微量であり、須恵器の高台坏、ロクロ調整の土師器坏、政庁第Ⅱ期の平瓦・丸瓦があるが、須恵系土器や「かわらけ」など10世紀以降の新しい遺物はない。

(8) **SK2083・1935、SD1815** は灰白色火山灰層よりも古いことから934年以前ということになる。このうち、**SD1815** は780年に火災を受けた後に、これを修得した**SF380D** (第54次調査)の後にその内側に本格的に造営した**SF300** 築地に伴う東城外の南北溝であり、8世紀末から9世紀初頭頃に掘られたとみられている。

**SK2083** は8世紀後半のSD2074よりも新しく、しかも、SD1815以前であることから8世紀末頃と考えられる。

**SK1935** は政庁第Ⅱ期の焼瓦や非ロクロ調整の土師器甕などが出土し、SD1815よりも古いことから、やはり8世紀末頃に位置付けられる。

(9) **SX2079、SK2082・2084** は8世紀後半のSB1930よりも新しい。このうち、**SX2079** はその埋め甕が非ロクロ調整であることから、8世紀末頃の年代が与えられる。

**SK2082** はSB1930よりも新しく、**SX2079** よりも古いことから8世紀後半から末頃とみられる。

**SK2084** からは非ロクロ調整の土師器甕・丸瓦が微量出土しているだけであり、遺物からの年代推定は無理であり、**SK2082** より新しいことから8世紀後半から末以降としかいえない。

(10) **SB2071** は第3層上面で検出されたが、柱穴が第2層の黒色土で埋められているので、

本来は第2層から掘り込まれたものとみられる。第2層の年代から13世紀前半以降とみておきたい。

**SD1936** は埋土から「かわらけ」Ⅱ類が出土しており、13世紀前半以降とみられる。

**SD2081** からは微量の須恵器・瓦片が出土しているだけであり、年代の特定はできない。溝の埋土が第1層の表土に似るところから極く新しいものとみておきたい。

(11) **SX2078** は埋納された須恵系土器の坏から10世紀前半とみられる。**SX1937** については年代を決めえない。**SD2080** は第3層に覆われ、政庁第Ⅱ期の平瓦を含むことから8世紀後半から9世紀後半までの年代付けができる。

以上、各遺構の年代を述べた。簡単に整理すれば次のとおりである。

8世紀前半に逆上る可能性のある遺構    **SF380A、SD1938、SK2075**

8世紀前半～末の遺構    **SF380B、SB1930・2072・2073、SA1931、SX2079、  
SK2082・2077・2076・1935**

8世紀末～9世紀初頭の遺構    **SD2074・2083・1815**

8世紀後半～9世紀後半の遺構    **SD2080**

9世紀後半以降の遺構    **SD1932(9世紀後半～13世紀前半)、SB2071、SD1936  
(13世紀前半以降)、SX2078(10世紀前半)**

その他の遺構    **SK2084、SD1937・2081**

## 6. ま と め

遺構の年代をもとに本調査地区の使われ方をまとめれば次のようになる。

1. 奈良時代の築地の内側にあたるこの地区が本格的に使われるのは8世紀後半の段階であり、東門が西に移る8世紀末から9世紀初頭以降はあまり使われていない。このうち、**SB1930** は桁行15間以上の両面廂付き建物が注目される。多賀城では8世紀の段階で廂付きの長大な建物として作貫地区で8間以上の規模のものがあるが、これほど長大な建物はなかった。桁行15間以上の建物は8世紀段階では全国的にも、国府政庁脇殿(下野国付・伯耆国府)、平城宮馬寮の建物が知られているが、国府などの実務官衙地域では例を知らない。性格については今後の課題としたい。
2. 8世紀前半に遡る可能性のある遺構として**SF380A** 築地と**SD1938** 溝がある。**SD1938** 溝には大量の鉄滓が出土していることから、建物が建てられる以前に鍛冶関係の工房が営まれていることが予想される。
3. 13世紀前半にはこの地区に小規模ながら掘立柱建物が建てられる。これらは西の第58次調査区のⅠ-1期に対応すると考えられる。

## IV 付 章

### 1. 関連研究・普及活動

平成2年度は多賀城跡の発掘調査の他に以下の関連研究や普及活動を行った。

#### (1) 多賀城関連遺跡の発掘調査

当研究所では多賀城に関連する古代遺跡について計画的な調査研究を実施している。本年度は多賀城関連遺跡第4次5か年計画の2年度に当たり、宮城県加美郡宮崎町鳥嶋字東山から同町鳥屋ヶ崎字八幡裏にかけて所在する東山遺跡を対象に、本遺跡としては第5年次の調査を6月18日から10月3日まで実施した。事業費は7,000千円(50%国庫補助)である。この成果は多賀城関連遺跡調査報告書第16冊「東山遺跡Ⅴ」として刊行する。

#### (2) 多賀城跡の環境整備

平成2年度の環境整備事業は第5次5か年計画の初年度にあたり、総事業費30,000千円(国庫補助50%)で実施した。対象地区は外郭東門・大畑地区のうち、市道市川線の北側の地区で、面積は約5,550㎡である。主な工事内容は外郭東辺・北辺築地沿いに散策できるよう配慮し、園路工、木道工、広場工、および休息展望施設などの便益施設設置工である。

#### (3) 遺構調査研究事業

本事業は多賀城跡で検出した建物跡等の諸遺構を保存・展示・活用することを目的として、他遺跡における類例とも比較検討しながら基礎的研究を行うものである。本年度は遺跡調査研究事業第3次5か年計画の3年次の事業として、8世紀後半の代表的国府である近江国府(滋賀県)と律令国家最北の城柵遺跡である志波城跡(盛岡市)に関する発掘データの収集を主に行った(県単独事業)。

#### (4) 発掘調査等のデータベース化事業

多賀城跡の発掘調査・環境整備事業でこれまで蓄積してきた遺構・遺物などの資料(実測図・写真・文献資料を含む)をパソコンで整理してデータベース化を図ることを目的とした昨年度からの継続事業である(県単独事業)。

#### (5) 現地説明会の開催

発掘調査の成果を一般に公開するため、下記の現地説明会を開催した。

「多賀城跡第58・59次調査について」平成2年11月17日 説明者 後藤秀一・柳沢和明

「東山遺跡第5次調査について」平成2年9月25日 説明者 丹羽 茂・村田晃一

#### (6) 他機関への発掘調査などの協力

城 生 柵 跡 中新田町教育委員会 平成2年7月～10月

伊治城跡	築館町教育委員会	平成2年9月
柴原 A 遺跡	福島県三春町教育委員会	平成2年9月
日の出山窯跡	色麻町教育委員会	平成2年10月
新田柵推定地	田尻町教育委員会	平成2年12月

### (7) 講演会などへの協力

村田晃一「縄文時代の集落」	東北歴史資料館開放講座	平成2年8月4日
柳沢和明「摺萩遺跡の調査」	東北歴史資料館開放講座	平成2年8月11日
後藤秀一「遠つ都太宰府・多賀城について」	斎宮歴史博物館	平成2年9月23日
進藤秋輝「東国経営について」	斎宮歴史博物館	平成2年11月25日

### (8) 研究発表など

進藤秋輝「多賀城創建以前の律令支配の様相」	伊東信雄先生追悼考古学古代史論攷	平成2年11月
	「多賀城跡」 高校通信日本史・世界史	平成3年1月
	「東北の古代城柵」 第28回埋蔵文化財研究集会 熊本博物館	平成2年9月
古川雅清「特別史跡多賀城跡附寺跡の復原計画」	木の建築	平成3年3月
柳沢和明「宮城県における遺跡土壌のとらえ方」	考古学ジャーナル No.329	平成3年2月
	「多賀城跡大畑地区」 宮城県遺跡調査発表会	平成2年12月
	「多賀城跡」 第17回古代城遺跡検討会	平成3年2月
後藤秀一「多賀城跡創建期について」	第17回古代城遺跡検討会	平成3年2月
村田晃一「宮崎町東山遺跡」	宮城県遺跡調査発表会	平成2年12月
	第17回古代城遺跡検討会	平成3年2月

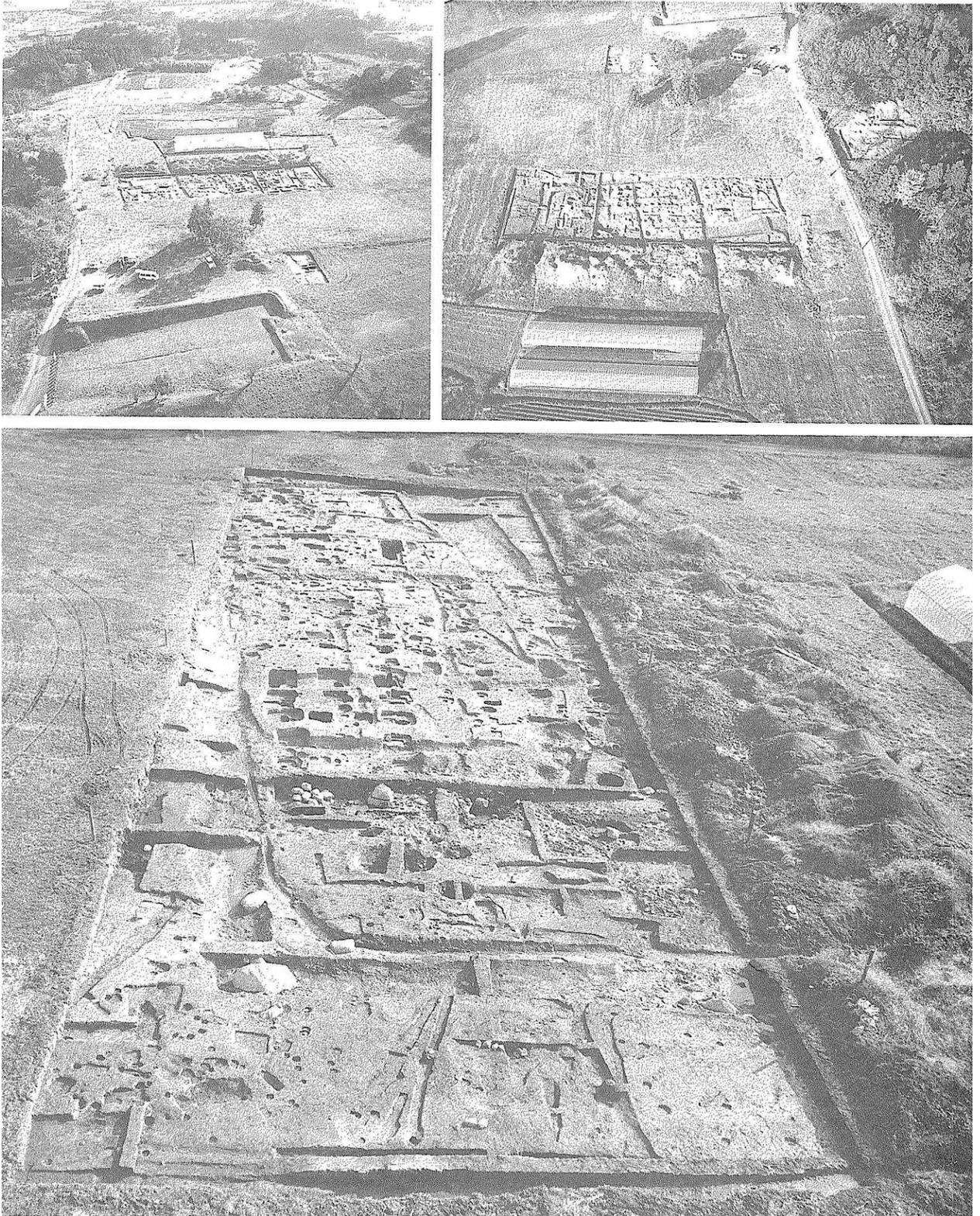
### (9) その他

佐々木茂楨	志波城跡管理計画策定委員、郡山遺跡発掘調査指導委員・多賀城市文化財保護委員、わくや万葉里づくり整備委員
進藤秋輝	秋田城跡環境整備指導委員・払田柵跡環境整備審議委員・胆沢城跡保存管理計画策定委員、名生館官衙遺跡発掘調査指導委員・根岸遺跡調査指導委員・大戸窯跡群調査指導委員・関和久上町発掘調査指導委員・石巻市史執筆委員
古川雅清	志波城跡管理計画策定委員・払田柵跡環境整備審議委員・秋田城跡環境整備現地指導・宮沢遺跡環境整備委員・千石城跡保存整備基本計画策定委員・わくや万葉里づくり整備委員・山王囿遺跡整備計画策定指導・白石城調査指導委員・名生館官衙遺跡発掘調査指導委員・国史跡九戸城跡整備基本

## 2. 研究成果刊行物

- (1) 『多賀城跡』 宮城県多賀城跡調査研究所年報・1989 1990. 3
- (2) 『東山遺跡Ⅳ』 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第15冊 1990. 3



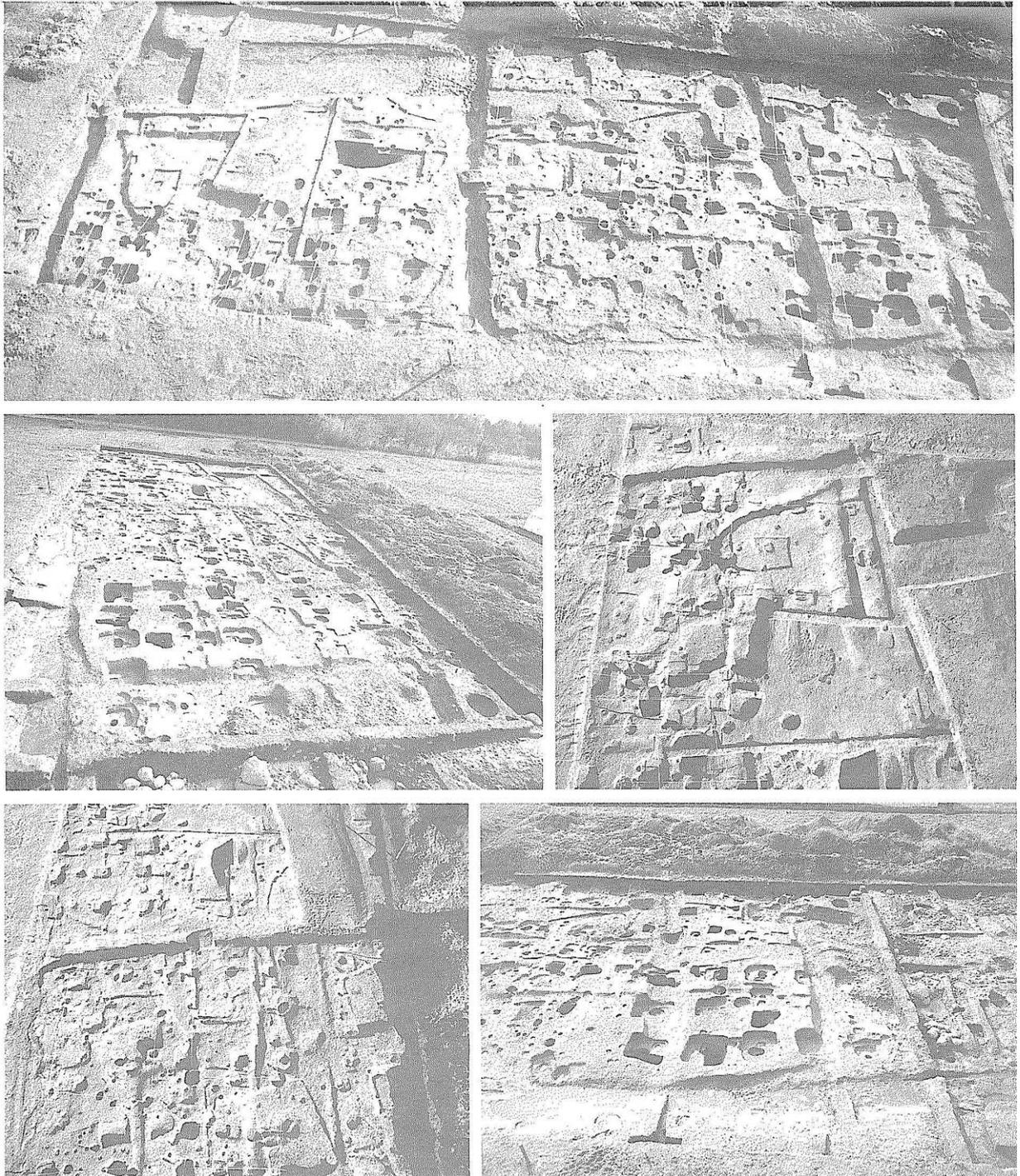


**図版1 第58次調査**

上左：外郭東門の北上空より第58次調査区・作貫地区を望む

上右：南上空より第58次調査地区・外郭南門を望む

下：西上空より第58次調査地区を望む



**図版 2 第 58 次調査の検出遺構**

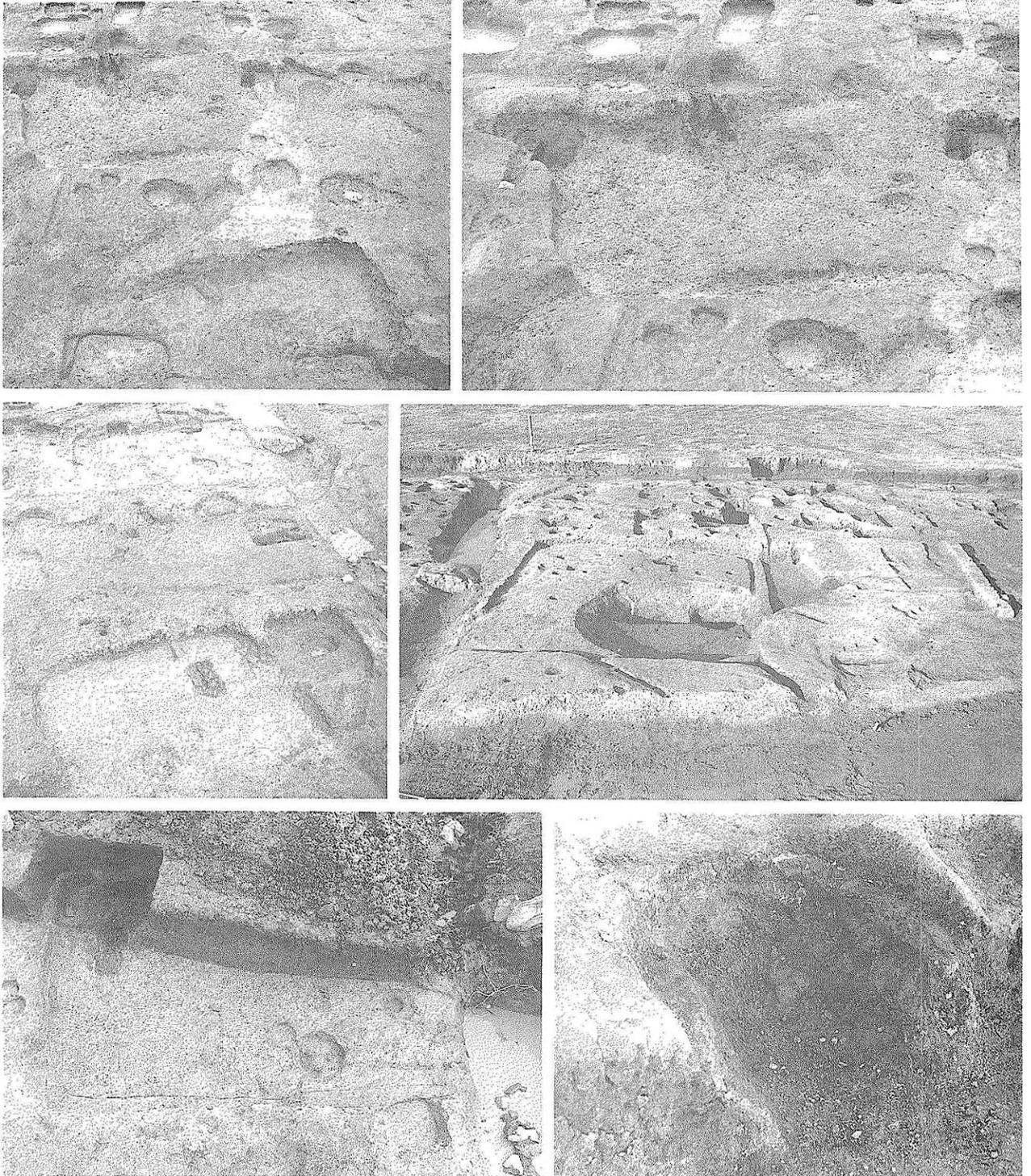
上：第 58 次調査地区全景（北から）

中左：第 58 次調査区東半部（西から）

左右：第 58 次調査地区東半部（真上から）

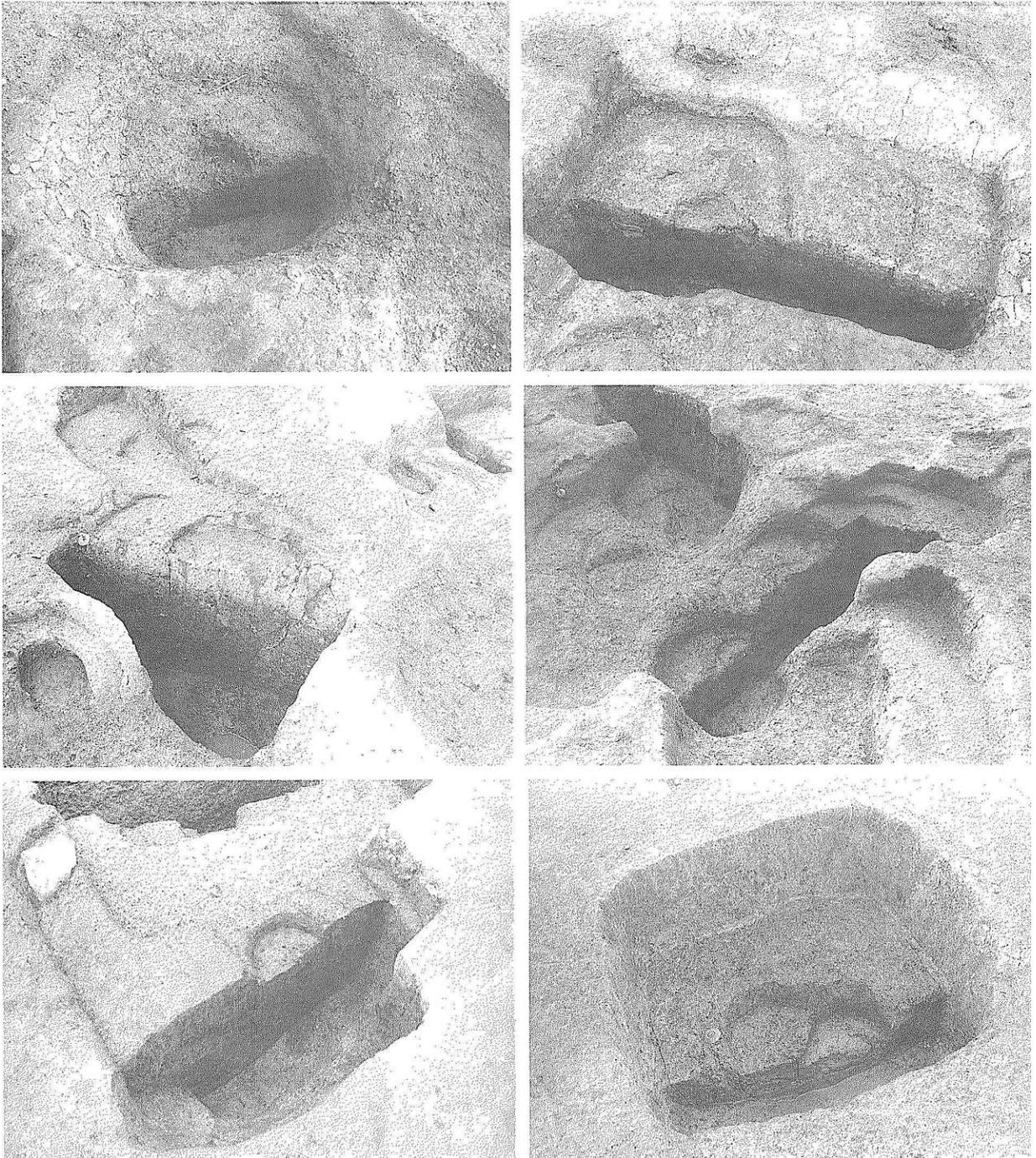
下左：第 58 次調査地区中央部（真上から）

下右：第 58 次調査地区西半部の SB2976 堀立式建物跡の周辺（北から）



**図版3 第58次調査検出の竪穴住居跡**

- 上左：SI1960 竪穴住居跡（奥）と SI1964 竪穴住居跡（手前、南から）
- 上右：SI1960 竪穴住居跡（南から）
- 中左：SI1961 竪穴住居跡（奥）と SI1965 竪穴住居跡（手前、南から）
- 中右：SI1962・1963 竪穴住居跡と SE1988・1989 井戸跡(南から)
- 下左：SI1966 竪穴住居跡(北から)
- 下右：SI1962 竪穴住居跡カマド(北西から)



**図版4 第58次調査検出の建物跡(1)**

上左：SB1898 建物跡南妻棟通り柱穴の断面(東から)

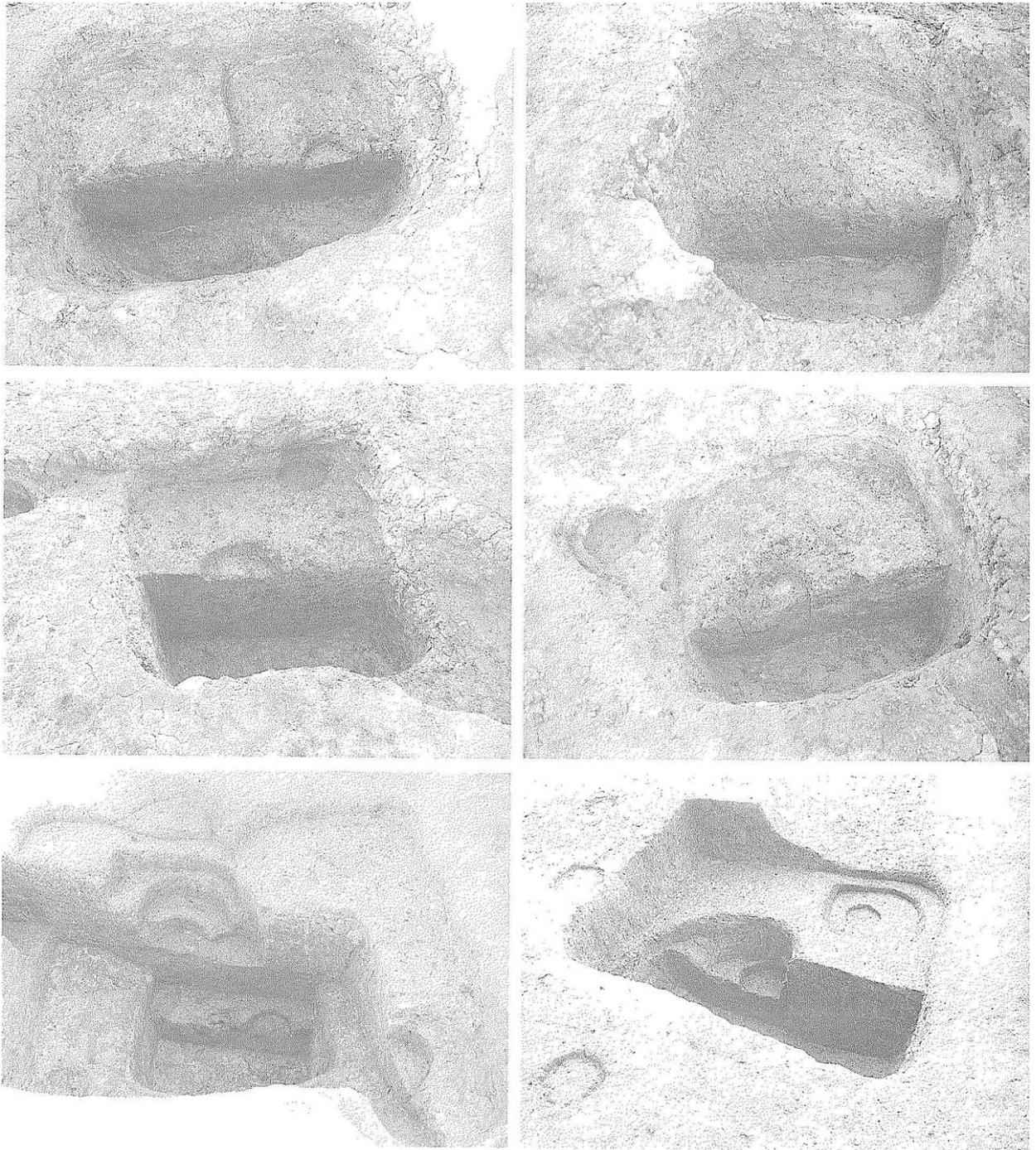
上右：SB1898 建物跡南西隅柱穴とそれを切る SB1969 建物跡西入側柱列南妻より1間目柱穴断面(南から)

中左：SB1969 建物跡西入側柱列南端柱穴(手前)とそれを切る SB1973 建物跡南東隅柱穴(奥)の断面(南から)

中右：SB1969 建物跡東入側柱列南妻より1間目柱穴と重複する SB1968・1974 建物跡南西隅柱穴など(北東から)

下左：SB1970 建物跡南西隅柱穴とそれを切る SB1971 建物跡北西隅柱穴の断面(南東から)

下右：SB1971 南西隅柱穴の断面(南東から)



**図版 5 第 58 次調査検出の建物跡(2)**

上左：SB1971 建物跡南側柱列東妻より 1 間目柱穴とそれを切る SB1978 建物跡南妻棟通り柱穴の断面(東から)

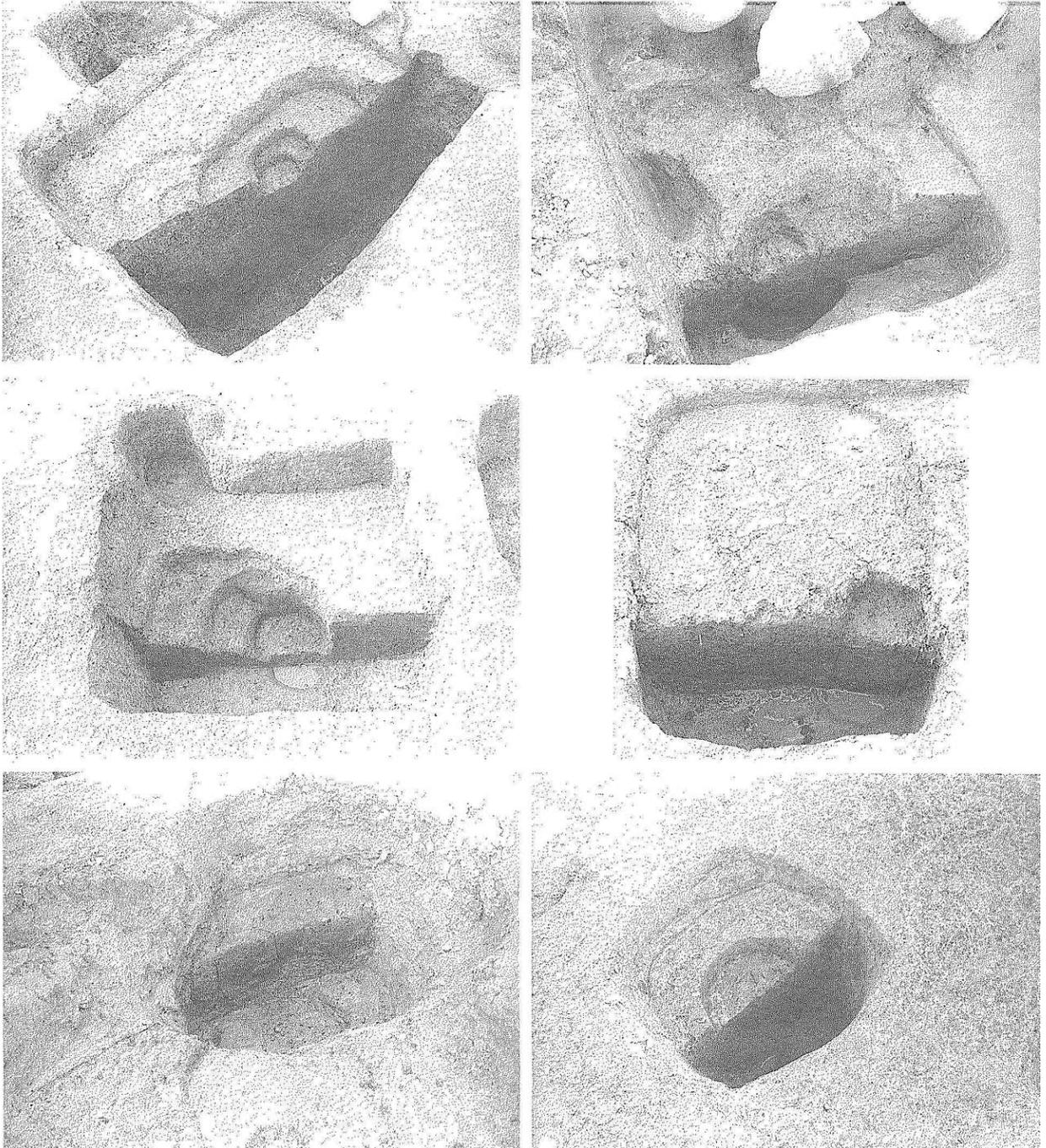
上右：SB1972 建物跡南東隅柱穴の断面(南から)

中左：SB1973 建物跡南側柱列東妻より 2 間目柱穴の断面(東から)

中右：SB1973 建物跡

下左：SB1976 建物跡南西隅柱穴、それと重複する SB1971・1970・1978 建物跡柱穴の断面(北から)

下右：SB1976 建物跡北東隅柱穴の断面(北から)



**図版 6 第 58 次調査検出の建物跡 (3)**

上左：SB1976 建物跡南側柱列東妻より 1 間目柱穴の断面(北西から)

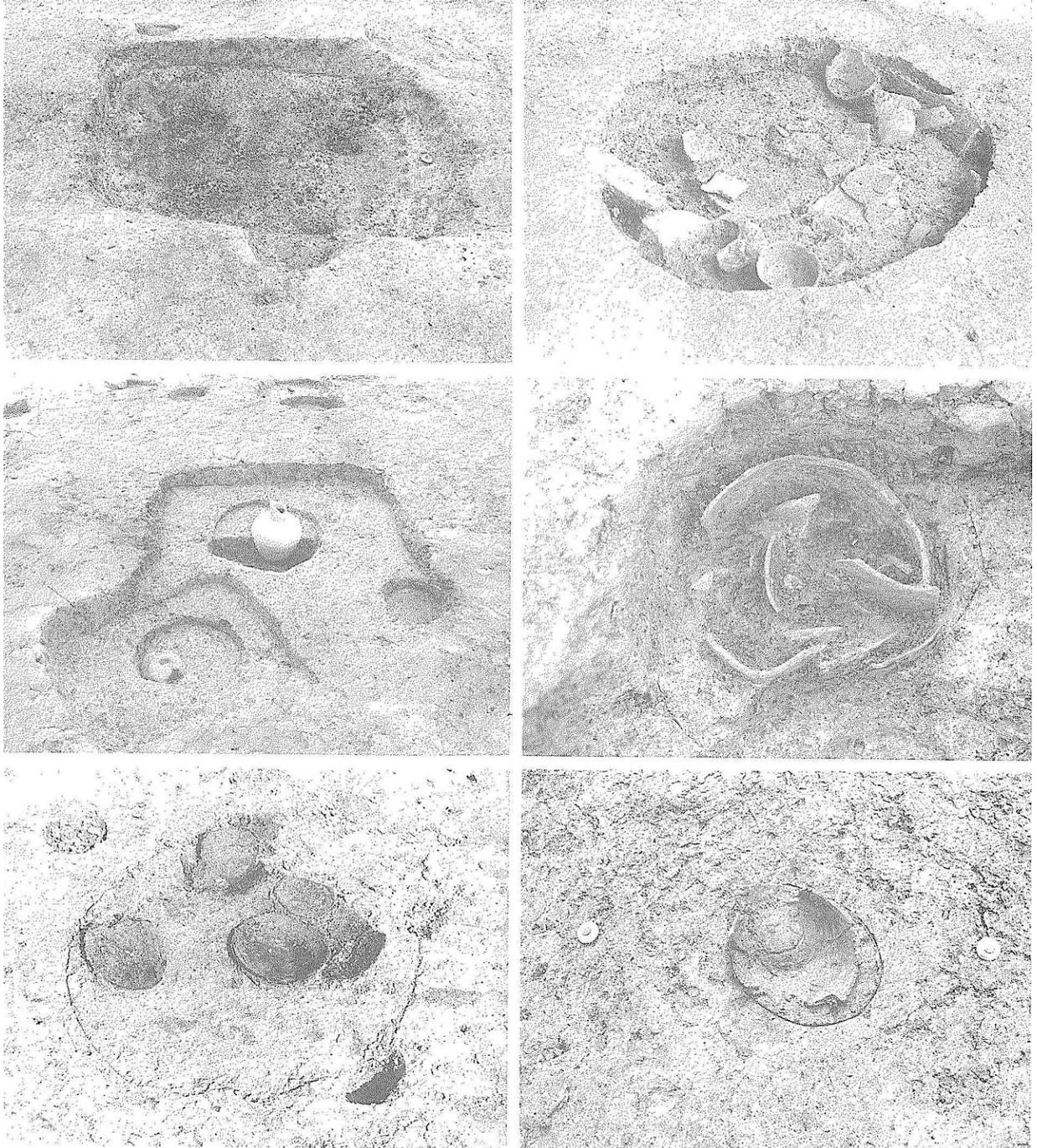
上右：SB1976 建物跡北西隅柱穴の断面(北東から)

中左：SB1976 建物跡間仕切り柱穴の断面(東から)

中右：SB1977 建物跡南西隅柱穴の断面(西から)

下左：SB1980 建物跡北側柱列西妻より 1 間目柱穴の断面とそれに切られる  
SB1971・1978 建物跡の柱穴(南東から)

下右：SB1978 建物跡南西隅柱穴の断面(南東から)



**図版7 第58次調査検出の工房跡・土器溜め・土器埋設遺構**

上左：SX2001 工房跡(北から)

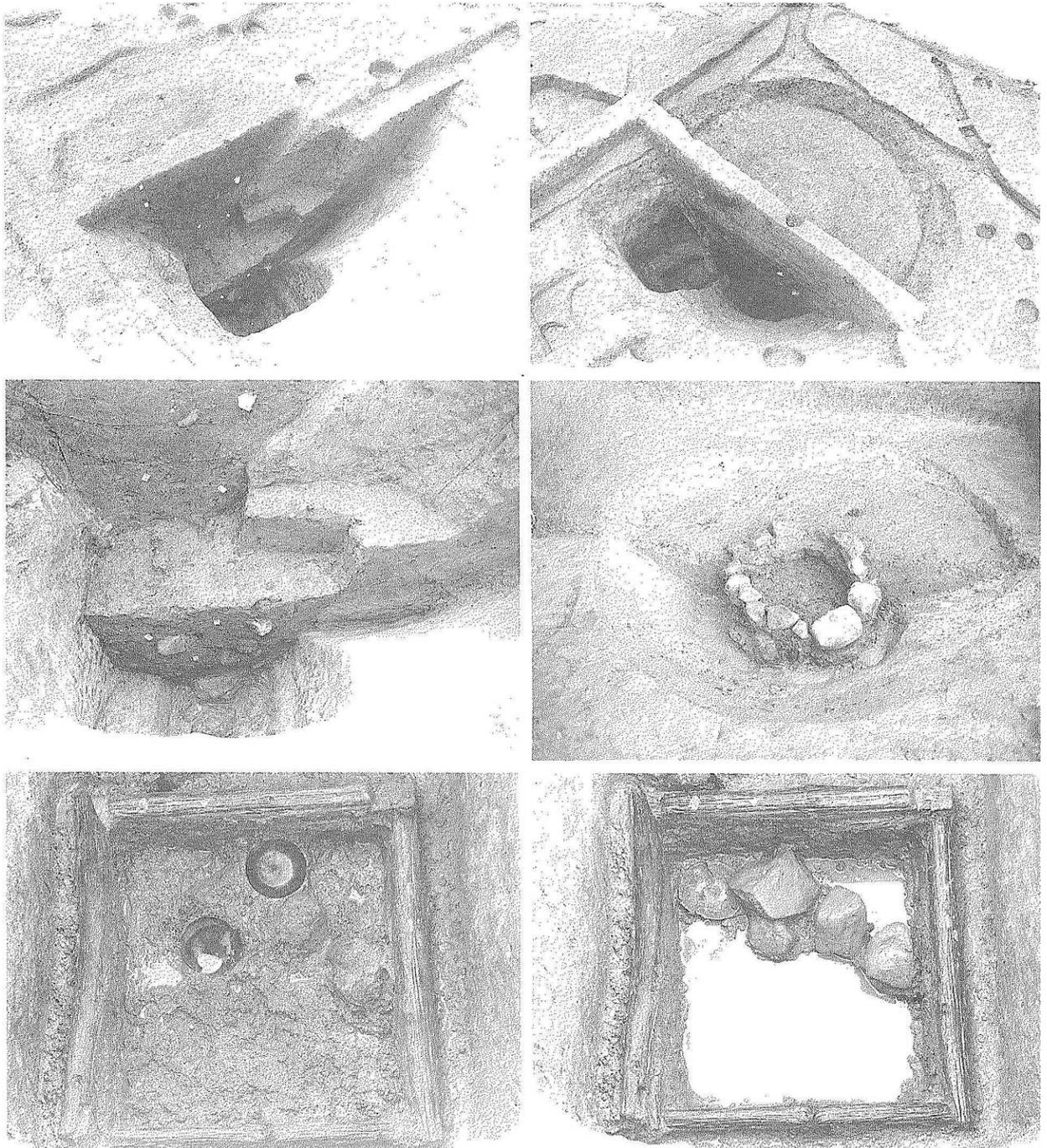
上右：SX2000 土器溜め(南東から)

中左：SB1973 柱穴を切る SX1974 土器埋設遺構(奥)と SX1978 土器埋設遺構(手前)

中右：SB1970 柱穴を切る SX1996 土器埋設遺構(北から)

下左：SX1997 土器埋設遺構

下右：SX1999 土器埋設遺構



**図版 8 第 58 次調査検出の井戸**

上左 : SE1988・1989 井戸跡、SK2013 土壌の重複状況(北東から)

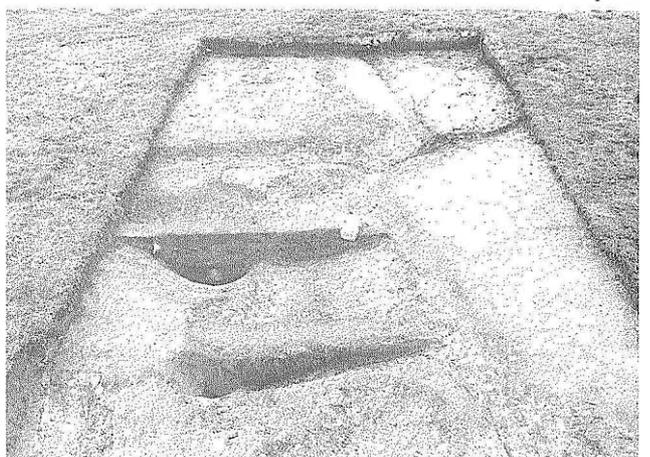
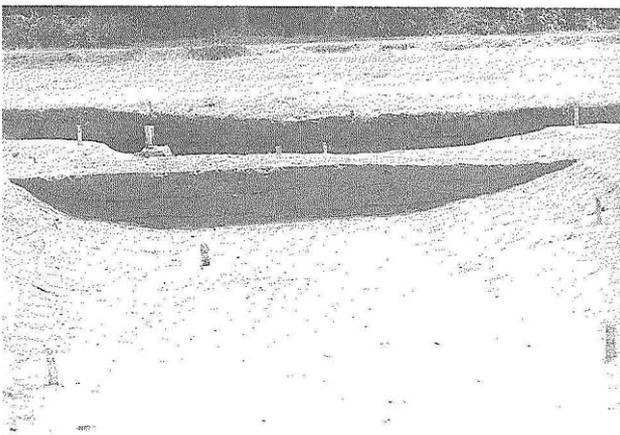
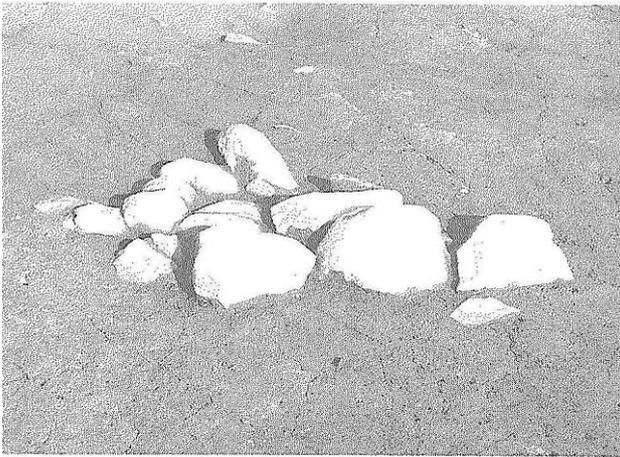
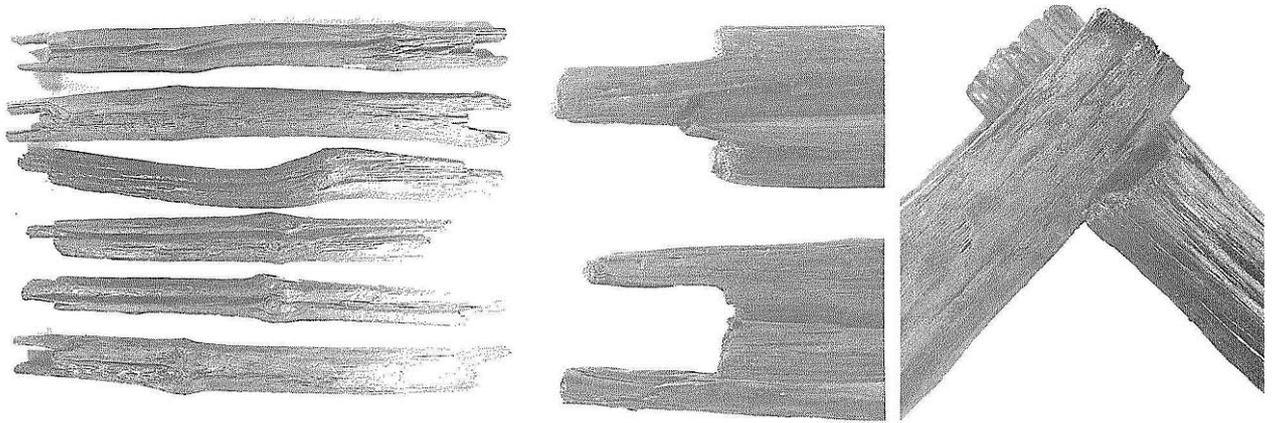
上右 : SE1988・1989 井戸、SK2013 土壌、SI1962・1963 住居跡の重複  
状況(北西から)

中左 : SE1988・1989 井戸、SK2013 土壌の重複状況(北から)

中右 : SE1991 井戸(西から)

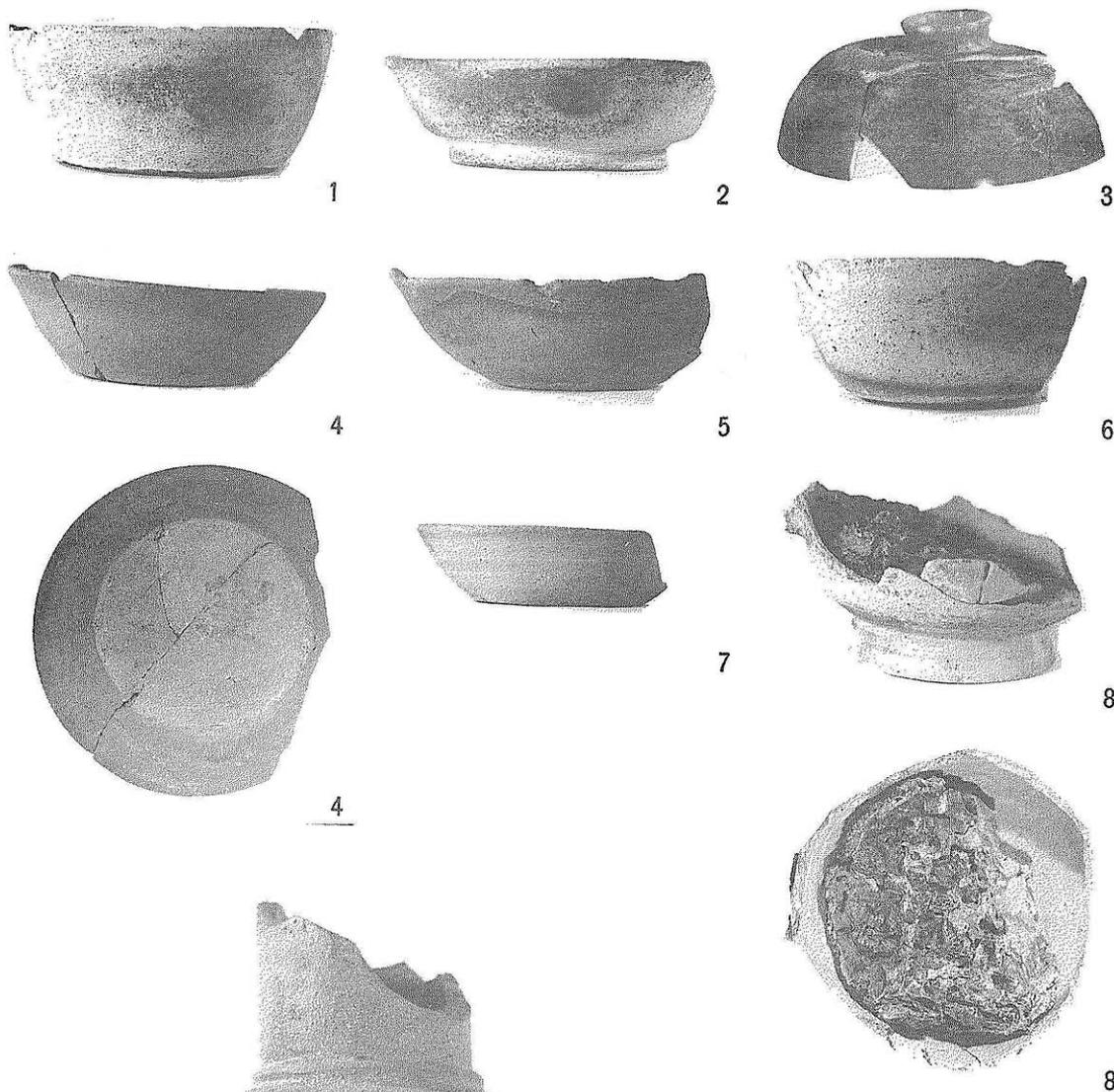
下左 : SE1987 井戸の井戸枠と 6 層上面の内黒土師器杯の出土状況

下右 : SE1987 井戸の井戸枠と底面に投棄された須恵器杯・礫の検出状況



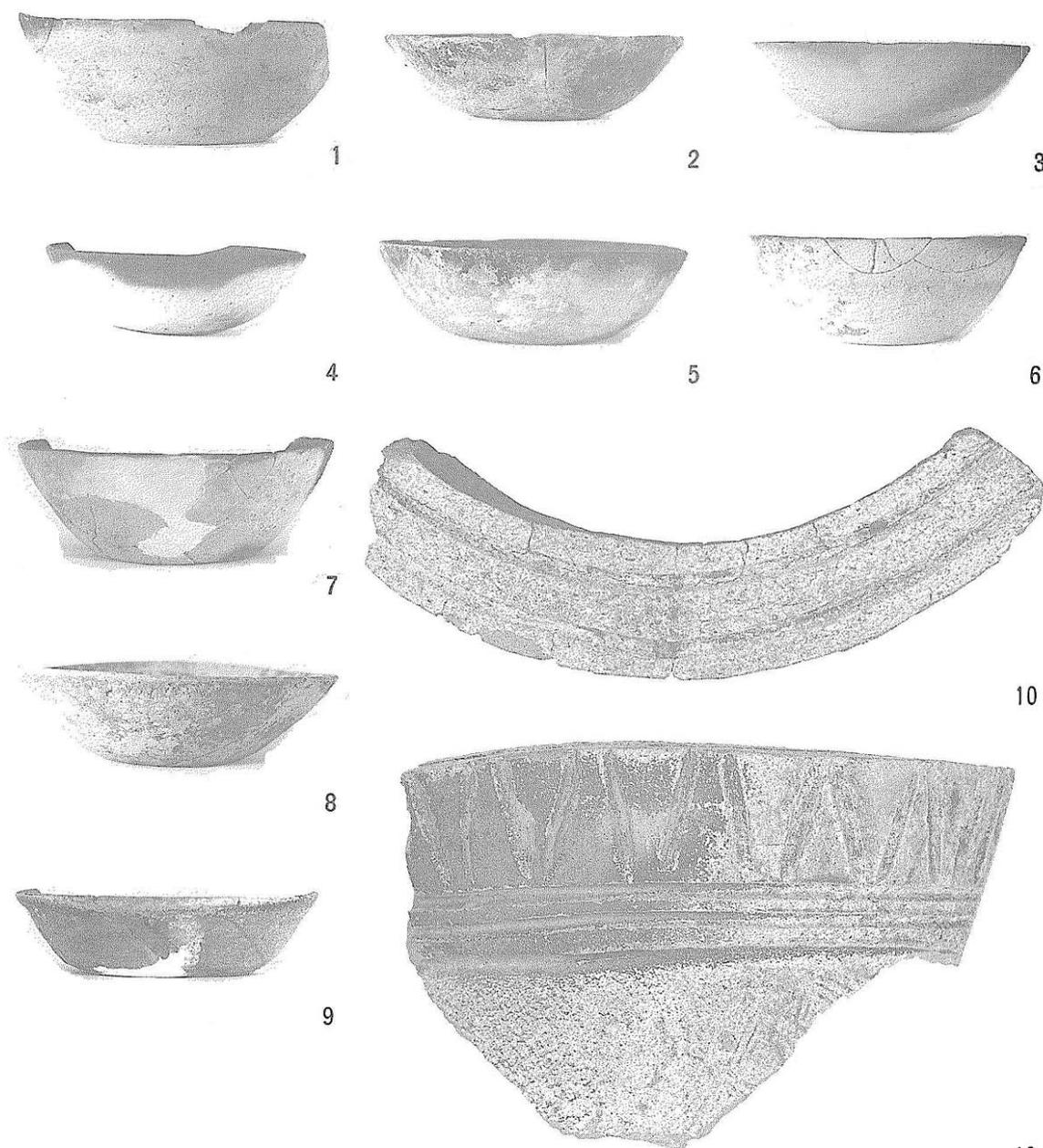
**図版9 第58次調査検出井戸枠・集積遺構・溝と北西地区**

- 上左：SE1987 井戸の井戸枠
- 上中：SE1987 井戸の井戸枠の端部
- 上右：SE1987 井戸の井戸枠の組み方
- 中左：SX2002 集積遺構(南東から)
- 中右：SD2050①溝と SD2050④溝の接続部(北東から)
- 下左：SD2050①溝の断面(西から)
- 下右：北西地区全景(南から)



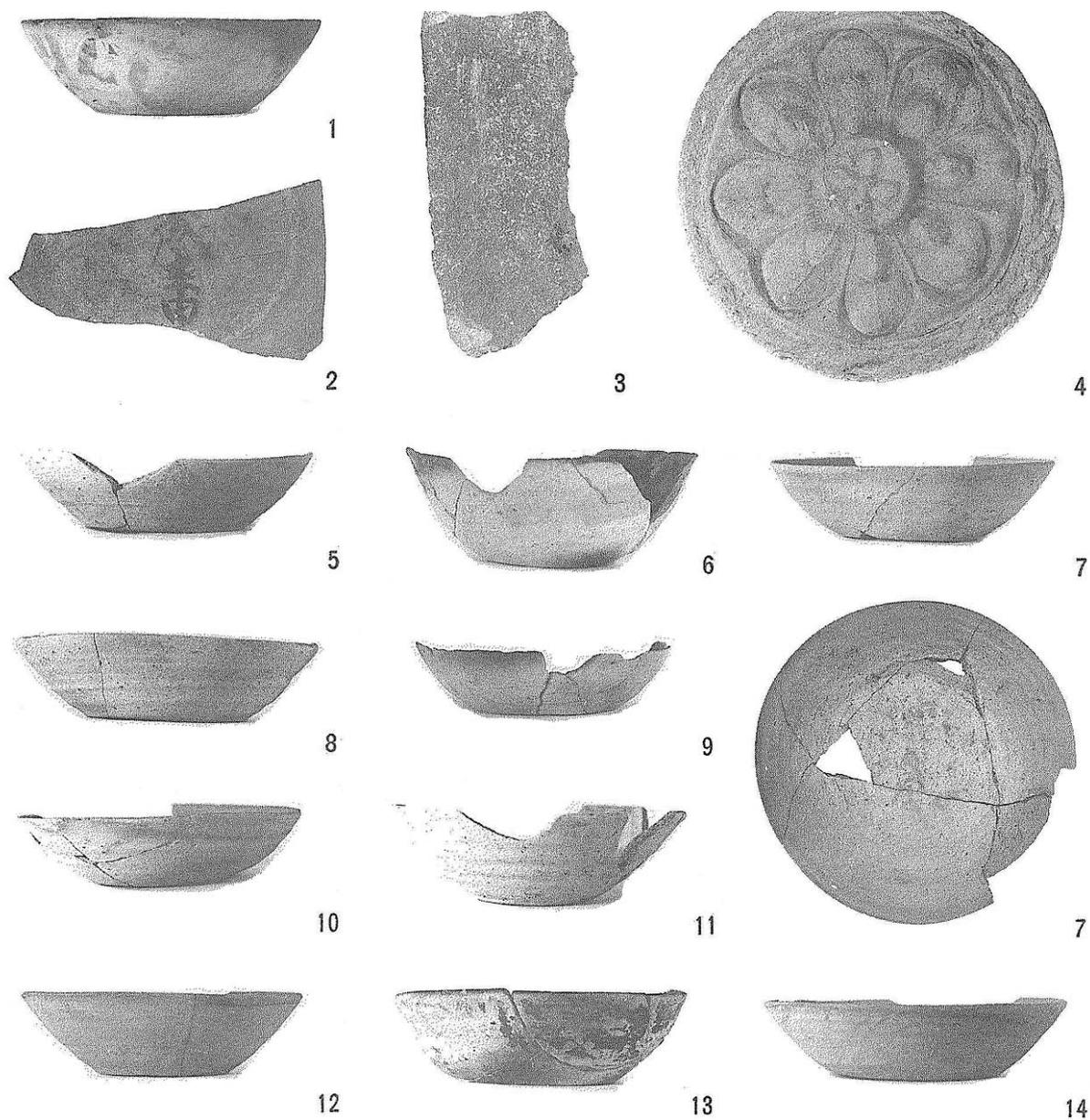
図版 10 第 58 次調査の出土遺物 (1)

1. SI1963 出土須恵器碗(第 5 図 7)
2. SI1963 出土須恵器高台杯  
(第 5 図 6)
3. SI1965 出土両黒土師器蓋  
(第 5 図 3)
4. SX2000 出土須恵器杯、底部に「室」  
墨書(第 38 図 1)
5. SX2000 出土須恵器杯(第 38 図 3)
6. SX2000 出土須恵器杯(第 38 図 2)
7. SX2000 出土須恵器杯(第 38 図 4)
8. SX1995 出土漆紙入りの須恵器双  
耳杯(第 31 図 4)
9. SX1994 出土須恵器長頸瓶  
(第 31 図 5)



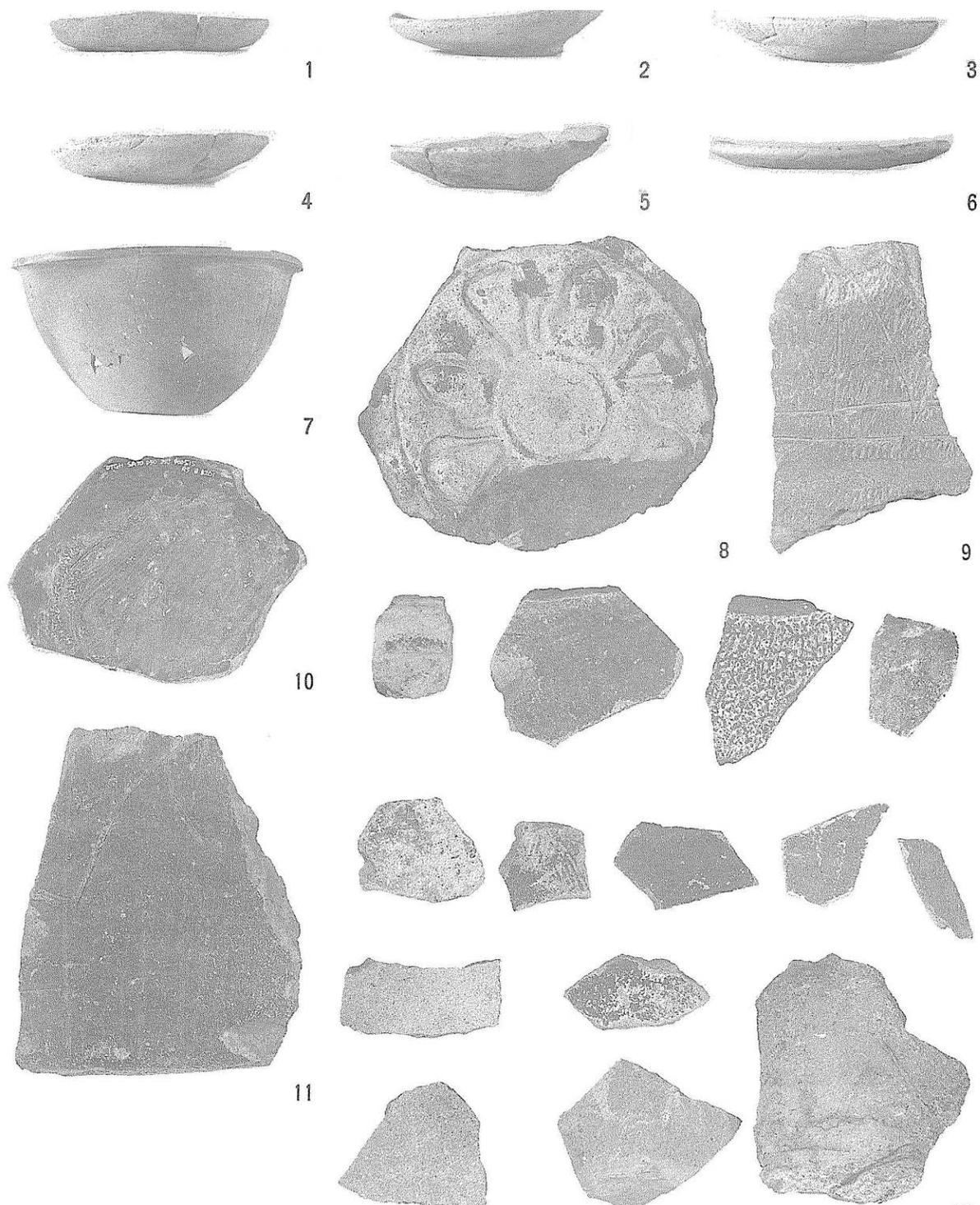
**図版 11 第 58 次調査の出土遺物(2)**

1. SE1987 出土内黒土師器杯(第 42 図 2)
2. SE1987 出土内黒土師器杯(第 42 図 7)
3. SE1987 出土内黒土師器杯(第 42 図 4)
4. SE1987 出土内黒土師器杯(第 42 図 5)
5. SE1987 出土内黒土師器杯(第 42 図 6)
6. SE1987 出土内黒土師器杯(第 42 図 1)
7. SE1987 出土内黒土師器杯(第 42 図 3)
8. SE1987 出土須恵器杯(第 42 図 8)
9. SE1987 出土須恵器杯(第 44 図 2)
10. SE1987 出土二重弧文軒平瓦 511a タイプ(第 42 図 8)



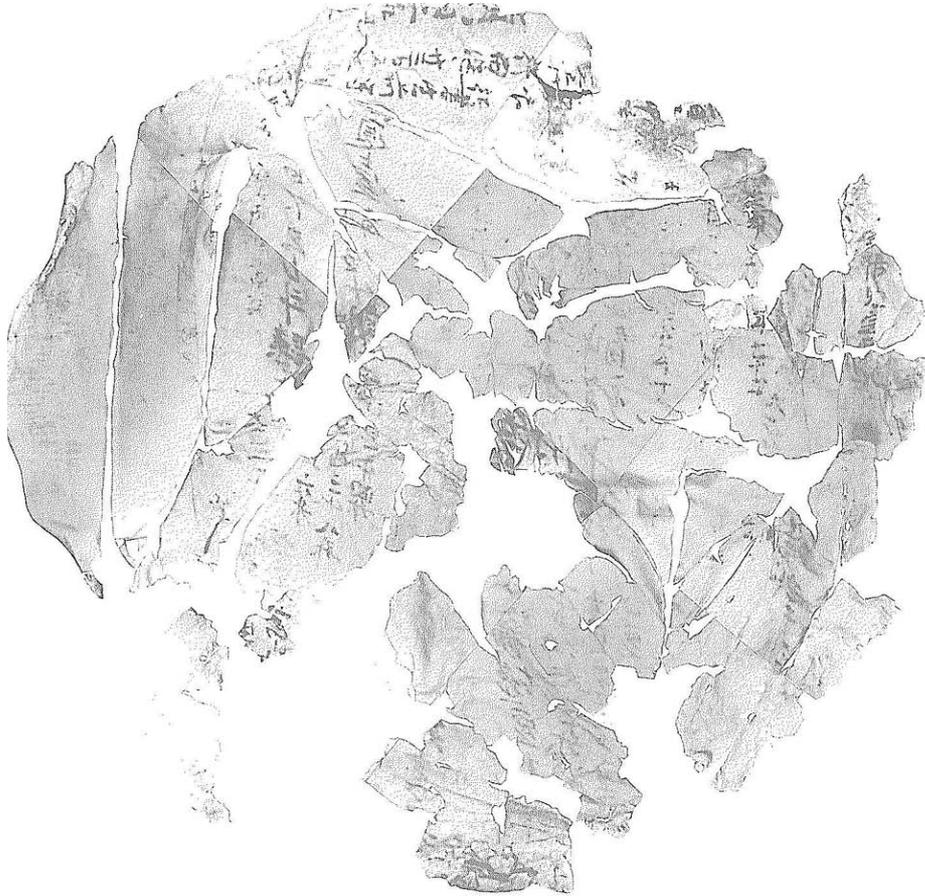
**図版 12 第 58 次調査の出土遺物(3)**

- |  |                                   |
|--|-----------------------------------|
| 1. SE1989 出土内黒土師器杯(第 45 図 2)               | 8. SK2006 出土須恵器杯(第 48 図 5)        |
| 2. SE1989 出土「□成番」墨書須恵器杯<br>(第 45 図 4)      | 9. SK2008 出土内黒土師器杯<br>(第 49 図 1)  |
| 3. SE1989 出土政庁第 I 期熨斗瓦(第 45 図 6)           | 10. SK2008 出土須恵器坏(第 49 図 4)       |
| 4. SE1989 出土 8 葉重弁蓮花文軒丸瓦 114<br>(第 45 図 4) | 11. SK2008 出土須恵器坏(第 49 図 3)       |
| 5. SK2004 出土須恵器杯(第 52 図 2)                 | 12. SK2010 出土須恵器坏(第 50 図 3)       |
| 6. SK2005 出土内黒土師器杯(第 47 図 2)               | 13. SK2013 出土内黒土師器坏<br>(第 51 図 4) |
| 7. SK2006 出土「曹司」墨書須恵器杯<br>(第 48 図 6)       | 14. SD2041 出土須恵器坏(第 53 図 4)       |



図版 13 第 58 次調査の出土遺物(4)

- |                               |                                     |
|-------------------------------|-------------------------------------|
| 1. SK2012 出土かわらけ小皿(第 51 図 6)  | 8. SK2013 出土宝相花文軒丸瓦 425 (第 51 図 13) |
| 2. SK2012 出土かわらけ小皿(第 51 図 7)  | 9. SD2050 出土軒平瓦 910(第 57 図 8)       |
| 3. SK2013 出土かわらけ小皿(第 51 図 9)  | 10. SD2050 出土漆附着内黒土師器杯              |
| 4. SK2013 出土かわらけ小皿(第 51 図 11) | 11. 1 層出土戯画平瓦                       |
| 5. SK2013 出土かわらけ小皿(第 51 図 10) | 12. SD2050 出土中世陶器                   |
| 6. SK2013 出土かわらけ小皿(第 51 図 8)  |                                     |
| 7. SK2013 出土須恵器鉢(第 51 図 5)    |                                     |



図版 14  
第 58 次調査の  
出土遺構 (5)

上 : SD2041 出土の  
漆紙 (非漆面)  
(第 58 図)



下 : SD2044 出土  
の漆紙 (漆面)  
(第 59 図)



**図版 15 第 59 次調査**

上：へリ写真 調査区全景（西から）

下：へリ写真 調査区北地区（第 56 次東地区）全景（西から）



**図版 16 第 59 次調査**

上：SF380 築地と崩壊土の堆積状況 調査区北壁

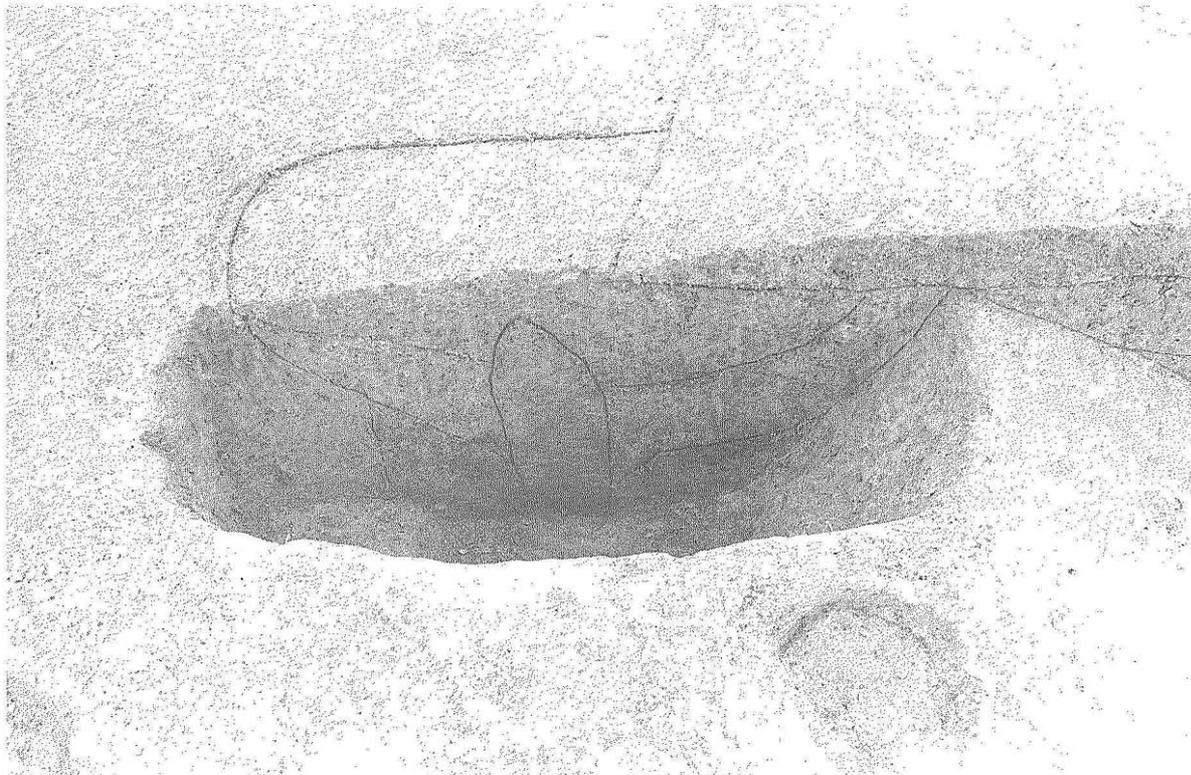
下：SF380 築地堆積土の状況 調査区北壁



**図版 17 第 59 次調査**

上：調査区中央部全景 SB1930 と SB2072（北から）

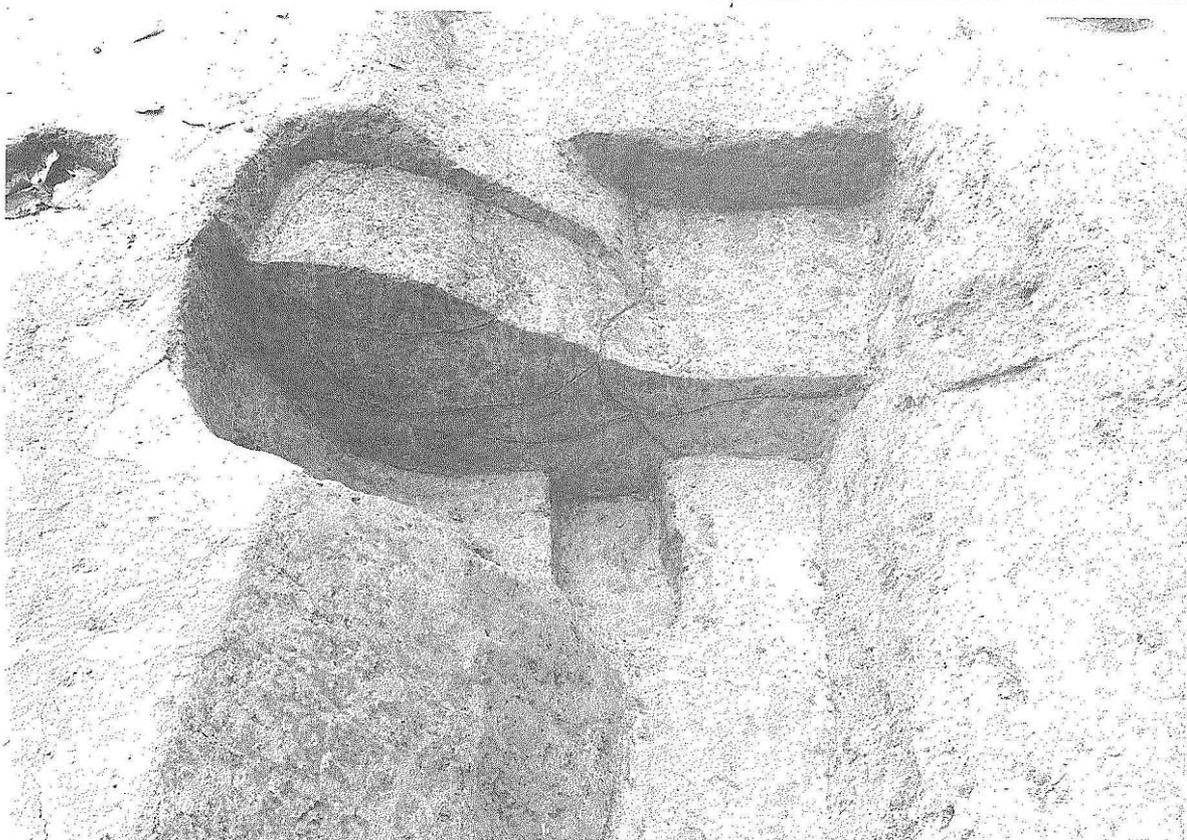
下：SB1930 東入側柱列北端の柱穴断面



**図版 18 第 59 次調査**

上：SB1930 東入側柱列北端から南へ 13 間目の柱穴断面

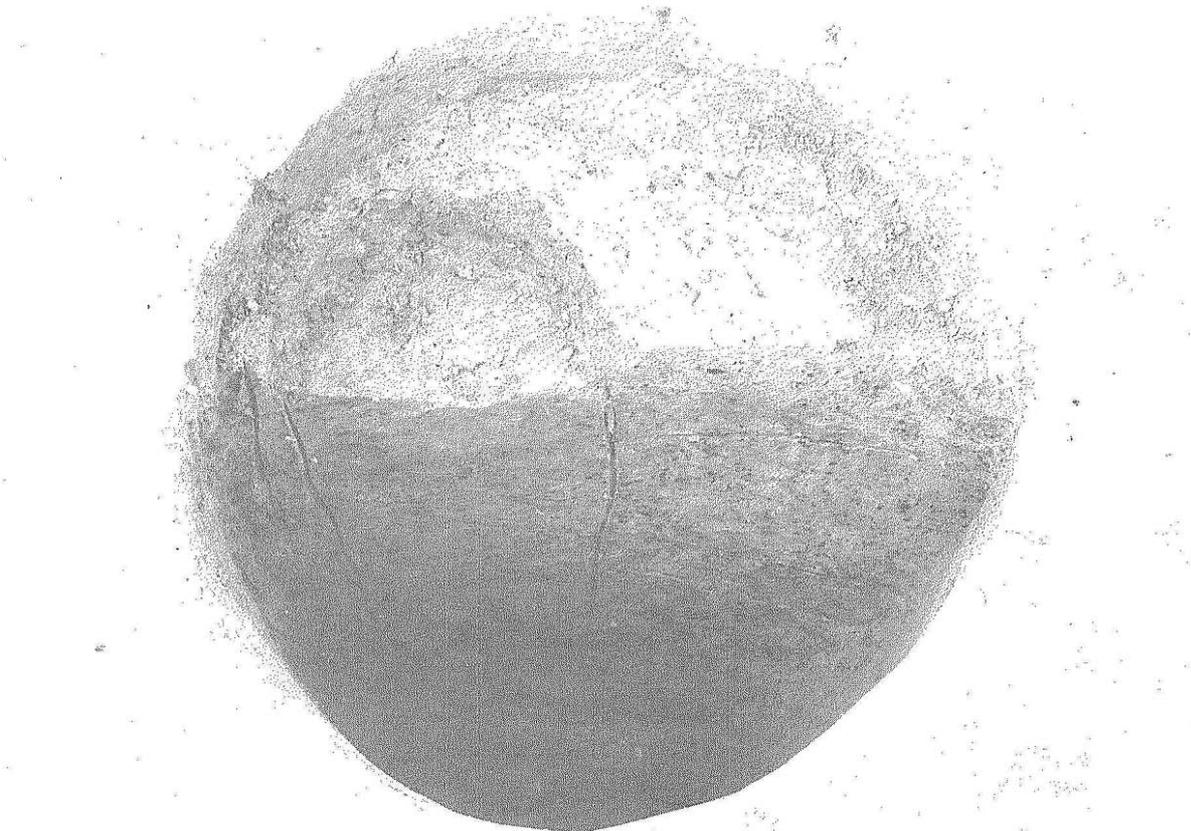
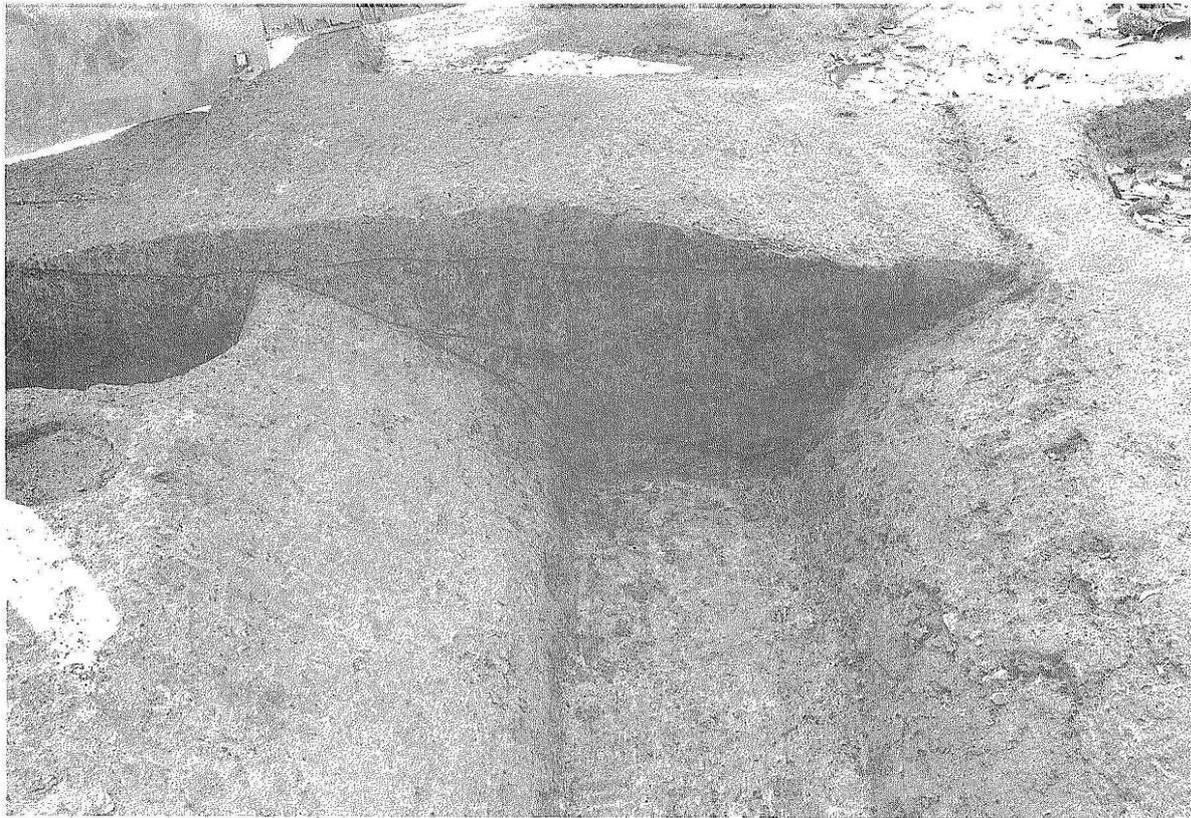
下：SB2072 西側柱列南端の柱断面 第 3B 層が柱穴を覆う



**図版 19 第 59 次調査**

上：SB1930 東側柱列北端から 6 間目の柱穴、柱取穴の状況（南から）

下：SB2072 東側柱列南端の柱穴断面、SB2072 は SD2074 に壊されている



**図版 20 第 59 次調査**

上：SD2074 区画溝断面 第 3B 層に覆われている

下：SB2071 東入側柱列北端の柱穴断面



図版 21 第 59 次調査

上 : SA1931 材痕跡

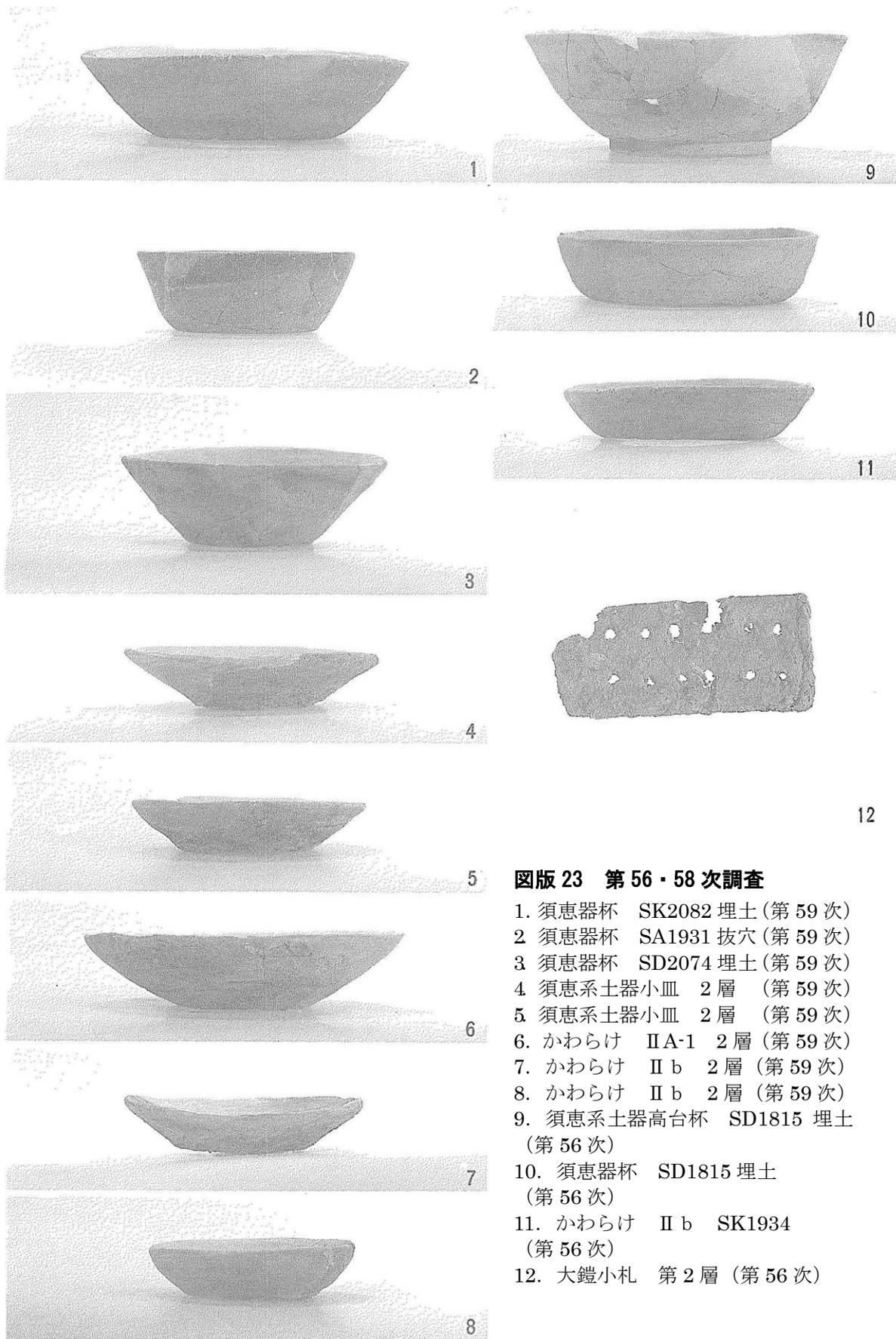
下 : SX2078 かわらけの埋設遺構



**図版 22 第 59 次調査**

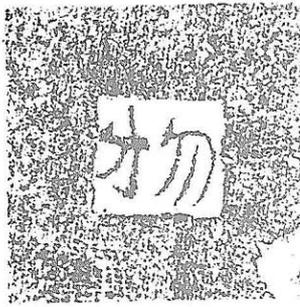
上：SD2074 と SD1938 の重複状況（西から）

下：SD2074 南北溝の堆積状況（北から）

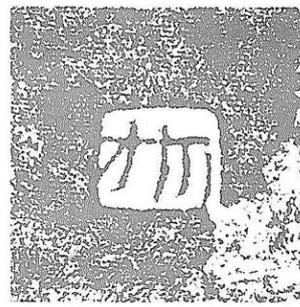


図版 23 第 56・58 次調査

1. 須恵器杯 SK2082 埋土 (第 59 次)
2. 須恵器杯 SA1931 抜穴 (第 59 次)
3. 須恵器杯 SD2074 埋土 (第 59 次)
4. 須恵系土器小皿 2 層 (第 59 次)
5. 須恵系土器小皿 2 層 (第 59 次)
6. かわらけ II A-1 2 層 (第 59 次)
7. かわらけ II b 2 層 (第 59 次)
8. かわらけ II b 2 層 (第 59 次)
9. 須恵系土器高台杯 SD1815 埋土 (第 56 次)
10. 須恵器杯 SD1815 埋土 (第 56 次)
11. かわらけ II b SK1934 (第 56 次)
12. 大鎧小札 第 2 層 (第 56 次)



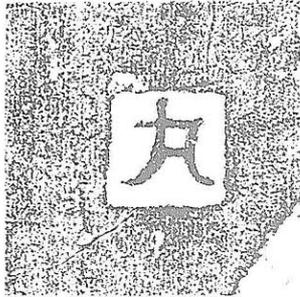
「物」A 3 b



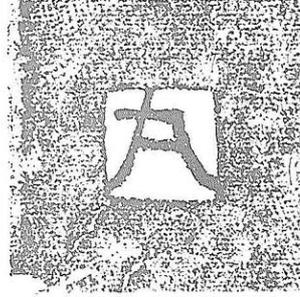
「物」B 4



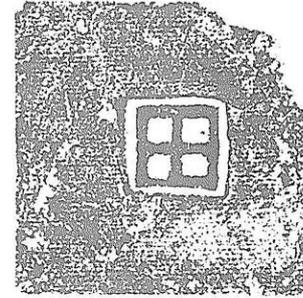
「物」C 5



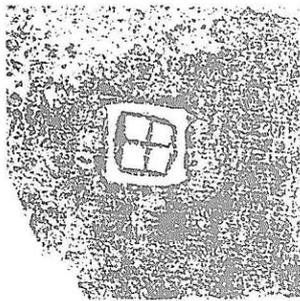
「丸」A 6



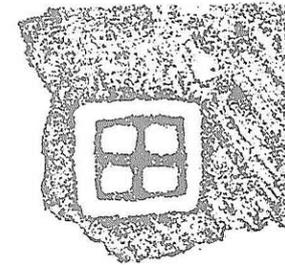
「丸」B 7



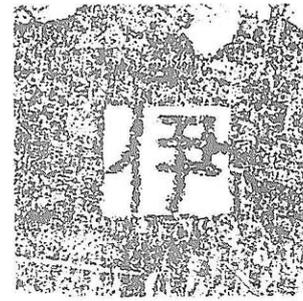
「田」A 8



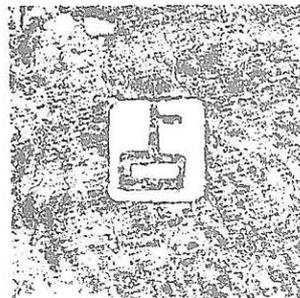
「田」B 9



「田」C 10



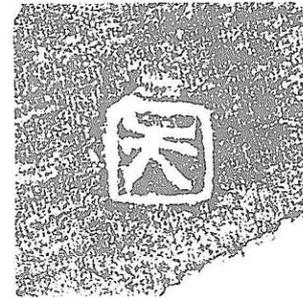
「伊」 11



「占」 12



「矢」A 13

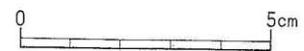


「矢」B 14



「矢」C 15

付図 多賀城出土の刻印瓦



---

宮城県多賀城跡調査研究所年報 1990  
多 賀 城 跡

平成3年3月25日印刷

平成3年3月31日発行

発行者 宮城県多賀城跡調査研究所  
多賀城市浮島字宮前133  
TEL(022)368-0101  
印刷所 小泉印刷株式会社

---